明治三十八年二月五日發行
每月一回五日發行

明治三十三年十二月
第三種郵便物認可

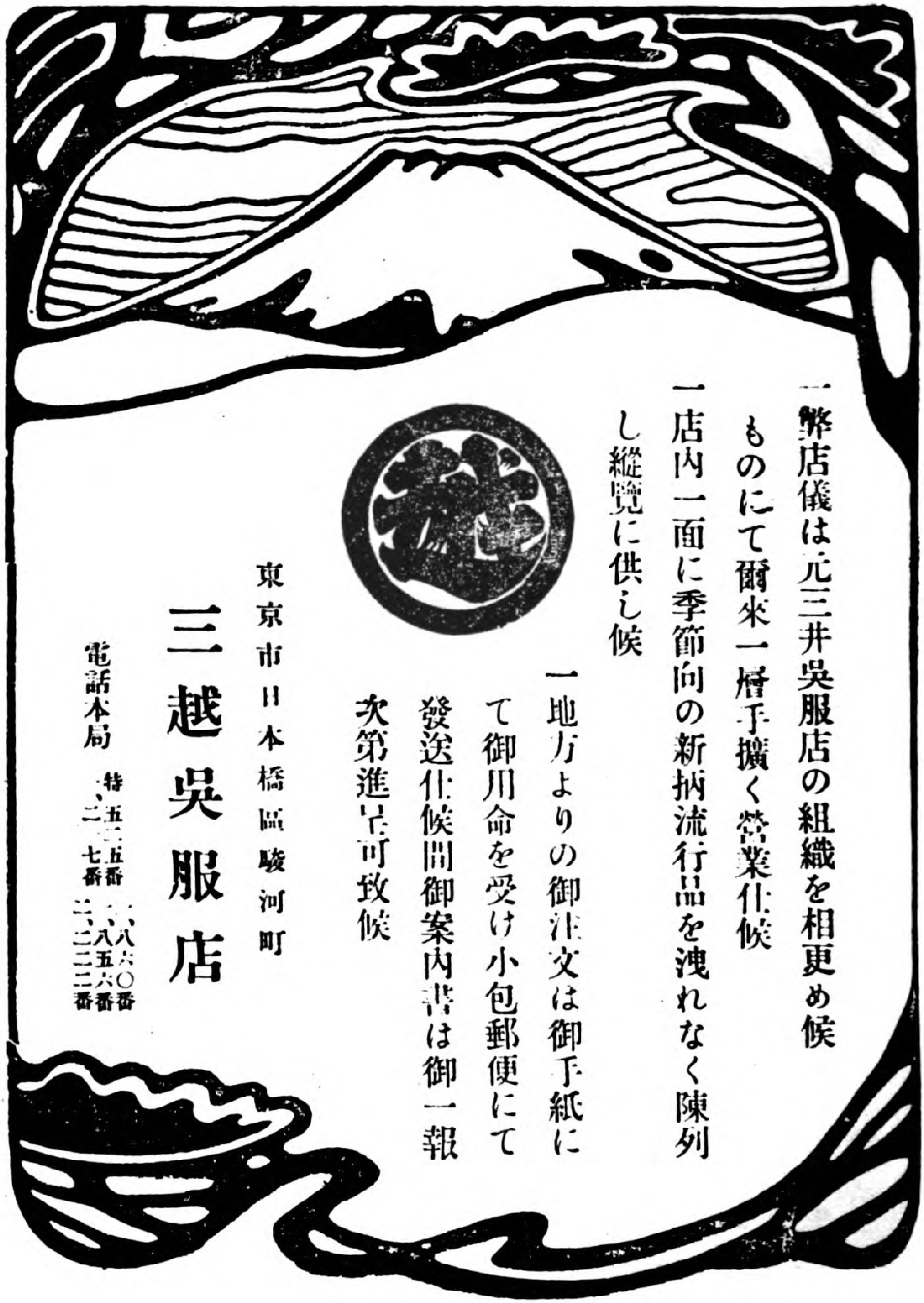
女學世界

第五巻第参號

口繪
- 觀梅　水彩画
- 枯野　鉛筆画
- すみれ　毛筆画

名流筆蹟
梅だより　繪はがき
西太后の玉坐（寫真版）
米國の美術學校
記事要目
女子の精神教育
婦人の新教育
虚禮の廢止
野津大将夫人
跡見玉枝女史
小說子




一弊店儀は元三井呉服店の組織を相更め候ものにて爾來一層手擴く營業仕候
一店内一面に季節向の新柄流行品を洩れなく陳列し縱覽に供し候
一地方よりの御注文は御手紙にて御用命を受け小包郵便にて發送仕候間御案内書は御一報次第進呈可致候
東京市日本橋區駿河町
三越呉服店
電話本局
特五二五番
、二七番
、八六〇番
、八五六番
二、二二二番

女學世界 第五巻第參號 目次

滋養强壯と次亞燐

次亞燐は世界無比の滋養新藥なり常に服用せば血を增し肉を肥し食物の消化を補け血色を能くし身體を强健ならしむ本劑は肺病、肋膜、胃病、心臟、神經、喘息、たんせき、脚氣病其他貧血衰弱症に特效あり尙ほ産前産後の肥立は勿論病後等の補血に缺くべからざる新藥にて牛乳に優る數十倍の効ありて飲み安き藥劑なり

●大瓶五週分金壱円廿銭●中瓶二週半金七十銭●小瓶壱週分金四十銭
◎(小包送料)●大二十銭●中十五銭●小十銭



本舗 大阪道修町 小西久兵衛

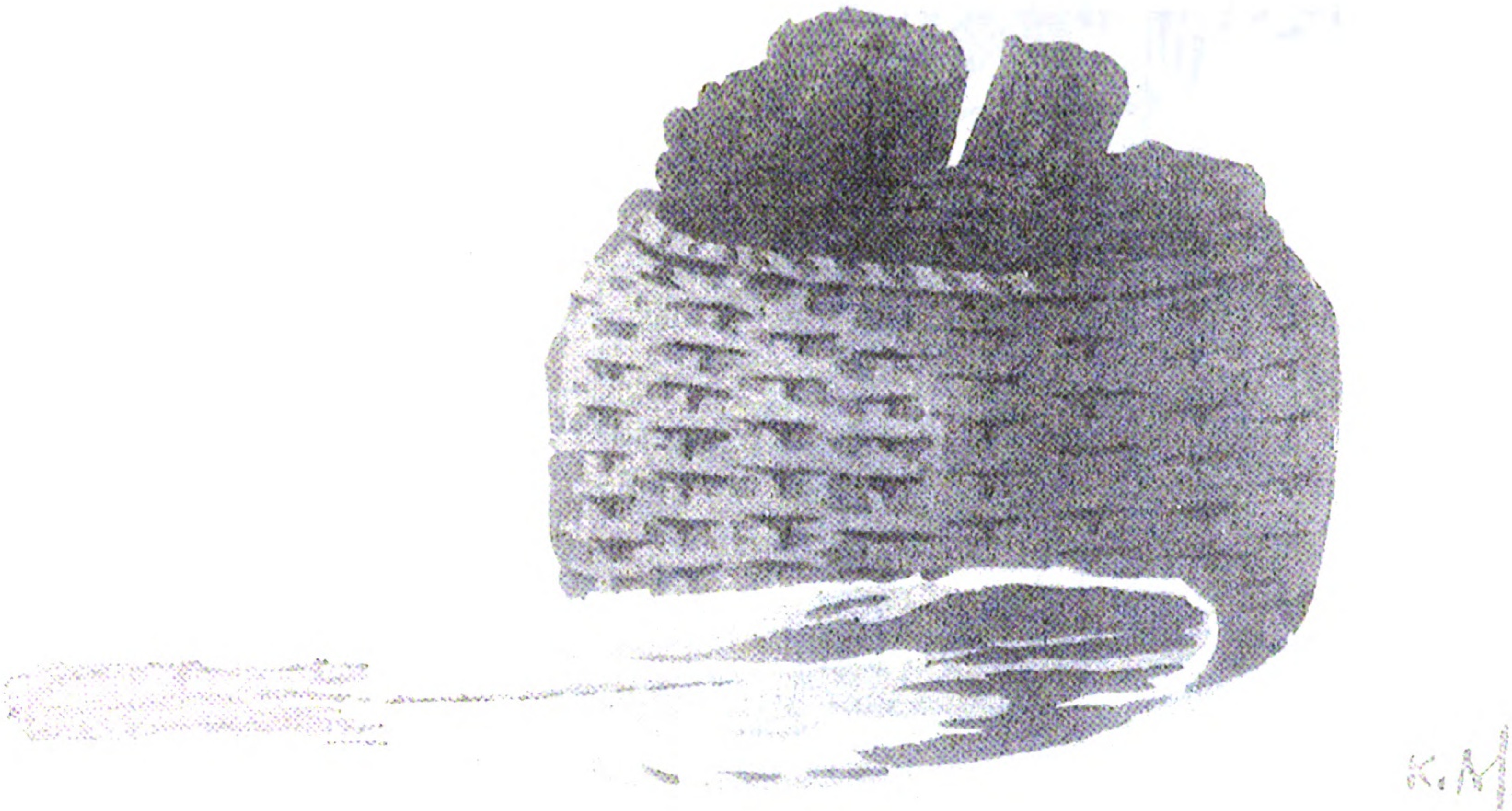
(賣捌所は全國各藥店にあり)

観梅



波々伯部金洲筆

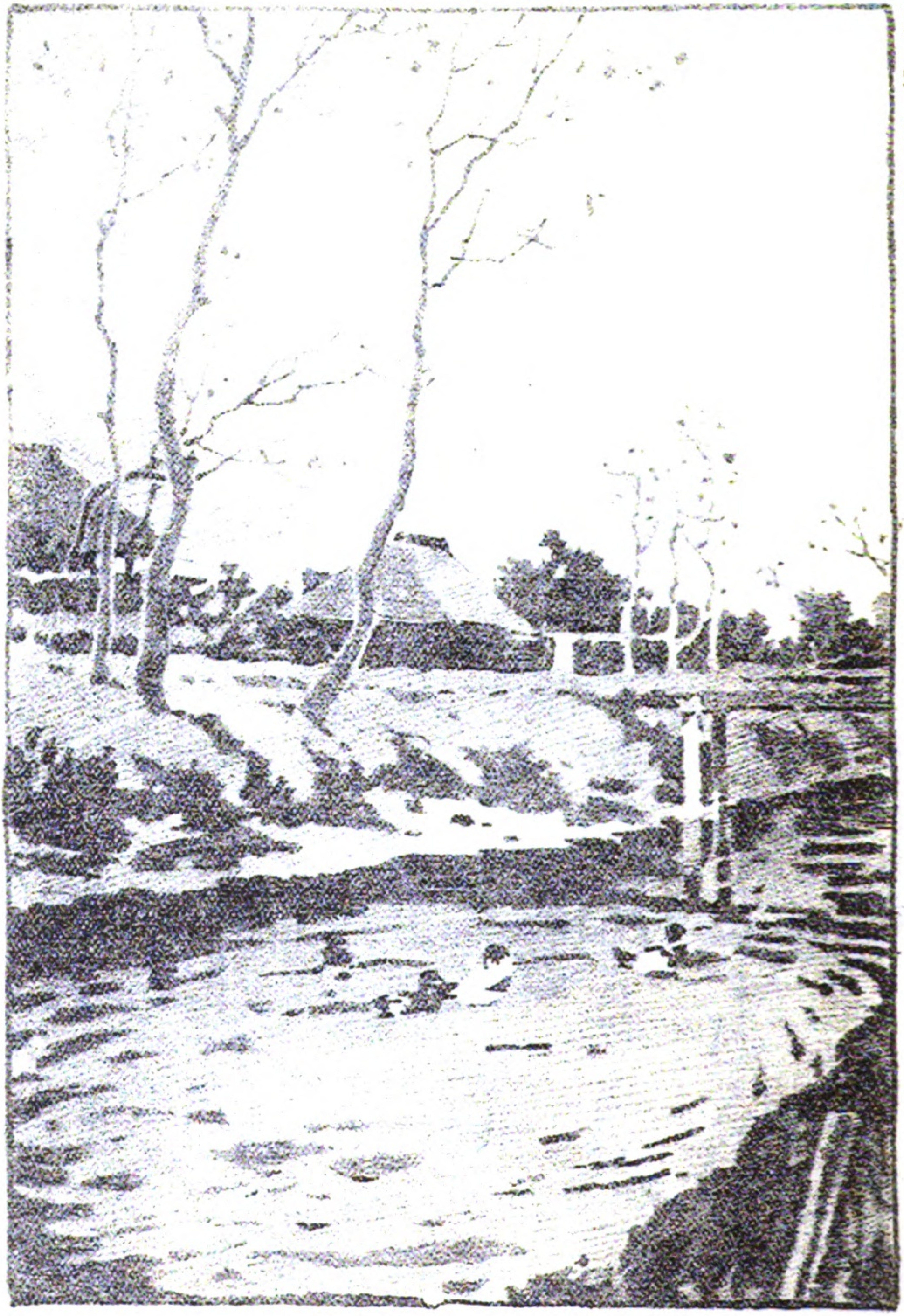
りとみす



三宅克己筆

枯野

三宅克己

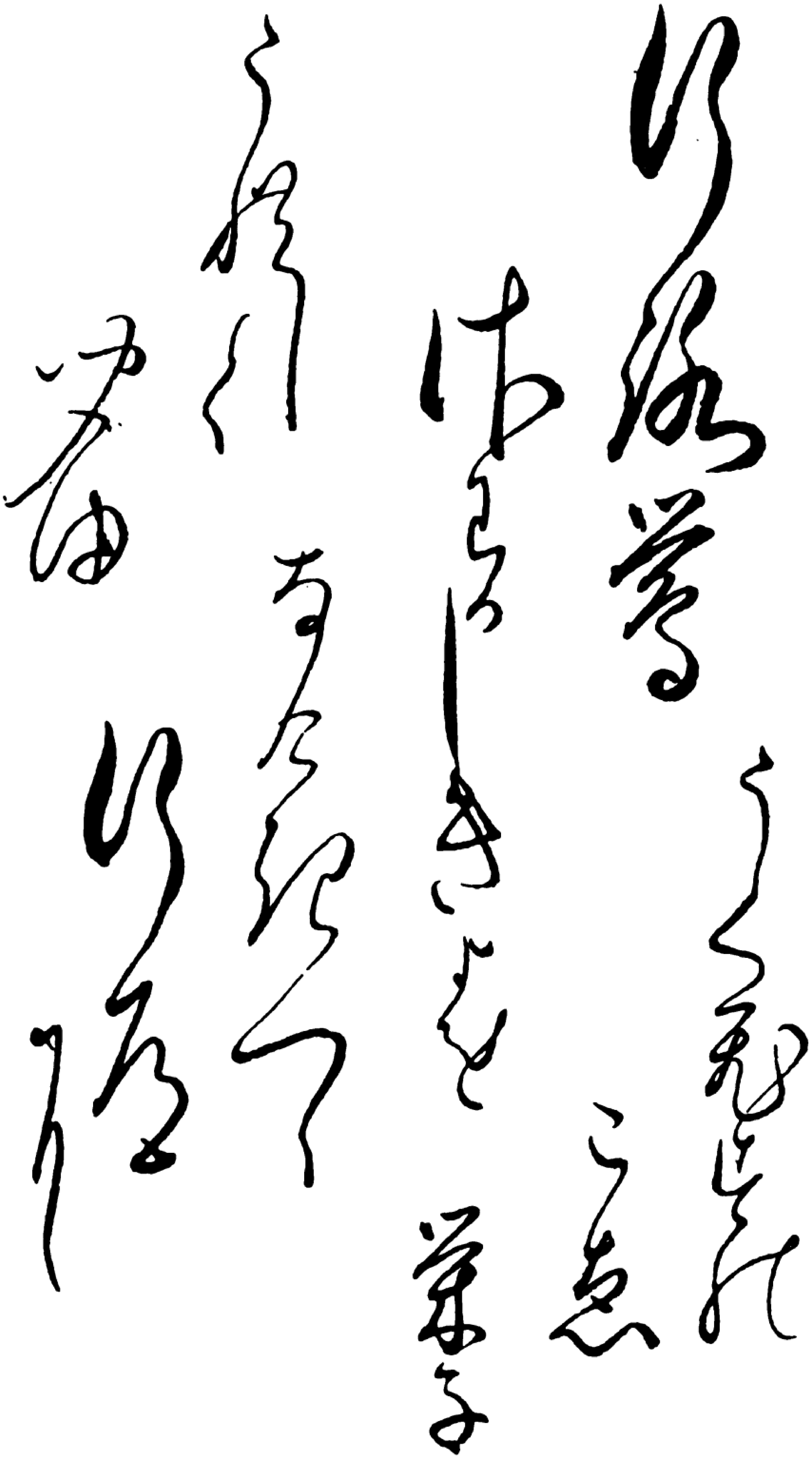


三宅克己

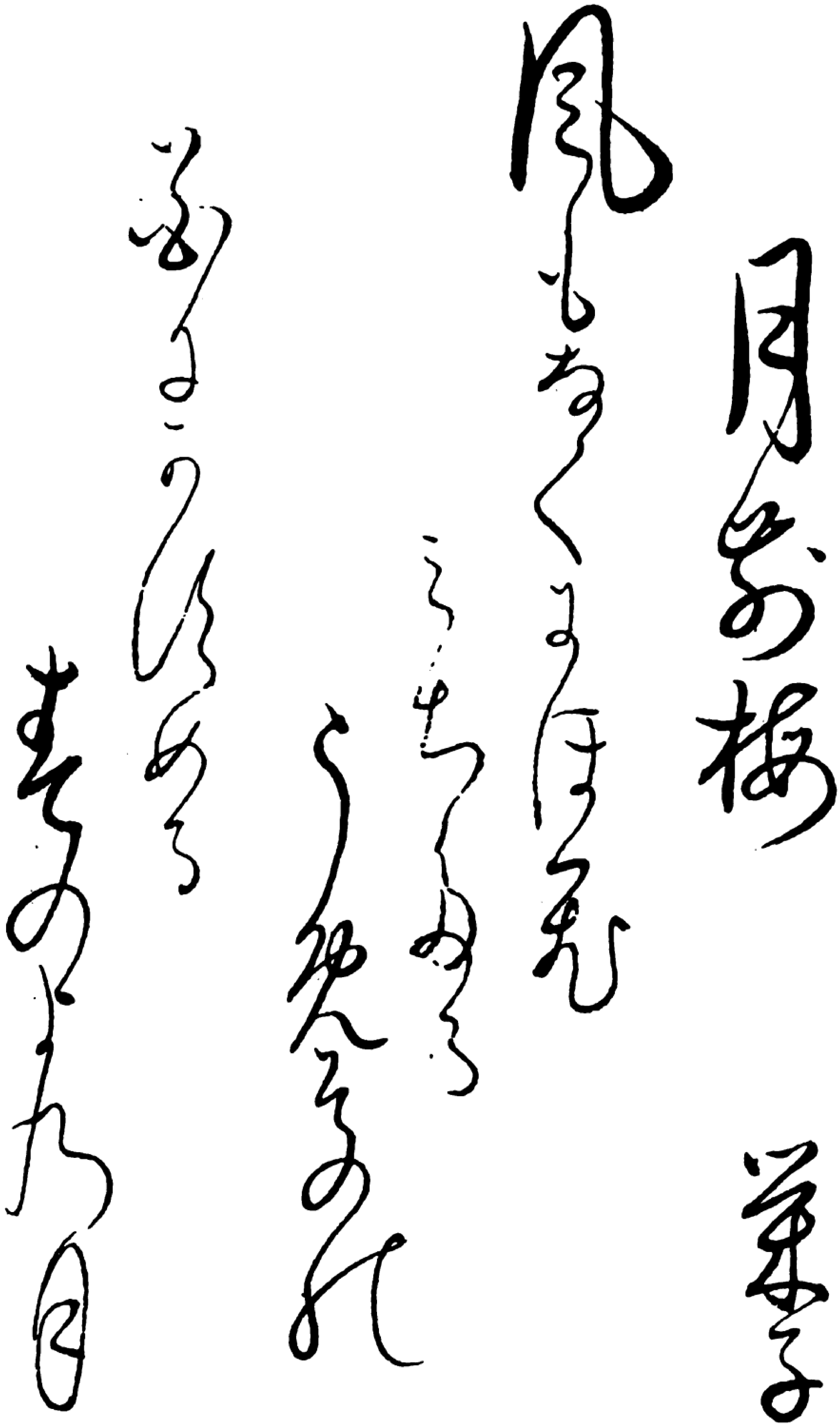
手提かばん



鍋島侯爵夫人筆



鍋島侯爵夫人筆



鷲

跡見花蹊女史筆



すみれ

跡見花蹊女史筆



女學世界一日記者 糸左近先生著（訂正再版）

家庭衛生講話 全

全壹冊 菊判 總クロース 美本

紙數三百三十頁、當問券附・正價七十五錢小包料十錢

其說最も嶄新確實で、彼の理學者の說いた衞生生理書や、十八世紀頃の原書を譯した樣な我國に適せぬ本などとは天地の差がある。言文一致總振假名で、しかも流麗な筆、讀者興味を感じつゝ了解し易きは、彼の乾燥無味なる有ふれの書とは大に違ふ、まづ衣食住から運動法、腦の使用法、疾病治療法、生殖篇等と分け、就中食物篇の日用に適切なること、治療法の懇篤なること、醫者か讀めば大いに參考となり、素人が讀めば長壽を保つ術を知り醫學後期生が讀めば、受驗の友となる。早く本書を讀め、早く本書を開け、病氣ある人、子無き人、英雄にならうといふ人、溫泉にゆかうといふ人、貧しき人、富んだる人、學者も不學者も

糸左近先生著

改訂三版 生理學講義

全一冊菊判 クロース美本 ▲紙數二百七十頁

▲插圖二十五個▲正價七十錢▲小包料十錢

近い物から遠い事に及ぼすのが敎育の基であるのに是迄の普通生理書は學生が一度も見たことのない骨から大體說き始めてある著者先生之では敎育の旨に違ふといふ考から上篇には人の直に目に觸るゝ五官器皮膚の解剖生理衞生から說き始めそれより段々と深部に及ぼして中學程度の生理大體を了り更に下篇に進んで高等の生理を講じ其書方は言文一致で誰にもよく分るされば本書は中等敎育の敎科書文部省の檢定受驗用又醫學生參考用として最良の書である

杉山孚富先生著 訂正五版

漢文故事熟語詳解

全一冊 洋裝美本 紙數三百二十頁 正價三十五錢 郵稅六錢

漢文學上故事熟語に關する解釋の書は古より和人と漢人との別なく多々有れども要するに大抵好んで僻語奇字のみを拈出したるものなれは大家名人の資料とはならんも青年新進の徒の助とはならざるなり本書は深く此に注意し集むる所の數百件盡く現今普く世に行はるる所の漢書に依り其要を拔し然も平易明快に註釋を加へたれば一讀して其異彩ある好書たるを知れ

杉山孚富先生著 訂正再版

國文故事熟語詳解

全一冊 紙數三百八十頁 正價四十錢 郵稅八錢

本書は中學校生徒及高等學校入學志望者の爲めに參考用として作りしものなり曩に弊店漢文故事熟語詳解を先生に託して發行するや非常なる高評を以て忽ち數千部賣盡し今や既に五版を刷するに至れり因て今又た先生に乞ひて本書を公にす希ふ續々御購讀あらん事を

糸左近先生著

●作文の敎へ

マリーイーストレーキ孃著

全一冊 菊判 正價五十錢 郵稅八錢

●英和婦人會話

全一冊 袖珍 正價廿五錢 郵稅二錢

發行所 東京市神田區今川小路一丁目五番地 金刺芳流堂

（甲の一）

多田親愛翁筆

翠雲習字帖

全五冊

第一、二體いろは其他
第二、徒然草四季の上
第三、同　下
第四、大鏡鶯宿梅の文
第五、大井河行幸の序
緞子表紙極美製折手本送料各四錢
全部揃の注文者には送料を特免す

定價各卷金五拾錢
爲替今川橋郵便受取所

色紙習字帖

多田門の人々が三代集より選拔したる秀歌を艶麗なる彩色刷の色紙形に翁が健腕もて諸種のちらし書式を示されたるものなり

和裝全二冊
定價帙入一圓廿五錢
袋入金一圓
郵稅帙入拾錢袋入四錢

發行所　東京市神田區千代田町三番地　江川八左衛門

賣捌所　東京神田錦町三丁目　明治書院
大阪市南本町四丁目　三宅書店

日本筆道の神域に達し天下に獨歩の命名を博せられたる翠雲多田翁の筆蹟を學ばんとする士女の爲に本會は翁に乞ひて茲に通信教授を開始したり

二種の習字帖は門弟の手本に供するもの彫刻印刷共に巧妙を極め多く肉書に不讓門外一般の希望者に頒つ入門規則は郵券二錢を添へて請求あれ

東京市下谷區西町廿四番地　翠雲會

新岡旭宇翁書

短冊習字帖

いろは三體帖

和裝全一冊
定價金一圓
郵稅四錢

折本全一冊
定價四十錢
郵稅二錢

右は紳士淑女の好手本にして筆意の艶麗非凡なる加ふるに製本頗る尚美なれば机上の裝飾又は進物等には適當なる書なり

發行所　東京市神田區千代田町三番地　江川八左衛門

賣捌所　東京神田錦町三丁目　明治書院
大阪市南本町四丁目　三宅書店

古今對照

習書帖

和裝全二冊
定價金七十錢郵稅六錢

此書收むる處の要は四君子講義、寫生法、隈取り法、刷毛使用法、繪具の系圖、繪具使用法、落欵事用語、其他古今大家の書就中應擧先生の人物下書法數圖等を擧げたれば初學者に尤も要用の好書帖なり

（甲の三）

（甲の四）

●上州特產 新斜子黑紋附羽織地（しんなゝこくろもんつきはおりぢ）



正價五圓の處織り出し披露の爲め特別減價金二圓九十錢一ッ紋三ッ紋五ッ紋共千人限り紋付代り**無料**望の方は紋形に手附金五十錢相添へ注文せば殘額引換小包にて送る送料十錢二反以上注文は送料不要本品は學生、教員、役場員、會社銀行員、巡査、看守、郵便局員、裁判所吏員、諸氏は勿論苟も軍國の經濟を重んじ質素を旨とせらるゝ諸君は是非本品を御愛用あれ地質堅牢色澤善美實に一見本斜子に劣らず殊に化學的染色法を應用したれば何十回洗濯するも變色の憂ひなきは弊店誓つて保證す實に普通着晴着兩用に適當なれば誘ひ合せ續々御注文を乞

小供用四ッ身二圓廿錢 女學生用袖模樣二圓五拾錢

●上州特產 新斜子鐵無地羽織地（しんなゝこてつむぢはおりぢ）

商人農家等地味向に適當地合及染色法等黑紋附羽織地と全樣なれば德用請合正價二圓九十錢黑無地も全直段

●新甲斐絹羽織裏地（しんかいきはおりうらぢ）

本品は斜子其他の羽織裏用として優美高尙の良品 一枚分金九拾八錢

●日進特製 白縮緬兵兒帶 大巾一丈一圓九十錢 中巾一丈一圓六十錢

●發賣元 上野國桐生町 大和屋呉服店

第二號概目

▲水彩畫（早稻田の雪）三宅氏密畫其他寫眞數葉入 ▲名家文壇○女子の文藝（萩野文學博士）○竹取物語二（中內文學士）○月香（久保文學士）○湖南の春（竹貫直人）▲家庭○婦人の正義（松井柏軒）（儒教的倫理の一節、岸上質軒）○和樂なる家庭（菅綠陰）▲女流短評（棚橋跡見奧村下田鳩山安井、其他才媛淑女の投稿懸賞披露、編輯便、諸姉の氣焰等皆面白

投稿歡迎

○論說○舒情文○敘事文○消息文○短歌○俳句○新體詩○小說○はがき文 內容本誌を見よ

見本壹冊 拾壹錢也

▲選評家▼

日本女子大學教授文學士 鹽井雨江先生

女子高等師範講師文學士 尾上柴舟先生

佐々木信綱先生

巖谷小波先生

廣津柳浪先生

山中古洞先生

女子文壇

◀第二號▶

二月壹日發行

每號 三宅克己先生水彩密畫及寫眞版口繪挿入

每月一回 壹日 定期發行

新案獎學 懸賞 每號あり

發兌元 東京京橋區大鋸町十一 女子文壇社

大賣捌●東京堂●東海堂●北隆館●良明堂●上田屋外雜誌書店御最寄に賣捌所なき時は直接「發兌元」又は右の「大賣捌所」へ便宜御注文の程奉希上候

▲第二號より稍々完備せり、上等書籍洋紙を用ゆ、內容も亦改まる

▲第一號は旅順陷落紀念日に產るゝや大好評を博し初版再版三版とも忽ち賣盡したり今また四版增刷成る本誌陸續御愛讀あらんことを乞ふ

定價 金拾錢 六冊前金五拾七錢 郵稅壹冊壹錢 郵券代用壹割增

（甲の五）

(甲の六)

陸軍々醫監醫學博士森鷗外先生序　田山花袋君著

第二軍從征日記

全壹冊洋製
紙數四百頁
正價六拾錢
郵税拾貳錢

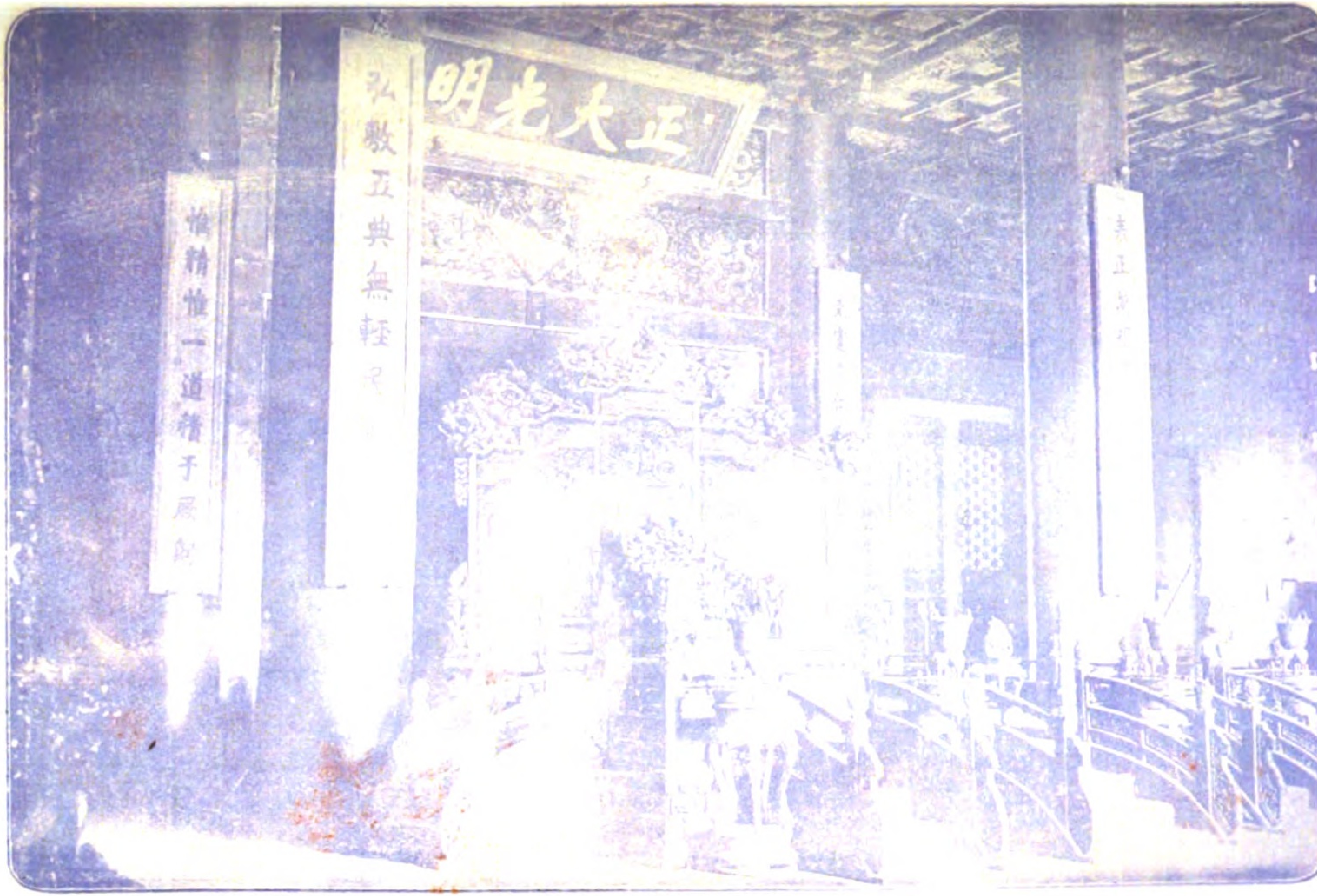
一讀再讀紙上即戰場

第二軍の滿洲に於ける功績は實に赫々として日月の天地を貫くがごとし。南山、得利寺、蓋平、大石橋、遼陽、其の進路の極めて遼遠たりしにも拘らず、其戰提の活潑なる、實に端倪すべからざるものありて存す。されど其軍の行進は軍機上極めて秘密を要するものありしを以て、筆を載せて軍に從ふの從軍記者なく、從つて其眞相の世間に傳はらざるもの甚だ多し。著者は博文館從軍寫眞班の一員として、宇品より其軍と共に乘船し、嘗むべきの困難は共に嘗め、耐ゆべきの辛苦は共に耐え、かくして漸くに身を寓するを得たるは天地最壯最美の大活劇。況んや若者はかの大活劇を觀るに一種特色なる眼光を以て、戰鬪を記し、砲烟を記し、殺戮を記するに於ても、尋常紀文家のごとく乾燥殺伐なる文字を用ゐず、多樣にして多趣、恰かも一篇の敍事詩を繙くの概あるに於てをや。即ち第二軍の滿州に於ける行動は此著に依るにあらざれは斷じて詳細に知る能はざる而已ならず、讀者はまたかの著によりて戰爭美の最も完全に發揮せられたるを認むるなるへし。蓋し戰爭文學中最も光彩に富める著作なること勿論也。其他寫眞は一々撮影せし箇所を文中に示し、第二軍の行進踏査地圖を附し、寺崎廣業畫伯の實寫になれる寫眞圖を添ゆ。錦上の花とは是也。

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（甲の八）

西太后の玉座



正面の屏障は黄金と緑玉を以て鏤めたるものなり

病院船上の撮影

[illegible]

當代名士の面影



一木喜德郎君



杉榮三郎君



戸水寛人君



松崎藏之助君



土方寧君

東京皮膚病院發明山崎製

毛(モウ)生(セイ)液(エキ)



禿(はげ)、脫毛(ぬけげ)、薄毛(うすげ)、生際惡(はへぎはわる)き人(ひと)試(こゝろ)みよ

本劑は第一毛をはやし、ぬけ毛を止め、髮の毛はへぎは眉毛髮等の薄きをこく生じ皮膚病でき物ヤケド跡はげ其他あるべき所に毛なきに用て毛はへる妙請合

○藥價三十錢五十錢◎特製一圓二圓◎送料六錢

本舖 東京市日本橋區蠣殼町二丁目 山崎愛國堂

五大軍醫合議製劑

藥價 五週分壹円、三週分六十五戔、二週分四十五戔、一週分二十五戔、二日半分十戔

本舖 東京銀座壹丁目 大阪南久寶寺町堺筋東 山田安民



全國各藥店にて取次販賣す

石橋思案外史序文

征露紀念 續福引種本

東西〳〵罷り出ました新版新案此福引の種本は日露の時局を當込みに智慧の有り丈け捻り出したる何れも嶄新奇抜の趣向に乘て四方の雅君に徵し寄せ集めたる珍種を撰り取り見取りに取り添えて又附錄にはデン通が唸らせ申す義太福引坊ちやん方や孃ちやん方の御慰みには繪歌留多の稚ない趣向の福引と眼先を變へた御景物買つた門には福來る去辰年の此胎みもの巳年の春の賣出しに一番花を咲かして見度い澤山お買ひ下さらば福若の鼻も高砂野々宮サア評判蛇〳〵

加野孤雁君
有田鐵笛君 共編
在佛國中村不折君 意匠表紙
口繪 秀方女史 極彩色畫

▲中判長形美本 約百六十餘頁 正價金拾八錢 郵稅五錢▼

石橋思案外史序文 加野孤雁君著(七版)
柔術 福門 新案福引種本
中判長形美本 正價金拾八錢 郵稅金四錢

(乙の一)

帝國百科全書新刊

第百貳拾壹編

文學士　松本孝次郎君著（製本既成）

兒童心理學

全壹册

抑も兒童心理學は兒童の精神狀態を攻究し兒童の心的發達を明にするを以て目的とせり而して此研究は一方に於ては普通心理學と相待ちて心理に關する問題を解決し他方に於ては普通心理學と動物心理學及民族心理學との連鎖をなし尚精神狀態上より生理學解剖學及病理學とに關する所少からず是れ近時學者間にありて兒童心理學は實に心理學中の一學科として重要なる位置を占め最新研究として最も價値ある科學と稱せらる、所以なり著者教鞭を高等師範に執られ久しく斯學に造詣する所あり、此頃諸學の傍ら本書を公にし以て將來斯學の進歩發達に多大の貢獻を與へられたり

上製　五十五錢
郵税　十錢
並製　四十錢
郵税　八錢

第百貳拾貳編

文學士　小川銀次郎君著（上卷近刊）

世界美術史

我大八洲國は往古韓唐との交通開けてより支竺の美術前後輸入せられて燦然たる異彩を放ち、東洋美術國の稱を擅にせり、維新以來西洋との交通頻繁となり、物質的文明は滔々として國內に風靡し、東洋固有の文物は一時、將に一掃せられんとするに際し、毅然として神州精氣の發するありて、能く我國粹を自覺し、彼が長を採り我短を補ひ帝國の文物を宇內に宣揚するに至れり、此時に當り深く西洋美術の沿革を究闡し其眞意に造詣し研磨精勵以て神州固有の美術を發表し祖先の遺風を顯彰すること無限の快といふべきなり、本書實に此必要に應ずるの新著にして美術國の寶鑑之れに優るものなしといふべし

上製　五十五錢
郵税　十錢
並製　四十錢
郵税　八錢

（乙の二）

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

日露戰爭寫眞畫報臨時增刊

(一月二十五日發行)

征露 第一軍紀念寫眞帖

大判美本　正價貳拾錢　郵税貳錢

名將の英姿

久邇宮、北白川宮、黑木大將、長谷川大將、西大將、井上中將、木越中將、西島中將、渡邊少將、岡崎少將、松永少將、佐々木少將、兒玉少將、藤井少將、澁谷少將、島村少將、梅澤少將、今村少將、平井大佐、小原大佐、梠原大佐、原田大佐、多田大佐、柴大佐、深谷大佐、可兒大佐、谷山大佐、石橋大佐、加藤大佐、

戰鬪の實寫

鎭南浦第一第二、軍用棧橋貨物揚陸、鎭南浦の棧橋に御用船の輻湊、鎭南浦の埠頭に軍需品の堆積、鎭南浦の居留地より第一軍の進發、平壤大口門外の軍橋に先發隊の通過、義州街道に近衛野戰砲兵彈藥縱列前進、義州街道批峴南塲裡に近衛步兵の露飯、開城の南方に先發隊の前進、我軍鴨綠河を渉りて九連城に迫る、統軍部の我軍司令部より觀戰雙綠江戰後負傷捕虜の集合、安東縣河岸に軍需品揚陸、傷[illegible]

山城附近軍用輕便鐵道、鳳凰城第一軍司令部、全東門外我步兵の下水工事、鳳凰城軍司令部に於ける各國從軍武官、鳳凰城市街の一部と鳳凰山の遠望、鳳凰城南門樓上の我衛兵、鳳凰城附近に戰利馬匹と戰利砲の新編制隊(一)(二)(三)軍司令部營内にマツメール孃の慰問、鳳凰城狀より城外市街を望む、甜台子に於ける某聯隊第三大隊露營中の炊爨場、𤏶河より通遠堡方面を望む、𤏶河口軍司令部宿營地、𤏶河口軍司令部前の慰問僧侶、全軍司令部附從軍記者、鳳凰山下に於て學士會員の集合、𤏶河口兵站倉庫糧食積込、全第十二野戰郵便[illegible]𤏶河口の[illegible]砲兵陣[illegible] [illegible] 忠魂祭、松樹林子激戰、全死者の墳墓、[illegible]管理長以下、露探清國人の處刑

然水店より三道嶺の遠望、三道嶺の師團山砲隊砲門の掃除、蘇家堡子の野戰衛生隊繃帶所(一)(二)(三)太平附近の砲兵陣地(一)(二)黑峪附近に糧食縱列の集合、太子河架橋、全黑英台方面砲戰遠望、某旅團黑英台方面前進、黑英台の戰死者、黑英台附近某師團砲兵陣地、烟台附近の戰利品、烟台停車場(一)(二)九月五日黑英台方面より墳上に至る途中の光景、全敵の[illegible]

記事

第一軍戰紀は黑木軍が雷霆を叱咤し韓疆に入りし壯觀より始まり鴨綠江の大激戰、鳳凰城[illegible]天險の占領[illegible]の激戰を經て**遼陽沙河の大戰**に至る迄[illegible]詳密を極むし、其他[illegible]

附錄地圖

第一軍戰鬪經過詳圖

(その三)

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館


HIGETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
PATRONISED BY THE IMPERIAL HOUSEHOLD
Awarded First Class and Gold Medals at the various International Exhibitions held at home and abroad
The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor
G. TANAKA
Choshi, Chiba-ken, JAPAN

女子大學の體操

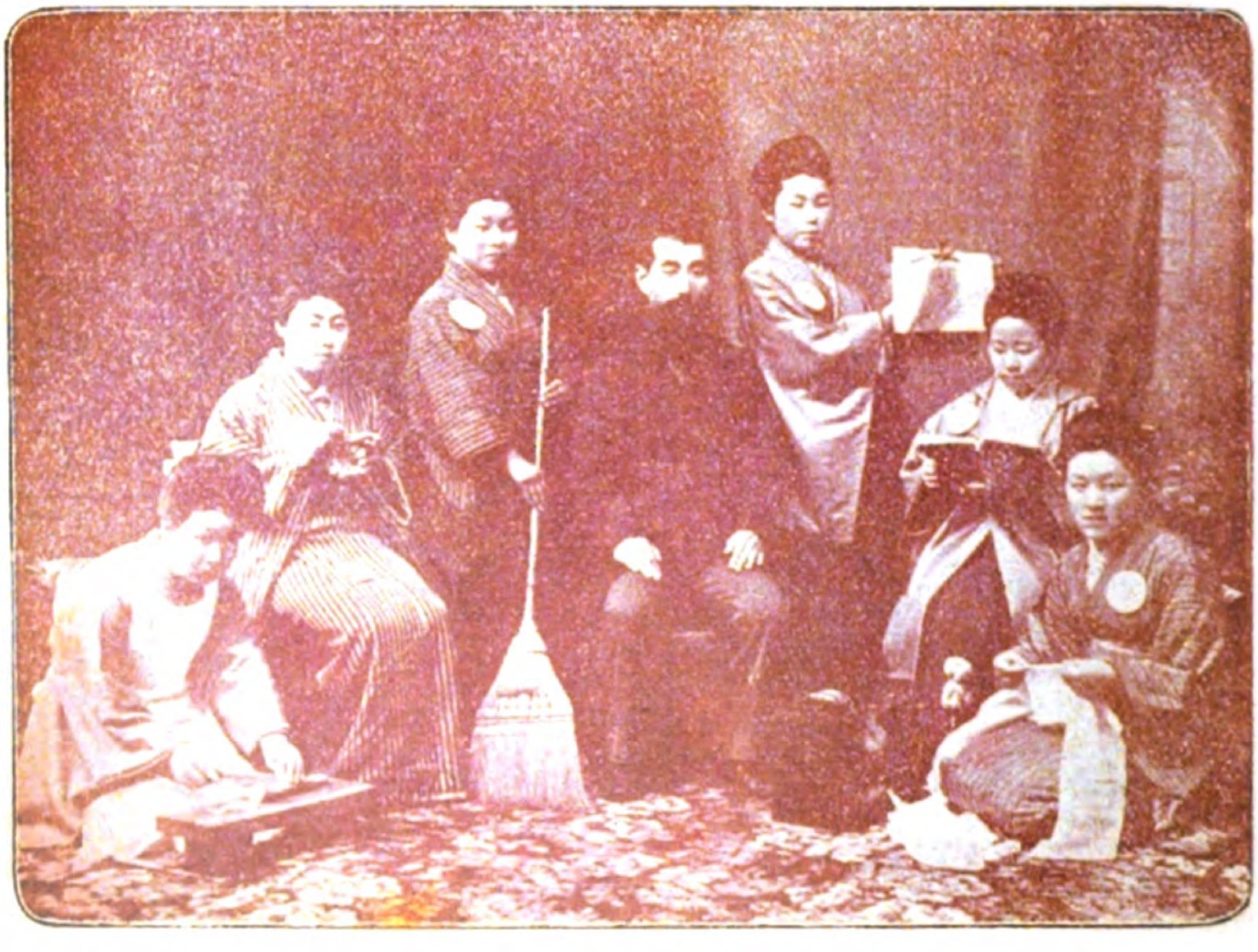


京城の日本小學校女子部



女禮の講習





（記事參照）

米國女學校の兵式體操



（渡米土產記事參照）

寫眞畫報
臨時增刊

征露第二軍寫眞帖

大判美本
正價廿錢
郵税貳錢

縦二尺六寸
横一尺八寸

▲附錄＝第二軍戰鬪經過大地圖＝

二月二十日發行

●本館曩に第一軍寫眞帖を公にし幸に江湖の大歡迎を得たり、豈に第二軍寫眞帖なきを得んや

●第二軍寫眞帖に就ては本館は大に誇るへき幾多の特色を有す、征露軍が滿洲の野に活動を開始せし當初、軍は容易に非戰鬪員の從軍を許さゞりしに拘らず、本館の寫眞班は幸に當局の特許を得、他に率先して從軍するの光榮を得たり、當時本館の寫眞班の屬したるは實に十萬の精鋭を率ゐ、先づ遼東半島の敵前に上陸して最も激烈なる攻擊を加へんと續々出征中なりし奥大將の第二軍なりき

●我寫眞班は斯道の名家柴田常吉氏其他數人より成り、中に田山花袋氏亦筆を携へて一行に加はり、第二軍が內地出發と同時に奥大將の御乘船に同乘して戰地に向へり、而して同軍が十三里台金州に轉戰し更に南山得利寺に敵の堅要を破り、進んで海城に達せし頃また坪谷水哉氏は銳利なる筆と精巧なる寫眞器を携へ、所謂二刀流の腕前を揮ひ從軍記者として馳せ加はるあり、當時此一行が如何に活動せしやは本館諸雜誌の愛讀者は既に知れる所ならん

●第二軍は讀者も知れるか如く、軍の編制に最も變代多く、戰鬪の經過に於ても最も變化多かりし軍團なり、隨て其從軍寫眞に於ても戰記に於ても千變萬化の趣味あるは云ふ迄もなし、我寫眞班及び從軍記者が此軍に從屬するの特許を得しは、一行の大に快とする所にして寫眞に於ても記事に於ても隨分手腕を發揮して、諸君が平生の愛顧に酬ゆるを得ん

●即ち第二軍寫眞班は、軍が內地出發より、船中、碇泊地、上陸地、金州、南山、青泥窪、得利寺、熊岳城、蓋平、大石橋、營口、海城、鞍山店、首山堡、遼陽に至る迄、專ら我寫眞班が撮影せし、千變萬化の寫眞、五十頁二百餘圖を卷頭に飾り戰記は從軍記者坪谷水哉、田山花袋兩氏の快筆に成り、他に第二軍中の逸事、奇談、諸勇士の壯話等は時正に陽春の候に臨み、梅花と共に滿紙に芳を競はん、江湖の華客必ず座右に備ふべき無比の紀念帖なり

發兌元 博文館

（其の一）

實業教育參考書

神戸高等商業學校長 水島鐵也君
德富猪一郎君 書翰
神戸高等商業學校敎授 中川靜君著

書翰文研究

全壹冊

一月中旬
出版發賣

洋裝總ソロース
金文字入美本
紙數五百二十頁
正價六拾五錢
郵稅拾錢

各種文中能く筆者の面目を躍如たらしむ情趣を躍進するもの書翰文に如くはなし而して今や遠征通商其他の事益盛にして其用益多し此時に當り此編あり本書が時代の要を充たすこと大なりと謂ふべし巻中書翰文の變遷、組織、種類、用語、特質等に就て文學的に實用的に古今東西の類例を引證して解說周到行文流暢加之書翰整理法郵便電信幷に敎授法練習問題等を附したれば以て好箇の敎科書參考書と爲すべく間々挿む所の貴顯名家の消息漢文時文尺牘陣中書書翰等は亦文房の珍と爲すべし巻頭に掲げし德富蘇峰水島鐵也二氏書翰の要に曰く『寔に以て精詳後進者を惠む淺からず『歴史的に實用的に解說して全く世間の類書を拔く速に出版ありて可然』云々書翰の利用に意ある人請ふ速に繙て之を其內容に質せ

類書

中村秋香君著 **書翰文大成** 大判上製 正價壹圓 小包送拾五錢

內山幻堂君著 **明治書翰文大全** 大判並製 正價五拾錢 郵稅拾錢

大和田建樹君著 **書簡組立法** 大判並製 正價拾五錢 郵稅六錢

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（其の二）

中學 課程

數學講義錄

每月一回一日發行　一月二十日發行

主筆 竹貫登代多君

算術と三角

——(第八號)——

第一學年　課程 解義　最大公約ト最小公倍數次號ニ讓ル……

第二學年　課程 解義　割引、株式、支拂日ノ平均 問題第十一ヨリ第十三……

第五學年　課程 解義　三角法雜定理 問題第八……

補習科　課程 解義　試驗問題ヲ以テ之ニ代フ 試驗問題解義ノ欄ニ揭ク……

●整數術……出野淺治君

●三角比ノ關係ニ就テ……高木安次郎君

代數學

——(第八號)——

第二學年　課程 解義　方程式ト其問題 問題第十二ト第十三……

第三學年　課程 解義　最小公倍數ト其問題 問題第七ト第八ノ續キ……

第四學年　課程 解義　等比級數ト其問題 問題第十五……

補習科　課程 解義　試驗問題ヲ以テ之ニ代フ 試驗問題解義ノ欄ニ揭ク……

●總テノ虛根ニ付テ……鈴木長利君

●一次不等式ノ解法……理學士 藤田外次郎君

幾何學

——(第八號)——

第三學年　課程 解義　圓ノ定理ト其問題 問題第四……

第四學年　課程 解義　比ト比例ノ應用 問題第二ノ續キ……

第五學年　課程 解義　立體幾何學二面角ト立體角 立體幾何學第四講問題

補習科　課程 解義　試驗問題ヲ以テ之ニ代フ 試驗問題ト解義ノ欄ニ揭ク……

●根軸……飯田與三君

●球躰幾何……田中矢德君

試驗問題

海軍機關學校入校試驗問題　幾何五問三角五問

岡山醫學專門學校入學試驗問題　數學三問

群馬縣小學校敎員檢定試驗問題　算術四問代數四問幾何三問

問題解義

海軍機關學校入校試驗問題　算術六問代數七問

問題募集

好きな題、嫌いな題

此題名の下に其問題を書く(はがきにてもよろし)

正價

一册拾錢、三册廿九錢、六册五拾七錢、十二册壹圓拾錢、郵稅一册壹錢

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

(丙の三)

松原廿三階堂著

女學生の栞

全壹册大和綴極美本
正價卅五錢郵稅六錢

女學世界記者 中村鈴子女史著

名流百家 家庭の模範

極彩色（石版）井筒孃の[illegible]入 《製本既成》

全壹册洋裝
正價卅八錢
郵稅六錢

權門
毛利公爵家
谷子爵家
加納子爵家
鍋島侯爵家
岡部子爵家
平田男爵家

名士
見島惟謙氏
片山工學士
三宅文學博士
水野法學博士
島田三郎氏
山脇玄氏

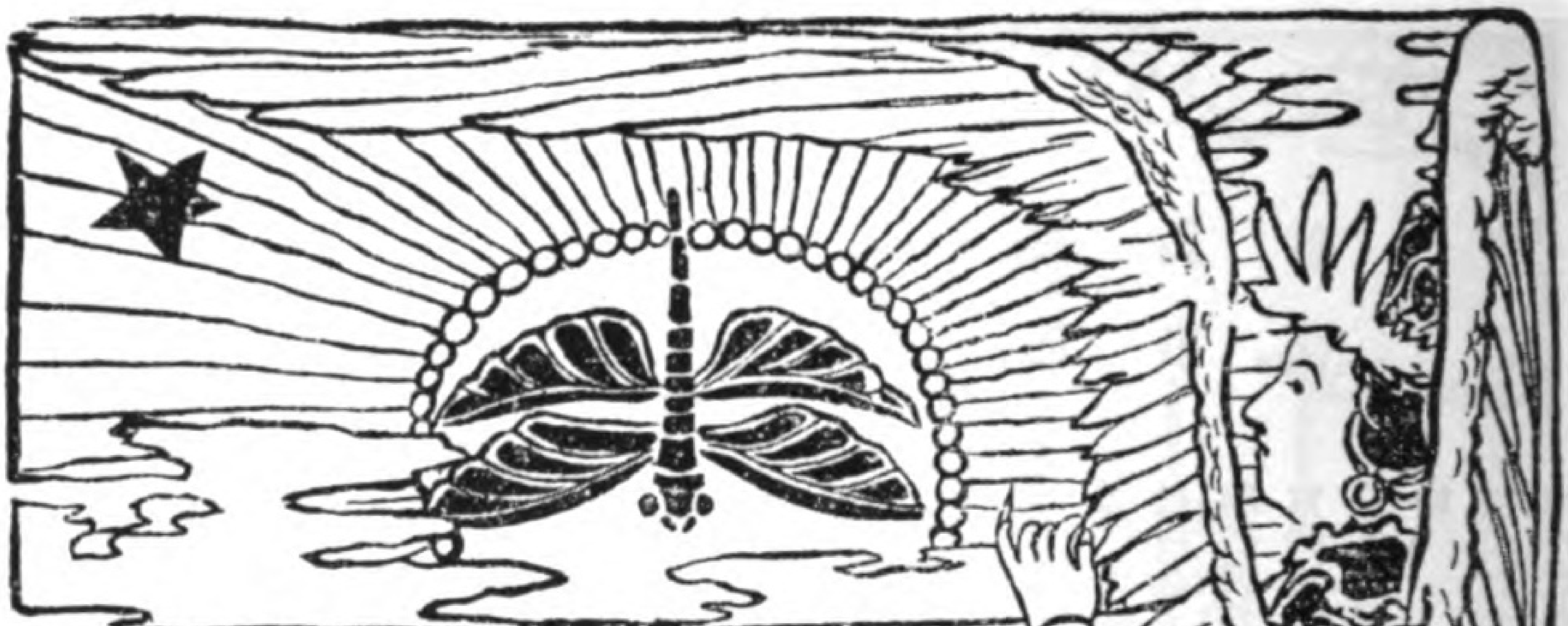
武人
樺山大將
伊東大將
伊集院中將
黒木大將
石本中將
出羽中將

實業家
原六郎氏
中山健三氏
某實業家
片岡直輝氏
佐々熊太郎氏
中橋德五郎氏

方今社會の上中流に通じて其家政一般を見るに表面錦繍を飾りて裏面に糞土を包める如く破倫破德を行ふて醜然愧ざる人多し爲めに一家は惡魔の棲所となり風波絶ゆる時なく和氣靄然の家庭は全く其痕跡を失ふに至れり是れ一家の小にして實は國家の大に及ぼす利害ならずや女學世界記者中村鈴子女史久しく誌上に家庭訪問欄を擔任し數年名家を歴訪して其直話を世に紹介せり今本書に其模範となるべきもの數家を撰摘して一層世に益する所あらしむ權門有力者の家庭學者名士の家庭軍人實業家の家庭等其各家の主人に直接して實賤躬行の直話を寫氣し温かき香ばしき家庭を作らんとするの良模範に資するなり諸子一本を備へて美質良風を涵養せらるべし

（丙の四）

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館





第五巻第參號

沈默せる東郷大將

最も深き水流は其の流るゝ事極めて緩かなり、最も多く荷を負へる蜜蜂は其の飛ぶ事高からず、最も豊滿せる稲穂は其の首を垂るゝ事甚だ低く、最も大なる人物は其の態度最も謙遜なり。我が提督東郷大將の旅順艦隊を全滅して京に歸るや謙退して其の功跡を語らず、沈默して其の平生を言ふ事罕なり、君や水流の深きが如く、又稲穂の豊滿せるがごとし、吾人是を以て誠に棟梁の材、其の用意の深くしてよく軍國の大任を全ふするの人たるに敬服して措かざるなり。

人事暦

二月

休日（日曜日——五日、十二日、十九日、廿六日
　　（祝日——十一日、

▲一日(舊暦十二月廿七日かのとひつじ)——河内牧岡祭、日向鵜戸祭、▲三日——節分、柊木、鰯の頭を戸外に挿し、炒豆を撒いて鬼は外福は内を呼はり、年越の吉事となす、▲四日(舊暦正月元旦)——新月、此日宮中より官國幣社に新年祭の幣帛を班たる、▲五日——釋迦涅槃會、諸寺に勤行あり、都下にては淺草観音最も賑ふ、▲十一日——紀元節、稜威八紘に耀く戰勝國の佳辰、最も祝すべし、▲十二日——初午、子女を連れて稲荷神社に詣づるもの夥し、穴森稲荷、王子稲荷等最も繁昌す、▲十七日——神宮祈年祭、伊勢神宮にて豐稔祈禱の祭典を行ふ、▲二十日——月食、午前二時五十三分より缺けはじめ四時極點に達し五時六分に終る、蝕度四分一厘、此の夜滿月、▲廿一日——仁孝天皇祭、▲廿四日——二の午、〇廿四五日より女兒ある家庭にては上巳節供の準備に取掛り、雛人形を飾り付く、又た都下十軒店に雛人形及器物の市立あり。

季　節——四日より「立春」、十九日より「雨水」。殘んの寒さ餘威を逞うして、氣温最も冷やかなりといへども、北風漸く軟弱となりて東風之に代り、匂く雪又た跡を絶たんとして春心動く所、嵐雪の所謂「梅一輪一りんほどの暖かな」の感あり。

農　事——播種最も閑なる時、農家は舊暦の新年を迎へて隣保相賀す、此月の仕事は農具の修繕、苗床の準備、胡瓜、茄子、蔬菜等の播種、果樹の刈込位に過ぎず。

遊　覽——東野西郊梅香洽れし、龜井戸臥龍梅、小村井江東梅、木下川梅園、蒲田梅園、小向井杉田、月ケ瀬梅園、水戸公園、京都北野など杖を曳くに宜し、初午には稲荷詣て、亦た可なり。遊獵家は山野に入りて雁鴨を打つべく、殊に兎狩の好時期。

食　品——蕗のわさび醬油、たこの酢漬、いかの甘煮、數の子の味噌和、鶯菜のひたし物、慈姑の木の芽あへ、ふきの薹の味噌燒、鯛の甘露煮、甘鯛の照燒、海苔の揚物、七草めし、鹽鮭の酢づけ等最も口に適す。

時論

女子の精神教育

女子高等師範學校教授　町田則文

現行高等女學校令の發布後各府縣何れも一校乃至數校の公立高等女學校を設置し加ふるに私立女學校の設置ありて其の不足を補ひ、女子に對する教育の機關は形式に於ては漸く其の整頓を告げんとするの時機に際會したり、誠に斯道の爲めには祝すべき喜ぶべき次第である、然れども退きて學校の內容如何を顧みるときは未だ吾人の滿足せざる點一にして足らざること多く、教授の事項と云ひ訓練の方法と云ひ全く一般の男子中等學校と粗ぼ其の規矩を一にし、女子の特別教育機關たる性質を得ざるもの頗る多きを感ずるなり、故に今日の急務は寧ろ女子學校の內容に向ひ鋭意して大企畫をなすにありて殊に女子の精神教育を奬勵するを以て然りとなす。

蓋し我が邦學校教育としては男子にありては古來よりの沿革あり習慣あり、殊に男子の精神教育にありては現今寧ろ歐米傳來のそのものよりも反て在來の精神教育を次第に發展し來りて益々旺盛ならんとするに似たり、即ち當世の氣質鍛錬方法として柔道を利用し兵式躰操を利用し其の他劒道に遠足に或は素衣素食に甘んぜしむるの慣養、或は學生相互の制裁を利用する等何れも古來より行はれたる吾が武士道教育の精神を各學校に於て顯はさゞるはなし、實に吾が國男子に對する教育の方法は歐米各國の間に介在して一種特別なる精

神教育の行はるゝことあるは掩ふ可らざる事實にして、吾が輩は此の傾向に向つて滿腔の熱誠を以て之を贊成せんとするものなり、今や吾が邦日露大戰に際し將校士卒の誰れも奮つて粉骨碎身以て尸を原頭に暴露するを以て男子の本分とするの所以は其の由來する所遠く且つ深しと云ふ可し、故に男子に對する學校にありては既に吾が邦古來よりの慣習染襯しありて如何なる勢力も之を奪ふこと能はざるに至りたれども、惟り女子に對する學校にありては果して克く斯の如き境遇に達したるなるべきか杞憂に堪へざるなり、之れ余が茲に聊か述べんとするの所以なり。

古來我が邦にありて女子の教育は惟り家庭に一任し置きたるを以て慣習とし學校教育といふことは全く明治維新後の新計畫たりし、而かも女子に於ける學校教育は此の四五年以來漸く盛大になりたるを以て未だ完全なる教育の方法確立したりと云ふこと能はず、然るを况んや明治四五年の交始めて女子學校を施設するや其の間には色々の失敗談ありて隨分世評を招きたるの歷史を有するに於けるおや、元より我が邦古來より各家庭に於ける女子教育の方法は自ら備はりて相ひ傳はり來り其の習慣の勢ひ亦侮る可らざるのみならず、寧ろ將來に於ける我が女子の學校教育も此習慣に基く可きは勿論なりと雖ども、近頃我が邦に於ける女子教育の傾向は家庭に於ける從來の教育を全く學校教育に移して一任せんとするが如し、故に學校にありしは宜しく此の任務を引き受けて差閊なきまでに其の教育方法を研究すべき時機なるべし、然るに實際を顧みるときは動もすれば此の重大なる責任を盡さずして徒らに皮想的方面に奔り猥りに新奇に馳せ或は單に淺薄なる理想を案出して之を實現せんずるの傾向ありて、遂には家庭の慣習と學校の教育と相背馳するの事實あり爲めに世人の批評紛々たるの現象を提出し來り、誠とに女子教育に對して憂ふ可き次第にして各人女子教育に關係あるものは奮つて此の問題につき其の解釋を試みざる可らず。

抑も人間を教育すると云ふことは、自ら其の國固有の習慣に基かざる可らず、故に英國には自ら英國の教育あり獨逸國には自ら獨逸國の教育あり其の他佛蘭西米國等均しく其の風俗習慣に從つて教育の方法を立てざる可らず、然るに論者動もすれば歐米大家の教育學說を引證し來り以て直ちに一も二もなく之に倣らひ之を現實せしめんとす謬れりと云ふ可し、勿論純粹なる科學と云ふ點より論ずれば何れの國を問はず科學そのもの丶間には國によりて差違ある筈は勿れども、即ち教育學說としては英佛獨國を問はず其の歸する所一なるべしと雖ども、實際の教育方法として見るときは、自ら其の間に至大なる區別あるべきことを知らざる可らず、獨逸の教育を直ちに英國に移すこと能はず亦英國の教育を直ちに米國に移すこと能はず獨逸の婦人必らずしも吾が邦の婦人たらず米國の婦人必らずしも英國の婦人たること能はず之れ等は誠とに事理の判明したることにして玆に詳言を要せざるのことたるべし、故に如何に完美の教育方法が歐米各國に行はる丶も之を直ちに我が邦に移すこと能はさるは何人も首肯する所ならんとす、然るに之を此れ顧みず世界共同主義の精神を以て教育に從事するときは教育の爲めに寧ろ國家の歷史を忘却する欠陷となりて實に寒心栗立すべきの事と云ふ可きか、近頃世上一般の女子教育の風を觀察するに徒らに新を逐ひ奇を好み或は遊戲に運動會に猥りに外觀を買はんとし甚しきは一年一回の大運動に一種異樣の服裝を一齊に裝はしめ寧ろ運動そのもの丶優技を以て競爭するよりは單に外觀の異彩を放ちて以て衆目を惹かんとするの傾向あり、斯の如きは反て之を禁止すべくして其に運動を奬勵するの意義ならば衆目を惹かざる暗々裏に之を奬勵するこそ適當ならん、即ち休業日等に少數の女子を參々伍々教員引率の下に郊外に遠足せしめ或は其の他平素にありて衆目を惹かざる如くに躰育を奬勵する等其の方法數多あるべし、何を苦んてか一年一回位單に御祭り的の大競技をなし一時に數千の衆目を惹くが如き必要あらんや、斯の如き形式的方法を以て女子教育の本領を得たりとするは誠とに痛心すへき現象なり

とこそ云ふ可けれ、蓋し之れ等は多くは徒らに男子教育の方法を一意模擬したるの譯合にして畢竟未だ女子教育に對して專門的研究を遂げざるの結果ならん。

さればとて亦餘り守舊頑牢に失し單に舊時の陳套を逐へば足れりとするは宜しきを得ざるなり、例へば現今我が國に於ける女子に課する國語科などに於て一層然りとなす、徒らに古文古言を解釋し得るを以て能事了れりとし古文の解釋につきては可なりに之を克くするものも時文の解釋に至りては寧ろ反て教育の少なき常識あるものにも劣る如き奇觀ありて就中作文科の如きは幾んと男子のそれと文體を異にし記載の事項を異にし想像的事項にして練習を積み事實其のものを具體的に記述するの能力に至りては誠とに意外の感想に打たるゝこと往々にして然り、或人は之を評して云へらく現今學校卒業生の女子は家庭にありて竈の火をたきながら古今集を暗誦するものありと、實に之れ等の評語は果して其の實際なるや否やを知る能はすと雖も現に角學校教育と女子實際の需要と相隔りつゝあるの例證なりと云ふことを得へし、現に吾人は十分に教育ありと稱せらるゝ女子の日用雜簡文等を讀むに多くは冗長散漫必要なき閑文字を以て全文を組み立るもののあるを見ることあり、蓋し之れ等は元來女子教育の本旨を誤りたるより然らしむる次第にして徒らに形式的方法のみに奔り女子の精神教育の遂行せざるの致す所ならん。

之を要するに今日我か邦に於ける女子の教育は學校教育としては全く明治維新後の新事業にして古來より確乎たる習慣ありたるにあらず、故に動もすれば歐米に於ける女子教育の方法直ちに我が邦の方法と化し去るの勢ひなき能はず、或は亦強ゐて歐米の方法を峻拒せんとするの結果猥りに守舊固牢に陷り徒らに古文古學の教育方法を逐ふて所謂文明流の教育を施すこと能はざるの形跡あり、二者何れも兩極端に奔りたるの偏傾にして蓋し眞正の理想は其の中央點にありて存ずべきか。

蓋し女子の精神教育をして完全に其の結果を收めしめんとするには今日の如くに男子教育家をして其の事業の一部を占むるの間は到底之を望むこと能はざるべし、若し教育をして單に學問技藝のみを授くるを以て足れりとせば決して教員の男女たるを問はず學識あるものは均しく其の結果を收む可しと雖、苟も女流の人物を陶冶し其の品格を作爲するを以て教育の目的なりとせば女子教育家自らが女子を教育するにあらずんば不可能の事たるべし、何となれば教育の効果は模範とすべき人物に觸接して始めて感化せらるゝものなればなり、故に男子教育家は如何に熱誠を以て教育事務を執るも決して女流の模範となること能はず勢ひ教育の方法をして單に形式的に終らしむるのみにして決して女子の精神教育を遂行すること能はざるべし、之れ蓋し吾が邦現今に於いて女子教育の形式的盛大となりたるにも不拘其の割合に十分に女子教育の効果を收むること能はさるの所以たるべきならん、現に男子に於ける中等教育の機關にありては着々成功しつゝありて運動會と云ひ遠足と云ひ柔道と云ひ教員さへ自ら模範を示し率先して生徒を奬勵するあらば生徒は益々之れに刺衝せられて氣質鍛錬の方法となり人物養成の方法となるべき譯なり、然るに男子教員が女學校にありて如何に模範を示すも男子は男子なり女子は女子にして決して兩者同一に其の跡を逐ふこと能はさるべき理の覩易き次第なり、若し女子教員にして女子の女子たる人物と品格と氣質等の模範を十分に示すあらば生徒は忽ちにして之れに感化せらるべし、玆に於て始めて女子教育の成効を見るに至るへきか、吾人は望む今日の女子教育家よ奮つて女子教育の事業を其の双肩に負擔するの覺悟あらんことを聊か感ずる所あり其の一端を述べて世人と共に之を研究せんと欲するなり。

女醫師の前途

東京女醫學校長 鷲山彌生

▲熟々世間を見渡しますに男子の職分即ち働く範圍は廣う御在ますけれども、女子の職分は極めて狹い範圍に限られて居ります、隨て敎育の如きも女子の方は規模小さく、低い程度に止つて居ります、勿論男子は外交に當り女子は內政を司ると云ふことは天賦の通性てはありますが、併し、女子は單に內政をのみ掌り古來の所謂良妻賢母を氣取て居て事足るやと云ふに至つては、一大疑問てあらうと存じます。

▲東洋の文明と西洋の文明を比較致しまするに、前者は後者に及ばさること遙に遠いので御在ます、尤も我が日本ばかりは急速の進歩を以て西洋文明を凌駕し、殊に武勇を以ては世界に冠たるのてありますけれども、飜て其他の諸國を顧みれば、支那にしろ、朝鮮にしろ、又た印度にしろ、暹羅にしろ、一として西洋諸國の右に出つるものはありません、斯樣に東洋諸國が風土氣候の宜しきにも拘らず西洋諸國に後れを取つて居るのは何故てせうか、私は固く信じます、是は全地球何億萬たる人口の過半を占め居る東洋の女子其物が永き歷代に於て徒らに男子の仕事を傍觀坐視し、少しも外に向つて働かなかつた結果だらうと思ひます。是に於てか、文明を進むる上に女子の活動を必要とする理由も解り、又た女子の專門敎育を必要とする理由も解るので御在ます。

▲今や國命を堵して戰爭を繼くる場合てありますから、吾々は必死の覺悟を以て之に當り、最後の一人の盡きるまて最後の一錢のなくなるまて戰ふの決心を持て居らんければなりません、故に時機によつては、男子は

盡く戰場に立ち、婦女のみ國內に止まる樣の場合にも之に處するの覺悟がなくてはなりません、斯樣な場合には女子は男子に代つて國を脊負つて立たなければ成らぬから、其の責任や、實に重大なもので御在ます。

▲戰爭の影響の最も畏るべきは、國の生産力を減じ、富を妨げ、又た國家の單位たる一家を離散せしむるの不幸を見るに至る事であります、即ち國家の基礎を動搖せしむるので御在ます、故に之を防ぐには女子に自營力を得せしむるが最も急要で、又た最も萬全の策であると思ひます、女子にして自營力を有して居つたならば、非常の場合にも一家の離散を免るゝ事が出來ませうし、亦一國の富をも維持して行くことが出來ませうし、從つて出征の勇士にも後顧の憂をさせずして、思ふ存分十分に戰つて貰ふ事も出來るので御在ませう。

▲目下社會の一問題と成て居る再婚論の如きも、畢竟女子に自營力が無いから起つた議論であります、單に理論上から申せば再婚もあながち惡くはありますまいが、併し一家の興廢、夫婦の愛情、社會の道德、女子の節操等の諸點より觀察しまするど、再婚の忌はしい事は火を睹るよりも明かなのであります、若し目下の女子にして自營力を有し、我が手に子女の教養一家の經營をなし得たならば、決して斯る忌はしい再婚論如きが、社會に擡き出てやうはないので御在ます、之を思ふと今の婦人方の腐甲斐なさには轉た憤慨に堪えんので御在ます。

▲近來女子に自營力を養成せしむるの目的を以て、諸所に職業的の學校は設立せられ、又た女子を需用する方面も廣くなつて、女子にふさはしきいろ／＼の職業が出來て參つたは、誠に結構なる現象だと思ひます、唯今の所、女子の職業には教師、看護婦、産婆、保姆、計算手、交換手、新聞雜誌記者等種々ありますが、私は女子の天性に最も適當し且つ高尙なる職分として、女醫の職を此內に加へたいと思ひます。

▲醫師の職が女子の天性に適すると云ふ譯は、抑々醫學なるものは博物學の分科で、緻密の腦力を要する學科

てあります、又た終始弱者の友たる職分であるから、緻密と同情と忍耐の三條件が極めて必要であります、然るに女子は是等の諸德を悉く備へて居りますから、此の業務の女子に適切なることは申すまでもありませぬ。

▲そこで現今女醫の社會的位置は何うかと云ふに、我が國の女醫は最も古き時代に於ては稍勢力を有し、女醫博士と云ふ稱號も在つた位ですが、中頃一時中絕致し、明治に成て十七年に始めて內務省に於て女醫の開業を許されたので、今日では全國に百二三十名の女醫師が夫々門戶を張つて居るので御在ます。

▲而して此の女醫達は或は個人で開業致してるのもあり、或は夫婦共同で開業致してるのもあり、又た病院に奉職してるのもあり、女學校の校醫に成てるのもあり、獨國へ留學中のものもあり、或は支那朝鮮に聘せられて居るのもありまして、先づ何れも女子としては相當に高い位置を占めて居ります。

▲扨又一般の需用は如何であるかと云ふに、從來婦人病の如きは、男醫の診察を厭ひ、等閑に附したものでしたが、斯ういふ患者も女醫には進んで治療を受け、又た小兒の病氣に於ても慈母の如く馴れ親みますから大に診察に便宜であり、隨て醫療を乞ふ者が多いので御在ます、且つ女學校々醫は一般病氣の治療のみならず體格檢査等には大に便宜で御在ます。

▲又た一家存續上より申しましても大なる利便があります、例を私の友人に取りますと、父退職後の家計を娘の手に開業して維持したのもあり、結婚匆々良人病氣にかゝりしを、よく治療看護し一方には一家の經營に務め、良人をして家政の憂あらしめず心靜かに永眠させた方もあり、又た良人と共に病院を開いて居つた人が不幸にして良人に死なれしも、依然其の病院を維持して居るのも御在ます、是れ全く女子の自營力があるからです。

△然るに若し斯かる場合此の人達に此の職業がなかつたとすれば何うでせうか、其の慘狀實に見るに忍びざるものがあるでせう、現に今度の戰爭に於きましても、主人出征の留守に殘つた家族方には隨分御氣の毒なのがあります、幸ひ軍人遺族救護會等の團隊より夫々救助を受けて、安心はされて居るもの丶、之を以て滿足とは云へないので御在ます、此の場合若し女子に自營の力が有たなら、優に家計を續け得て、敢て他より救助を仰ぐにも及ぶまじく、外征の良人に後顧の憂をさせることもあるまじく、內は益々平和を保ち、外は益々國威を輝かすことが出來やうと思ひます。

△今回戰爭が日本の大勝を以て終局を告ぐる曉には、戰後の經營として、東洋の平和を維持する必要から、清韓を保護し且つ之を發展せしめんければなりません、是れ素より男子の職分ではありますけれど、其の一半は我々女子の双肩に於て荷ふの覺悟がなくてはなりません、歐米諸國に於て布敎師を東洋に派遣するや、必ず之に病院なるものを附隨させます、是れ醫師は靈と肉とを醫するもので、最も人を近づけ易く、且つ最も信賴せらる丶ものであるから、未開人を誘導啓發するには、最も當を得た良手段だと思ひます、因て支那朝鮮の如き男女の區別甚しく、女子は設令病氣に罹つても決して醫師に肉躰を觸れしめずと、云ふ樣な閉鎖主義の習慣ある國を啓發してゆくには、我邦より女醫を多く派遣し、以て閨閤の改革より初めるに限ると私は考へます、即ち戰後經營の最大急務は精神の確固とした、國家的觀念ある女子に醫術を學ばしめ、之を彼地に送るにあると思ひます。

△斯く申すもの丶私は決して女子の本分を捨て丶內を外に職業にのみ熱中せよといふのでは御在ません、設令敎師に成つたにせよ醫師に成つたにせよ、女子は何處までも女子たるの本分を守つて家政を主宰し子女を敎養しなければなりませぬ、又た其が出來ないといふ事は斷じて御在ません、我邦では古來の習慣上女子の職

業を卑み、主婦にして職業に勵みなば良人たる人の品位を下ぐる樣に思つて居らるゝ方が往々あるやうで御在ます、勿論本誌を御讀みなさる諸姉の父兄方には、夙に此の誤解を一掃なされしことゝは確く信じて居りますけれども、猶一層進んで一般に此の迷信を破り、新福音を鼓吹して戴きたいのが、私の希望に堪へません點で御在ます。

婦人の新教育

塚本はま子

はしがき

著者はこゝに新教育と題すといへども、もとより學識もなく經驗はた少なき身なれば、斬新なる婦人の教育を考へ得べくもあらねど、たゞ日に日に新たにしてまた日に新たなるべきは、何事にまれまさに然るべき道なれば、おのれが聊かたづさわれる婦人教育の事も、そが初期より今日に至れるまで、外觀こそ少しの異はあれ、殆ど一樣一律のものに抑へとゞめられて、進歩の跡なく學校は增し、學生は殖ゆれど、依然として舊時の男子教育を、形ばかり燒き直しゝが如き方法をあらたむるに至らず、十年の昔と今日と內容は何の異れる點をも見出し得ざるをあやしむの餘り、早晩改良さるべきものと想像して、來たるべき婦人の新教育に、望むべきふしぶしを左に掲ぐるのみ。

教育は將來有用なる人物を造る

べきやう施設さるべきものなれば、今後我國の舞臺には如何なる役者の必要あるべきかを考へ、これが準備と

して恥づかしからぬ教育を施すべき事は、男女とも同じかるべし。婦人はことに學者、技術者として教養せらるゝよりも、まづ一家の主婦として教育さるべき筈なればこれに要すべき教育法は、主として常識と理學思想とを發達せしむるに在り。常識乏しければ日々起り來たる、生活上の事項を處理し、世間の交際、子女の教育をもなすこと難く、理學思想缺くる所あらんか、衣食住に關して衛生、經濟の注意をも完全にする事難かるべし。されば

主婦は必ず常識と理學思想とをそなふべし

との議論には、何人も首肯する所ならん。然るに今の高等女學校程度の教育に於ては、果して常識發達の爲に力を注ぎて研究されつゝあるべきか、理學思想を豊かならしめんが爲に、何等の實驗、何等の設備あるべきか、まことに疑はしき次第なり。見よ今日も猶、修身話として逸成の娘、忠與の妻を模範とするにあらずや、實用の爲にとて日常の座作進退を敎ふる作法は、學校の大廣間にてのみ習ふべき事とし、四疊半、六疊、八疊等の小座敷にては、客に茶をすゝめ火鉢を出すの法をも辨ぜず、學びたる國文讀本はよく諳んずれども、新聞雜誌の雜錄は解し得ず、花の宴開きし記事、納涼に友を誘ふ文など巧みにものせども、盥、手桶などの注文書、金品貸借に關する往復文書など、筆執るべき方向も分かず、地理に滿點を得たる優等生にして、石油は何所より如何にして得べきものなるかを知らず、天氣豫報に「第何區を警戒す」などあるも、何れの地方なりや考へんとも思ひみてさず、大化の新政を委しく説く人も、憲法發布の意義だに解せず、力學の定義を述べて誤らず、よく勢力不滅の解釋をなすものにして、撒水して涼を覺え、積雪の爲に暖を感ずるの理を識らず。況んや化合量をとき、原素の數を諳んずる人も、瀬戸引鍋の危險を思はず、硝子の破損し易きを防ぐ法を知らず、生理學を學びて人身の構造を知れども、入浴に二時間を費し、躰操時間には姿勢を正せども、裁縫の時は脊を屈めて怪

しまず、家政學の敎授は受けたれども、字句の講讀以外には一物も得る事なく、料理は二た月に一回學校の割烹室にて、料理敎師の腕前を見物するに過ぎず、ことに寄宿舍制度の如きは、殆と社會と絶たしめて、尼寺の如き生活をなさしめ、愈々常識の發達をさまたげ、かくて敎育を受けたる女子は、若干の年月を經れば、

女學校の卒業生

となりすまし、一片の卒業證書を得て、婚嫁の資格一つを増したる外、亦常識に關しては何等の得たる所なきに終る。さてかゝる有様にて學びたる本人はいふまでもなく、敎育の任に當れる者も、何の面目をかざしてか、余はこの婦人を敎育したりと社會に吹聽するを得ん、何の顏をもてかそが兩親に、御身の令孃を敎へ得たりと誇るを得べき、まことに小學敎育を終れる後わざ〳〵遠國より出だして、

妙齡の婦人を三年五年手放しおける兩親

の苦勞、心配に報ゆるの道といふべからず。よし兩親の膝下に在りとするも、少からぬ學資と、長き年月とを費して、行末善かれとのみ祈れる望半ば空になり行かば、その失望如何ばかりなるべき。もとより文部省に於ても少からぬ注意を女子敎育に拂ひ、先に高等女學校令出て、近來またその敎授要目を示さる、全く忽せなりといふべからずといへども、近來女子の高等小學以上に勉學を欲するもの、日に月にその數を加へ、數年以前に於ては僅かに全國を舉げて十個に足らざりし高等女學校の、今はその十倍にも達し、生徒數また百倍に餘れりといふ、實に盛なりといふべし。されば往時の敎育にして一人を過りしものは、今は百人を害ふに至るべく、當局者の責任も亦大なりといふべし。要するに今一層

女學校敎育を實際的有効ならしむるにあり

委しくいへば、國語の講師も、理科の敎師も、純粹なる國文を講し、理科を敎ふるの心をすて、わが受け持て

る學課を媒介として、日常必要なる智識を與へ腦力を發達せしめん事を努むべきなり。今の女學校教師に據らぬ點は、そが學力の不足、品行の不良にはあらず、教授法の不親切なるに在り、見よ國語を教ふるものは生徒の男性なると女性なると、高等女學校なると師範學校なるとに關らず、國文を講し、作文を添削するのみをもて任務終れりとし、品行上の事は修身の教師の責任、家事向の事は家政の教師の教ふべきものとし、超然として我關せずと定め、毫もおのが生徒を他日有用の婦人たらしめんとするの用意なく地理の教師數學の教師、また家庭に關する一片の智識をも有せず地理は地理、數學は數學として講ずる事、男生に對すると少しも異る所なきをみる。かくの如くして獨り家政の教師のみ、一週僅に一二時間を費して、家庭に關する百般の注意を與ふるとせば、その不完全なる事はいはずして明かならん、かくてもなほ眞に家庭の女王たるべき、主婦の資格に欠くまじき常識と理科思想とを養ひ得べしとは、何人も思ひ得まじく木によりて魚を求むるとは、これをやいふなるべし。しかも多くの女學校は、女子に理科の必要なしとて、

理科に重きを置く事を知らず

「手などつたなからず走り書き」と四五百年の昔に、すねたる法師の女子に望める希望を其のまゝ、今も女子教育の要件としては、歌を詠み文字を書き、花を生け琴を彈ずるの類を擧げ、一家の生命を司り、國民の元氣の基となるべき、

臺所を輕んじ卑しめ

少しの興味をもたしむるの策なく、ひたすら文學美術などの方面にのみ嗜好をむかはしむるをもて、砒素を含める塗箸を添へ、鉛の入りたる釉を引ける鍋にて煮炊したる食物を、良人に進めて怪しまず、厨房の事は無智の下婢に任せて、懸念だにせず、看護育兒の法も、全く行屆かぬ婦人のみを世に出たずには至れるなり。

かゝる婦人をだに良妻といひ、賢母と稱へば、世間何人か良妻賢母ならざるべき、もとより家事は一種の俗務、妙齢靑春の處女の必ずしもよろこぶ事にはあらざるべきも、これを導くの法其當を得、日常生活に用ひ慣れたる器具の、何の心もなくて使用し居れるに、思はずも恐しき毒劑を拆出し得るが如き事あらば、一は無智の危險を悟り、一は好奇心に驅られて研究せまほしき念も興り、おのづと朝夕の生活むきにも目とゞまり、單調なるべき炊爨裁縫にも、いつとなく趣味を感し來るべきは、覺り難き事にはあるまし。

中流以上の婦人

に對してかゝる懸念は不必要なり、我が娘に高等女學校の敎育をも受けしむる家庭は、十中の八九は生計裕かにして、婚嫁すべき家も亦さのみ低き程度の生活を遂ぐべきものならず、所謂貴婦人仲間の交際をすべきものなれは、厨房に關する智識の如きは必ずしも肝要にはあらじと難ずる敎育家も私立女學校などには尠からねど、こはまた一笑の價たになき議論なり、そも今の我國の如き過渡の時代にある家庭にありては、應接間には卓と椅子をそなへ、ストーブを置くも、勝手には舊式の竈を据ゑ、薪の烟に室内を燻らしむるが如き、不釣合の事珍しからず、座敷には文明の空氣流通し、臺所には野蠻の風吹きすさむ有樣にて、實に我國の開化は未た勝手元まで及ぼさゞるものといふべし。かゝる社界に立ちて中流以上に位するものは、進んで家庭の內部を改造し、表面の開化に調和しむべきなり。ことに衛生上不都合なる品をあらため、經濟上面白からぬ物を改良するは、生計裕なる者が人に率先して試みるべき事なれば、中流以上の家庭にあり、貴婦人と呼ばるべきものは、殊に此の點の研究を怠るべからず。何を卑しみてか、良人小兒等の大切なる身躰に關係を及ぼすべき、衣食住の事を輕しましむべき。

されども又一方より考ふれは、今の女學校の卒業生等が、實際の用に立たざればとて、必ずしも女學校のみ

の罪にはあるまじ。世間は多く女學校を誤解し、學校教育を信用する事深きに過ぎ女學校にだに入校せしむれば、家庭に於ては何等の注意をも拂はず、何等の監督をもなさずして、そが娘は必のづと立派なる婦人となり、いはゆる良妻賢母の資格を備へ得るものとせり、まことにあやまれる考といふべし。そも學校に於ては十分なる設備あり、完全なる教師ありて、理想の如く教育を施し得たりとするも、只僅に一日數時間に過ぎず、その他は家庭に在りて、父母兄弟の間に居り、一家團欒の中に親しく家内の實務を見習ひ、今まで學校に於て机上に講義を聞きしことは、悉く實現してその解釋を與へ、その練習を得しむべきものなれば、若し家庭の父母にして、學校以外にその娘を教育するの道を知らず、學校より歸り來れば、無遠慮なる客人の如く取り扱ひそが學業の成績よからん事を願ふのあまり、勉強のみ心がけしめて全く家事にはたづさはらしめず、寄宿舍生活と同樣の狀態にあらしめて、切角學校にて學べる學課の實地練習をもなさしめず、爲に教師の苦心も水泡に歸し、教育の効果は、その半ばをだに納め得ざるに至らしむる事珍しからず、實に遺憾なりといふべし。家庭に於ては、母親及び姉嫂等はその指導教師として、學校にて學べる主義方針に從ひ、そが學科の練習を實地にせしむべし、まづ代筆させ得べき用談の書簡を書かしめ、日常出納の簿記をつけさせ、土曜日日曜日等には掃除、洗濯、裁縫などなさしめ、料理法を學べるものには、同じ品物を調理せしめて、家人に供し、來客の接待はもとより、時として父母兄姉などの代理として、他家に使せしむるもよかるべく、差支なき限りは母姉などの伴ひて交際場裏をも窺はしむるをよしとす。さるを世の母親は、姑息の愛にのみ溺れ、そが學藝の勞苦に同情する事過度にて、たゞそが疲れんことをのみ恐れ、學校より歸りては、家事の手つだひなんどせしめざるのみかその身のまはりのすゝぎ洗濯に至るまで、他人をしてまかなはしめ、なるべく厨より

遠ざけて、机にむかひ琴に對するを喜こぶが如き傾あり、家事のてつだひなどは嫌ひなりといふを自慢めきて人に語り娘の不束なるの罪は、學校に被らしめて毫も家庭のあづかり知らざるが如き態度あるは、實に怪しくもまた笑止なりといふべし。

要するに今の我國の女學生は、學校よりは實用少く迂遠なる敎育法を受け、家庭に於ては冷淡なる家事の見習者たるに終り、學者技術家として立つべき腕前もなく、いはゆる中途半端の人間として世間に出てゝは、無用物視さるゝに至る、まことに氣の毒の至りといふべし。しかも女子敎育家の多くは、良妻賢母を養成すと稱し、父母は幸福なる婚嫁をなさしめんが爲に、學校に送るといふ、實に言行相違とはこれらをやいふべき。さりとて今の高等女學校學課、科程に於ては、たとへ改良を加へたりとも、もとこれ男子敎育に用ひし學科の變形に過ぎず、如何に各科とも家政に關係あらしむべく敎授せんとすとも、其目的異るを如何すべき、もとよりおのれも良妻賢母養成のみを、女學校唯一の目的とするには、全然贊成し難き節あり、聊か疑ひなきを得ざれど、假りに輿論に隨ひて、主婦養成をもて女學校の主眼とせば、學科は次の如くあらためたき望あり。

まづ五ヶ年程度の高等女學校に於ては、終りの三年間、即ち第三學年以上をもて高等女學校本科とし四ヶ年程度及び三ヶ年程度のものにては終りの二年間をもて同じく本科とし、始めの第一學年及び第二學年、若しくは第一學年間のみは、その豫備學科として小學高等科三四年位の普通學科を課す事とす。本科は修身、齊家、看護、育兒、社交及び運動の六科目とし、その時間の配當等は、凡そ次の如くせんとす。

五ヶ年程度に於ける本科

科目＼學年	一年	二年	三年
修身	人倫道德の要旨 二	仝上 二	仝上 二

齊家	衣服及び身體清潔法、裁縫、洗濯	六	食物論、住居、料理	六	經濟及家庭整理	六
看護	一般の看護法	二	仝上、特種看護	二	特種看護、救急	二
育兒	特別衛生并に姙娠中の攝養	一	體育、德育	二	德育、智育	二
社交	園藝、習字、音樂	六	作文、社交心得	五	作法、禮節	五
運動	體操、遊戲、テニス	五	仝上	五	仝上	五
練習	裁縫洗濯等	六	裁縫料理	六	料理、簿記	六
合計		二八		二八		二八

修身は普通一般のものと大差なく、只實例となるべく今の新聞雜誌に表れたる事實に採らん事を要す。

齊家、看護、育兒等の學科は動植、生理、理化學、鑛物學等を基として、專ら理學的思想の上に、その應用なる齊家、育兒等の實際必要なる知識を養ふ。

社交は交際上必要なる學科を授け、兼て作法禮節社交上の心得などを學ばしむ。

運動は別に解說の必要なく、練習の一項は裁縫、洗濯、料理、簿記など、總て練習を要すべき學科の練習設備をなし、其性質により、好みに隨ひ、一定の教室に於て夫々專門の教師の指導のもとに、練習せしむるものとす。

以上擧げたるは、もとより不完全なる未定稿にして、世に公にすべきにはあらねど、暫くこゝに掲げて世の叱正を乞はんとするのみ。

赤心一片　虚禮廢止

華族銀行頭取　園田孝吉君述

此度は非常な國難に遭遇致しました、幸に上至尊の御稜威と下將士の忠勇義烈とに依て最終に勝利を收める事は疑ひもない事であります、此場合に於て吾々國民、充分の熱誠を以て軍資の供給を充實ならしむる事に力め、國家の目的を達するやうにせなければなるまい、それに就ていろいろの手段もありませうが兎に角此場合に於て國民が力めぬけりやならぬのは勤儉である、

此勤儉は今の流行語で申すと、消極の經濟と積極の經濟の二つである、即ち一は冗費を省いて萬事節略すること、一は稼ぐこと、即ち生產力を增すと云ふ事である、先づ此消極の經濟に就てお話を致したい、凡そ此一國の經濟は一家の經濟が本である、一家齊はずして一國の經濟が齊うと云ふ理屈はない、然らば先づ一家の經濟から論じて參らなければならぬ、今日我國民は此衣食住に就て如何なる事をなしつつあるや、非常に不經濟な事をして居る、第一住居、下級の人民は暫く置いて中流以上の人々の住居の有樣は如何であるか、大抵は二樣になつて居る、即ち西洋風と日本風、啻に家の構造が二樣になつて居れば家具其他衣服萬端に至る迄皆二樣になつて、恰も一軒の家で二軒の暮しをして居ると云ふ有樣、今の富豪の人は其一家の内で二重の準備をするのみならず、妾宅と云ふものがある、是は獨り經濟の上から計りではなく、道德上甚だ列國に對し耻づべき事である、日本が文明國の仲間入りをした以上斯樣な耻づべき事を致しては成らんと思ふ、是等は斷然打破して仕舞はなければ成らぬ、

△贈答品の廢止

悪習慣の内で拾ひ上げれば幾等もありますが、第一盆暮の贈物です、お年玉とか、お歳暮とか云ふ物、是等は誠に無益のものであらうと思ふ、それからちよいちよい人の家を見舞ふに菓子箱、玉子箱を持つて行くとか云ふ事があります、是等も要らぬ事、交りを結ぶに物の遣取りをしなければ結ばれぬと云ふ理窟はない、こんな物の遣り取りをするが故に却つて交際が仕難くなるのである、前に玉子箱を持つて往つた、今度は何んにしやうかと云ふ考へを起すだけでもう交際の妨げになつて仕舞ふ、況んや不經濟な話である、尤も一代一度の婚姻の時とか何とか云ふ場合に

紀念物を贈ると云ふやうな事は差支ない、それは私の娘が先頃外に嫁付た時、誠に容易ならぬ親切を多数の人から受け、何百と云ふ贈物を貰ひました、其御厚意の段は千萬忝けないが、此貰物の始末に甚だ困りました、鰹節の大箱が何百、赤白の綿のやうなものが幾百包み、それから赤い縮緬とか何とか此處分に甚だ窮しました、或は一説にはお禮として其品に鳥の子餅を添へて返すが宜いと云ふ話もあるけれども私は大嫌ひ、人が厚意を以て贈つた物に對し禮をすれば差引何にもならぬ、況んや人から貰つた物を贈り返すは非常な失禮である、葬式の場合でもさうである、香奠なり何んなり折角親切に贈つて呉れた物に對し菓子を贈るとか茶を贈るとか云ふ事があるけれども、私は大嫌ひ、人が折角厚意を以て呉れた物に對しさう云ふ事をすればつまり贈つた者は其お菓子を貰ふ爲めに贈つた形になります、そんな事なら最初から贈らぬが宜しい、此答禮に就ては家内抔は非常に苦しんで居ましたが、私はそんな事はせんでも宜いと云ふて只貰つた人に對して一通の禮状を差出す事に致したが、それでも極く少数の人には鳥の子餅と云ふやうな物を遣つたやうでした、さうしなければ家内のものが承知せんので、さて其一片の禮状を貰つた人が何う云ふ評を下したか、甚だ冷評を下した、それが爲めに妻杯は神經を起して實に困つた、何と云ふかと申と「貴女方へも禮状を……さうですか、私の所へも禮状だけ……はゝあ左樣ですか、お珍しい事で御座います」と云ふやうな譯で是が非常な厭味、一體斯樣な場合には鳥の子餅杯を贈るべきものである、殿田の遣方は怪しからんと云ふかは知らぬが、併し私の精神は其處にはない、今云ふ通り折角人が厚意を以て呉れたのに又此方から禮をすれば差引ぜろになるから私は常に家内の者に死んだ時は香奠抔を貰ふか知れぬが決して返禮をするに及ばぬ、といつて置きます、

△婚禮の贈物

又婚禮の贈物に就て私は少しく注文がある、贈物をするなら、虚飾虚禮に亙らぬやうにして貰ひたい、折角の親切で人に贈ると云ふならば安くても構はぬ、何んでも實用に立つものを贈つて其人の好意を紀念として忘れぬやうな物が欲しい、西洋では婚禮の贈物は他の贈物と違ふて極く叮嚀に致しますが、何れも實用に立つものであります、お嫁さんに附るものは隨分高價な飾物類もありますが、向ふへ往つて家事向きに不自由のない物、例へば食器具の如き什器の如きもの又男なれば男相當の實用品を贈りますから贈つた者の志も行屆き且つ何時までも紀念として遺る譯でありますけれども貰つて直ぐに消え失せて仕舞ふやうな物では誠に其處分に困る、鰹節には實に弱りました、長く持つて居れば虫が付く、何うしても賣る外はない、人から貰つた物を賣ると云ふ事は實に言語同斷の話ですけれども、仕方がない、それから之れを

明けた所お其中には全然鰹節の形のないものがありました、丸るて蜂の巣のやうになつて虫が一杯居ると云ふやうな品物もありました、それは贈つた人は勿論知らぬてあらうが若し之を知つたならば面目ない話、こんな間違が能くある、玉子箱を貰つて明けて見たら中から雛つ子が飛出した杯と云ふ笑ひ話もあります、

故に此鰹節や玉子の類を贈ると云ふ様な事は是非止めて貰ひたひ、今後の處我社會一般が、どうぞ虚を去つて實に就くと云ふ風にありたひものと呉々希望致し居る次第てあります、

今一つ婚禮の時に迷惑なるとは祝物を持參する使者及車夫等に祝儀を遣はす、一事てある五人や十人なら左程てもないが何十何百と、到來する其使者等に一々包み分けて祝儀を遣はすと云ふとは、非常の手數にして、家内の混雑一方ならぬとてあります、是等は細かに吟味すると折角厚意を以て贈つた品物の代價を取戻すと云ふ理屈に陥るから、蓋し寄贈者の本意てもあるまい、故に若し使者等の勞に酬るの必要があるならば寄贈者自身に仕拂ひ先方の人へ迷惑の掛らざる樣致した方が充分厚意を貫くとてあらう、

△煎茶の惡習

それから日本程茶を飲む國はない、朝往かうが晩に往うが、晝往かうが、又人足が來やうが車夫が來やうが、誰でも構はん、どうしても茶を出さんければ承知しない、彼處の家に往つたけれども茶一杯飲ませないと云つて小言を云ふが、そんなに喉の渇くものでない、唯これは習慣で、往けば必ず茶を出すもの、火鉢、煙草盆を出すもの又少し宜い所になると必ず茶菓子を出します、華族の家にお訪ねすると必ず恭々しく奉書紙に包んだお菓子が出ます、それを頂戴せんと御立腹になると云ふ話、それは誠に有難迷惑であるが仕方がないから貰つて來ます、一日の中に何十人幾ら出ても一々お客にお菓子を下さる、一ヶ年の内にはこりやあ相應な失費であるだらう、實に無益の話ではないか、上の好む所下之より甚だしきものありて、私が華族銀行の頭取となつて華族さんの所に出入りを始めて何時もお菓子を頂戴して來るからと云ふので、妻が何うしても華族さんのお出ての時は必ずお菓子を出さんければならぬものと心得て了つて、外の人が來ても菓子を出すてす、幾ら小言を云ふてもこれは止まん、餘計な事と知りつゝせなくちやならんと云ふのは困つた話であるが、そうしなければ華族さんの力ては承知がなからう、又世人も承知せんだらう、或は惡口を云はるゝ恐があるから已むを得ず其眞似をすると云ふ始末、私は色々家庭の經濟の事に就て考へて居る事もあるが、一つも實行は出來ない、苟も此社會に出てゝ公衆と交際を結ばんければならんに就きましては、矢張り泥水に住めば泥水に染まれ

ばならん道理で、世間の人のするやうにせなくちやあ此社會に立つて仕事をすることが出來んに依つて、已むを得ず忍んで居りました、實に此度の國難は不幸な事であるが社會の各方面にある弊害、不經濟なる事を一掃するには誠に好機會であらうと私は思ふ、何うした所が非常な事が出來せん以上は、非常な改革は覺束ない、此點から申しますと此度の大戰爭は或は禍いを轉じて福となすかも知れぬ、幸にして戰爭にも勝ち社會の弊害をも一掃する事になりますれば此上もない天下の幸福だらうと思います、獨り經濟上の事ばかりではない、社會各方面に弊風が滿ちて居る、之を一概に申せば人心が腐敗して了つたと云ふ有樣　此有樣で幾十年を經たならば日本は自滅するかも知れない。

△贅澤品

それから此贅澤品に就き一つ申述べたいのは金鎖金時計、餘程外國から輸入されてをる、此統計は見ませんが何うも日本國民の此富の度合から見ると私は此金鎖、金時計と云ふものは甚だ不釣合ではないかと思ふ、時計は固より必要でありますが、時が合ひさへすれば何でも宜いので、何ぞぴか〳〵金色を光らして居らんならぬと云ふ必要はない、それから金剛石も大分輸入されたてあらう、先年領事を勤めて居ります時分に大分注文が來た、其時分から私は論じて居る、日本の婦人がダイヤモンドを以て外國の婦人と競爭する抔と云ふことは迚も出來ません、國を傾けても恐らくは六ケしいかも知れんこれは、實に不經濟な話であるからダイヤモンドを買入るゝ事はお止しになつたら宜からうと云ふて其注文をした人の處へ外の安い飾物を買つて送つた、所が其注文主の曰く誠に御尤も、委細承知致した、以來其方針を執らうと云ふことであつた、然るに跡で聞くと其同じ注文者が外の手を經て矢張ダイヤモンドを注文したと云ふ、何うしてもダイヤモンドでなければ夫人が御承知にならん、婦人社會の流行物になつたに就て一人ばかりダイヤモンドを着けて居らんと云ふことは出來得られないと云ふ事で、外の手てお買入れになつた左樣な事ですから幾ら云つた所が行はれはしない、而してダイヤモンドは御承知の通り外國產の非常な高價の品て、それに外國の細工を加へた物を日本人が飾りとして用ゐて居ると云ふ話、英吉利の如きはケープ、コロニーと云ふあの喜望峰の脇にダイヤモンドの產出する所があつてそこから掘出して多く本國に送るので、本國の人が出すに違ひなけれども、其金は同じ植民地、自國民の住まつて居る土地に落ちるのであるから矢張自國に落ちるので一つも他國に出はせん、唯だ本國にある金が植民地に往くだけの事で、其植民地が產出すれば詰り本國も產出する事になるのであるから損益の上に於ては頓と違ひはないのである、それて又英吉利の上流社會ではダイヤモンドの流行は非常なもので貴夫人方は殆どダイヤモンドで埋まつて居ると云ふ位で、一人て何拾萬圓何百萬圓のダイヤモンドを持つのは敢て珍

らしき事ではない王宮の舞踏會などに行つて見ますと瓦斯の光よりか貴夫人の付けて居るダイヤモンドの反射の光の方が强い位、そんな處へ五千圓や、一百圓のダイヤモンドを着けて行つた所が、却つて見苦しい位のもので、少しも目に立たぬ、私が彼地に在勤中に、或る宮様と御息所が來られて、國王に謁見なさると云ふので、俄にダイヤモンドをお買上になりたいと仰つしやるから、私がお供をして參りました、所が髮の飾りから胸の飾り一と揃いて、それもたつた一遍しか着けられぬ物、再び謁見なさる時には復た違つた物を着けなけりやあならぬと云ふのが、英國宮中の風習でありますが、其一遍しか着けられぬ物が二万何千圓と云ふ事であつた、宮様も殆どお驚きなされて、是れだけの物に大金を使ふのは堪へられぬ話であるが、何うしてもお會い申さなくちやならん、誠に困つた次第であると仰せられた、私は平素、日本は美術國である、日本人自らも美術國を以て任じ、又人からもさう見られて居る國でありながら、婦人の飾物や何かは何故に自ら拵へる事が出來んであらうか、何もぴか〳〵光つて居らんければ飾りでないと云ふ事はない、一種の立派なる美術的細工を以て、日本の裝飾品として宜さゝうなものではないか、どうぞ今後はダイヤモンドなどを無暗に輸入する事は罷めて貰ひたい、物品を輸入するならば、もう些つと實用的の物にして貰ひたい、

△葬式の虛禮

次に葬式の事を述べませう、今日の葬式は實は葬式ではない、殆どお祭り騷ぎである、人が死にますと平素出入もしない人にまで廣く緣を取った通知狀を出す、是れは暗に會葬して呉れと云ふ意味合ひ、夫故平素出入をしない人でも、左樣な通知を受けるから、已むを得ず吊意を表する爲めに墓場まで行く、人が死んで悲まぬ者はない、荷も吊意を表することは人情の常でありますけれども、何も平素出入もせぬ所まで往つて吊意を表するには及ばない、何故にそんな事をするかと云ふとこれは一つの流行、何處其處の葬式には何千人の會葬者があつて盛んな葬式であつたと云はれたいのが即ち流行である、實に無益な事、花なぞは一丁も二丁も行列を造つて往く、甚だしきは鳥や何かを立派な籠に入れて墓場に持つて行つて放つ、何の事やら譯が分らない、

△醫師への虛禮

それから醫者のことに就てもお話して置きたい私が第一醫者が氣に喰はぬのは少し上等な醫者になりますと忙しいとか何とか云つて容易に

來て呉れない、眞に忙しくて來られぬなら宜いけれども、大臣さんとか何んとか云ふと屹度出掛けて行く、均しく忙しいなら大臣さんの所へも行き得られぬ筈、人を見て往くのである、大臣さんの命も我々平民の命も地位に於てこそ高下があるけれども、命に於ては一つも輕重はない、我人共に同じやうに惜しいのであるから、其命を助ける職分に當る人が、其位地の高下に於て忙しいの何んのと云ふ事を云はれては甚だ困る、そりや醫者も矢張商賣であるから診察料の高下に依つて區別をするかも知れぬけれども、商賣と云ふ内にも人情と云ふものを含んで貰はなくちやならぬ、今一つは此醫者さんが乘る所の車夫です、病家から其車夫に――祝儀と云ひますか――祝儀か何か知らんが兎に角出すと云ふ習慣になつて居る、これが非常に私は氣に入らぬ、なぜ車夫に祝儀を遣らんければならぬか、なぜ醫者自身が雇ふて居る人間に病家の者が心付をせねばならぬか、實に餘計な手數である、經濟のことは別として、手數も宜いが此お醫者さんの車夫に心付を遣るにも遠近に依て差がある、又醫者に依ても區別がある、甲には五十錢遣るとか乙には三十錢遣るとか餘計な心遣ひをしなければならぬ、夫れが爲に私の縁家では非常な混雜を惹起した事がある、其縁家は貧乏である、通常其邊に來る其醫者の車夫は確か五十錢取り居つた、それを二十錢か三十錢遣つた所が車夫が怒鳴り込んで大騷ぎをした、病人も殆ど目を廻したと云ふ事がある、實に不體裁不都合極まる話である、何うぞ此後は車夫に病家から遣らんければならぬものは醫者自身に拂つてをいて、後で病家から取る樣にして貰ひたい、醫者の來る度に女中が一々奥さんの所へ來て此お醫者さんの車夫には何んぼ遣りませうとお尋ねをする、さあ、あのお醫者で彼處からだからまあ斯んなものだらうと考へる丈けても煩はしい事夥しい、それから診察料の事です、夫れが一向分らぬから半期々々の仕拂時に細君の心配は一方ならぬ、少な過ぎてはならぬと思ふから、よい加減に診察料を包んで其外に反物とか玉子箱などを添へて遣はす、是は醫者の方でも隨分迷惑な事であろうと思はれる醫者も一種の商賣だから遠慮なく勘定書を送つて其の外には貰ひ物をせぬと云ふ事に願ひたい、

△婢僕の冗員

次に日本の家庭には何故に多數の婢僕を要するか、茲に一つ實例を擧げてお話しますが、私が彼方に居つた時分は仕舞には子供の五人も出來て隨分手の掛る暮しをしましたが、其上領事館の官舍見たやうな所に住つて居たから、上は皇族其他發着の人迄に日本食を饗まうやら何やらて、隨分忙しい、一年の内には何百人宅へ來て飯を喰つたか分らない、それてどの位の人を使つて居つたかと云ふと五人の子供の時には子供の世話をする女が二人、其二人の女が萬事世話なしに引受けて遣つて呉れた、それから又部屋の掃除から寢床の始末、其他給仕やら何や

ら夫等の仕事をする爲めに——上番と云ひませうか——それがたつた一人、四階五階建の家で部屋の數も多い、それに只つた一人で用が足りた、ルイザと云ふ女でありましたが、未だ存命であらう、兎に角始めから終りまで八年間使つて居つて英國を立つ時分には互ひに泣き分れをしました、此女には何にも苦情の仕様がない、此方が云はないでも終日働いて居る、椅子に腰を掛けると云ふのは飯を喰ふ時とか茶時に茶を飲む時だけで、其外は決して腰を掛けて居らぬと云ふ女である、それから臺所に料理番が一人に仲働が一人、皆女で何うかすると日本人の厄介者が一兩人居る事もありましたが、夫れは餘り役に立たない、それで臺所の方に居る女は料理の外何んにもしないからルイザが客の給仕をしたり、玄關の戸の開閉をしたり其他種々な事を一人で遣つて居つたのです、なぜそれが出來るかと云ふと日本のやうに茶を出すとか、火鉢を出すとかお菓子を出すと云ふやうな事がないからで、玄關の戸を開けると云つた所が其客を客間へ通すだけで、其處へ主人が出て行つて挨拶をする、其間は決して下女下男は出入りをしない、客もそうです何も煙草を喫ひに來たのではなし茶を飲みに來たのでもないから、

△喫茶の弊風

英國では一定の茶時があつて其茶時は十人十五人と來客があつても、女中は一人で澤山である、唯茶器其他菓子類を座敷へ運ぶ丈けで、茶を入れるのは女主人の役、給仕は子供等がする、又來客中で互に手傳つてやると云ふ風で、決して下女下男を近づけない、誠に清らかにして簡便なる風儀と思ひます、夫れについて恐れ入つた話がある、今の有栖川宮殿下が英國御留學中、或る教師の家庭に御住居になつて居つた、茶時抔に御見舞すると殿下より親しく茶菓の御給仕に預つたとを恥辱して居りますが、是が即ち英國一般の家風であります、

私の宿主島津家では、先般來英國女教師を雇ひ、四五人の御子供方を托して、純然たる英國風の家庭教育を受けさせてあるが、其の教育法に至ると規律整然感服の外はない、實に末賴母しい事である、私共が時々御見舞をすると當主たる公達が矢張親しく茶の給仕をなさると云ふ有様であります、之に反して日本は何うです、それ御客さんが見へたと云ふと先づ玄關番が戸を開ける、夫れから煙草盆を出す、茶菓を出す、事に依ると珈琲も出せば紅茶も出すと云ふ騷ぎ、なぜ斯んな事をせねばならぬか、茶は僅か許りのものでありませうが茶菓等の給仕の爲に餘計の人手を要し、且つ藥罐の湯も朝夕絶へず沸して置かなければならぬ、而して茶を飲む許りではない、朝から甘い物を喰ふ衞生の上から云ふても非常に有害です、

我が家庭に於ける主人公の無性なるには驚かざるを得ない、酒を飲む時には御酌が要る、衣服は一人では着られない、風呂に這入れば人に

流して貰はればならぬ、一寸先きにあるものを取るにも他人を煩はすと云ふ昔の殿樣流儀とも申すべきものか、丸るで不具者同樣であつて何の爲に人間に手足が付いて居るのか一向分らぬ、そうして主人公の出入の時杯は家内總出で玄關に於て送迎すると云ふ騷ぎである、

私が龍動領事在職中我大藏省は正貨回收策を執り、其事務の取扱方を領事館に一任した、二三年の間に幾千萬圓と云ふ銀塊を本邦へ送つたが、其取扱の爲に幾人を要したかと云ふと、私の外に書記生が一人、英國の小使が一人居つた、其書記生は專ら本邦と往復の事に當り私は英文往復、金錢出納、銀塊購入の事等を司さどり、銀行杯へは自ら通帳を携へて往來した、一ケ年には何百萬圓と云ふ取扱高である、其外外務省關係其他可なり用事もあつたが格別譴責も受けずに用を辨じました是れが我が御役所であつたならば少なくも五六人以上の手を要したであらう、甚だ自負がましい樣であるが、國民がこんな心持で遣つたならば一家の經費は勿論政府の官吏も半分位は減じ得らるゝ事であらう、

△夜會、園遊會

是等は元と西洋を眞似たものであろう、眞似をするのが惡いとは申さぬが、我國では是等會合の趣意を大に取り違へて居る、所謂眞似損つて居る、要する所社交の爲めであつて第一主人に敬意を表し友人に面會して舊誼を溫め且新友を求めたいと云ふのが目的である、私は英國在留中屢々園遊會杯に參つたが食堂の混雜する有樣又は餘興等をついと見た事がない、給仕杯は前に申述べた茶と同樣客同士で互ひにやる、そうして第一婦人を扶けて一般に行き渡つた處で始めて男子が飲食をする、夫れも決して大食大飲をやる樣なとはない、此外別段世話人もなければ給仕も要らない、眞の給仕なるものは食卓の後方に立て食器の取次とか或は酒瓶の口を開ける位のものである、然るに我國ではどうです、第一幾人と云ふ世話人が赤白の目印を付けて諸所に張り番をして居る、立食の外に種々なる飲食店を設けて其給仕には多く醜業婦を使つてある、尙夫れても足らぬと云ふので種々餘興の設けもある、贅澤と云ふてよいか、不體裁と云ふてよいか言語同斷である、又た立食場の混雜なる有樣杯は實に見ものである、婦人が居ようが誰が居ようが構つた事はない、我れ先にと立食場に馳せ集り各種の肉類を皿一杯山盛りに取つて他人の席を奪つても構はない仕すまし顏で腰を掛けて居る、今日はもうあるまいが、以前はよくはんけちに食物を包み或は隱しに入れた事があります是等は不作法を外國人の目から見たなれば抱腹絕倒の事であらう、(以上は氏が談話の要領を筆記したるものなり)

The "Jogaku Sekai" English Columns.

Conducted by Isoh Yamagata.

The Empress of Russia.

In the previous issue, I have written at some length about our gracious Empress and the Queen of England. It would not be out of place to write here something concerning the Empress of the nation, with whom we are now at war. Her name is Alexandra. Her Majesty is the daughter of Ludwig IV., Grand Duke of Hesse, and was born on June 6th, 1872, so that she is now thirty-two years of age. She married the Czar on November 26th, 1894, and has since had three daughters and one son. Her Majesty lives is a very luxurious way. How costly her living is may be judged from the fact that she spends £2,000 or 20,000 *yen* a year on perfumes, soaps and toilet waters, which she has sent to her exclusively from the French capital. Violet is her favorite scent and her toilet water is usually perfumed with violets.

Compare this extravagance of the Czarina's with the simple and frugal way of living led by our Empress, who annually spends so much in charity. Are not we indeed fortunate?

女學世界英文欄

山縣悌湖

露國の皇后

前號に於て私は我仁愛なる皇后陛下幷に英國の女皇につきて少しく記述する所がありました、こゝに目下我國と戰ふて居る國民の皇后につきて記述するもをかしくはありますまい、露國の皇后は御名をアレキサンドラと申し、ヘッセの大公爵ルードウイッヒ第四世の息女て、一千八百七十二年六月六日の御誕生なれば、現今御年三十二てあります、陛下は一千八百九十四年十一月廿六日露帝と結婚し、以來三人の皇女と一人の皇子とを生み給ひました、陛下は頗る贅澤なる暮しを爲し給ふ、其生活のどれ程費へ多きかは香水、石鹼及び化粧の水に一年二萬磅即ち二萬圓を費さるゝことを見ても分ります、これ等の品々は佛國の都から特別に取寄せらるゝ菫が陛下の尤も御氣に入りの香ひて、陛下の御化粧の水はいつも菫の香が入れてあります、

露國皇后の此贅澤と毎年慈善の事に費し給ふ我皇后陛下の御暮し向きの質素儉約とを比べて御覽なさい、我々は實に幸福でありませぬか、

A Tragedy of War.

Despite the fall of Port Arthur the war is still going on. Let us hope that Russia will soon see the folly and hopelessness of continuing her resistance and sue for peace.

War is the source of sorrow and misery. Who is there who will not be touched by reading the following story, written by a Russian officer, of an incident, which he himself witnessed in one of the Russian defeats ?

All our wounded were carried away if they could walk or hobble with assistance, but we had to leave several of the badly wounded behind.

It was all right leaving officers, but the wounded privates imagined that they would be tortured by the Japanese, and many cried to us either to take them or put them out of pain.

I witnessed one most affecting incident. A young man named Feodorenko, son of our grizzled sergeant, was badly wounded in the stomach, and lay in a trench among a heap of dead. Over him bent his father, crying like a little child, and exclaiming, "My son, my son!"

Reschetizky called, "Come on, Foedorenko, we must be off!"

"It's my son, your honour."

"Say good-bye to him, then!"

"Never mind, Mikhail," said the father, "the Japs won't harm

戰爭の悲劇

旅順口の陷落したのにも係はらず、戰爭は尙ほ進みつゝあります、願はくは露國が速に其抵抗を續くることの愚と無望なるとを悟り、和を請はんことを、

戰爭は悲みと不幸との源であります、次ぎに揭ぐる、露國の一士官が露軍の敗走の際實見した事を書いた話を讀みて、感動せぬ人がありませうか。

我軍の負傷者は自ら步行し得るか、若くは他の助けを得て跛足を引き得る者は悉く他に移されたり、されど數名の重傷者は之を殘し置かざるを得ざりき。

將校を殘し置くは可なり、されど負傷せる士卒等は日本人の爲めに虐待さるならんと想ひて、我等に向ひ、伴れ行くか若くは殺してくれよと嘆願したり。

余は一塲のいとも哀れなる出來事を實見したり、我隊の老曹長の子なるフエオドレンコといふ若者腹部に重傷を負ひ、累々たる死骸に交りて塹濠に橫はり居たり、彼れの父は子供の如く泣きながら其上に伏し屈みつ「我子よ我子よ」と叫び居たり。

レシエチッキーは呼んでいへり「來れ、フエオドレンコよ、我等は去らざるべからず。

「君よ、こは我子なり」

「然らば別を告げよ」

父はいへり「憂ふる勿れ、ミハエルよ、日本人は汝を害するとなか

you."

"Come on," repeated Reschetizky.

The old man again bent over the lad, and this time he got an answer.

"Go, father, you'll be killed if you stay."

The bullets began to whistle overhead. The sergeant rose.

"Now, my lad," he said, "I won't see you again in this world. Do you want water?"

"We can't wait any longer," rang out the words.

Feodorenko stooped, and poured the water from his flask into the boy's mouth.

"Good-bye, Mikhail," he said. And all the soldiers around shouted, "Good-bye, Mikhail," and continued the retreat.

るべし」

レシエツキーは再びいへり「來れ」

老人は再び若者の上に伏し屈みつ、此度は答を得たり

「去られよ、我父、もし止まらば殺され給はん」

銃丸は頭上に鳴り始めたり、曹長は立ち上りつ

彼はいへり「さて我子よ、もはや此世に於て會ふことなからん、水を欲するや」

「もはや待つ能はず」と命令の言葉は高く聞えたり

フェオドレンコは屈みて我子の口の中に水筒の水を流し入れて言へり

「さらば、ミハエルよ」あたりの兵士も亦「さらばミハエルよ」と叫びて退軍を續けたり

* * *

A Russian Amazon at the Front.

Speaking of war, here is a very strange story of a famale Russian scout. It is told by a foreign war-correspondent, who says that he saw her at Liaoyang Station before the town fell into the hands of our Army. He says that the name of this Russian amazon is Alexandra Ivanovna, that at the time he saw her she was dressed in uniform just like other soldiers and that she carried a sword and a revolve in her belt. The correspondent further says:—

"She is a student from one of the Siberian High Schools. She has for o couple of terms studied

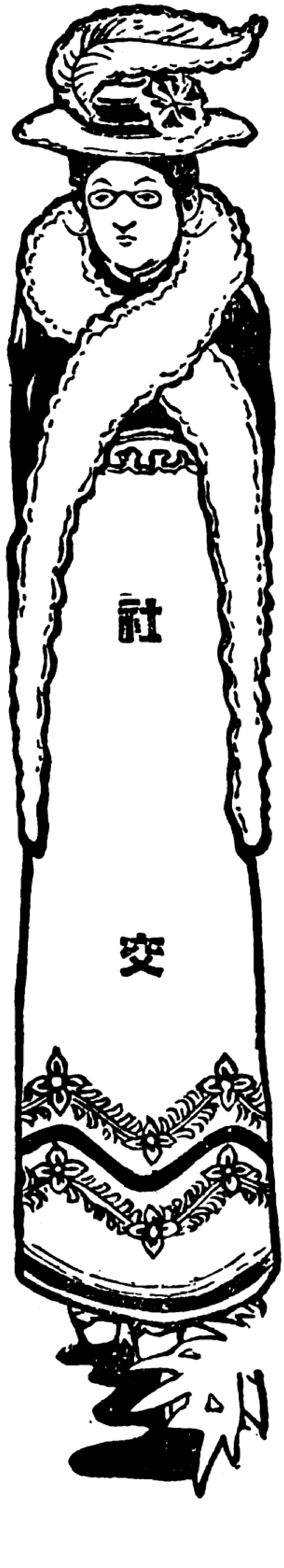
露國の女兵

戰爭と申せば、こゝに露國の女の哨兵の頗る奇なる話があります、これは外國の軍事通信記者の語る所で、彼は遼陽がまだ我軍の手に落ちぬ前同地の停車場で此女兵に出會つたと言つて居ります、通信記者のいふ所によれば、此露國の女兵の名はアレキサンドラ、イヷアノヷナといひ、其出會つた時には他の兵士の如く軍服を着け、帶には劍と短銃とを附けて居たそうです、通信記者は更に述べていふやう:—

「此女はサイベリアの一高等女學校の生徒で、二學期の間トムスクの大學で東洋語を學び、流暢に

Eastern languages at the University of Tomsk, and she speaks Chinese and Japanese fluently. She has already, during the Boxer rising, followed the Russian troops disguised as a man. She admits that her love of adventure is so strong that she cannot control it; and when the present war broke out she again offered her services as a scout. The high military authorities did not receive her very graciously, although she wore her medal for services rendered during the Boxer war, and although she was able to prove that she had a complete knowledge of the languages both of the Manchurian and of the enemy. It was only after having given the General information about the Russian and the Japanese positions, information which could have been obtained only on the spot, and which was known but to a few at headquarters, that her services were accepted. She received a certificate of indentity, which, in accordance with her wishes, was made out in the name of a man and a couple of horsemen were given her for an escort. Since then she has been all over the country lying between the opposing armies, and she has rendered such great service, and has displayed such skill and daring, that General Kuropatkin has decorated her with the Cross of St. George."

支那語と日本語とを語る、既に團匪の亂の時男子の裝ひをして露軍に附從した事もあり、自ら其冒險を好むの情を抑ゆることが出來ぬと言つて居る、今の戰爭が開かるゝや、此女は哨兵として勤務せんことを申込んだ所、軍の高官は、此女が團匪の役の時に立てたる軍功に對する勳章を持つて居り、且つ滿州語と敵の國語とに精通して居ることを證し得たにも係はらず、初めは甚だ此女の願ひを容るゝを喜ばなかつた、然し此女が露軍と日本軍との位置につきて、其場所に行かなければ得られぬ、而して本營に於て少數の人にのみ知られて居る報告を將軍の許に差出すに及んで、此女の願は聞屆けられた、そこで此女は人相書を授けられたが、これは其望みにより男子の名にしてある、それから護衛として騎兵二名を付せられた、以後此女は兩軍の間に横はる地を悉く偵察して大功を立て且つ熟練と勇氣とを示したれば、クロパトキン將軍は聖ジョージ勳章（我金鵄勳章に相當す）を授與した



跡見玉枝女史 渡米土産

婦人記者

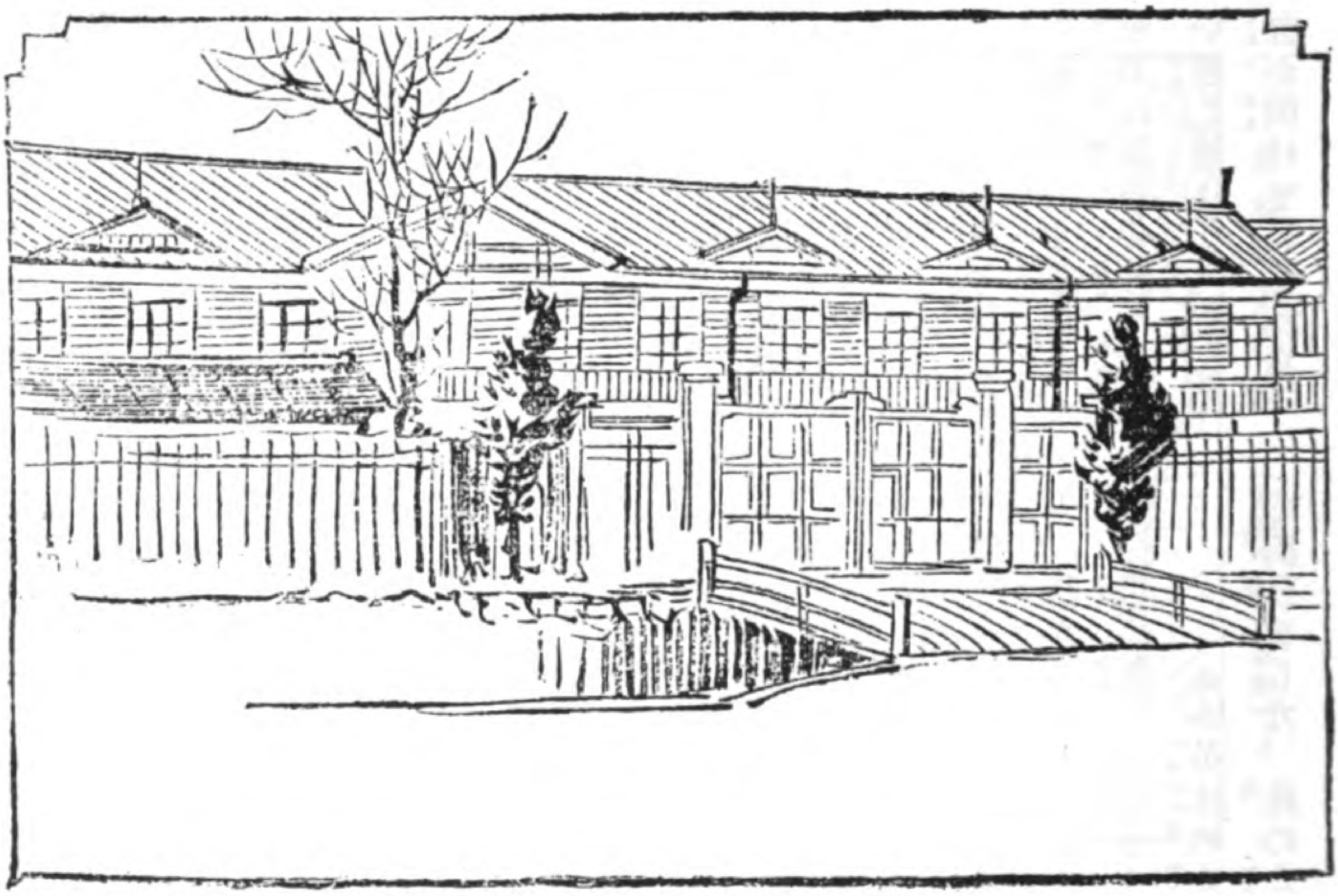
聖ルイ博覽會見物の爲め、穗積、北里、箕作の三博士及び下田歌子女史の實踐女學校卒業生て、這般ボストンの女學校へ入學せんとする、鈴木淸子氏等と共に、昨年八月米國に漫遊された閨秀畫伯跡見玉枝女史は、昨年の暮方無事歸朝されましたので、記者は女史の渡米土産談を聽く可く、神田今川小路の御宅へ訪ねました、時はまだ松の內の六日の朝てしたが、記者は先づ女史に對つて、二六時中洋服て居られしやとお質ねいたしたところ

エヽ、船中ては始終和服に、栗皮色の袴を著けて居ましたが、穗積博士から折々注意を受けまして、どうにか致さねば、と、思つて居まする中に、船が桑港へ着きましたので、私は此のまゝて上陸いたしました、下手に洋服を著てアラを見られるより、寧そ其の方が宜いかも知れん、と、皆樣が有仰ッて下すつたので、ツイ和服のまゝ上陸したのてす、ところが恁うなんてす、マア其の

▲上陸當時の光景

なんてすネ、穗積先生と北里先生とは、其筋から何か徽章の樣なものが、渡つて居りますので別に手數もかかりませんてしたが、私は稅關へ案內されて色々と取

調べを受けますする間に、ジャパンのレデーが、而かも日本服て來たといふ噂て、私の四周は人の黒山を築く位ゐてございましたよ、私が例の袴を着け、西洋傘を杖にして恍惚と起つて居ります其の前を、出迎えに來て下さいました、上野領事と汽船會社の伊藤と申すお方が、絶えず往たり來たりして居られたのです、其の時私は少しも氣が付ませんてしたが、私共の一行を寫眞に撮らうとして、向ふの方に寫眞器を据えて居る人が在たのだ想で御座ます、と、其の翌くる日聽きましたが、段々と彼地の様子を承はりました所、税關へは常に新聞や雜誌の記者が詰め切ッて居まして、少しても毛色の變つた上陸客のある時は、其の



第一高等女學校（淺艸七軒町）

▲珍客の撮影

を致して、直ぐ其れを新聞に掲げやうとお互に競爭して居るので御座います、私共の上陸致しましたのは、丁後午後の三時頃てしたが、新聞の挿繪に成て顯はれましたのは、其の日の夜でございます、御存の通り彼地ては日に幾度となく新聞が出ますゆゑ、私共の分は其の日の夕刊新聞に出ましたのですが、上陸の翌日上野領事から招待を受けまして、奥様から、跡見さん是を

御覧なさい、とて、其の輸入新聞を見せられました時は實に驚きました、てずから、私共が撮らせまい、撮らせまい、と、思つて貴女方の前を右往左往と歩るッたのですに、覺々撮られましたな、と、笑ひながらおひやかしになるので御座ますよ、桑港から滊車で聖ルイへ參ります途中、オモハと申す所で

▲滊車の衝突

がありました、大變な噪オモハといふのは、聖ルイへ往く滊車と、シカゴーへ往く滊車と、岐れる處てすが、私共が乘つて居りました滊車が時間の都合て、三時間程オモハの停車場に待つて居りまする夜の八時頃に、煤煙を立てゝゴロ〳〵と參りました滊車がありました故、彼れは何處へ往く滊車か知らん、今日は自分の父の命日てあるから、と、車窓を締めて目をねむつ、て居ますると、突然窓の下て大砲の破裂するかと、想ふ樣な音が致しますと共に、私共は滊車の外へ投り出されました、幸ひ少しも怪我い致しませんてしたが、後て聽きますとルイの博覧會が開けましてから、見物の乘客を乘せた滊車の衝突は是れて七回だ相でございます、日本のミス・アトミが負傷したと新聞に書いてありましたから、方方から見舞狀を受けました、中には早くも日本の親類や友人から見舞の手紙を寄越して下さいました併し、マーお蔭樣て此の通り御目に掛られますので…… 洵に嬉しう御座ます、と愛嬌こぼるゝばかり

▲博覧會中の見物

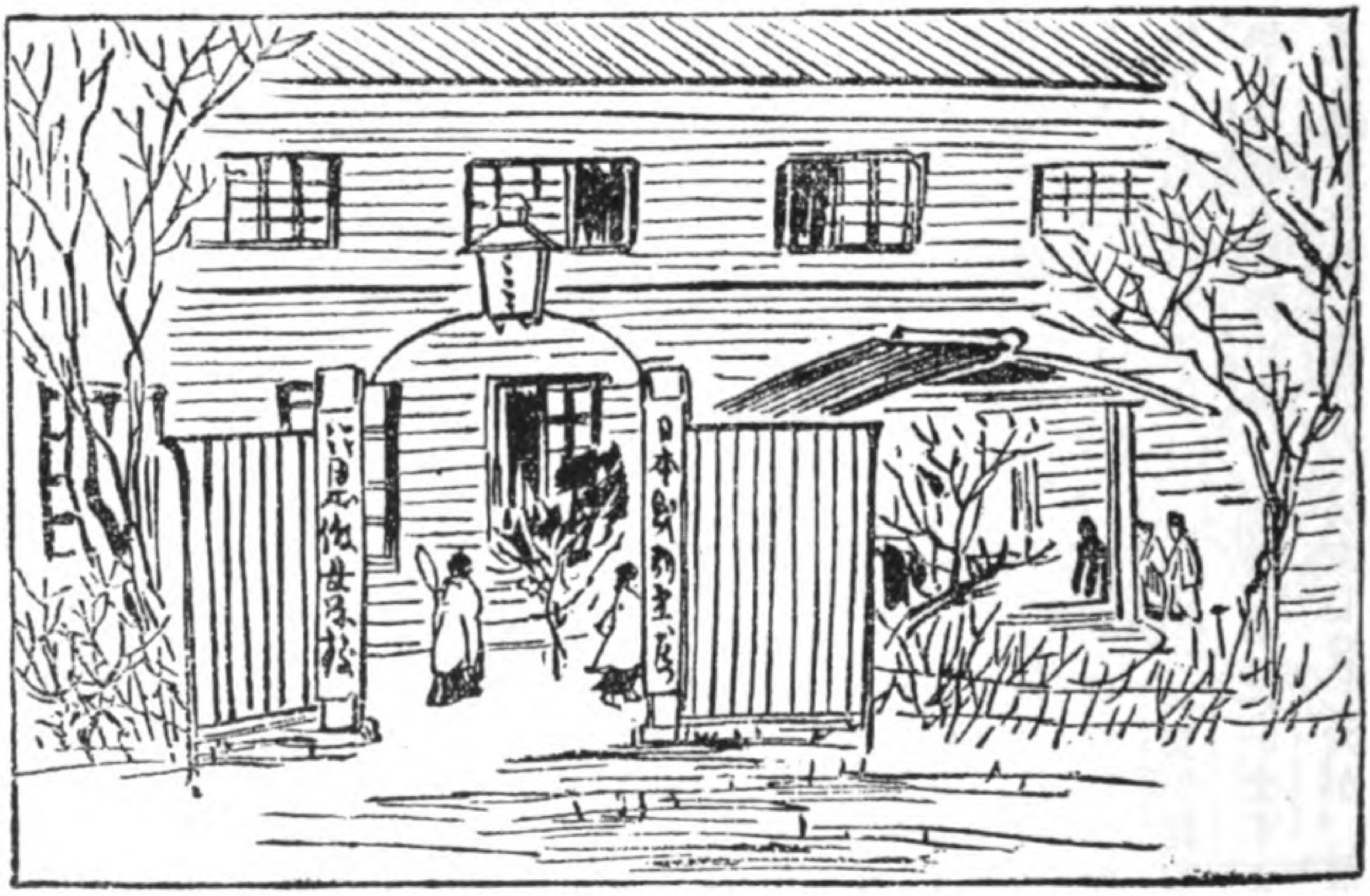
左樣、私は御存の通り、始終繪の方を注意致して見ましたが、陽明門を飾つてありました工業館の中で、佛蘭西や英吉利の人達が非常に日本からの出品に注意して、いち〳〵帳面に書き取つて居る所を見ましたが、戰捷國の出品として、他日日本へ漫遊した時は、是非これ〳〵の品を購ひ來らんとてノートにつけたのだ、と、後から聽きました、其れから敎育館の中で西洋人が一番に集つて居りましたのは

▲お茶水の女學校の出品

て御在ました、此の女學校からは女生徒の手になりま

した袷と衣服とが出て居ました、袷は穂積博士のお孃さんの御描きになつた花鳥か大層に甚く出來て居ました、衣服は四季の晴衣で、振袖の紋付とか三枚襲とか羽織袴などでしたが、いづれも見物人の目を惹きました樣で御座ます、之は別のお話ですが、私は米國へ參つて實に異樣の感に打たれましたといふのは

▲米國の女權の甚しい事です、兼て聴いて居りましたが、恰度私と鈴木孃と博覽會の庭園に憩んで居ました所、向ふから若い夫婦のお方が樂し氣に散歩をして此方へやつて參ります中、其の細君が突然庭石の



日本淑女學校（本郷千駄木林町）

上へ片足を上げましたから、成程米國の婦人はお轉婆だなーと見て居りますると、亭主が急に近寄つて細君の靴の紐を結んで與たのでござります、夫れて、いゝ、ありがとうとも何とも言はず、又前の如に話しながら往きました、上流の人てはありますまいが、女權擴張なんてことは、恁んな結果を生ずるものか、と、鈴木孃と語り合つたこともありました

▲市俄古の見物

は、ほんの一日に止めましたが、十年前に日本の出品として有名てあつた大極殿は、當時の紀念として未だ其の儘に成て居りましたが、毎日曜日には縦覽を許

して居る、加之は叮嚀に手入れがしてありますので、少しも以前と異るところがないそうてす、私共は洵に嬉れしく意ひました。夫れから

▲ナイヤガラの寫生

を致さうと存じまして、其處に三日許滞在致しましたが、季は丁度九月の二十五日で、日本婦人の手になつた秋のナイヤガラ瀑布であると申して、到る所で所望されましたもので、紐育やボストンでは隨分畫いてあげました、夫れからモントリールなど往く〳〵寫生して、ボストンへ廻りましたが、隨分面白い事もありました、同地の

▲女子美術學校を參觀

しましたが、此校の校長は明治三四年ごろ日本へ來て大學の教授を勤め、十年に國へ歸つたといふ、モースといふ老人で、日本の骨董を澤山に有て居られるのには驚きました、中でも陶磁器と屛風と掛屑とを澤山お有ちで、陶器は非常に古代のものまで蒐せられ、私は始めて拜見致しましたものも澤山にありました、日本の古代のものを外國で而も外人に見せて頂くなんて、洵に浦耻かしいやうな感じがいたしました「未だ〳〵是れ斗ぢやありません、澤山、ドッサリ倉に仕舞つてあります、日本の陶磁器といふ書物を出版しました、今日本の繪畫といふ書物を著述中であります、そして私は大變な日本贔負でありますゆゑ

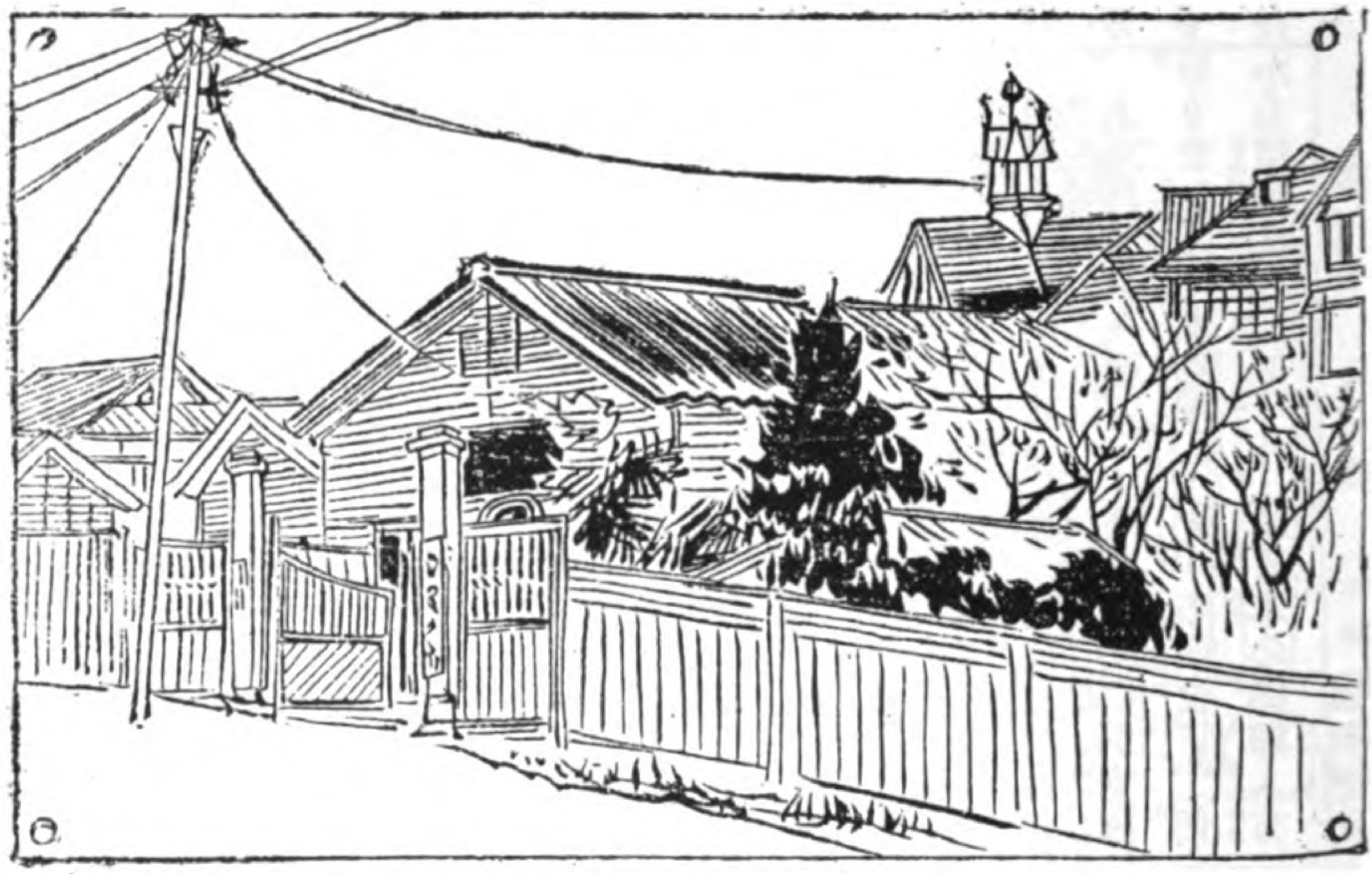
▲娘の名をお玉

と名づけ、玉ちやん〳〵と申して居ります、貴女も玉ちやん、玉ちやんが二人あります、など、隨分愉快なお方で御座ましたから、女生徒が著述の手傳ひ致して居る所など拜見して居ますと、米國美術の粹を集めたものが三階にありますから、往つて御覽なさい、とて女教師が案内してくれましたので、私は鈴木孃と一緒に昇つて見ました所が、此室は

▲女生徒のモデル室

なのでございますよ、入りますと煖爐の火氣でポッといたしましたが、最早秋の晩でありますからモデルの冷えないやうに至したものとみえます、私も鈴木孃も

何だか氣まりが惡るくて能くも拜見いたしませんでしたが、室の眞中に十七八の非常に綺麗な婦人が素裸のまゝ片膝を立てゝ坐つて居ます、其のぐるりに四人の女學生が懸命に寫生をいたして居りました、回壁は一面に裸體畫で持ち切ッて居りましたが、私も鈴木孃も狐鼠々々に降りて參りました所、鈴木孃がムキになつて校長さんに怒るのですよ、失敬な日本のレデーに那んなものを見せて……所が校長は一向平氣なもので、人物を描くには何うしても裸體の實物を見つけて居らねば、到底も充分の筆を揮ふことは



普連土女學校　（三田切通町）

能ぬ、と、說き拔日本では何ういふ風になつて居るか知りませんが、米國では

▲紳士の娘をモデルに使はねばならぬ、と、いふ事一般の美術社界に唱へられて居ります、下等社界の娘などに隨分綺麗なのがありましても、其の頭髮は決してゴールデン、ヘーアならず、皮膚も亦モデルによるほどの價値はありません、無論四肢も良くありません、と申して上流社會の娘は決してモデルなどに雇はれるものでありませんから、勢ひ、ツイ此頃まで非常の財産家であつたが、事業に失敗して急に零落れた、と

かいふ由緒ある人の娘を澤山お金を出して雇ひ來るのでありますが、扨この落ちぶれた娘でも緻縹の良いのもあれば惡いのもある、探し當てた後、更に美人を撰んだ上、漸とのことでモデル臺へ上げるのですから、一人のモデルを得るまでお苦心はチットやソットでありません、と、淳々しくモデル難を述べなさいました、それより、この庭先に術御覽に入れるものがあります、と、申しなさいますゆゑ、只今拜見いたした樣なものなら最う澤山です、と、お斷りした所、左樣でございません、とて例の女教師が案内さるゝまゝ往つて見ました所が、今度は

▲モデルて彫刻

て、二十一二の美人がモデル臺へ昇つて眞直に立ち、兩手を高く擧けて掌を正面に向けて居る、と、いふ素破らしい風をいたして居りまする、其の四方に矢張り女生徒が刀を執つて彫刻いたして居りました、あまり話頭がモデルの事許になりましたから這度は

▲米國婦人の家庭

に就いて感じました所をお話し致しませう、植物學博士ハージ氏の宅に暫時世話になつて居ましたが、博士は朝夙く學校へ出られる、其の以前に奥樣は馬車に乘つて青物市場とか肉市場とかへお出掛になり、朝のテーブルに上す食事の用意をなさいます、庖厨には始終奥樣がお附きになつて、是は旦那樣のお好きなもの、那れはミス、アトミに、と、何から何までのお指圖を一々なさいますが、其は到底も日本の上流の奥樣方の想ひも付きません所です、取別け、

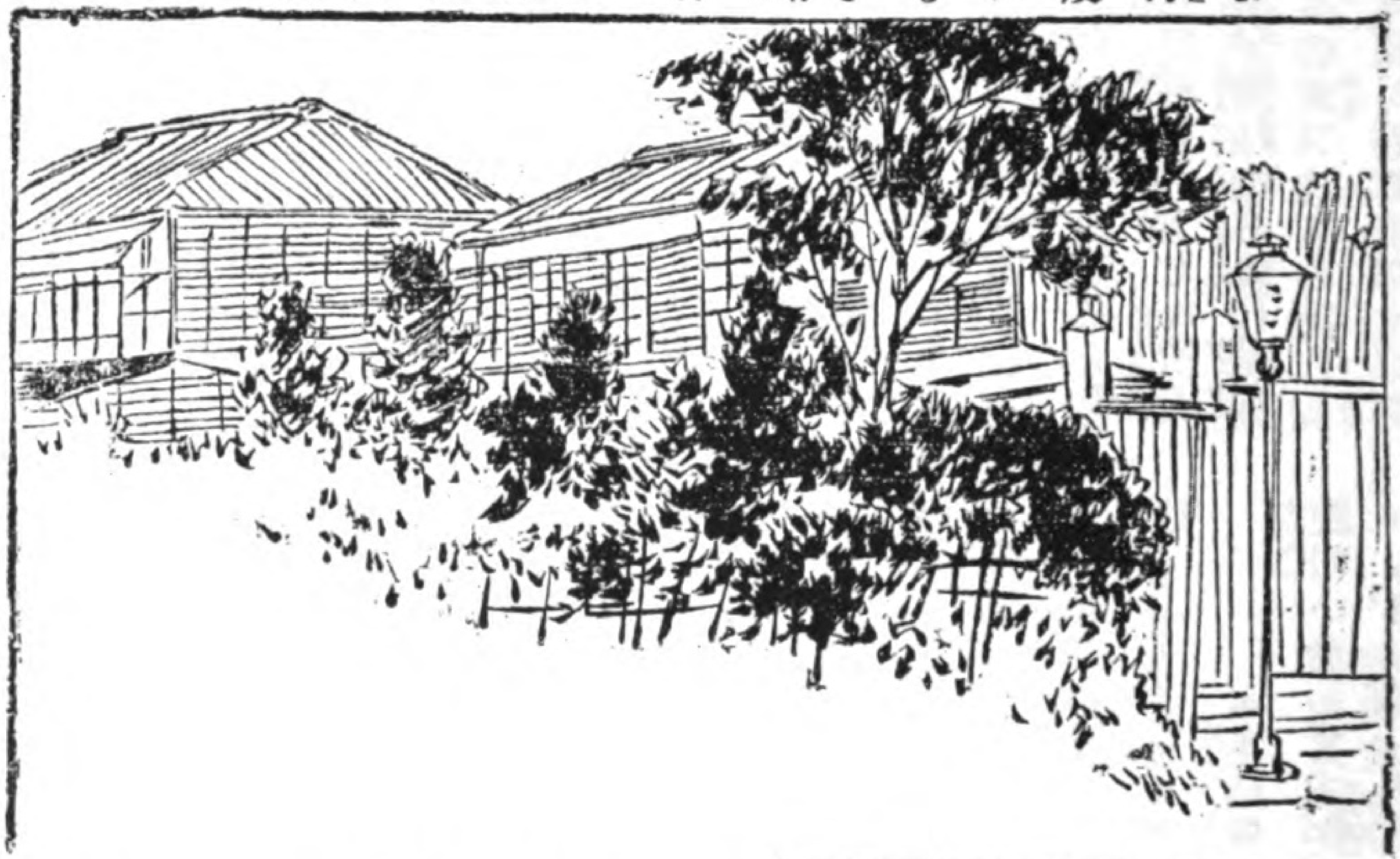
▲家庭の圓滿

これは、實に羨ましい程です、ミス、アトミ、今日はミストル、ハージ（即ち旦那樣）が居ませんから、何もありませんが……と良人を思ふ妻君の心根の程は、洵に想像も及ばぬ位です、博士が學校から御歸りになると、小供が玄關に立ち迎えて父に縋りつきて、キスをする所など、何んとも言はれぬ程です、此に又第一に日本の御婦人方にお報らせし度のは

▲毎週の洗濯日

てす、これも奥様が先に立てなされるのです、月曜日に洗濯して、火曜日に火熨斗をかける定めになつて居ましたが、衣服や襯衣の汚れて居る居らぬに關はらず、必度其の日には洗濯をすることになつて居ました、萬望日本の家庭でも恁な風の定めが致したいものてす、夫れから紐育で、市の裁判所長スーツロ夫妻から招待されまして暫時同家に厄介に成ましか、同氏は有名の美術家でありますから、自然日本の繪畫をも研究されましたものと見えまして、色々と日本畫の批評をされました、中に

▲日本の畫家に注意すべき價値のあるお説が御在いま



櫻井女塾（本郷彌生町）

した、仝氏の申されまするには、一時紐育では日本畫が大變に流行いたしましたが、近年は油繪じみた日本の繪が、熾んに日本の繪畫として喩られるから、實の日本畫とは受け取られないので、少しも流行らぬやうになりました、これは日本美術界の爲め大いに鑑む可きことであります、實際わが國の美術家中に、舊派の老人株と新派の青年株と二種に分れて居る風てありますから、自然青年の中でも純粹の日本畫を學ぶ人と洋畫めきた日本畫を學ぶ人と二派に分れて、何う致しても、新派の方が持て囃されますから、自然西洋あたりへも此の西洋臭い日本畫が輸出されるのでありませうが、之は何

うにか致して充分日本畫と西洋畫の區別を付たいものです、

▲米國女流畫家と日本女流畫家

との比較に就いて、米國婦人は人物や山水に秀て、日本婦人は花鳥に秀でゝ居りますが、一般の上から申しますと、米國の壯大は日本に勝り、日本の巧緻は米國に優るとも劣ることはありません、素より油繪は彼此のものでありますから、到底も及ばぬと致した所が、純粹の日本畫は亦世界の各國に對つて誇るだけの價値は十分に御在ます、只惜しいのは日本婦人の手になりました繪畫は、六ケしく申しまするると、纎巧緻密に過ぐる所がありまして雄大壯麗の意氣を全く缺いて居る點が澤山に御座ます、是はツマリ彼地と我が日本とは生活や、風習も差つて居りますから、洵に止むことを得ない次第です、私ども始めお互ひ樣に注意して充分勉强せねばなりませんと意ひます、夫れから此に是非申し上げて置きましたいのは

▲日露戰爭に就て貴婦人方の熱心

て御在ます、いづれに參りましても、戰捷國の婦人として大變に歡迎致されましたが、ボストンの某る處で二三の貴婦人方から怎んな問を受けました内地の病院には幾人位ゐの傷病兵が居ますか、名譽の戰死を遂げたものは將校で幾人、兵士で幾人位ゐありますか、全體負傷の場處は體の何の邊に多くありまするか、又傷は何んな種類が一番に多くありますか、銃砲の丸ですか但しは大砲の丸ですか、など、夫れは〳〵現在戰爭をして居りまする、日本の男子方でも及ばぬやうな事まで質問されますので、赤面いたした位ゐです、私は戰時に際して日本の婦人社界は充分活動して居りまする事をお話しいたしますと、疾に愛國婦人會とか篤志看護婦人會の情態などは、新聞の上で承知して居る、と、申されましたのには愈々驚きました、最後に記者は

▲本誌卷頭の寫眞に就て

說明いたしますが、前にありまするのは、女史が彼地から持ち歸られましたもので、ボストンの町から四十

哩ほど離れましたウスターと申す處にある高等女學校と其の卒業生とてありまして、其の次にあるのが、同校繪畫敎室、其の次は矢張り同校內體操場に於て女生徒が執銃體操を演つて居るところであります、初項に申しました、實踐女學校の卒業生鈴木清子孃は此の女學校へ入學されました、この女學校へ跡見さんは折々遊びにお出掛けてあつた想ですが、

ある日御馳走をするからとの事で、參りました處、廣々とした部屋のヅット向ふの方には、日本の國旗と亞米利加の國旗とが交叉されて、十五名の優等卒業生が、日本の畫家ミス・アトミ、ミス・アトミと申して交く握手の禮をなし、叮嚀に待遇つてくれましたが、料理は割烹科の生徒が作つたものだとのことで御坐いました（完）

△梅干の核　梅干の核を割ると中に小さな豆の如なシンがある、夫を取りてカラシ醬油にて食べて御覽なさい、脂の無い落花生を食べる樣に、却々旨しいもので、酒客には珍味として喜ばれること請合也。

野津大將夫人 家政談

中村鈴子

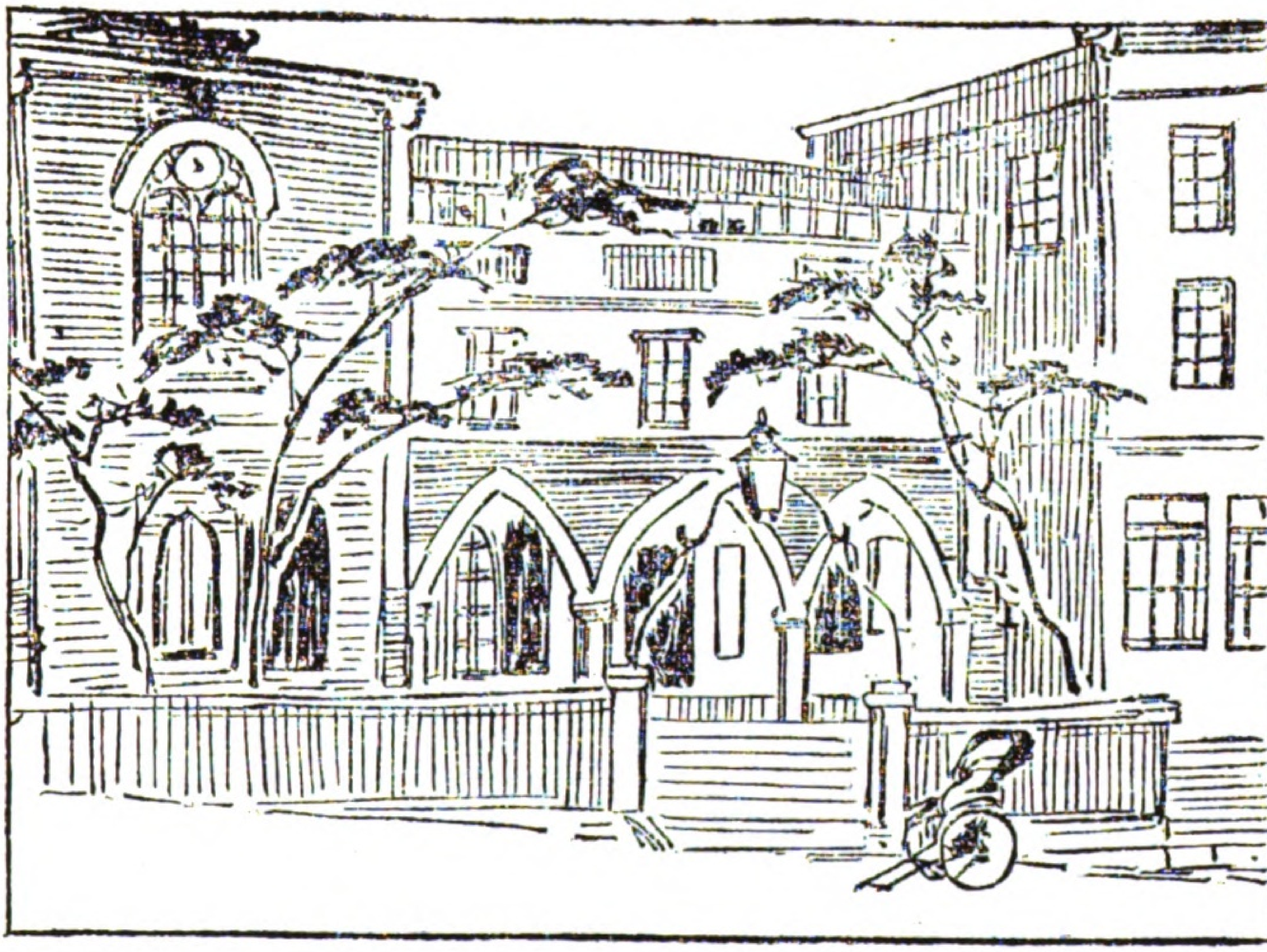
夫人登米子は舊鹿兒島藩士高島啓兵衛氏の第二女なり嘉永四年十二月二十三日を以て生れ慶應三年を以て今の從二位伯爵陸軍大將野津道貫氏に嫁し四男五女を擧ぐ人と爲り沈着堅固にして思慮緊密善く將軍の意に從ひて書生を敎養し他の寡婦孤兒を厚遇すと云ふ

滿州出征軍中には名將雲の如く集つて居られるが、位地の高さとに於て大山元帥の外に匹儔なきは、申すまでもなく野津大將で御坐います。實に野津將軍の名は維新の戰役に連戰連捷の勁敵大鳥圭介氏を挫き、西南の役頑強の敵と田一反を隔てゝ累日對壘し、日清戰役には第一軍司令官として眞先に出征せられたるだけでも牧童の耳にまで響いて居るので、其上今回第四軍の司令官として出征せられましたから、赤坂區新坂町の高臺に將軍の御邸を見上ぐる毎に、餘程心丈夫に感じて居りました。記者が樺山大將夫人の御紹介に賴て、新坂の御邸へ伺つたのは、十一月十一日の午前でしたが、打ち續ける小春日和に屋上の霜も認めず、黃赤色

に紫色の覆輪とつた朝雲は、振り翳す聯隊旗を想ひ起され、空高く歌ふ鳶も凱歌を奏するかと心地好く覺えつゝ、青葉交りの紅葉の投影を斜に敷いた阪路を登り切つて、石塀ある御門を入ると左手に「馬繋ぎ」あり、兩側に檜あり、御玄關前の植込は枝を翳した松に躑躅を點綴し、砲一門は西洋館の側に据ゑられてありました。

▲松林に青海波

御中の口に伺つた記者は、島田髷に結んだ御女中に導かれて、ズックを敷いた御廊下を通る時、馬具、正馬



東京裁縫女學校（本郷竹町）

具など配せる箱幾個を拜見して、御座敷へ入りましたが、此處は白茶縁の十疊の御部屋で松林に青海波の模様ある唐紙を以て立て切られてありました。御女中が郡内の座蒲團をすゝめ、陶製手炙り一個と茶菓を運び、丁寧に一禮して下るや否や、夫人は直に唐紙を推し開いて先づ〳〵と記者を上座に請ぜられました。

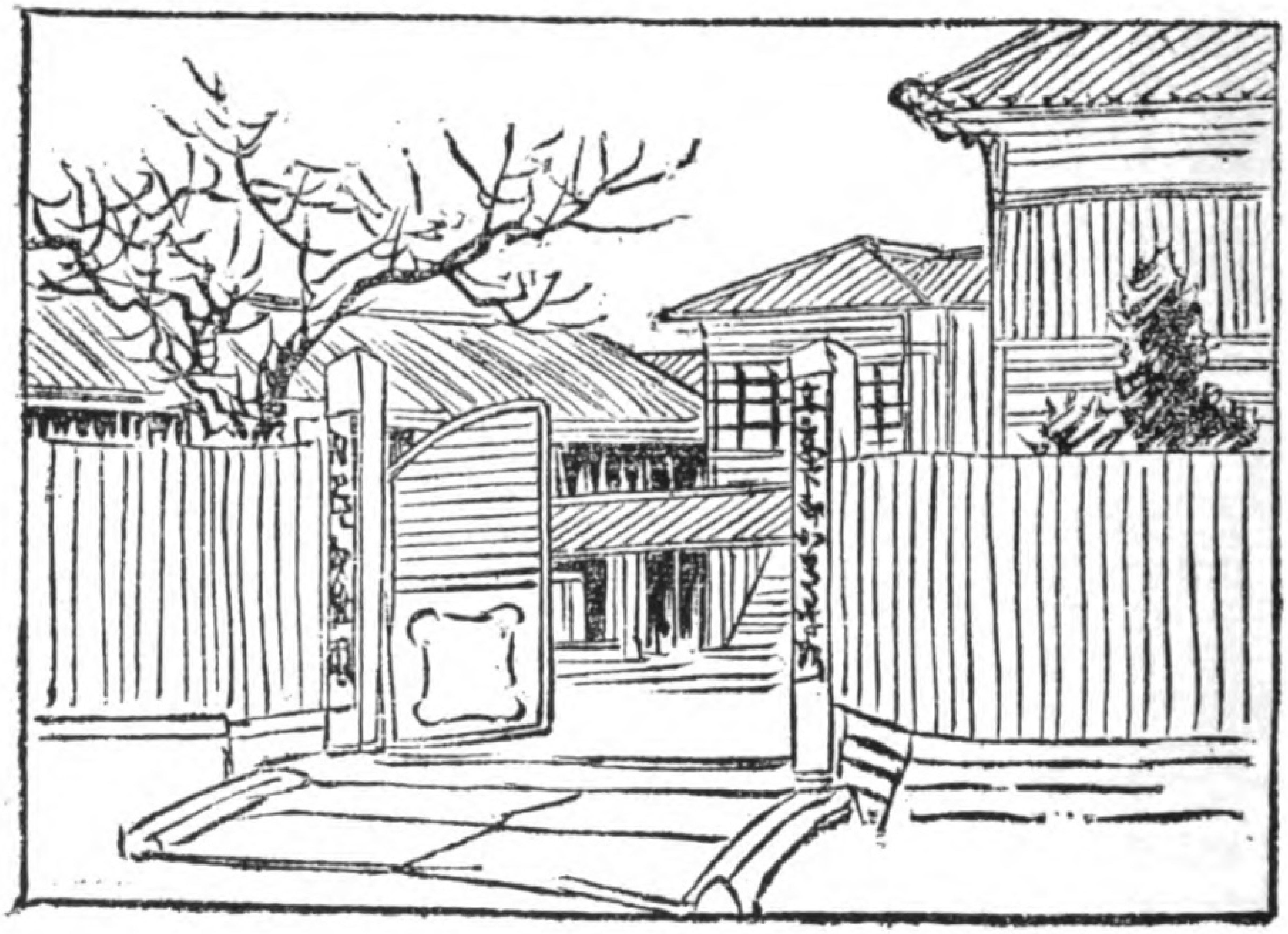
▲夫人の御風采

夫人は濃茶米澤紬の小袖の下より、鐵皮色縮緬に早蕨の白い模様少しある襦袢の襟を僅かに現はし、黒七子に三つ紋付いた被布を召さ

れ、未だ白髮の一筋も見えぬ束髮に固く結ばれ、雙瞼の凜として御眼と濃い眉は犯し難い御氣象見え、締つた御口元にチラリと金義歯の現はるゝなど、御格腹と云ひ御物腰と云ひ、如何にも沈着た御方で、控え目勝ちの御話の中にも、折々興ある御言葉を交へられ、客をして飽かしめぬ御應對振で御坐いました。

▲軍人の家庭

私などは何も辨へぬ不調法者て御坐いまして……それに軍人の家庭は何處樣も似たやうなもので、別段に際立つて御話し申し上げる事も御坐いません。ハイ鹿兒島を出ましてから確か三十三年程になると存じます



東京女子體操學校（下谷眞島町）

が、何に致せ頑固の國で、私共なぞも武骨一邊で仕方が御坐いません。言葉も他國の御方は違つたなりにも善く判りますけれども、鹿兒島は本當に他國の方には御分り難いだらうと存じます、總て物を縮めて申すので、例へば『見たくあるなら』を『見たかなら』と申すやうな具合に言葉が詰つて居る上に早口ですから判らぬ筈で御坐います。商人なども強い物の言ひやうなので、『鹿兒島商人の品物は見たらば買はずに止せない、買はなければ怒られる』と怖がつて居る地方が御坐いますが、全く怒つて居るかのやうに聞

えます。以前は屋敷者と町の人とは總てが大分異つて居つたので、髮の結ひやうなども、町の人は鬢髷が京の風に似て居り、唯だ少し廣いだけでありました。士族は鬢差を入れて芝居の鬘のやうに鬢を膨らして、丸髷に結つたので御坐います。

▲將軍の御酒

野津は御酒と名の付きますものなら何でも好物で、若い内は隨分頂きましたが、近頃年を取りました故か、餘程分量も減りました。野津は鄕國の御酒が好きですから、毎年取り寄せて此方のと兩方頂いて居ります。ハイ彼地のは甘味が御坐いまして、味淋のサッパリ致した様なもので、色も少し濃う御坐います。鹿見島は餘程別物にされて居ると見えまして、御夜食に下女が御燗を附けまするのに『今晩は鹿島の御酒で御坐いますか、日本のに致しますか』と聞きます。それで野津が毎度『鹿島は日本の內で無いと見える』と申して笑つて居りますホヽヽヽヽ。

▲將軍の食物

唯今の御方のやうに衛生と云ふヿを考へません方ですから、何でも食べたい放題澤山食べたので御坐います。近頃は年の爲めに矢張り減じましたが、併し何でも善く頂く方で御坐いますネ。別に是れでなくてならんと申す物もありませんから、何も世話は無いのですが、唯だ肉類が主な好物で御坐います。朝は牛乳鷄卵に麵包位に致したり、又御飯に變へましたり、種々に致して居り、何でも様々の食物を頂いて居る方が宜いと申して居ります。

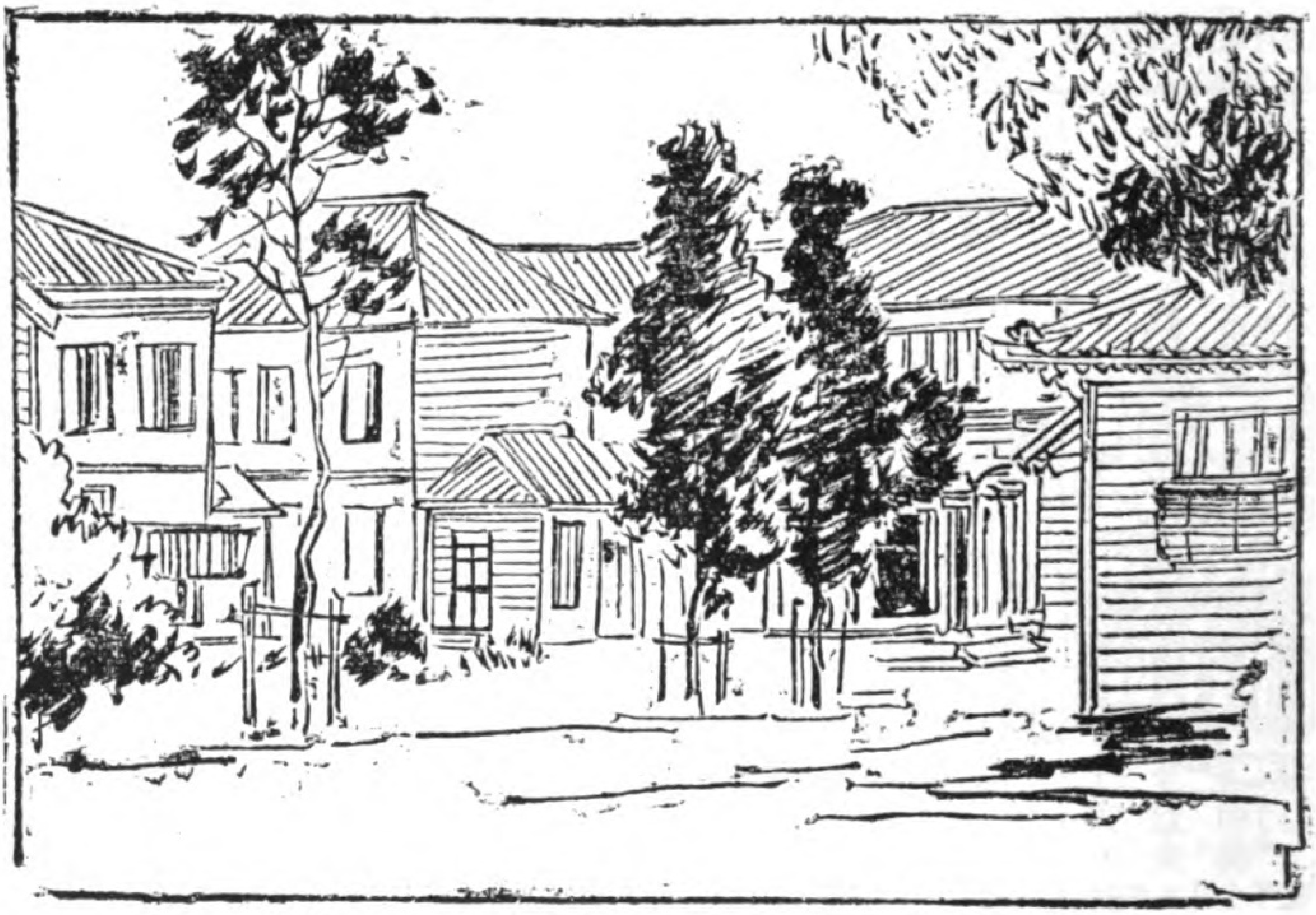
▲獵

左様で御坐いまする、好きな事は獵位のもので御坐いませう。近在へも參りますし、よく伊豆伊東へ入湯がてら出掛けまして、彼の邊の山で兎狩を致します。獵は實に樂みなさうで御坐いまして、尤も山の御嫌ひの方には可けますまいが、御承知の通り野津は最早昔から山を善く驅け廻つた方ですから、唯今でも山獵を致すのは、何より衛生に宜いと申して居り、他の獸を狩るよりも兎を狩るのが特に愉快だと申して居ります。

何時も昔から居る從者を一人連れて參るのですが、伊東は船着が惡い上に汽船も小さいと申すので、私は一度も參つたとは御坐いません。

▲獵犬

獵犬は始終獵を忘れさせぬやうに致して置かねばなりませんから、方々の獵師の家へ犬を預けて置き、平常獵に連れて行かせます、野津が參らぬ時には、家來に宅の犬を連れて獵に遣はしますので、何でも暫く休ませますと可けないさうで御坐います。獵犬は柔和しいものですが、如何も身體が



東京女醫學校（市ケ谷田町）

弱いやうで御坐います。野津は總て動物が大好でして、犬も澤山居りますし、猫も鷄も飼つて置きます。

▲植物

植物も當節は好きになりまして、宅に居ります時は、畑へ出ましたり、庭木をいぢつたりなぞして、樂んで居ります。

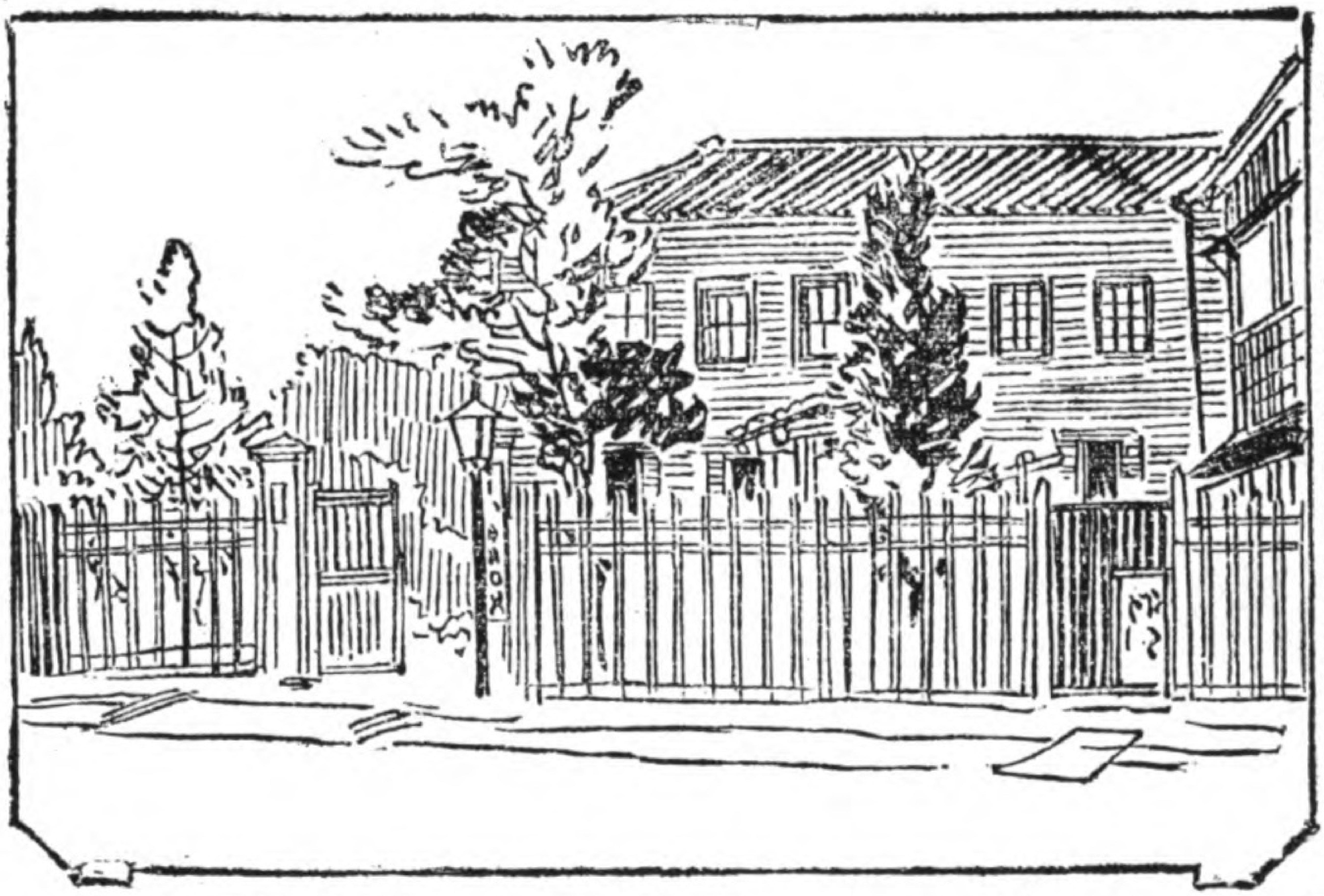
▲角力

角力は若い頃は好きで自身でも善く取りました。野津は着物を着て居る時は瘦せて見えますが、肌を脱ぐと胸の所が太く却々肥えて居りますから、御醫者が『貴殿は見かけより體格が立派だ』と御褒め

なさいますので、自分も是れは全く角力を取つた爲めに肥つたのだと申して居ります。手前共の子供は少し細い方ですが、『汝達は身體の鍛へが惡いから肥らないのだ』と申し聞かせて居ります。

▲令息

子供は私の乳で育てましたのもあり、乳母と牛乳で育てたのも御坐います。長男は缺けまして次男(鎭雄氏)と三男(鎭之助氏)は、騎兵中尉と砲兵少尉で出征致して居ります。皆不束者(御謙遜の極)で御坐いますから、皆樣の御厄介になる事と存じます、何卒御國の爲めに幾分かの御奉公でも出來れば宜いが



柳北女子小學校(淺草向柳原町)

と、それのみ日々案じ暮して居るので御坐います。平生は上下共隨分多勢の家で、却々賑かで御坐いますが、此頃は御懇意の方も悉皆出征して居らつしやいまして、御客來も少く寂しう御坐います。

▲新聞

時々何か調べ物など致して居る樣てすが、暇が少う御坐いますので……。ハイ新聞は「時事」と「日々」を見て居ります。

▲書生好き

昔から書生の絶えない家で、野津はこれが道樂で御坐います。日清役の際、平壤で戰死された町田大尉は二人の男兒を殘されたのですが、弟の方は未だ御腹

に居つたので、兄の方を私共へ引取つて世話を致し、今年十五歳になりました。折々國元へ歸つて母親に會ふのですが、母親は大層悦んで居られるさうで御坐います。

眞率な御話しに漸々膝の進む折しも何れかの奥方訪問せられし由御女中の取次ぎありしゆゑ殘念ながら御暇乞致せば夫人は御玄關まで送られながら、御失禮致しましたの御言葉を繰り返されました。

衣食住の釣合

米國の習俗は、妻女の贖着といふものも、其良人の收入の四分の一に超へざるを以て一衣の代價とするに止まり、良人が一と月乃至一月以上の收入を一衣に費す如き事をせずといふ、目下我邦に於て二十圓の月給をとる人の妻女にして一領十圓以上の衣裳一筋二十圓もする帶を持者なきや、三四十圓の俸給をうくる人にて一くだり二十圓内外を費すべき仙臺平の袴を穿く人はなきや、是等を以て推すも、世界に富を以て稱せらるゝ米國の風俗よりは、奢侈に於て遙に增長するものたるを知るべし、一家の生活費も其歲入の多寡に依つて、素より千差萬別なるべく、甚だ富める家にして甚だしき粗衣粗食を用ふるは不釣合なれど、又富みたりとて贅澤に過ぐれば世の嘲をも招ぐべければ、物は程合にするをよしとす此事に就て往時碩儒の名ありし篠崎小竹が、自家の經濟をいへる中に歲入二百金、而して自ら衣自ら食ふ所は二十分の一に過ぎず、乃ち其餘を以て偏く家事を辨じ、稍贏餘を存し以て異日吉凶の用に供ふ、云々と小竹翁は十金を以て自身一年の衣食の費用としたるに過ぎず、左れば其家族を養ひ一家を維持する費用と交際費その他を合算するも決して歲入二十分の十五には至らざりしならん、斯の如き割合にて伸縮加減せば、收入に差別あるも、其贏餘を存するに至りては一なり、然るに例へば玆に歲入二千金ある人翁の故智を襲ひ百金を以て自身一年の衣食を辨ずべきに、左はせずして一領の外套にも四五十金を投じ、甲の割烹店に會飮しては一日數十金を費し、乙の待合に痛飮しては一夕幾十金を消すといふ振合にては、異日吉凶の事に備ふべきものもなく、左れば一年自身の衣食はその一年の收入額二十分の一を程度とし、其贖着にても一衣の價は月々の收入額四分の一とするときは、自ら奢侈に遠ざかり、窮して濫に陷るを豫防することを得べし



さがし



繪さがし當選披露（第一號分）

當選者　三百四十五通
不合格　三千七百四十二通
右の内　一二點の差ありし⊠分千三百九十七通

此の一二點の相違は重に圖中の網持の一人を二人と解したる人多かりし爲なり、されど網持は人頭と共に一人なり、又釣する人の所に毬あるは釣人のいたづらにて別人にはあらず故に爰には唯二人と解すべきなり、又船には船頭一人にて他の船には人なし

△正格なる解答者（但し遲着の分）

黒澤嶺水　福田庄一郎　高木由太郎　佐藤いひ
小原三和子　隆子　寅　岡田しげ　山口とき
谷口たつ　鴨澤まさ　小和松代　神藤太郎
殿嫌こう　小橋朝雄　石谷いな　保田尾小松
梅田きみ　伊藤しげ　細川とみ　岡田鶴太郎
谷　順卿　野村とよし　瀧川　仙　齊林林之助
笹澤かね子　大平きよ　松原よし　大塚常子
神崎保子　西本すみ　小幡すみ　仲田はな
藤岡やす　戸田かすみ　太田英吉　西村ちよ
土井龜代　菅井まい　川島　操　佐藤安子
松尾さと　森　しげ　上野ふさ　上田こう
岡崎しう　小出ぬい　宮川たか　佐藤つゝ
正木一代　猪野よし　森岡しげ　中山みさを
長久保あす　金ふりの　大谷トミ　大原リン
中澤ノリ　大田えい　小野よれ　大野やちよ
小竹みな　長谷川セト　矢内あい　細島やす
解部たけ　松田よし　大野さと　かつ女

△正格なる解左の如し

兵士	三十七人	擔架卒と負傷兵	六人
配達人と受取人	二人	梯子と木上に	二人
女生徒	六人	子守と兒	二人
瀧龍昇と客	三人	鷄飼	一人
凧揚	四人	物干	一人
碁打	二人	犬ヲケシカル處	二人
家の內に	二人	乞食小屋	一人
網と釣竿持	四人	船曳と船頭	三人
魚釣	二人		

〆八十二名

△正格なる解を附して投じたる先着人名

河合しげ子　岐阜市八寺町
加々美ゑい　東京麻布區南坂町十四
三輪とみゑ　横濱南太田町二一四七
長島萍汀　仙臺東四番町四十三
甲鎖とみ　牛込市ヶ谷加賀町二ノ六
伊藤うた　鳥取縣八頭郡知頭村
小林さた子
紫　子　山形市香澄町最上川發行所

俗事俗言

大町桂月

所帶じみたる女

味噌の味噌くさきは、眞の味噌にあらず、學者の學者くさきは、眞の學者に非ず、家婦の所帶じみるは、眞の家婦にあらずといはゞ、それは、無理なる注文也。所帶もちのよきとが、家婦第一の役目也。殊に、世間へは出ずして、家にふすぶつて居り、書を讀む暇さへなき身の上なれば、自から所帶じみざるを得ずといふものあるべけれど、そこが即ち人間の修養といふもの也。家婦もとより所帶の事に熟達せざるべからず。かしこの八百屋はたかく、こゝの八百屋はやすしといふ事まで知りて、自から、みそこしさげて、買ひにもゆくべく、臺所事も、下女まかせにすれば、我が損得にかゝらぬ事とて、醬油をつかひ過ぎたり、薪をくべすぎたりして、不經濟なる事をするものなれば、隅から隅まで、氣をつけて、とりしまらざるべからず。女學生あがりの家婦の第一の缺點は、所帶じみざるに在り。然し、餘り馬鹿でなき以上は、熟るれば、自から、所帶じみて來るもの也。はじめから所帶じみざるを氣にして、まるで、赤子のやうに思ひて、姑がてしやばつて、何事も世話やくは、それは、所謂老婆心といふもの也。世話をやいてやれば、むかうにても、その氣になりて、いつまでたちても、お孃樣にて、所帶になれざる也。

さは云へ、所帶もちのよき事のみが、家婦の役目に非ず。夫への務もあり。姑あれば、姑への務もあり。子を生めば、子の教育もあり。世間に對する義理もあれば、客に對する務もあり。子をそだつるにしても、たゞ所帶の事のみ考へて、下駄をどろだらけにしたから叱る、着物をかぎざきにしたら叱る、香の物に醬油をかけ過ぎたから叱る。ランプをこはしたから叱るては、眞の教育が出來るものに非ず。夫に對しても、

姑に對しても、はた客に對しても、よろづ所帶的にては、夫婦の情味あるものに非ず。家庭の和樂あるものに非ず。人生の意義あるものにもあらず。ねても、起きても、夫が一日の務を果して、歸り來りても、いつも糠味噌くさき話のみをもち出されては、家庭は、竟に一種の牢屋也。放蕩するもの、家計は、必ず苦しく、家計苦しければ、家婦は、必ず益所帶じみるべく、家婦所帶じみれば、自家が益面白くなくなりて、慰藉を外に求むべし。罪は、夫にもあれば、妻にもあるべし。概して、姑は、嫁の所帶じみたるを愛し、男は、その本能的快樂の爲めに、妻の所帶じみざるを愛す。家婦が、夫と姑との間に處せむと、亦難い哉。姑なくとも、家庭の根原は、家計にあれば、家の爲めになるをも、一時、夫の不快を招くとあるべし。所帶をよくもちて、陰氣にならず、乾燥無味にならず、和氣ありて、笑聲常にあふれて、だらしなくならざる處に、家婦の伎倆は見ゆる也。

再婚

余は、貞女、兩夫にまみえざるを、婦人の美德とするもの也。日本獨得の美風とするもの也。然れども、今の時也、余は必ずしも再嫁を非とせず。

後家の操をたもつとは、殆んど完全に、武家時代に行はれたり。これ行はるべき筈也。武士の家は、先祖代々、藩主より俸祿をうけたるものにて、家嗣をたやすは、先祖に對して、この上もなき不孝也。而して、武士は命を君にうりたるものなれば、いつ戰死するかもわからず。かゝれば、妻たるものは、夫に代りて、家を維持せざるべからず、子を育てざるべからず。而して、俸祿ありて、食ふことには困まらず。再嫁せむとするも、もらひ手なし。かくて、自から、後家の操はたもたれたる也。

我を愛したる夫の爲めに、再嫁せずとは、理想としては、此上もなき立派なる事也。されど、千万人中の上根の人に求むべし。世間多數の下根の人に强ふるは、

少し無理也。古の後家とても、眞に愛情の爲めに、後家をたてたる人は、少なかるべし。多くは、社會の風習と境遇とに制せられたる也。俸祿ありて、食ふには困らねし、生んだる子が可愛いし、武家の制、その子をつれ子にするわけには行かねし、一般の氣風、再嫁の女を歡迎せねし、後家をたてゝ居れば、人からはほめてくれるしといふものにて、下根の人も、人並に後家をたて得たる也。

今や、時世然らず。家をたつるといふとはさまで重くなくなりたり。子さへ、立派にそだてば、どこへつれ子にゆきてもよし、祖先以來の俸祿といふものなくなりて、後家の先づ苦むは、生活問題也。たゞ習慣の惰力、今に再嫁せざるを尙べども、この惰力は、時世の變遷につれて、いつかは、消滅すべし。今の世、わけのわかりたる者は、必ずや、後家論を主張せざるべき也。

さは云へ、後家を強ふるの間違なるが如く、再嫁を強ふるも、亦間違也。福澤翁などは、色情は人を和ぐるもの也、色情をもらすを得ざる者は、和氣を失ひて、邪氣になり、けんどんになるもの也。姑も、その夫あるものは、邪見ならざるも、夫なきものは、邪見なりとて、生理上より、再嫁を主張したるが、これも一理なきにはあらねど、社會の事が、生理のみにて判斷せらるべきに非ず。孫まである女が、夫の遺產をすて、子をもすてゝ、再嫁するに忍びざるは、人間自然の情也。再嫁すると、せざるとにも、年齡の問題あるべく、美醜の問題もあるべく、子の有無もあるべく、財產の有無もあるべく、色情の強弱もあるべく、職能の有無もあるべし。學者が机上の空論にて、再嫁問題が決せらるべきものにあらざる也。

子の男女

幼少なる時は、男の子も、女の子も、たゞ乳がこひしさに、女親になじむものなれど、やゝ長じては、女の子は、男親になじみ、男の子は女親になじむためし、世にはめづらしからず。その男親になじむ女は、必ず

や家婦として不適當なる人也。女親になじむ男は、必ずや馬鹿殿樣的人物也。

すべて、男は、男の事に氣がつき、女は、女の事に氣がつくもの也。男は、わが半生の事を考へても、男は斯くあるべきものと思ひて、男の子をしつけたがるものなれど、女の事は經驗したるとなければ、隨つて、男の子の缺點は見ゆれど、女の子の缺點は見えず。女親は、之に反す。而して、親の心を、子は知らず。眼前、ちやほや言はるゝがうれしくして、しつけせらるゝがいや也。かくて、男の子は、女親になじみ、女の子は男親になじむに至れど、しつけの有無が、實に後日の運命の決する所也。甘やかされたる子に、ろくなものなく、しつけせらるゝは、一時は苦しきやうなれど、これ實に人間になくてはならぬ修養の一方法也。

世には、兩親とも、兩性の子に甘すぐるもあれば、辛すぐるもあり。又、男親が兩性の子にあますぐるもあれど、槪して、女親が兩性の子に甘すぐるが常也。辛すぎても、ゆかず、甘すぎても、ゆかず。子を育つるは、面倒なものゝ、また趣味あるものなり。男親は、社會上の仕事あれば、人によりては、心を子女の敎育にそゝぐ能はざるものあるべし。これ英雄の子に往々豚犬ある一原因也。女親は、自から、專門の敎育者たらざるを得ず。余は、女親に向つて、とくに男の子を甘やかし過ぎざらむことを切望す。遊蕩兒の母は、必ずや男の子を甘やかし過ぎたるもの也。

小兒の玩具

玩具は、家庭敎育の一要具也。こどもに玩具あるのみならず、おとなにも玩具あり。だるま、みゝづく、風車これ、小兒の玩具也。生花や、掛物や、古刀や、古器物や、書物や、すべてこれ、おとなの玩具也。玩具は人をなぐさむのみならず、またよく人の智能を啓き、品性を涵養す。今の世、小兒の玩具、あまり精巧になりて、小兒をして、自から智能をはたらかすに由なきは、余の遺憾とする所也。家の貧富によりて、貧家の子は、思ふまゝに玩具を得ざる代りに、自から

玩具を工夫す。富家の子は、思ふまゝに玩具を得る代りに、工夫の餘地を有せず。幸は、却つて不幸にして、不幸は、却つて幸也。五六歳以下の兒は、致し方もなけれど成るべく愛に溺れて、むやみに玩具を買ひてやることをひかへざるべからず。小學校にゆくやうにならば、成るべく、自から玩具を工夫するやうにさせざるべからず。又、智能を要する玩具をあてがはざるべからず。紙鳶の如きは、男の子の最も面白がる玩具也。余が少時鄉里にありし日は、自から之を製するが、少年のならはしなりしが、東京にては、紙鳶のこしらへ方、少し異なれど、自から製する少年は、殆んど之なきやう也。自から製して、自から放つ處に、愉快もあれば、小兒の力の發展をも見るべし。買ひたる紙鳶を人にあげてもらひて喜ぶやうな子は、必ずや、長じて意氣地なき無能力者となるべし。

世に如何なる大學者、大哲人も己れの子を完全に育て上げたる人はなし

泰西俚諺　人情の機微

半俗子

▲處女と後家

一體男子は一に唯己の便利の爲めに婚禮するものなり、蓋し男子が妻を求むるに當り、相手の女の幸不幸を考ふるは極々稀のことにして、彼が心に思ふて忘れざるものは、却て其女が己を幸ならしむるや如何の問題に在り、其所で先づ爰に二人の婦人あり、其一人の方は常に己の事のみ語らざるとするも、思ひ居りて自家の利害にのみ心を注ぎ、又一人の方は深く男の目的、事業及び計畫に留心し、我は其實然らざるも然るが如き體を裝はんとする時は、男子が其間に撰拔を爲すに一瞬も躊躇せざるや必せり、舞踏會の踊相手、宴會の言葉敵、又は海濱のそゞろ歩行きの道伴としては、蕾の花の春風春雨を知らず、罪もなければ咎もなく、新鮮にしてあどけなき姿こそ男子が望む總ての者なれ、然れ共世帶暮しは舞踏會にも非ざれば宴會にも

非ず、乃ち極々眞面目の渡世にして、月雪花ては渡れず、長の年月の艱難辛苦にして或は病氣もある可し、或は貧苦もある可し、或は又不幸もある可し、苟も物事の理を悟りたる男子がフト見て、心ドキック婦人に遇し時に、彼果して吾が一生連添ふ女房たるを得可きや、能く非運に堪へ忍び、能く吾と辛苦を分ち能く貧苦に臨て勇氣ある可きやと心の中に問試むるは論を俟たず、斯く穿索したる所にて扨、眼前の花顔細腰が人の辛苦の物語を聽て、同情相憐の狀を呈せず、乃ち一切面白からぬ話は馬耳東風と聞き流し、只管、己の容色をのみ是れ褒められんことを求め居るとの次第を發見しなば、容色は左までに非ずと雖も、長の生涯の苦樂を共にして、飽く事なき所の後家に之を見換へるや火を見るよりも明なり。

▲情界の年功者　後家が男を心醉せしむる所以は其會て夫婦暮しの間に成就し得たる所の見界智識の廣きこと是なり、即ち人の妻たりし經歷は我を張らず、思遣深くして、男の苦を苦とし、樂を樂とする事を敎へたるものにして、凡そ此三ッの持前は男子の心の底を突て之を感化するに、最も有力なるものなり、要するに後家は男を知り盡せり、左れば一言半句の間にも能く男の心の秘密を掬し取るなり、剩へ如何にせば是に留心するの狀を裝ひ得るかを知れり、後家は又男の弱點を押ゆるに鋭きものなり咄嗟の間に微妙なる巧言を放つに當りても、之を云はゞ彼を擒にす可し、彼を云はば彼に厭氣を生ぜしむ可しとの判斷力に富み、何を云て良きや、何は云はぬが花との區別は多年の經驗に據て深くも學び得たり、後家は人情界の一種の哲學者にして、早くも男と云ふ者は本來、氣隨氣儘、我儘一杯の獸たり、故に首尾よく之を擒にせんには、女は先づ己あることを忘れ、其語る言葉、その爲す所作をば、一切その男を主としたるものたらしめざる可らず、との理合を悟りたるがごとし。蓋し十中八九の男は、始終己の事を考へて、己の目的を念ひ、己の希望を心に畫きて、己の業を計畫し、己の心配、己の苦樂、一切萬事己ならざるはなく、甚だしきは己の男振までも思

續けて止まず、左れば爰の所に切込て、其實面白くもなしと思ふ事にても、充分乘氣の風を裝ひて、へーそんな事も御在ますかと學問と云ふものは眞實に面白いものですなア、など丶水を向け、更に男に氣を持たせんとして、オヤ〳〵貴樣は誰かに似て居らッしやると思ッたらアレマア横顔は廣瀬中佐そつくりですよ抔と好き機會を見て一寸〳〵と甘茶を飲まする等、總べて己の事は棚に上げて噯氣にも出さず。萬事その男を話の立者とすれば、流石五尺の粗大漢も遂に降服をせずには居る能はざる、後家が赤縄の市場を制する譯は畢竟此手練に在りと知るべし。

▲情界の未熟者　是れに反して處女が夫婦暮しの經驗なき悲しさは、彼も亦男子の如く常に己の事を思續け居れり、左れば會話の途次に、男子が暫くも其容色を褒め、其志を稱することより、話を轉ずれば、處女は之に堪ふること能はず、直に忌嫌を云ふなど、穩ならぬ手段に出づるを以て常とせり、畢竟、處女は此世界を以て一箇の小さき祠と心得、己は即ち其中の辨天樣ぞと信じて疑はず、男子の本分は此祠に來り跪いて、辨天樣の足下に平身低頭するに在るのみと思へばなり、成程、沈魚落雁の姿、美は即ち美なり、閉月羞花の形、艶は即ち艶なり、然りと雖も形態の原則は歎く可らず、マサカの時には飛込て助上ぐ可き覺悟ある所の快男子も、さう〳〵は痺が切れて居たゝまり得ず、時々には立上りて伸をするも、強ち無理とは云ひ難し、然るを彼の辨才天は之を以て直に己を悦ばざる印しなり、見棄たる證據なりと思詰め、吾を蔑視たる男の心の中こそ憎けれと、言葉に擧動に怒を漏らせり、蓋し處女の考へにては吾は貴きこと神の如し、男子たる者は唯この神徳に浴するを以て無上の快樂と思ふ可き筈なるに、左はなくて暫くが間も之を脱れ去らんとするは何事ぞ、彼の心事知る可らずと思へり、之を要するに處女は我儘にして強慢、思遣なくして男子を人と思はず、故に妻を娶らんとする者は去て後家を求め、處女は即ちいたづらに人のなぐさみ物となりて畢るがごとし、世に處女の其の美貌を誇るもの、多くが狸の餌食となるはこれが爲めなり。



一家の經濟

棚橋絢子

凡一家の經濟は小なる事に氣を付ざれば立行き難し、大なる事は誰も考へるもの又目にも付くものなれば左のみ苦勞はあるまじけれども、小なる事は等閑になりやすければ能々注意せざる可らず物を節儉して用ゐるは最も肝要なる事なり日々惣菜物を買ふにも下女任せにせず、凡そ人數に當はめ過不足のなき様に注意すべし、家内大勢なれば中には嫌ひの人もあり、又小食の人もあるが故に凡の見積は平生に能々考へ置き、其物々に就きて見當を付け一人前幾切づゝとか、又何程宛とかに定め可成丈餘分の出ぬ様せざる可らず、日本にては物價の廉なる處より兎角物を麁末にし易き傾向あり、此處最も注意を要す、野菜物などは就中然るが如し、西洋の如く物の高直なる土地にては菜大根にても麁末にせず、はし〴〵迄も利用し捨てぬ様にするが故に無用の費少なし、是その國家の富む所以ならむか凡て品物を買ふにも下女任せの家庭は其買方所謂大ざつぱにして其の買ひ餘りたるを押入などに殘し置くが故に、或は赤葉となり或は日ましとなり、或は黴を生じ、終には打捨るの外なきに至るとあり、一家を主宰する者は能く此邊に注意し、遣ひ殘りの品物は早く汁の實の足しなり何なりに、工夫して無益の腐敗を拒がざるべからず、其外他より到來の珍物などは餘り大切に貯へ過ぎて味を損じたりするは勿論無益の事と云ふ

べきも、今日も明日もと遣へは折角の物も珍敷なくなるものにして、畢竟之を麁末にすることゝなるが故に程よく之を遣ふ工夫を運らし、到來品の多き場合などには、先づ其品を吟味し腐敗し易き品は其味の損ぜざる内に之を用ひるか、然らざるも何とか其始末を付べし、其儘に入れ置きて全く之を打忘れ其物を腐敗せしむるは實に人の厚意を無にする行たるのみならず、不經濟此上なきことゝなり、夢々疎略ある可からざることなり、都て何物に



由らず其物〳〵に就きて終を全くせしめ、無駄にならざる樣にするは所謂隱德を積む行ひなれば自然に經濟上の陽報あるべきことなりと知るべし、或物馴れたる尼僧の話に、凡そ料理をなさんと欲せば先豆腐滓を買置、其用ひし所の切端皮などは細かに刻み旨く煮て其きらずに混ぜ合すれば捨るものをも捨ずして至極よきものなりと、誠に結構と思はる、是等は田舎の人には隨分實行するものあれど、都會殊に東京人抔には思ひもよらぬ事にて

皆々打捨るが當然と心得中には下女任せの內にては飯の洗ひ落しをながしに散亂させ、又夏向殘飯多き折は大道へ打捨犬の餌食ともならず、其儘腐敗に屬する事あるは折々見うくる事なり、實に天物を暴殄する譯にて勿躰なき次第ならずや、捨るものも捨ざる人さへあるに今日、命の親たる飯を不注意より無駄に捨るに至るは不德是より甚しきはなしよく〱注意すべき事なり。

△割烹　割烹は中饋とて女の任務なり、朝晝は夫々用事あれば團欒の樂みをとる能はざるも、夕飯は日々勤を濟し一家打集ひ睦じく樂しみて終日の勞を慰するものなれは、妻たるものは勤て調理の鹽梅をよくし、家內の歡心を迎ふべし、尤も財產の有無によるといへども、平生は可成手料理をよしとす、手料理は第一任務を盡すとを得、口にも叶ひ且つ經濟にもなつて一擧兩得なり、來客の節も手料理は眞の馳走になる者にて茶人抔は必らず麁末なる品を立派にこしらへ捨る物を捨ぬ樣質素儉約を旨として手料理を賞する者なれは其心得を以てすれば誤ちなかるへし、近來は茶人にても客を招くに料理店に命ずるものあり、不風流の至りにして茶人たるの主意に違へり、僅かの客にて其用意もなく又他に客の相手を爲すものもなく、手少の折は兎も角も主人なり誰なり相手のある節は手間取る品物のみを他に命じ及ぶ限りは前文述べし如く貯へ置し物杯を取交ぜ手料理にて出せは客も心好く打解けて一際親密の感を爲すものなり、故に一家を治むる者は兼て調理法を心得置くべし、其心得の有無により同じ品を持ちながら氣の利かぬ事をなし、或は一向に味を損する事あるなり、料理店にても其原料は決して珍物のみに非らず、種々と仕法をかへ珍敷がらしむると多し、心得置くべき事なり。

△買物　買物は買ひ置きて利なるあり、不利なる事あり、其邊の注意を肝要とす、炭薪杯は六七八月の間は一年中にて價の下落する期なれは、一年分或は半年分乃至二三ヶ月分宛買置きて利あり、一年分ならば此上なけれ雖當所の不充分なる場合には秋の末より春の取

付迄の分を買置か、又は多分丈けにても買置き其分は別に貯へ置きて當分使は入用丈其都度々々に買ひ入る可し、十一月末より一月頃迄は非常に高價となるが故也、其他高下のあるものは右の如くするに利あり、又高下なき日用品にても減らず損せざる品は小買より大買に利あり但し腐敗し易き者などは、價廉なりとて一時に其買入れを爲し、貯へ難きを貯へむとするが如きは不經濟の極にて、場合に由りては却りて高價の買入れを



爲したると一般なるとあり、總じて日用品は些細の物といへども日々の事にしあれば心懸次第にて年分には大なる相違となるなり、必らず注意を加ふ可し、其他呉服屋小間物屋などを折々出入せしむるは悪しゝ、第一時間潰しにて又入らぬ物も買ひ入るゝ故、不經濟となるなり、出入の者あらば入用の節に呼び寄するが宜し。

△衣類　全躰呉服類杯は下直なりとて必用にあらざる品は買ぬが宜し、餘分にあれば有るに任せて使ふものなり、譬へば金持

の子に修業の爲めとて困窮人の眞似せしむると同じ、到底辛抱は出來得ざることなり、衣類抔も富有に任せ有る上にも拵ふれば一年に幾度といふ程も着ざる中箪笥の中にて疊み皺など出來、或は虫杯も入り又入れ置く中見馴れて未だ用ひざるに中には氣に入らぬ物も出來又派手になりなどして詰り染直しをするとか下着にするとか目に立ぬ所に失費する樣になり、實に不經濟の甚しきものなり、時々必用の品は兼て心懸け恰好なるものを見計ひ、相當に之を貯へ置べきも決して多分に造るべからず、斯樣にすれは土用干の世話も入らず仕立直しも事少に濟み入物も嵩からず、何角便利なり。

惣じて若き人の流行を好むは普通なれど是も大抵にせざれは法圖のなきものなり、中には流行々々とて新奇を好み賣替買替するものあり、是亦尤も不經濟にして且浮きたる樣に見へ、人物の奥床しからざるを示すものなり、只其身に應したるを用ふるを可しとす、餘り奇を好み其にしみ心神を盡し、一家の經濟に疎きは主婦たるの資格なし、ゆめ疎かに思ふ可からず、又其に引替へ着物の身に添ざる染柄縞柄或は汚し、着くずれたるを構はず着たるは世に勝れたる人物としても餘り物數奇に過ぐるのみならず、女子の物すなる裁縫に疎き人と見下げらるゝ恐あり、況んや普通の人に於てをや、返々も身の度合を計り新陳の中を取るべし、又衣類のいぢり立を好み、今日綿入かと思へば明日は袷袷かと思へは羽織下着と仕立替に熱中するあり、是も第一其都度々々に費用も懸り、たとへ自らなすとも大切なる時間を費し、或は洗ひはがし等をなして甚だ不經濟となるなり、夫張綿入は出來得る中は綿入にして用ひ袷は出來得る限り袷として用ふるがよし、色々と替ふるは飽つぽい浮氣性をあらはして最と見苦しきとなり、愼まざるべからず、然れど又右に反し兼ての用意も後れ勝にて汚れたれど取替ず、綻び裂けたるも補綴せず、終には洗へども容易に落ちず、綻びより破れに及び、因循の結果手數も多分に懸り、且見苦しくなりて最早人前へは着て出られぬ樣になれは尤も大なる

不經濟にして然もしみつたれの看板を掛たるが如し、是も平生より心懸け油斷ある可らざるなり、古語にも衣裳の綻び裂けたるは以針補綴之とあり、味ふべき言なり。

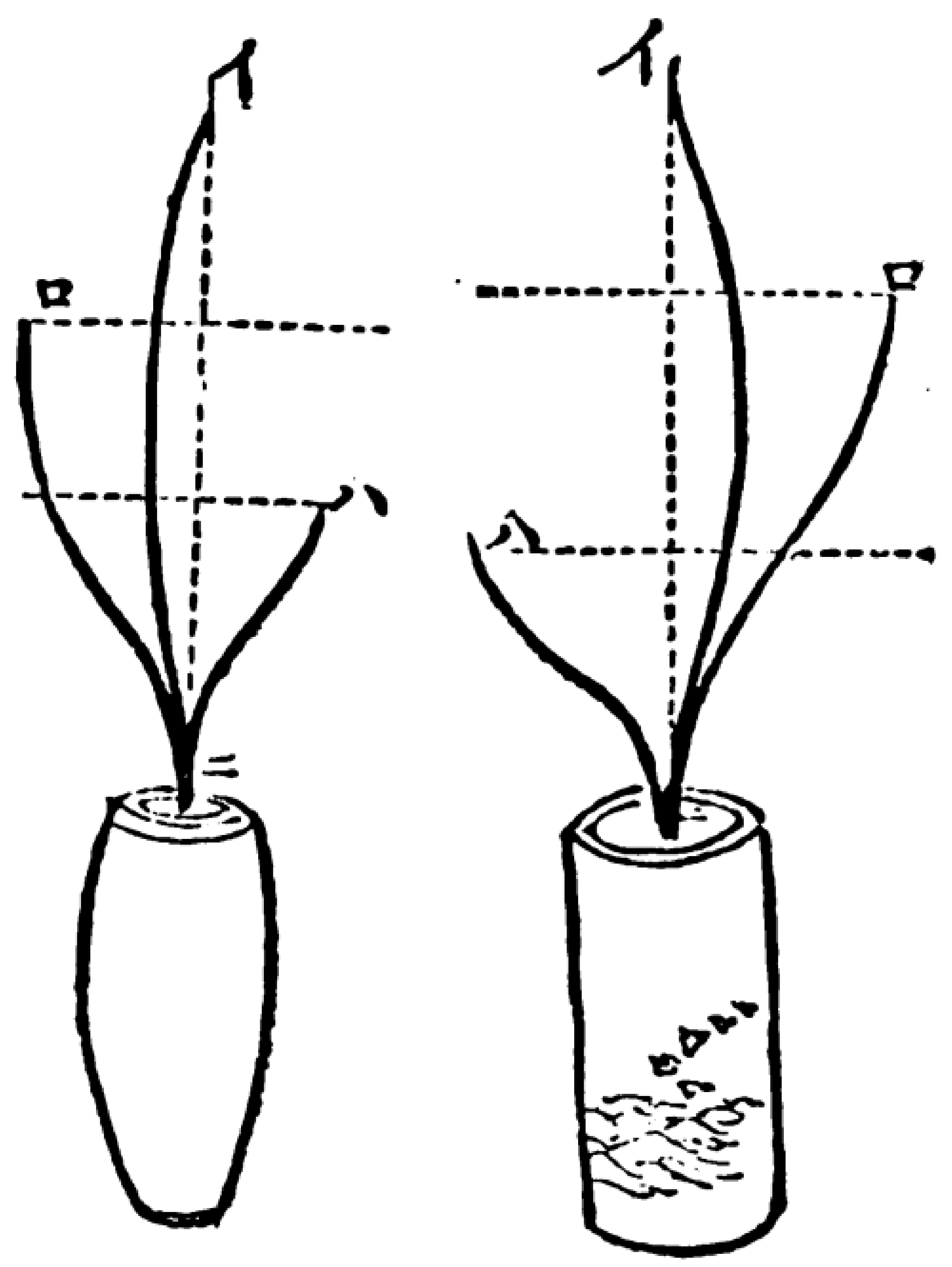
△**裁縫**　裁縫は女子第一の藝なり、多くの人を召仕ふ上流の人にても必用とする次第なるが、わきて中流前後より下等に至る迄は尤も必用なり、手の廻らぬ折などは人になさしむるも可なりといへ雖、身に覺えなくては積り物等にも差支へ、入らざる所に費の立つ事夥敷のみならず、不斷着迄外へ出すに嗜みの惡しき事を人に示すに同じ、特に積り物などは又其積り工合にて裁縫の手利なるか下手なるかの知らるゝものなれば、其心得なくては万事に不都合なりと知るべし、總じて婦人にして仕立の不束なると着て無頓着なるは何程他事に秀でたりとも肝心の專務に疎きを示す者にて立派なる事とはいひ難し、女子たる者勉めて嗜み置くべき事なり。

△**出納**　日々の出納は必らず明細に記し置き出入の節は先に帳簿に記入し次に金錢を出すべし、左なくば計算の時に間違多く出づる者なり、又可成は其日又は隔日位に小計をなし、間違を避くる樣心を盡す事肝要なり、一家の妻たるものは一家の經濟を知り、入るを計つて出づるをなし、日々出入の多寡によりて注意を加ふるを主務とす、之を疎かにして單に御役目の如く心得又は人の預り物の樣に取扱ひ金錢は自然夫の手より湧出る樣に思ひて麁末になし釣錢などは其處此處と所かまわず入置き、其中下女の目見え等に盜まれ、又は入場所を忘れ入用の節家搜しする抔は第一時間を費して不經濟なるのみならず、中には到頭其儘に出ざるものも出來て實に不取締の極となるなり、都て金錢は勿論他の物品にても入場所を極め置、多忙の節は猶更に其極りを忘れぬ樣にせざるべからず、諸葛孔明の語にも靜以修身儉以養德とあり心して見るべし。

次號には
諸道具の飾付、交際、下女の使方、小兒の教育を掲ぐ

活花十二ヶ月

梅月園主人述



活花の本意は、草木の花を水にさして長く保たしむるのが主意である、左らば花の枝を切て水にさして置けば其れて宜敷きかといふに、決して然らず、彼の野に山に咲き出づる花は皆春秋の心を得て、一々其の變化につれるもの故、其の木、其の草、其花、其葉、或は其枝、皆一々同じからぬ事を見れば、此に天地自然の法則と云ふものがなくてはならぬ、其れて昔しの賢き人が此の自然の法則から、活花の法則を定められたのである、此の賢き人の定めを基として世の中の變遷につれて、其の形ちも亦變ッたけれども、一瓶の中にて主となるものは「眞」でこれが天を象り「副」は人を象り「躰」は地を象りたるものである故に此の理を極めて萬の花を活くる時は、天地自然の理に叶ひて、根のなき花も實を結ぶ樣になるのである。

活花の法則

池の坊の活花の規則としては前號に略述しましたが爰には花の數の事を申し上げると、此れは三本五本七本等總て奇數でなければならぬ併し二本丈けは偶數でも許されてある、又其の花輪は數多く咲く梅桃の如きものは別に調べませぬが、菊椿等は矢張り三輪五輪等奇數の定めてある、今一つ斷りて置かねばならぬ事は花を活けるに其の花の高さの定め方です、是れは前に申しました如く自然の法則が基となりて居るのであるから、其の自然に生へて居る形によりて高きものは高

く、低きものは低く、活ける事であります、其の他花なり葉なりの多少も總て自然の形に從ふ事であります。

葉蘭

葉蘭は一年間何時でもあるもので、必ず葉蘭から始めねばならぬと云ふ理由は少しもない、否や反て他の花のあるときは他の花を活ける方が宜敷い、如何なれば活花は深山の花に當りて活ける方が上手になるのですから、花のない時活ける爲め、葉蘭を後に殘して置く方が宜敷いと思ひますが、初心の人には、此の葉蘭が「眞」「添」「躰」を見別くるに容易いと云ふ所から、多くの先生方も此の葉蘭を最初に教へるのである。



葉蘭を活けるには、初めの程は五枚其れから七枚、九枚と追々數を增して活け、十五枚或は十七枚位差支へなく活ける人は、最早や餘程上手な人である、

先づ五枚活けるには左陽の葉を「眞」と致します、又「眞」の「あしらひ」及び「躰」にも同樣の葉を用ひます、總て陽の方を前にするので「躰」には幅廣き葉を中程より折り返へして或は捲いて用ひます、其して第一に「躰」次に「胴」「眞」の「あしらひ」、其れから「眞」「添」と順次靜かに活けるのであります。

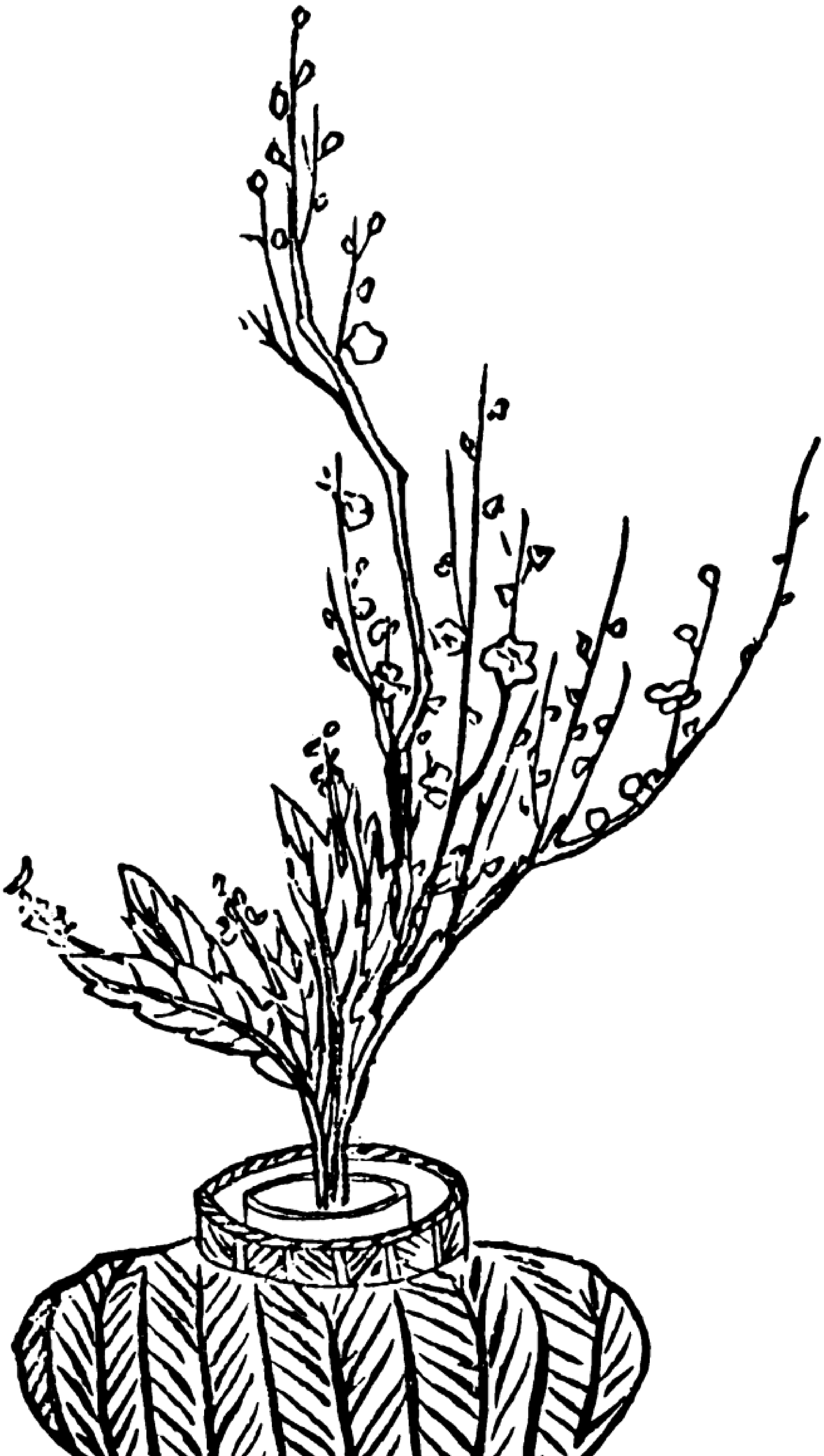
五枚の活け方が御了解になれば、七枚も九枚も又十三枚にても、其の活け方には少しも變化はないのであります、只「あしらひ」を增し此れを程よく配合すれば宜敷いのであります、斯樣に申せば事もなき樣なれども、

數多く活ける事はなか〳〵六敷も、充分注意して心靜かに活け給へ、

此れから、花の种類の順序を定めて置きましよう、此の順序は容易きものを先きにし、六敷きものを後にするのが通例なれどもこゝには其の時々に應ずる花に付ひて申しますから、從て其の順序は四季の花の順序に從ふ事となります、其都合により、傳物或は水上げの事等を御話し申します。

桃に若菜

桃は其の木質が柔であるから、撓め直すには容易な



ものて、其の木振りも極めて素直ですから、誠に活け安い花ですが、小枝は十文字になり安すく縺れ安いものですから、注意せねばなりませぬ、「眞」「添」「躰」等の寸尺の定め方は、前の例を考へ合して、各〳〵心して意匠を込めらるべし、若菜は二本或は三本、葉と花の都合を見合せて、色よく添へるのです、菜の類は一般

に丈けは短くして、根は太く、活けるには随分六敷いものです、故に根の太き所は削り取りて用ひ、其の白き所を「くばり」の上へ見せぬ樣にするのです、例により花の數、葉の數は奇數でなければなりません。

家庭科學

理化應用 家政廿四時

河西璞

飯が濟む。跡方付け、洗濯、裁縫乃至訪問、買物、山の樣な用事は箸を投げて立つのを催促して居るが、て〻に其前に是非爲ねばならぬ極大切な用事、愚かにも世間の多數が爲ずにしまふ一つの極大切な用事がある。

▲食後の休息

抑も我々の躰肉に循環つて居る血液は、譬へば一家衣食住に必要な經費の樣なもので、一家月々の收入は衣、食、住と小遣ひとに平均支出されて始めて愉快の生活を營むことが出來るのだが、時期により、冬支度、味噌の舂き込み、一炭薪の買ひ込み、といふやうな月額超過を要する月は必ずある、さういふ月には、是非此方へ經費の過分を向け、夫丈他の出費を扣へ目にせねばならぬ、其通り、分量に限りある人躰の血液も、躰のある部分に特別の入用を生ずる塲合には、自然他の部分を扣へて此部分へ多く循環させるやう心懸けねばならぬ。極明白な道理で、若しそれを一切無頓着で居るならば、譬へば冬支度に餘分の支出をしながら小遣の節約に心付かぬ細君の米屋、魚屋、家賃の拂ひに面目を缺くと同じやうに、必然身躰の調和を狂はせて、壽命健康に故障を來さずには置かぬ。躰肉の血液平時は腦にも手足にも五臟にも適宜平等に循環つて居るが、食事をすると此が直ぐに自然の命令に服從し消化機關の力へ集つて活潑に消化の作用を始める。無論腦や手足の筋肉に働く分量は減らねばならぬ。然るに之を思はず、食事が濟む、直ぐに立つて跡方付けにかゝる、

他の仕事に懸る。サア血液はまごつかざるを得ない。本を讀まれゝば腦へ行かねばならず、手足を動かされゝば手足へ行かねばならず、と言つて食物が來たからには胃腸の爲に胃液、腸液、膵液、膽汁を造り筋肉を動かして之を混ぜてやらねばならぬ。泣く／＼必要量の一部を割いて腦手足へ分派する。其結果は言ふ迄も無い、消化不良病で、消化液の働きは段々鈍り、消化器は日一日と不活潑になり、同時に手足の力も減り、腦の元氣も衰へる。深く思ふべきことゝて、自分一人でなく、子供衆などにも同じこんな愚かの自然罰を免れさせねばならぬ。嚴酷の論法を以てすれば凡て病氣なるものは、避くべきにせよ、避くべからざるにせよ、必ず何か不自然不注意無智の天罰である。避くることとの出來ぬ場合は避くることの出來るやうになる迄は仕方が無い、避くることの出來る限りは避くるのが生存の義務で、又近くは子孫、廣くは他人に迄關係する公德問題である。自然は常に慈愛なり、而して常に嚴酷なり。

▲食物の貯藏

●●●●野菜貯藏法　寒中馬鈴薯甘藷などを凍らすまい爲には、普通土を掘り、藁を用て埋めて置く。此法は至極手輕で、しかも有効だが、夏時分の馬鈴薯などは、腐りたがつて仕方が無い。其折の法として、土を掘つて、木灰と石炭灰を半混ぜにしたものを入れ、其中へ埋めるに限る。此法は冬も只の土よりは効が多く、其上棄て處に困る石炭灰のよい利用法である。夏時分卵、肉なども此法で可也久く搆つて置ける。

●●●卵貯藏法　尤も卵の搆ひ方としては、水硝子といふ藥の安物を百倍程に溶したのへ入れて置くが一番よい。卵の安い時、此法で少し搆つて御覽なさい。石灰を煉つた中へ搆ふ法もある。水硝子の溶液は外の物も同樣搆へる。

●●●●●●林檎などの貯藏法　一つ／＼紙で包んで、前の木灰と木炭灰（木灰許りでも宜し）の混合物の中へ埋めて置く。言ふ迄も無いが土を掘らずとも、箱の中でよし。好く搆へたら時ならぬ珍味として食膳を賑はすことが

出來るたらう。只紙て包む代りに、水硝子の濃いのか、卵の白味て一個〳〵に隙間なく美濃紙を貼り、前の樣に貯へれば必然成効します。御試しなさい。

▲入浴

勝手から出て來た、さて何にかゝらうか、と考へる前に、垢臭くならぬ先に一風呂などは結構てせう。

昔羅馬人は其有名な公浴場で進取の元氣を垢と共に流し去つた、今は土耳古人は名物の蒸風呂て恍惚たる生涯を樂んで居る。然しながら潔癖に有名な我國



民が二日三日に一度を缺かさぬ湯浴は、我國民の健康に、元氣に、どれ程の貢献をなしつゝあるか。同じ浴湯て一は其國の衰運をトされ、一は其國の元氣養成の源になるとは、面白い現象と言はねばならぬ。

西洋人の風呂は所謂一人占めの寢風呂で、細長い金屬製の風呂桶に、生溫い湯か、寢て漸く全身を蔽ふ程入れられる。此中て月二三回若くは一回、甚しきは二月三月に一回の底垢を落すのだから、一人入れば御跡など

ゝいふ譯には行かぬ。自然湯錢が五十錢一圓となつて一般人民は始終其恩惠に浴することは出來ぬ。我國の錢湯は之に比ぶれば平民的で、湯代の高い東京でさへも、二錢五厘の端錢で生き返つた樣の心持になれる。田舍へ行けば僅か一錢か八厘で此健全な樂みが得られる。西洋風の一人占めに比べれば不潔と言へば言へるが、上り湯があれば、馴れゝば氣にもならぬ。

他人に膚を見られることを恥とする觀念は我國にも大分發達して來た。男女平氣で混浴した維新前の風呂へ今の人を連れて行つたら、大抵は恐れ入つて顏に媚てあらう。が、我國人の裸體を恥づる觀念は、未だ同姓同士、及び小兒に迄は及ばぬ。畢竟は習慣だから、そこまで此觀念を養成する必要は無からう。

泥坊にも三分の理といふから議論はどうともなるであらうが、先づ女子は男子の、男子は女子の裸體を見、見らるゝを恥とする觀念を正しい標準として、さて田舍から出て來て十人が十人、呆れて眉を顰める都會の風習の一つは、女風呂の流しに於ける裸體の垢助なるものである。女子が平氣で裸體男子に己が皮膚をつく〳〵見られながら肩腰を撫られる。假令自分一人はそれて滿足するとも、同浴者の中には、男子に膚見らるゝを恥と養成された婦人もあらう、連れた兒はさう養成せやうと心懸けつゝある母もあらう、と氣が付いたなら、そこが即ち共同生活の公德で、遠慮すべきことやかましく言へば、社會の制裁はさういふ處に入用ではあるまいか。今日の社會では女湯に男子の三助は禁止すべきものと、少くとも自分は思つて居る。

▲入浴の効果

風呂の身體に對する衞生上の効果に就いては一二にして止らぬ。重なのを二三擧げて見やうならば、第一に血の循環をよくする。第二に筋肉を舒める。第三に筋肉內臟の働を活潑にする。第四に皮膚の垢を取つて毛穴を明ける。第五に皮膚の彈力を强くする。第六に容貌を美麗にする、身體の臭氣を去る。第一の利益は一日の劇務に鬱結して血液の循環が平均括潑になる爲、疲勞を去り、全身何となく輕く、言は

と重荷を卸した愉快の心持になれる。血液の循環は生命の活動を意味するのだから、其結果は健康長壽。第二の利益は、肩の凝り、脚の膨れ、腰の痛み、腕の塊り、一切筋肉の不自然を復舊して一部に鈍り一部に過敏になつた神經を落付かせる。風呂が眠りを催す理由の一つはこゝ



にある。第三の利益は先づ誰でも經驗して居る胃腸の働きを活潑にする。食べ過ぎたから風呂へ行かう、風呂へ行つて來たから二膳餘分に參つた、などはいつも聞く所。夫から風呂へ行けば聲がよく立つやうになる、肺の力は增す。尤も湯の壓力の爲肺の弱い人は堪へ難く感じて、却つて害を惹起すかも知れず、又心臓も血液の

循環の盛になつて來る爲、平常強くない人は長湯せぬやう注意せねばならぬといふやうな、反對の結果になる場合もある。生理の場合と病理の場合は夫々別の方面から研究せねばならぬ。

生殖の機關、子供の寢小便などに入浴のよいこと言ふ迄もない。

第四の利益は皮膚呼吸といふこと、及び皮膚病に關して居る。一體我々の皮膚は肺臟と共に斷えず呼吸作用を營んで居るもので、八釜しく言へば、肺臟も皮膚の一部で、廣げれば五十疊敷ある廣い皮膚が小縮りと一處に屯して居るのだと言ふことが出來る。尤も言ふ迄もなく肺の面は特に呼吸に適する樣に出來て居るものだから、我々の呼吸は主として肺臟に由つてするが、皮膚も亦輕からぬ關係を呼吸に有し、特に水分の呼出に於て大立物の位置を占めて居る。即ち我々の皮膚の毛穴なるものは、之から空氣中の酸素を取つて、體內から炭酸瓦斯と水蒸氣とを射出する大切の門戶であるのだから、皮膚の働を十分にさせる爲には、此門戶を常に開放して置くべきで、皮膚に垢を溜め、垢で此門戶を閉いで置くのは、身體の働きをそれ丈停止して置くやうのもの、つまり身體を害ふことになる。だから垢を洗ひ落すといふことは、只奇麗にといふ爲ばかりではなく、第一に皮膚の呼吸を滿足に保つといふ意味であらねばならぬ。垢を落し毛穴を明けてぬく〱寢て御覽なさい。小用の近い人でも、其晚は起きずに濟みませう。垢のある時四丈皮膚から出た水分が、毛穴が明いて六丈皮膚から出るとすれば、二丈は膀胱に行く分量が減る勘定でせう。風呂が喉を渴かす理由の一つもそこにあるのです。

第五の利益は、裸躰になり皮膚を鍛る爲、其彈力を强くする、從つて風邪を引き惡く、日射病に罹り惡く、皮膚病に犯され惡くなる。我々の皮膚は一般の規則通り極外界に馴れ易いものだから、シャツ股引で皮膚を包む癖を付ければ、忽ち其保護に依賴し、弱くなつて、脫げば直ぐ風邪を引くが、始終裸躰露出して置けば、矢張遂に夫に慣れて所謂顏膚になる。外力に張合ふ

力が強い程皮膚病の源因になる微生物にも犯されず、風邪も引かぬ道理だから、風呂は成るべく繁く入りたいものである。第六の利益は言ふ迄も無い。但しあまり摩り磨き過ぎて、却つて顔の皮の組織を傷ね、テラ〱と光を放つ程にするのは愚の事である。身躰の清潔は自分も快く人も心持よい。蒸れた頭髪の臭ひ、腋の下足の臭ひ、此等は少しの不注意から自分の品格を下るのみか、他人に對して大失禮である。

湯の餘り熱いのは身躰の爲に宜くない、夫から長湯も勿論宜くない。熱い湯長湯は却つて血管、内臓、皮膚、筋肉の方を弱める。過度に働かせて疲れさせるのだ。從つて神經を鈍くする。年寄の熱湯長湯を好くのを見れば分る。此理を推して小兒には大人よりは猶熱湯、長湯の有害な譯が分らう。世間には往々小兒の泣いて詫びるのを壓へ付け、湯冷めを口實にも少し〱と、長湯を無理強いする親達がある。實に恐るべき考へ違ひて、かく苦み勉めて小兒の健全を打壞すとは情無いてはないか。湯冷めは垢の被覆の取れた皮膚へ、直接に寒い風が當るのと、今一つ皮膚から水分の蒸發が盛になる爲潜熱として取去らるゝ躰熱量の多いに基くのだから、風呂屋から寒い戸外を家へ歸る間、身躰に十分の熱を保持させる丈、湯から熱を身躰へ取つて來る必要はあるが、湯から取つた熱は一時のもので、身躰を害ふて迄も、少し位餘分に取つて來る價値は無い、のみならず、長湯、熱湯で身躰の機關を疲勞させれば却つて其後の運動を不活潑にし、躰熱の發生を減少させ、それが却つて湯冷めの原因にならぬとも限らぬ。萬事程よきといふことが大切である。入浴は湯冷めの虞の最少い午後二三時頃が一番よい。

▲皮膚乾燥の害

言ふた通り、我々の皮膚は呼吸機關の一で、吐き出すのは、身躰組織の燃燒に由つて生ずる廢物、炭酸ガス水分、脂肪、夫から一種特有の臭氣、垢は一半は躰内よりの廢物の滓、一半は外部空氣中の塵埃）である。さて此皮膚呼吸であるが、これが一般に皮膚の程よく濕つて居るといふことを必要條件として居るので、パ

サ〳〵と乾いて居れば、皮膚は收縮り呼吸孔は塞つて、此作用を十分にすることは出來ない。例へば蚯蚓、蚯蚓は全く皮膚のみで呼吸作用をするもので、別に肺臟や鰓の樣なものは無いのだから、若し奴さん日向へ匍ひ出して身躰が乾き、皮膚に水氣が無くなれば、人間なら肺が役に立たなくなつたと同じて、死んで了ふ。蛭、水母なども其通り、原生動物は凡て皮膚呼吸、蛙も盛に此呼吸をする。蛙の口と鼻を塞いても平氣て居るが、皮膚へ蠟でも塗れば、苦んで早く死ぬる。さて我々の皮膚も程度こそ違へ、其通りて、脂肪を洗ひ取つた湯歸りなどに、寒い風に吹かれて、出て來る水氣を吹き取られて了ふと、呼吸孔は即ち縮まつて、皮膚呼吸は急に止り、此不自然は身躰の衛生に大害を來すのみならず、脂肪の缺乏の爲皮は硬張つて皮は遂に之が爲損はれ、冷却收縮の力に抗することが出來ずに裂け切れる、これが即ち胼て、胼はいつも過度の皮膚乾燥に原因する。であるから、皮膚の脂垢を取ることは必要ではあるが、之と同時に、皮膚の程よき濕りも常に必要て、若し風呂から寒風の中を歸らねばならぬ場合、若くは水いぢりの後などは、皮を柔軟に保つ爲何か附藥をする必要がある。此目的に用ふる附藥には砂糖の煮汁（單舍利別）、グリスリン、外に色々賣藥もあるが、百倍の水に溶した苛性加里は、安くて、利が至極よい。苛性加里は劇藥てはあるが、溶したものなら藥局で得られるだらう。これにグリスリンを混ぜても結構、香油の一滴も猶結構。

女學生の學費

女學生が每月要する學費については小石川竹早町なる第二高等女學校にて一學年より五學年に到る全生徒につき一ヶ年（十一ヶ月）に要する學資金（但し學校だけの入費にて食料其他を含まず）につき精細なる取調べをなしたるに下の如き結果を得たり

▲授業料（十一ヶ月分）十九圓八十錢▲運動費（每學期二圓五十錢）七十五錢▲書籍代（每一級）十五圓▲靴（一足修繕費、靴下十一ヶ月分十一足代共）七圓二十錢▲紙（中紙四十帖、卷紙二本、畫箋十一枚、繪水引中紙十一帖、用紙十帖）三圓十五錢▲筆（大三本小十本、畫筆三本、ペン六本、軸一本）一圓四十錢▲墨（一挺、木炭二箱及羽箒二本、インキ一壜）四十錢▲繪具（一、二、三學年を通して每年）二十錢（四、五學年を通して每年）一圓十錢▲雜記帳（十五冊）七十五錢▲鉛筆（二十本）六十錢▲遊戯器具三十錢、

即ち總計一、二、三學年は四十一圓七十五錢、四、五學年は四十二圓六十錢なり

季節料理

治庖會本部　安西こま子

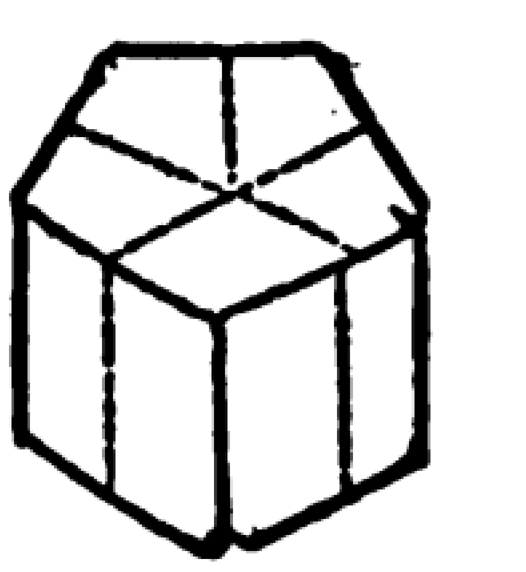
吸物　酒むし蛤　燒蕗の薹

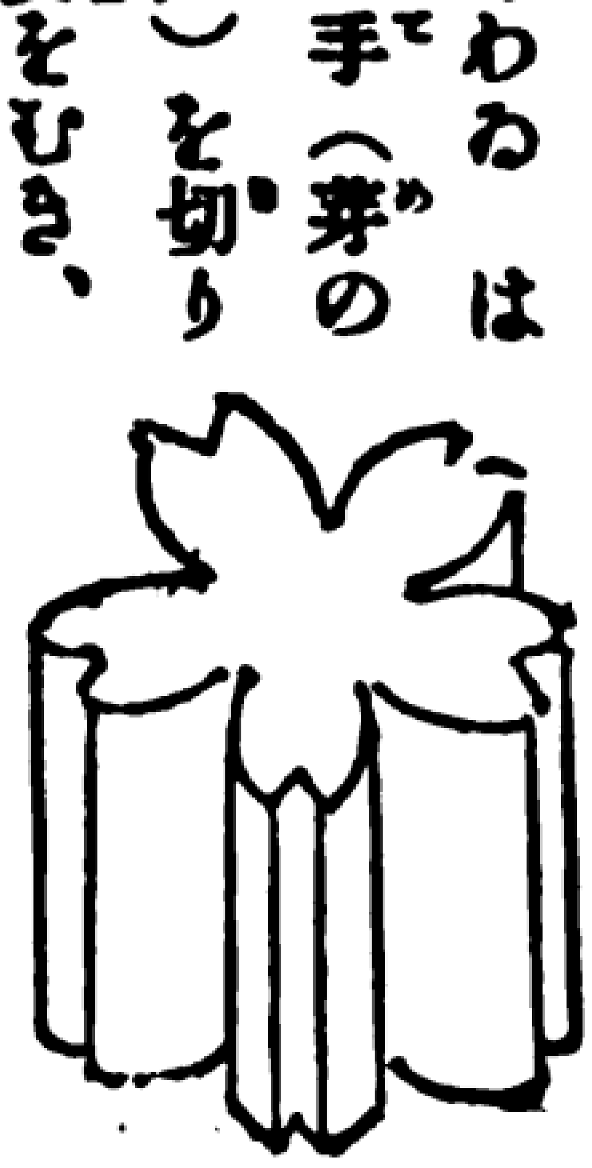
一、酒むし蛤　は大なる蛤（二拾個）を淡水の中に放ちおきて充分に砂を吐し、而して蛤を鍋に入れ、水（壹升）と凡そ並盃に二杯程の清酒とを加へ、鍋を火に掛け煮立れば暫らくして蛤が口を開くべし、此時に食鹽少しく加へ、鍋を火よりおろし、直ちに汁と共に蛤を二個づゝ椀に盛り、蕗の薹を吸口となすべし、又燒ふきのたうの製方は蕗のたうの上皮を除き、金串の尖端にさして炭火に焦せしものなり

甘煮　印籠白魚　かむろ椎茸　花くわゐ

一、かむろ椎茸　は小粒の生乾椎茸を撰び、水につけおきて柔らかにもどし、之を沸騰湯の中へ投じゆでて、目笊へ取り直ちに冷水を注ぎかけて冷し、此椎茸の蕊を除き、別に味淋の煮切り（味淋を煮詰めたるもの）と濃き煮出汁（鰹節の）とを等分に合せたる汁を鍋に入れ、火に掛け、汁の煮立つを待ちて、前の椎茸を入れ、落蓋をなし（今煮んとする品物に觸れて其上におくとを得べき小なる蓋を用ゆることなり）汁が半分程につまるまで煮、之に生醬油を加へ、一寸と煮て汁と共に平皿の如き器に移し、直ちに扇ぎ冷すべし

一、いんろう白魚　は白魚を水にて洗ひ、水を切りおき別に鍋へ味淋を入れ之に少しく食鹽を加へ、火に掛け、煮立つを待ちて、前の白魚を一尾づゝ其頭と尾の處とを兩手に持ち、魚形が眞直になるやうに手早く鍋の中へ入れ、魚の色が白く變るを度とし鍋を火よりおろし、金杓子と菜箸とを持て皿へ移し取るべし





一、花くわゐ　は慈姑の取手（芽の處をいふ）を切り落し、皮をむき、

根元の方を薄く平らに切りおとし、次に圖の如く五角形に庖丁を爲し、次に圖の如く庖丁をなして櫻の花形につくり、水にて洗ひ、沸騰湯の中へ入れ、柔らかにゆで、水にて洗ひ、水を切りおき、別に三盆砂糖と水を等分に合せたるものに少しく食鹽を加へたる汁を鍋に入れ、一同煮立てゝ、前の慈姑を入れ、蓋をなさずして、煮込み、味をつけ、汁と共に平皿の如き器に移し、而して慈姑を木口より二分程の厚さに庖丁をなして、其半數を「水にザット洗ひ、水を切り、」食紅を水に溶せし汁を煮立たる中へ投し、淡紅色に染め、水にて洗ひ、能く水を切り、他の器に入れ、前の煮汁の中へ漬けおくべし

饅茹

蛤
胡葱
摘み和布

一、蛤 は蛤の剝肉を目笊に入れ、之を笊と共に水の中へさし入れ、笊を振り動かして能く洗ひ、水を切り、之を沸騰湯の中へ入れ、火を通し、目笊に取り、湯を切り、生酢に一寸とつけ、酢を切りおくべし

一、胡葱 は水にて能く洗ひ、根を切り捨て、之を一掴程の束とし、澤山なる沸騰湯の中へ投し、程好く茹て、(湯煮がすぐるとあしくなるなり)、目笊に取り擴げおきて冷し而して一寸二三分の長さに切り、生酢にて洗ひ、酢を程好く搾りおくべし

一、摘み和布 は和布を微温湯にて洗ひ、之を沸騰湯の中へ投しザット茹てゝ、筋を除き、生酢にて洗ひ、酢を切り、適宜に庖丁をなして前の蛤と胡葱と共に酢味噌にてあへるなり　又酢味噌の製方は相白味噌と並の辛味噌とを等分に合せ、之を擂鉢にて能く擂り交ぜ、之に三盆砂糖を加へ擂り交ぜて甘味をつけ又之に少しく生酢を加へて裏漉せしものなり

備考　裏漉しとは馬毛篩を俯せて篩の裏に味噌をおき、山杓子にて味噌をおし以て篩の表に漉し出すことなり

薄作りさゝえ
いてふ慈姑

磯焼さゝえ　せん椎茸　ちらしみつ葉　みぢん柚子

一、薄作り榮螺　は榮螺を水にて洗ひ、之を鍋の中へ俯せて入れ、榮螺が被る程の水を加へ、鍋を火に掛けおけば暫らくしてブツ／＼と音を發し二つ三つの水泡が浮上るを度とし、直ちに榮螺を取出し、火箸を殼と肉との間に挿し込みておて肉を取出し、腸耳等を除き、水にて能く洗ひ、竪に二つに切り而して木口より薄く作り、別に煮出汁（鰹節の）と味淋（煮出汁より少しく多くす）と生醤油（控へて加へる）とを合せたる汁を鍋に入れ、此汁が煮立つを待ちて、前の作り肉を入れ、手早く網杓子にて二三回掻交ぜ、直ちに皿の如き他の器に掬ひ出し、又此肉を鍋に入れ、網杓子にて二三回掻交ぜ、直ちに皿へ掬ひ出す斯の如くすること三回繰返して後ち、鍋に殘れる汁へ生醤油を前に控へし丈け加へて又前の肉を入れ、一寸と煮て、鍋を火よりおろし皿に移しおくべし

又榮螺の殼と蓋とは水にて能く洗ひ淨めて水を切りおくべし

一。銀杏くわゐ　は慈姑を銀杏形に庖丁をなして、水にて洗ひ、之を沸騰湯の中へ投じ、柔らかに煮て、目笊に取り上げ、水を注ぎ掛けて後ち水を切り、煮出汁（鰹節の）と極めて少しの味淋とを合せたる汁を鍋に入れ、一沸しして前の慈姑を入れ、一寸と煮、之に生醤油を加へ、再び一寸と煮て、網杓子にて掬ひ、皿に移しおくべし

一、繊椎茸　は甘煮の條に説明せるかむろ椎茸と同じ手續を生乾椎茸に施し、其味付方は禿椎茸より少しく味淋を控へ而してせんに打ちしものなり

一、ちらしみつ葉　は萌し三つ葉の芥と枯葉を除き、水にて能く洗ひ、根元の處を揃へ、適宜の小束となして之を沸騰湯の中へ投し、暫らくして三つ葉の周圍に泡沫が生ずるを度とし、三つ葉を裏返し、一回煮立て、直ちに冷水の中へ放ち、二三回水を取り換へ能く冷して取出し、程好く水を搾り、之を煮出汁（鰹節の）

と生醤油とを等分に合せたる汁にて洗ひ、汁を輕くしぼり、凡そ五分程の長さに庖丁をなすべし

一、みぢん柚子　は柚子の皮を薄く剝き取り、之をみぢん庖丁をなして、水の中へ暫らく放ちおきて、布巾の上に取り、搾りて水を切りおくべし

一、汁　は鰹節の心の處を削り以て作りたる煮出汁を一回炎立て、之に生醤油を加へ、普通の汁よりは辛き加減に味を付けおくべし

以上夫々準備が整へば榮螺、慈姑、椎茸、三つ葉、の四品を一様に混じ、之を榮螺の殼の中へ詰込み、其上より汁を注ぎ入れ、さゞえの蓋を以て蓋となし、此蓋の上にみぢん柚子を添へおき、客に出すときに之を炭火におきて温め、皿の中へ紙を敷きたる上に載せて、侑むべし

二色鶏卵
青山かん
和かまぼこ
いんげん

口取

金とん
水晶昆布と
きくらげの
てんぷ

一、二色鶏卵　は鶏卵を微温湯の中へ投し、十三四分間茹て、、目笊に取り、笊を強く振り動搖して鶏卵に亀裂を生ぜしめ、而して殼を除き、白味と黄味とを分ち、各々へ三盆砂糖と食鹽とを加へ、黄味の方は甘くして鹽氣を持たせ、白味の方は鹽味に少しく甘味を持たせて、先つ白味の方を裏漉して次に黄味の方を裏漉して、押箱（笹折を代用するも可なり）の底へ美濃紙を敷き、白味を入れ平らにならし、一回押箱の蓋にておし、次に黄味を平らに入れ、其上に美濃紙をしきて又蓋を以ておし、而して上蓋と横框とを取りはづして、蒸籠に入れて蒸し、冷めて後ち、算木形或は色紙形に庖丁をなすべし

一、青山かん　は寒天一本を暫らく水の中に放ちむきて後ち、水を搾り之を斷りて鍋に入れ、水三合を加へ

文火に掛け、凡そ十分間煮詰め、之に三盆砂糖拾匁を加へ、砂糖の溶るを待ちて、之を絹篩にて漉し、又鍋にもどし入れ火に掛け能く煮詰めて、火よりおろし、之に豫て水をはり晒しおきし葛（二勺程を）の水を切り、箸にて掻交せ液汁となして垂し入れ、又鍋を火に掛け、更に煮詰めて、火よりおろし、寒天液の熱度が少しく冷るを待ちて、挽茶を茶匙にて三四杯加へ、（寒天液の熱度の高きうちに挽茶を混ずれば茶の色を損し又挽茶を多く用ゆれば苦味を生ずるゆへ注意すべし）緑色になして之れを流し箱（重箱を代用するも可なり）に流し入れ、而して冷め凝るを待ちて、二色鶏卵の形状と異なりたる形状に（算木形或は色紙形）庖丁をなすべし

一、紅かまぼこ　は蒲鉾の製方甚だ六ヶ敷ゆへ蒲鉾屋よりもとめ、用ゆべし

一、隠元豆金團　は、隠元豆五合を水にて能く洗ひ、微温湯を仕立たる唐銅鍋へ入れ、火に掛け、能く煮立ちしとき冷水を注し、三十分間煮て其湯を去り、之に新らしき微温湯を入れかへて煮立つべし、斯の如く湯を取換ること三四回にして豆が能く柔らかなれば、静かに湯を切り、其豆の五分の一程を取分け、其殘る處の豆に三盆砂糖百二三十目と食鹽少しくとを加へ、文火に掛けおき、前に取分けおきし豆を手早く裏漉して鍋にもどし入れ、能く煮詰むべし

一、水晶昆布と木茸とのてんぷ

水晶こんぶは微温湯にて洗ひ、之を微温湯の中へ投し、ザツト茹て、湯を切り、三寸程の長さに切り、別に鍋へ三盆砂糖と少量の水と少量の食鹽とを合せたる少量の汁をつくり、火に掛け、前の昆布を入れ、菜箸を以て掻交ぜながら煮て、汁が殆んど煮詰りたるとき火よりおろし、昆布を平皿に移し、薄く擴げて直ちに扇ぎ冷すべし、又木茸は甘煮の條に於ける禿椎茸と同じ手續を爲して茹て、之を極く細きせんに打ち、味淋と少量の食鹽とを以て水晶昆布と同様に煮上げ、而して昆布のてんぷに木茸のてんぷを少しく混じ合すべし

鶏卵百珍

松の門

玉子は滋養に富みたるもの故病人などには尤もよし、されど若し腐敗したる卵を用ふる時は却て身躰に害ある故、先づ卵の善悪を撰ぶべし、此の善悪を知るには、手にて中央を攫み一端より光ある方を睨き、曇りあらば腐敗品なり又水五合に鹽三十目を入れ、卵を投じ沈むものは上品にして、中央に浮ぶは中品なり、全く浮上るものは腐敗したるものなり、又玉子を貯ふるには冷なる所に置くを要す、之を入るゝ箱には鹽又は籾を充たして、其上に玉子の端を立て置くべし、又「アラビアゴム」を卵にぬり乾かして炭の粉に蔵め置くもよし、今その料理法を記さん。

△かすていら玉子　鶏卵をよく解き、自然薯をおろして十分に掻き廻し、小麦粉と砂糖を程よく入れて摺り交ぜ、焼なべにてやくなり、

△玉子しんじよ　よき葛粉を水にて解き、鶏卵を摺り交ぜ、味淋醤油を加へ、鉢に入、蒸籠にて蒸すなり、豆腐の如く固りたるを金杓子にて掻き取り、葛あんかけにてもよし、又其時の野菜を取合せて椀盛にもするなり。

△茶椀むし　鶏卵を解きよく掻き交ぜ、鰹魚節の煮汁と味淋醤油とを加へ、茶椀に入れ、蒸籠に掛けてむすなり、茶椀程には魚、鳥、銀杏、木耳、芹、三葉等を入れてよし、

△鶏卵豆腐　鶏卵をよく解き、かきまはし、鰹節の煮汁に味淋醤油を合せたるを玉子の半分程に入れ、尚ほ十分にかき廻はして丼に盛り、蒸籠にて蒸し上るなり。

△ふきよせ　鶏卵を茹で黄味と白味を分け、裏越しにかけ、先づ白味を箱に詰め其上に黄味を詰め、さつと押を掛けて蒸籠に入れ蒸すなり。

△きみ酢　鶏卵を茹で黄味ばかりを裏越にして、酢に少しの鹽とを入れざつと煎り、鯛か海老又さより、きす、甘鯛など當坐酢の魚を仕立る如くにして箱に入

れて押すなり。

△たまご田楽　二寸廻りの竹筒を四寸位に切り、底に節をつけて筒の中をよく洗ひ、鶏卵三粒を割りて黄味の解けぬ様にして筒に入れ、厚紙にて筒の口を包み、縛りて湯に入れ煮堅にして引揚げ、水に冷し筒の節の方より割りて取り出し、よき程に切りて竹串にさし、すこし火に掛け山葵味噌か山椒味噌を引くなり。

△泡雪たまご　鶏卵二三粒の白味ばかりを鉢に取り、茶せんにて掻き廻し、泡立ちしを鰹節の煮汁に味淋と醤油を加へ、十分に煮立たる中へ杓子にかけて一とすくひづゝ別々に入れ、少時にしてかたまりたるを椀に盛るべし、なほ海苔、春菊の芽など取合せて宜し。

△琥珀たまご　鶏卵の白味と黄味とを掬ひ分け、まづ白味を箱に入れ、蒸籠を少し斜めにして蒸し、又黄味の方へは寒天の煮汁を少し加へて、白味の蒸し上りたる時、其上へ黄味を流して蒸す。

△ポーチド、エッグ　これは西洋料理なり焼パンの上に玉子を置くもの。廣き鍋に湯を沸かし、小皿に玉子を割り落し静かに砕けざる様注意して沸湯中へ移し入れ、三分間程煮るべし、別に薄く切りたるパンを黄色に焼き、之れを皿内に乗せ其上に先の玉子を砕けぬ様注意して取出し乗せ置くなり。

△カスタード　これは西洋の豆腐なり原料は玉子五個(黄。白別に解き)砂糖五大サジ、牛乳三杯半、ナットメッグ一小サジ、右共に能く交ぜて深き鉢に入れ、弱き火加減のヲーブンに入れて固めしむるなり、冷して食す、之を小さき茶碗數個に入れて焼くもよろし、これをカップ、カスタートと云ふ。

△スクランブルト、エッグ　少量のバターを鍋に投じて解かし、玉子三個を落し入れ、牛乳半杯交へて上下へ掻き廻し、餘り固くならぬ中に取り出して供す、鍋中にて鹽胡椒を入るべし。

△オムレッツ　原料は玉子六個(黄。白別に解き)牛乳三大サジ鹽幷に胡椒フライ鍋に多量のバターを敷きて熱し置き、玉子の黄味に牛乳、鹽、胡椒を交へ、

終りに能く解きた白味の泡を靜かに混じ、直に用意の鍋へ移し込むべし、熱するに隨ひ三四倍に膨脹すべし、既に上下固まりたる頃薄き小刀にて玉子と鍋の間を靜かに別たしめ、中央より二つに折り、碎けぬ樣注意して皿に入るべし、このヲムレツは出來ると同時に食すべし、冷へれは縮みて美味を失ふ。

△肉入ヲムレツ　方法は前同樣なれども、玉子を其半量用ひ、肉を包む皮の如くになすなり、中へは左の物を入る。牛肉又は鷄肉及「ハム」の何れにても細かく切りたるものと、葱を細末にしたるものを交へて、油にて揚げ、用意の「ヲムレツ」の上一面に乘せ折り込むなり。

△スープ用エッグボール　固く煮たる卵の黃味に鹽胡椒と少量のバターを交へ、粒の出來ざる樣注意すべし、次に玉子二個を能く解きて之に交ふ、其中に粉を手にて能く捏ね得る程入れ、小さき玉に作り、用意の「スープ」中へ投じ一分間煮て用ふ。

良人の愛を保つ方法　別欄に記載せし跡見玉枝女史が今回米國から持歸られたる新刊物の中に「婦人が人の妻となりて、良人の愛を永く保つ法」と題する、佛國某伯爵夫人の起草したものと云ふのを見るに、其個條は凡そ十四にして、中には日本の婦人としては、是を學んで果して良きか惡しきかは、一考を要すべきものなれど、兎に角一寸面白ければこゝに掲げん。

▲怜悧なる愛▲女らしき從順▲高尙なる趣味▲優麗なる態度▲意志感情の表示▲愉快なる態度▲道理に合はざる無邪氣の行爲▲外交▲じらして高くとまる動作▲禮儀に習ふこと▲苛酷殘忍のそぶりある可らず▲化粧身だしなみ▲言語の上手▲巫山戯方の上手

（二六新聞）

▲衛生顧問▼

（質問心得と答者の希望）（一）變名は可成異樣な名を用ゐられたし、何となれば「女學世界愛讀者」とか或は「一少女」とかいふ名は餘り多くて紛らはしいからである。（二）質問の文章は詳しく書かれたし。（三）文字は楷書にて認められたし。（四）男子生殖器に關する病は答へず。（五）猥褻の嫌ひあるものは答へず。（六）今月五日までの分を翌月の誌上に答へ、其の後の分は翌々月の誌上に載すること〻心得られたし。（七）衛生以外に渉る者及び到底行はれぬ事柄は答へず例へば學資金無くして勉強する方法とか或は長き顏を短くする仕方などの如し。（八）質問は葉書或は封書にて左記の箇所へ當てられたし。東京市本郷區森川町一番地表北裏入十一號糸左近。（九）藥品購入の周旋は答者斷然なさず、例へば爲替金を以て何藥を送つてくれとあつても一切斷るが如し、中には無法にも紙幣を封入して是非何藥を送つてくれといふのがある、答者の迷惑一方ならず、若し其地にて買求むることの出來ぬ藥品等は左記の箇所へ往復葉書を以て其の代價等を問合せ然る後代金を送り依賴せられたし。東京市本郷區森川町一番地加藤順天堂藥舗。（十）質問は一回三問以下と心得られたし、先日も一人で七十五問を列記したる封書を送られたのがある、其の熱心は感ずべきも可成多數の人に答へねば不公平になる傾きがあるから三問だけを答へました。右の外顧問の答を實行して功能のあつた方は御報告ありたし。答者は如何に嬉しいでせう。

（トラホームの療法）（問）私は多年慢性トラホームにて困つてゐます、色々の賣藥を試みますが何の功もありませぬ、醫療を請はんにも夫は出征中なれば其の謝金を得る道無し、出征軍人の家族は施療云々と村役場からも申さる〻けれど、それに從うて請へば、竹庵先生恩に着せた振舞、內職せんにも眼病、あはれ糸先生よ一時的の療法なりとも敎へ賜はれよ。

（紀の國の團體女外二十三人）

(答)烈風劇光に逢はぬやう注意し、常に藍色の眼鏡を掛け、清潔を専とし、左の藥を用ゐて御覧なさい、
硼酸(二、〇)を温湯(一〇〇、〇)程半合に溶かし、消毒綿を以て眼の縁を一日五六回も洗ひ、
皓礬(〇、〇二)を蒸餾水(一〇、〇)に溶かし、右一日四五回も點眼しなさい。さうして便秘の時は
硫酸苦土(一五、〇)稀鹽酸(一、〇)白糖(適宜)を温湯(百瓦)に溶かし、一日三回に分けて服むべし
併し右は矢張一時的の療法で、根治するには醫師自ら其の患者に接して手術を施さねばなりませぬ、若し右藥品等を買求るの餘裕無き方は、其の役場の證明を得て申込まるれば、博文館主喜んで慈善の道を盡さるゝとのことであります。

毒疹の療法 (問)私は百姓の娘でありますが、時々里芋を洗はねばなりませぬ、洗ひますと兩手は眞赤に炎症を發して、いごくて堪りませぬ、板の樣なもので洗はうとすれば、繼母は「お姫樣ぢやあるまいし」と叱ります、何卒御同情を垂れ玉うて、これを治す法を敎へられたし。(能登の貧女)

(答)酒を以て洗ひ然る後依的兒といふ藥を塗つて御覧なさい。

(問)漆にかぶれた時は如何したら治りませうか、御敎授を乞ふ。(石野の娘)

(答)撒里失爾酸軟膏或は石炭酸軟膏を塗擦し、其の上水を以て冷すが宜し。

(問)沃度仿謨にかぶれた時は如何なる處置をしたら宜しいでせうか。(藪醫の妻)

(答)亞鉛華軟膏を塗擦すれば治ること受合なり。

白禿風の療法 (問)私の長男十二歳は頭髮の間に白い粉の樣なものが出來ます、お醫者は之をばしらくもだと色々療治して下さいますが二三年以來治りませぬ、何か名法ありますまいか。(越後の某母)

(答)果して白禿風ならばイヒチオール(一〇、〇)と水製大黄丁幾一〇〇、〇とを混ぜて一日に五六回塗れば大抵功あります。

癜風の退治法(問)なまづとは如何なるものでありませうか、併せて其の治療法を問ふ。(鼓膚女外十四人)

(答)これには白癜風と赤癜風との二種あるが、何れも始めは小點皮膚に生じ、次第に周圍に蔓こり、後には腹腰或は全身を被ふことがある、其の原因身躰の薄弱なために出來るのは内服藥を用ゐねばならぬが、原因の不明なのは左の藥を用ゐて御覽なさい。

ゴーア末(二〇、〇)と醋(一合半)とを能く混合ぜて一日五六回も塗るが可い。若しこれにて効無くば撒里矢爾酸(五、〇)アルコール(一〇、〇)僞里設林(八、〇)よく混ぜて一日數回塗布すべし。

鷄眼の療法(問)「魚の目」だらうと思ひますが足の背に硬い物が出來壓せば痛みを感じます、原因は何でせうか、及び療法を敎へ賜はれ。(紫式部の末孫外七人)

(答)原因は靴或は其他の摩擦壓迫などの爲に發するもので、療法は石炭酸水を以て其の鷄眼を能く洗ひ、然る後能く利れる挾刀を以て剪り取り、左の藥を塗り、繃帶しておくが宜し。

撒里矢爾酸(二、〇)と格魯胃謨(一〇、〇)とを混ぜ塗布すべし。

黑痣の療法(問)糸先生の「顏の話」に黑痣の療法を書いてありましたが、今少し單簡なる方法を敎へ下さらば有難き仕合に存じます。(神田の我儘女外十二人)

(答)格魯兒石灰(〇、一)と醋酸(十瓦)とを混ぜて、これを少し宛、其部のみに塗布すべし。

赤き顏に就いて(問)白い顏にほんのりと櫻色を呈はしてゐるのならば嘸や美くしいでせうが私の顏は李の實の熟したやうな色で、鏡に向へば我身ながら愛想が盡きます、これでも未來の夫があらうかと思へば漫に悲しう御座います、殊に冬になると甚しくほてつて困ります、あはれ李を櫻になすよしもかな。(赤顏姬外百三十六名)

(答)近頃此の質問は非常に多くあります、そこで此の赤顏孃の美しい文章を愛でゝ詳しく答へませう。頰の少し赤いのは誰にでもあることとて殊に女子の生來でありますが、されど特別に赤いのは病的であつて、其の原

因は多血性の人、逆上性の者及び子宮病、月經不順、其他の生殖器病、寒風に吹かるゝ事、刺戟性の食物例へば唐辛、酢、酒類を食る事、腸加太兒、精神激勵などである。故にその療法は其の原因に依つて異なるのである。兎に角何れにしても便秘の無きやう常に注意してをらねばならぬ、若し便秘のある場合にはリチネ油(十五瓦)を濃い茶の上に浮べて頓服するが可し。子宮病及び其他の生殖器病ある方は其病を治せば從つて赤き色も褪むるものである。月經に異常のある人は日本藥局法の蘆薈葯刺巴丸を二粒宛一日三回食前毎に服むべし、但しこれは月經のあるべき一週間前頃から始め月經を見たら止め、その翌月またその通りなすのである、生來多血性の人は法列兒水(一瓶)林檎鐵丁幾(三瓦)水百瓦を一日三回食後々々に分けて服むがよし。併しこの法列兒水は毒藥であつて漸次に增量せねば功の無いものであるから、醫師の診察を請はねば危險である。すべて刺戟性の食物は斷然止めて精神を安靜に養ふことが肝要である。全體顏の赤きと蒼白きと何れが宜いかと言へば赤い方は强健に屬するのであるから、左程著るしいので無い限りは心配の無いものである、殊に娘時代に赤くても嫁いてから一度の分娩あれば大抵褪めるものである。

赤くとも左な悲みそ李子よ
嵐に散れる花といづれぞ

(藥品の質問)(問)蘆薈葯刺巴丸を買求に行きましたら蘆薈と葯刺巴との分量が分らぬから賣れぬと藥屋が申します。何卒その用量を敎へて頂きたい。(富山市愛讀の女)

(答)日本藥局法の蘆薈葯刺巴丸と申されたら分らぬことはありませぬ、內務省からこの丸藥一粒には蘆薈何程葯刺巴丸幾個と規定してあるのでありますから。

(問)醫者の方は賣藥は功の無いものゝやうに申されますが賣藥とても同じく藥でせう、若し功の無いものならば政府は何で許可いたしませうか、私はそれが不思議でなりませぬ、何うか私の腑に落るやう御說明を願ひたし。([illegible]屋の女房)

(答)無功と斷定する醫師は極端論者であります、併し從來有觸の賣藥は毒にも藥にもならぬやうなのが多いけれど、政府は既得權であるから害にならぬ限りは其の儘にしておくのであります、現今は餘程世が文明に進んで來ましたから功能の疑はしいものは許可もいたしませず、又願ふ者も少なくなりましたから、最新の賣藥は仲々侮られぬのがあるけれど、賣藥者の癖として萬病に功ある如く廣告するは必ず良心を欺むいてゐるに違ひありませぬ、我れ嘗て或る藥店主に對つて或る胃病藥の廣告の誇大なることを笑つたら、店主も亦笑つて、されぱて御座る、胃が强くなれば食物が消化しませう、食物の消化宜ければ血が多くなりませう、血が多くなれば心臟病にも功がありませう、心臟が强くなれば從つて肺臟にも宜しいでせう、肺臟心臟胃の腑が强くなれば腦も亦達者になりませう、此の樣に胃より腸、腸より肝、肝より腎、腎より膵と推し及ぼせば萬病に功あるのでありますと、まづ賣藥の功能皆は大抵この樣なものでせうからなア。

〔血の道病に就いて〕(問)婦人血の道とは如何なる病氣でありませうか、詳しく御說明をして頂きたい。(京橋の醫々女)

(答)私も醫者でありながら、實は能く知りませぬが、併し察するに、種々の病を含んでゐる廣い病名でありませう、即ち歇私的里病、月經に關する病、子宮内膜炎、子宮實質炎及び産前産後の故障などを一纏めにした名の樣に考へられます。

〔歇私的里病の病狀治療〕(問)歇私的里病とは何の樣な病でありませうか。(大阪の阿波女外十一人)

(答)嘗て「一日醫者」の欄に詳しく述べましたが、今更に其の大要を申せは、十五歲以上の婦人に多い病で、これに罹ると精神驚き易く、僻み易く、何と無く欝々し、人と話しすることも厭になり、一室に閉ぢ籠つて泣いてゐる方が却つて氣の晴れる樣に思はれ、鈍い頭痛がし、或は食欲大いに減り、聽臭味の感覺が過敏となり、或は喉咽に何か支へてゐるやうな氣がして、飲ん食物の嚥下困難となり、或は嘔氣を催すやうなことも

ある、さうして己れの病氣を他人が重く言へば氣に入り、輕く慰みくるゝと却つて氣に入らぬものである。

(問)私は多年歇私的里病で苦んでゐまして、種々醫療も受けますが治りませぬ、一層のこと死なうかとまで詔らめますが二人の兒に愛が殘り、今一度健康な身になつて見たう御座います、其の療法敎へ賜はりたし。(三十九歳妻外五十三名)

(答)頓とても無い心を發し玉ふな、「三十九ぢやもの花ぢやもの」と申す諺もあれば折角療治して「御前百まで、わしや九十九まで」と樂しみ玉へ、まづ消化のし易い食物を取り、可成運動をなして欝憂の氣を散し、精神感動を避け、何の世の中は絲瓜かなといふ心になり、山水花木でも眺めたり、音樂でも奏でたり、氣に合つた友逹と遊び、無邪氣に日を送り玉へ、芝居や小說の如き涙の種となるものは當分の中見てはなりませぬ、其の他溫浴或は冷浴を以て身體を淸潔にせねばなりませぬ、藥品としては、

纈草丁幾(四、〇)阿魏丁幾(四、〇)苦丁(一、五) 砂糖(適宜) 水(一〇〇、〇)一日三回分服、或は又
臭素加里(三、〇)舍糖百弗聖(三、〇) 砂糖 (適宜)
水(一〇〇、〇)一日三回分服も可い

右何れにしても十日間程續けて服み、又十日も休み、又服み、又休み、繰り返して御覽なさい、便の結する時は人工加兒々斯泉鹽(五、〇)を每朝三勺程の水に溶して通じのあるまで續くるが可い、併し該藥は味が惡いから服んだ後冷水を以て含嗽をなし菓子でもお食りなさい。

訥と音調とに就いて

(問)訥を全治する良法ありますまいか、あらば是非々々二月の誌上に載せて頂きたい。(早々女外三名)

(答)訥を治すは心理學者の役で普通の醫師には甚だ困難である、今心理療法の大要を言へば斯うです、まづ大凡三ヶ月程の間無言法を實行せしめ、(輕症にも依るが)可成熟眠せしむる樣に導き、心を悠々寛大になるやう敎育し、風流閑雅な道を樂ませ、四ヶ月目位から術者或は他の朋友と、極めて平易な談話を、極めて單簡になさ

しむることから始め、さうして他人より話しかけられた場合は熟考してから返答せしむる習慣を養成することが肝要である、其他唱歌、誦讀美文の如きものなどの稽古も効あるとのことである。

(問)音聲を宜くする法ありますまいか、私も恰も蛙の樣な聲で答辭など讀む時は愧かしくて堪りませぬ、迦陵頻伽とまでまゐらずとも、責めては普通の聲になる方法を敎へて下さい。(丹後の惡聲女外二名)

(答)肺病とか氣管支加太兒とか或は聲帶痲痺とかの病氣の爲になつたのならば治療もありますが、生來濁聲なのは病的で無いから私は知りませぬ、されど性質無骨な人が熟練に依つては極めて巧みに指を動かして琴三絃を彈く所を見れば聲音も亦斯道の人に就いて稽古せられたら頻伽の聲は出ずとも　鶯　の音位になられませう。

(問)蚯蚓を煎じたる汁を服めば聲が宜しくなるさうてすが、本當てせうか。(飛驒の一位女)

(答)噓です。

(問)吃者は聲帶に何か異常のあるものでせうか或は一種の不具でありますか。(羽前の月山女)

(答)すべて普通人と異りませぬ。

(男女兒を任意に産む事に就いて)(問)私は當年三十歳になりますが女兒のみ五人産みました、男子をもつ方法ありますまいか。(男兒うみ度女外四名)

(答)嘗てもこの顧問欄て述べた通り醫道てはありませぬ、漢法の醫書には「男の氣勝てば男を産み女の氣勝てば女を産むものなり」とありますが、此の氣といふことが漠然としてゐて私には解せられませぬ、されば或る動物學博士の面白い議論の大要を御參考に供へませう、博士曰く「受胎の初めは男女の性無きものである、然るに受胎してより完全に發育すればこゝに男子となり、柔弱不完全に發育すれば女兒となる、この道理より推せば受胎の前後に於て夫は心身を強盛に養ひ、妻は心身を柔弱に即ち滋養物不足運動欠乏といふやうにして居れば從つて男兒を姙娠せらるゝものてある」と、果して然るや否や余は保證せず。

「腸加太兒」(問)本年明けて五歳の男兒不消化なる食物
「の治療法」を原形の儘下痢致しまして全躰の發育不十分であります治療法を詳しく御教示を乞ふ。
(伊賀越中の愛讀女外七名)

(答)毎日温浴をさせて身躰を清潔にし、當分の中固形物の食品を斷然禁じ牛乳、卵黄の生、水飴、粥湯等の如き流動躰の食料を與へ、腹部を温め冷飲を避け、殊にソップの如き脂肪に富んだる物は必ず僅かたりとも與へてはなりませぬ、藥品としては

硝蒼(〇、五)を一日五六回與ふべし

(注意)大人ならば硝蒼の量一回二瓦以上一日十五も與ふべし、然るにこの硝蒼は高價藥である所から普通醫師は少量を與ふるために何等の功を奏せずに終る、地獄の沙汰も金次第とは嘆ずべきの至りである。

「毛は〜藥」(問)私の眉毛が薄いものですから、或る醫
「に就いて」者に相談しましたら、芫菁丁幾を塗れとのことで早速試めせば水胞が出來、その跡が紅くなり、四五日經つと治つたれば、却つて以前よりも毛が薄くなりました、腹が立つやら、悔しいやら堪りませぬから、其の醫者に談判すれば、その刺戟の爲に將來に生へるだらうとの不得要領、果してさうでせうか、心配になりますゆゑ、特別の御情を以て早く教へ賜はれ。
(北海道の薄眉女)

(答)滑稽な問の樣にあるけれど、其の實は往々ある例です、成程芫菁丁幾は毛根を刺戟して其の發生を促すには相違無いが、單純に該藥のみを用ゐては、刺戟が強過るために却へて不結果を來します、故に眉などにあつては酒精を十倍以上混ぜて氣長に塗けをれば多少の功あります、其他の部に於てはこれより少し濃くても差支ありませぬ。又十倍の酒精を混ぜても水胞が出來たら倘二十倍三十倍と稀薄にするが宜いです。

「皮膚病に」(問)にきび、そばかす、なまづなどの一切
「就いて」の皮膚病に通じて善い藥は無いものでせうか。(京都の十分嬢)

(答)有りませぬ、が併し左の藥などは比較的多くの皮膚病に用ゐられます

苛性加里(一、〇)屈利設林(三〇、〇)酒精(五〇、〇)
水百瓦　右一日二三回塗布すればにきび、しもやけ、

赤ぎれなど色々の皮膚病に功がある。

(問)田むしの療法を教へて下さい。(再伺女外十二人)

(答)矢張石藥を塗けて試て効無くば二千倍の昇汞水を塗布すべし。

藥の重量に就いて(問)(一、〇)とは我國の何匁に相當いたしますが、これに關することども詳しく御教示を乞ふ。(信濃の諸拾てず女外五名)

(答)(一、〇)即ち一瓦は我が國の二分六厘六毛六六……て(一〇、〇)は二匁六分六厘六六……(〇、一)は一瓦の十分の一即ち二厘六毛六六……であるから瓦量に十五分ノ四を乘ずれば我國の量なりと知るべし、例へば十五瓦(一五、〇)は何匁に相當するかを計算するには $15\times\frac{4}{15}=4$ 四瓦なるが如し。

(問)壹グレーン即ち一瓦は何匁に相當いたしますか。(讃岐の次三郎妹)

(答)一瓦は一瓦の百分の六即ち我國の一厘六毛に當ります。

鐵啞鈴に就いて(問)サンダー體力養成法は鐵啞鈴を使用することに候や。(名古屋の七寶屋)

(答)然り。

(問)鐵啞鈴を買求に參りました所其の重量に色々ありますが何れより用ゐて宜しくありませうか、詳しく御說明を乞ふ。(大阪のイチダー女外四名)

(答)其人の體質年齡體力等に依つて相違がありますから、何磅より御始めあれと一定することは到底出來ませぬ、が併し大凡の標準を言へば、色々の重量を持ちそれを振つて試てこれならば左程重く無い十分振れるだらうと思はれるのを撰んで、それを買ひ來り幾月も使用して輕きを覺ゆるやうになつたら又其上の重量を求め次第に斯の如くして、遂に梅ケ谷常陸山何のそのといふやうにおなり遊ばせ。

(問)鐵啞鈴を使用せば體力を養成せられんもデブデブ肥えて角力取然とした醜い女になりますまいか。(東京のためらふ女)

(答)然らず、醜き姿も直り、堂々と大家の奥樣らしく

なります。

(問)鐵啞鈴を使用すれば强壯になるとのことで先月から始めましたが、早朝に行つは成程朝御飯も旨しく食べられる代りに、學校に行きて講義を聽きますと睡氣を催して堪りませぬし、學校から歸宅して始めますと疲れて少しの復習も出來ぬやうになります、勉强中は止めたら宜しいでせうか。(AB女學生)

(答)臨臥にお行りなさい、例へば午後十時に就寢する人なら九時頃より一二三四と始めるが宜いです。

雜問一束

(問)蓚酸と單寧酸と同一の藥に候也(母なき娘)

(答)然り。

(問)授乳は一定の時に限るものでせうか、果して然らば生れて二ケ月の小兒に何回何時頃に與へて宜しく候や(病蓐の廿一歲母)

(答)これに就いて色々の時を定めたり或は回數を限る醫者もありますが私の說は回數も時も定むる必要は無いと思ひます、即ち乳房充實俗に申すちゝのはる時や小兒の求むる時はこれ天がその母に授乳の時を告げて下さるのである、されど小兒の泣くは必ずしも乳汁を求むるばかりでは無い、其の鑑定は愛といふ眼鏡をかければ自然に分りませう、小兒の求むる時はちゝがはつてゐるし、ちゝがはつて來ると小兒が求むるとは嗚呼天なる哉天。

(問)病者看護法の大要を二月の誌上にて御答へ下されたし。(SH女)

(答)大要を述ぶるにしても數頁を書かねばなりませぬから、又の日に詳しく說きませう、兎に角病者といふものは年齡智識の如何に拘らず小兒の樣なものであるから看護の任に當る人は我儘言はれても怒らず、さりとて求むる儘にも應ぜられず、唯無邪氣なる我が最愛の幼兒と心得られたし、これ看護の秘訣たり嗚呼看護の秘傳なり。

(問)鯛と牛肉と何れを滋養物とし食して宜しきや。(若狹の愛讀者)

(答)何れも滋養品なれば何れもお食りなさい、若し躰質薄弱なる病的の方ならば鯛の方がよし。

(問)鯉の味噌汁は乳汁の分泌を促がすとは眞理のあることに候や(妊娠中の母)

(答)然り、然れども鯉に限らず、すべて肉羹汁及び魚の味噌汁などは大いに宜し。

(問)其親に胃癌病あれば必ず其子に遺傳するものに候や又その豫防法を敎へられよ。(一讀者の妻)

(答)必ずといふことはありませぬ、遺傳に就いては未だ精確な議論も定まつてゐませぬ、別に豫防法といふ規則も知りませぬが、茶烟草酒類を貪らぬやうにするが肝要であると某博士は說いてをらる。

［讀者の不平］(問)私は髪毛を濃くする方法に就いて二度伺ひますが未だ載せて下さいませぬ、私に限り何ぜお惡になるのでせうか。(越前の薄毛女)

(答)一度も逢つたことの無い御方に愛憎のある譯はありませぬ、係質問書は今では一ヶ月に二千餘通に及びます、これを一々載せたら一冊悉く衛生顧問で埋めねばなりませぬ、そこで髪毛、子宮内膜炎、月經に關することなどは屢々載せましたから、今は可成異種類なのを撰んで、前者は又月日を經て述ぶる考へであります、それゆゑ貴女に限らず答の無き方は後日を御待ち下さい。

［讀者の喜び］(問)私は月經不順で本誌の顧問欄に從ひ蘆薈葯刺巴丸を月經時に先つこと一週間前から始めますと快よくあるやうになりました、今後毎月この樣にしても害なきものでせうか(大隅の不順女)

(答)害ありませぬ。

(問)生來胃癌でその發る度毎にお醫者はモルヒネの皮下注射をして下さいましたが二三日の間はモルヒネの中毒でせう、心持惡くて堪りませぬでした、然るに糸先生の敎へに從ひその痛みの發る時日本酒一盃或は二盃を飮みますと治るのみならず少しも後害がありませぬ、何うぞ先生何の御禮も出來ませぬから、後日御遊歷の節は御宿を致して山水の御馳走を致しませう。(瀨戸内海の啞女)

(答)多謝々々。

感冒の要愼

▲咳嗽の注意　感冒に就ての病理は古來未だ一定して居らぬから、何う云ふ藥が適當であるかと云ふのは醫者にも分らない、併し熱があるとか、咳嗽が出るとかすれば夫れ丈の手當はする、感冒の爲めに冒され易いのは氣管支、喉頭、鼻腔、眼などで氣管支や喉頭を冒すと咳嗽が出る、鼻腔だと涕が出るし、眼だと頻りに涙が出る、其内に咳嗽が一番危險だ、殊に小兒と老人の咳嗽は最も注意しなければならぬが小兒の氣管支カタル及び毛細氣管支カタルは往々生命に危險を及ぼす事がある、夫れから咳嗽て熱が烈しいのは普通の感冒でなく流行性感冒や猩紅熱の如き傳染病に感冒して居る事があるから咳嗽位と思つて油斷してはなりません

▲咳嗽の手當　咳嗽の出るのは實に苦しいもので素人の手當法は別にないが吸入器の備へてある家庭では醫師の指圖を受けた藥を吸入するのが簡便て宜い、左もなくば醫師を招ねいて應急の注射より外に無い、氣管支カタルにも乾性氣管支カタルと濕性氣管支カタルとあつて乾性とは俗に云ふ空咳嗽、濕性とは痰が出るが乾性の氣管支カタルには日の當た空氣の乾燥した室は宜しくなくつて咳嗽が多く出易い、濕性は夫れと反對で空氣の乾燥した室が宜しい

▲感冒の危險　感冒は咳嗽を醸す計りてはない實に萬病の基だから感冒の氣味で一週間も續いて癒りもせず惡くもあらずブラ〳〵して居るようなら直に醫師の診察を仰ぐが宜い、感冒は他病の初期の徴候に似て居て醫師すら往々危險なる傳染病と誤診する事がある、例へば輕症な腸窒扶斯或は肺結核の初期は感冒と能く似て居る、又流行性感冒となり易く之れが爲めには大人も死亡する事あるし小兒は猶更危險てある

▲感冒の藥　輕症の感冒には別に藥は服ない、溫かにして冷ぬやうに熱い湯でも呑んで寢て居れば癒る、接骨木花やカミツレー又葛湯などは至極宜しい、坊間で賣る風藥などに適藥はないが、多くは熱湯で振出して

飲むから夫れが即ち感冒に利くので熱い白湯を飲むのと違ひはない

齒の衛生法

▲齒の性質　齒の保全を話す前に、順序として齒の性質を一應述べておかねばならぬ元來齒は、象牙質、琺瑯質、白堊質及び齒髓から成り立つて居る、象牙質は齒の軀部を爲して居て、極めて鋭敏なる感覺をもつて居る、琺瑯質は口内に現はれて居る冠部を蔽ふて居る陶器のやうなもので、非常に硬きもので、常に齒冠部の保護をして居る、白堊質は齒根を被つて、齒根内に伏在して居るもので、齒の根を固めて居る、齒髓は軟かな肉の如きもので、血管や神經を司つて齒の内部にあるものや、齒が腐蝕すると、痛痒を感ずるものである、此の四要素から齒は成立して居るので、若し之を完全にすることの出來ぬときは、物を嚙み碎く力が完全でない、隨つて消化器に影響を及ぼすので、之を保全するのが、衛生上最大急務である

▲齒の發育　齒は小兒が生れてから七個月頃より、下顎の方へ二本、次に上顎へ二本、次に下顎、又次が上顎といふように、順よく生えて來て、滿二歳か三歳になると、上下ともに十個づゝ、總體で二十本揃ふが、之を乳齒といつて、齒根が變るやうに出來て居る、故に永久齒が生えるやうになると、次第に拔け落ちるのである、永久齒は年齡の長ずるに從つて、次第に生えて來るので、總數二十八枚、それに智齒即ち親不知齒といふのが左右上下一枚づゝ都合四枚出來て三十二枚になる、乳齒が拔けて永久齒が生え、次第に完全な齒となるのであるが、これは全く生理的作用である、而してこの永久齒は一度拔けると、もう次には生へない、即ち永久拔け變はることがないから、之を保全するのが必要である

▲齒の異狀　元來乳齒は時機が來れば拔け落ち、永久齒と入れ變はるのであるが、時としては時機が來ても乳齒は拔けず、さりとて永久齒は發生して來るのであるから、中止することが出來ぬ、已むを得ず、乳齒の

側へ發生するやうになる、これは生理上一種の異狀であるから、此の如き事のないやうに、永久齒發生の時機には乳齒を拔き去らねばならぬ、又永久齒が發生しない、即ち交代時機の來ぬ前に、早くも乳齒の拔け落ちることがある、これも一の異狀である殊に時機に先だつて拔け落ちるときは、後日亂杭齒となる本であるから、よく注意をせねばならぬ

▲蟲齒の原因　齒の力を弱らす大なる原因は、多くは蟲齒によるので、蟲齒のために齒は腐飾するから、消化器を害するのである、さて蟲齒の發生する原因は元來口の中にはいろ〳〵の黴菌が集つて居て、齒の間や、溝の處に殘されて居る食片を食つて發育する、これがまた同類を生み、一の化學的作用を起して、滑かな薄い、膠のやうな膜をば、齒の面上に造り、これがために齒は腐飾するのである

▲蟲齒の時機　蟲齒は齒の構造には依らず口中の狀態によるので齒の弱いと強いとの關係でないから、豫防を怠ッてはならぬたゞ最もこの患に罹り易い時機があるので、即ち八九歳から、十四五歳までが男女ともに罹り易いのである、故に小兒の頃から、よく〳〵この豫防を講じなければならぬので

▲小兒の蟲齒　蟲齒は小兒のみではない、大人になつても罹るものである、併し年少者の蟲齒は、大人のに比ぶると腐蝕し易い、故に小兒の時からして、この豫防をするのが父母の義務である、まづ小兒生れて七八個月も經れば、乳齒が生へる、この齒を健全にして、永久齒と交代するまで、物を嚙み碎く便利を與へねばならぬ、然らざれば、いとゞ軟なる小兒の胃は、これがために害されて仕舞ふ、隨つて小兒の發達を害し、終には、救ふべからざるに至るであらう、そこで之をよく保護して、永久齒の生へるまで健全にしてやつたなら、顎も從つて發育するから、永久齒の發生する餘地が十分になる、ために亂杭齒などの生ずる心配はなくなるのである、て蟲齒の發生せぬ豫防は小兒が飮食した後に直く口中を掃除してやらねばならぬ、

嬰兒の衛生

▲吸入の注意　此頃一般に子供に咳が出ると吸入をさせる事が流行つて來たが、是れは好いことてある。併しこれも素人が只水の中へ鹽を入れて、鹽水て吸入をすると云ふ樣なことは餘程危險て、却つて咽喉を刺戟して惡るくする事があるから、子供の吸入は必ず醫者に相談してからてなければ、いかぬ

▲寒中の外出　寒く成ると呼吸器病を小供が起すから注意せんければ成らぬが、老人などは、夫れを注意すると、何でも餘計着せさへすれば宜いと思つて、夜具の樣な厚い衣服を着て背負つたり何かして戸外へ出る人があるが、成る程斯うしたら身體は温かいてせうが、口か開いて居るから何の役にも立たない、いくら身體ばかり温めても肝腎な口が開いて居つて戸外へ出ては矢張り同じ事てあるから、成り丈け極寒の頃戸外に小供を連れて出る時には冷めたい空氣の直かに口に這入らぬ樣に注意するが宜しい

▲眼の消毒　初生兒に在る病氣ですが膿漏と云つて、生れて四五日目から眼から膿が出て遂ひに失明して了ふ事がある。これは生れだての病氣であるから餘程注意せなければ成らぬ。是迄生兒の膿漏で盲目になつた者は百人の中に八十人と云ふ位に多かつた。所が段々産科が開けて來て産の前には能く消毒しまして、生れると、消毒藥の硝酸銀とか、昇汞水とかを小供の眼に注すと夫を防ぐことが出來て、極く結構な事である。

▲襁褓の材料　大抵中流以下の所では、浴衣の古いのや單衣の古いのや單衣の古いの、又は役に立たぬ襤褸があると取つて置いて、これを使ひますが、誠に危險な事である何しろ肌に直接に觸れるものであるから、若しも病根でも附着して居ると、直ぐに感染するから、若しも古い物を使ふなら、必ず消毒して使はんといけない

▲種痘の注意　種痘と云ふ事は結構なことてあるが。併し其種え方又は種等を撰びませんと大變な事が起る、又種える時機も注意しなければ成らぬ。東京では

種苗製造所と云ふものが出來て安心すべき痘苗が出來ましたが、地方に參ると子供に種えて其子供から種を採ることが往々ある若し其種を採る所の小供に惡るい病氣でもあると、夫れが皆其種えた小供に傳染して行くから、夫れて種痘をすると他の病氣が發ると云ふ事を申す樣に成りましたが、之れは決して種さへ善ければ餘病を發すると云ふ樣な事は無い　（某博士談片）

故河村伯の家庭意見

皇孫殿下御養育主任として久しく保育の大任にあられた、故河村老伯が家庭意見の一說に「人物を作るのは男よりも女の手を煩はす方が多い、即ち父親より母親の感化を受くるのが多い其の例は古來甚だ尠からぬ事てある、して見ると其母となる婦女子の教育法の大切なることは言ふ迄もない事て、身躰の如きは最も注意を要する。之を動物に譬へて言へば先づ馬の如きは、如何ほど良い西洋種のものでも、良い牝馬てないと決して名馬は出來ぬ。犬でも矢張馬と同じて、母親次第て怜悧にも生れ鈍にも產れる。とすると人間とても胎內の養ひ一つて賢くもなり馬鹿にもなる道理て、胎內十月の間に飲む乳が十分てないと、健康て且つ怜悧な人間を分娩するとは迚も難しい。

我邦では、近頃學課漸く殖え來つて、どうも勉强と躰力とが相伴はぬと見え、陸海軍の學校を卒業して、少尉になるやならずに、忽ち肺病に罹るのが極めて多い。此等は大に考ふべき事てあらうと思ふ。丁度明治十四五年の頃てあつたが、遠洋航海に出た水兵が、殘らず脚氣を病み出したが、脚氣の傳染は不思議てあると云ふので段々病源を取調べて見たところ、勞働と食料とが一致しないからだと云ふ事を發見したから、高木と相談をして食物の改良をした事があるが、今ては脚氣患者は皆無といふ姿てある。陸軍ても今日は餘程食物に氣を着けて改良を加へたやうてある。

學校以外に教師を自宅へ抱へ、又は通はせるのは一得一失て、恁うすれば子供の方で安心をして學校の勉强に油斷が出て、怠け魂情がつきやすいから却つて不得

策である。矢張學校ばかりの方が宜からうと思ふ。佛國英國人は子供を教育するのに佛國人を傭ひ入れ、佛國人は英國人を傭ひ入れて、知らず識らずの間に英佛兩國の語を始め其の事情をも覺えしめると云ふ便法を考へてゐるが、今日の時勢では語學などは最も必要な課業であるから、夫々精を出して行らさなければならぬ。其他琴、生花、茶の湯と云ふやうにまあ色々あるが、其に相當する躰力が肝要で、躰が弱かつた日には何の役にも立たぬのであるから、室内にばかり閉籠つてゐないで、ちと家を離れて中外に交際するやうな事にしたら可からう。西洋では婦人が馬に乗り自轉車に乗るが、其程でなくとも、少しは其邊の心掛で攝生を怠らぬやうにしなければならぬ。それから西洋人は兎角見苦しい事は、決して妻子の前で言つたり行つたりしない、極めて嚴重であるに引替へ、我邦では昔は嚴格であつたらうが、今日では段々可けなくなつて、妻や子の前をも憚らず、藝者に戯れもすれば、隨分不躰裁な仕打をやつて恥ちる色のないのがある。第一こんな事から改良しなければ、迚も子供の躾方は難しからう」と常々家人に語られて居た。

ステッセルの家庭

ステッセルは黒鳩公とは同窓の友で、今より三十九年前共にハバロフの陸軍大學を卒業したのである。其の祖父は瑞典王カール十二世の下に將軍として仕へたものであるが、王の死後露國に捕はれ、遂に露國に歸化して了つた、そこで祖父なるステッセル將軍の二子イワン、ミハイルの二人は露國々教に歸し、露國の軍職に服したイワンは拿破翁戰爭の時に大功があつて、アレキサンダー一家の寵遇を得て、ツアルスコエ、セローの總務となり、又た弟のミハイルは宮内武官に出身した、將軍は即ちミハイルの子で、五十六年前ペテルホフに產れ、黒鳩公と同じ年だと云ふことである、それから夫人ワリアと結婚したのは今より三十九年前でアレキサンダー、アナトールウヰッチ、ステッセルと云ふ一人の子供がある、是は今近衛第二ライフル隊の一尉官と成つてツアルスコエ、セロの聯隊に勤め居ると云ふことである。

女學生と學費

（一ヶ月二十圓）

女學生が毎月郷里から送つて貰ふ學資金は全體どの位ゐのものだらうとのかんがへより日本女子大學生三名、女子美術學校生徒四名、和洋裁縫女學校一名に就いて親しく會談の末取調べたる所によれば左程贅澤にもせず、甚だしく儉約にもせざる普通の女學生の學費は、大方次の如しといふ、先づ女子大學にて英語、美術學校にて水彩畫、裁縫學校にて裁縫と各專門の學科を修め來れば直ちに餘科の稽古に通ふことは男子が漢、數、英の私塾に通ふと一般にて何れも割烹、造花、琴、生花の中の二三科目は必度これを修むるが慣ひにて學校より歸れば直ぐこれに通ふされば右に要する

▲月謝の額　なか〳〵に多く何うしても主目の學校の月謝とも五圓前後は要するなり然るに此に又費用を要するは

▲材料の買入れ　にて造花、生花、割烹など何れも修學の都度材料を買はねばならず、而して生花の如きは決して毎日にはあらねど花の代價月に一圓二三十錢（流儀によりて安し）を要し殊に割烹の材料は西洋料理の献立などは中々大したもの故、どんなに儉約にしても月謝とも毎月六七圓は要するなり、而して

▲女學生は素人屋住ひ　が最も多く（寄宿舍は別として）炭、油、湯錢、化粧品、其他小使を入れて十二三圓と見積る可ければ以上にて既に十六圓より十七圓位ゐまでを要す、これは必ず毎月に要するものなるが扨て

▲髪結錢と其他　といふがあり是れは何れの婦人にもついて廻るものなれど女學生には髪結錢といふもの更に要らず間食あれど是れは極少く、夫れに男學生の如く飲んだり食たりは殆んどなく、且つ客膳などあると殆んどなく

▲編物しながら客と談る　といふのが何れの女生も同じ事にて二六時中手を休めて居る事なし、お針をするか手習をするか編物するか雜誌を見るか厨房に這入る

か暇のなき事は到底男學生の想像だも及ばざるほどなりと、斯る有樣ゆゑ浪費など更になしと云ふを得れど、少し贅澤な方にて雪駄とか吾妻草履とかの三枚重ねを有ちたれどこれとて一度買へば姑くは要せざるものなり殊に

▲男學生より重寶　な處は裁縫と洗濯とを人に依頼せざる點と萬事萬端事こまかく從つて金は要らぬ樣にはあれど、女生は男生と異ひ、湯錢を筆立の底より集め來たりたる鐚にて間に合はす樣な事なきゆゑ、毎月十七八圓を要すとせば何うしても二十圓の金は用意して置かねば國の妹や姉さんの處へ年玉の繪ハガキや新刊の女學世界を贈るわけに參らず、夫れに生きた身の何時なん時病氣の起らぬとも限らぬ、而かも纖弱き少女な身の毛糸の財布の底を叩いて月の半中過ぐす事は何うしても出來ぬ事ゆゑ、月々二三圓の豫備金は要するとならん、去れば總額切りつめて二十圓は入用の譯なりと（婦女通信）

東郷大將　歓迎紀念の献立

東郷大將、凱旋せられて全國の津々浦々さては偏僻なる山の奥までも歓聲湧くが如し、吾人は狂せむ計りの熱誠を以て將軍を迎へ且つ成可的多く廣き方面に於て將軍の光輝ある偉績を殘さむと迄に思ふなり。

紀念料理は將軍の凱旋を祝せむが爲に將軍と郷を同ふする人々が主となりて將軍の一行を饗應歓迎されたる折の料理なり、時は一月八日所は伯爵河村邸、會衆凡そ百五十名、賓主肱をとりて懇語歡飲して些の僞善なく些の虚飾なく眞成なる饗宴なりしと云ふ。

その饗膳の料理品目を見るに之を盛膳と云ふを得ざるのみならず或は却て簡素に過ぐるの觀なきあらざるべきも、その簡素清朴なる所却て將軍が平素家庭の清雅にして品性の清潔なるにも適ふべからむ。吾人はこの凱旋料理の献立を紀念として永く將軍の偉勳を家庭に留むるも亦面白からずや。

献立

一椀（しんじよ（長方形旗の形）
鳥のたゝき
松だけ
つみ菜）

以上四種その獻立書に記されたる所は
旅順白旗進上
いけ鳥まとめ
青菜に塩
平和松だけ

付け揚（魚肉、生姜、人参を細かに切り胡麻油にて揚ぐ）

一盛合（鳩の味噌漬
昆布卷（鱈と魚の昆布卷）
きくらげ甘煮
蕪（一寸油にいためたり））

以上五種、獻立名は
日本名譽揚
黒鳩味噌づけ
攻圍卷昆布
木斗戰捷煮
勳章蕪

一刺身　紅白
獻立名は
日本刀なで切り
雪おろし

一甘煮（一鳥
花菜）
獻立名は敵陣奪ひ鳥
雪の下菜

一中皿（魚
大根　風呂吹）
獻立名
富士死煮
大根防寒煮

一大平椀（猪肉　蓬島煮
花菜
大根　輪切）
獻立名
祝捷萬歳煮

この料理の庖丁は前華族女學校教師として又割烹講習會師範として斯道に有名なる岩間芳松氏にして特に祝捷萬歳煮は某將軍の親しく好まれたる所なりと聞く。

頃日接手せる在米某男爵よりの來信に、當地に於ける我戰捷の影響は到底も內地人の夢想も及ばざる所にして彼も東鄕これも東鄕日本と東鄕ならでは夜も日も明け申さず、ピンにもネキタイにも又珈琲店に迄も日本か東鄕の文字なくては繁昌致し申さず候、これ一は流

行と好奇の爲とは申しながら戰捷の御蔭は難有ものに御座候云々、流行にもあれ好奇にもあれ遠き海外の國々にさへ輝く將軍の光彩をして永く我家庭にも止めむが爲にこの献立を芽出度初春の料理として世の主婦達に記臆されたく望むなり而して兒童にも子女にも食膳の間に將軍が簡潔質素の高風を知らしめよ。(近藤生)

簡易なる家庭遊戯

こゝに吾人が我が家庭に向つてすゝめたいはピンポンの事てすピンポンとは此頃新に西洋から輸入された家庭の遊戯と、もと男の學生間に持て囃さるゝローンテニスに對し、女の學生の趣味を充す爲始められた室内の運動具てす。されば讀者の中にはまだ其名前や、遊戯の方法を知らぬ人も多いてせうが昨今ては西洋趣味の家庭に漸く盛んになるやうな形勢が見えてきました、それは此遊戯が極めて簡易てあるのと、至つて無邪氣な、罪のない運動具てあるからてす殊に女小兒ても、紳士淑女ても、受ける所の趣味が共通て、容易く室内に行ふ事ができるからてす、然し如何に其方法が容易ても正式にピンポンの器具を整へて行ふとなると、中流以下の家庭ては中々困難て、從つて遊戯が貴族的となつて了ひ、誰にてもやれるといふ譯には行きません、そこて今茲に紹介するピンポンといふのは、さういふ大袈裟なものてはなく、誰にてもやれる極めて簡易なものてすから設備をしてやつてごらんなさいそこてまづ第一に必要なのはコース(戯場)てす、是は本式にやると玉突臺のやうなものてすが、茲ては高足附のテーブルか又は普通の机てよろしい、成るべく大きくてそして長方形のものを撰むがよい、若し有合はさなかつたならば戸板を脱して代用してもよいのてす是を戯場として、ステツキの代りに尖つた火箸か錐のやうなものても又は筆の軸のやうなものてもよい、長さ約五六寸もあるものを、テーブルの兩側(横に中斷したるくらいの位置)に突刺して、それに毛糸て編んだ少女の襦袢の半襟ても乃至毛糸の襟卷のやうなものてもよい、すべて長三四尺幅五六寸もあるもので殊に

レースの切れッ端か網のやうなものなら一際妙てせう、是をネット(網)に代へて、ステッキの兩方に張渡し、それからラケット(玉を彈く板)は玩弄品の團扇大歟か正月なら羽子板でもよし、又杓子の大な者を代用しても善い、是は僅三四十錢で一對買へる故、買求むる方がよい、ボール(球)はセルロイドで拵へた小いハズミ玉でも、又小兒の玩弄にする矢張セルロイドのから〳〵でも宜しいが、最もピンポンのボールと云て買へば一個六七錢ですから買ふ方が手易い、これでまつ卽席のピンポンとしての器具が整つたならば、甲乙二人テーブルの左右に分れてネットを中心とし互ひに對ひ合て遊戯を試むるのです、先甲より始めて球を乙に彈けば、乙は直ちにラケットを以て是を受止め、甲に對つて彈き返す、甲は又更に是をラケットにて受止め乙に返すといふ風に、幾回でも同じ事を反覆へして、球を受損じないやうにすればよいのですけれど、其球を彈くには一定の規則があつて、夫に違反すると負になる、其規則には種々の制約がありますが、まづ第一に戯場の上に於ける球の飛ぶべき境域を定むるといふ事は最も必要です。それは網を中心として甲乙各一尺五寸ほどを隔てゝ其處に長く網と並行した線を劃る事で、玉を對手に向けて彈くには此線以外に逸してはならぬ、若し甲が乙に對つて球を彈いて、それが乙の劃線外に逸したならば、夫は甲の過失ですから、甲は負けとなります。それから甲の彈いた球を乙が受損ずれば是は乙の負です、又甲の彈いた球がネットに觸れて乙の方に行かぬ時も甲の負、殊にアウトといふのは戯臺の外に球を飛ばすので一番惡るい、それ故球はすべてネットの上を超えて對手の方に送らねばならぬ、玆が手加減を要する所なので、ピンポンの趣味も玆にあるのです、それから勝負の法にはいろ〳〵複雜な方法があるが、素人に早く判明る單純な法は、一回の勝負を一點とし甲が一回勝てば勝星一點、負ければ負星一點として二回以上續けて勝てばそれが勝である、但し三回の中互に勝敗があれば最後の一回が決戰となるのです、本式の勝敗は點數であるが

是は最初の一回及次の一回に勝てば十五點、三回からは十點づゝて、百點でも五十點でも適宜に標準點を定めておいて、其最高標準點に達したものが勝となるのです、倘勝負を定むる方法は他にいろ〳〵ありますが兎に角寒い間の室內の御樂として極めて適當なものでございます。

盆栽の培養法

（別項の摸寫圖參考）

盆栽は深山幽谷或は林野の趣味を小盆の裡に收めて之を愛するが目的にて、紅塵萬丈、人家櫛比して庭園を造るに餘地無き處に在つては一鉢二鉢の盆栽が何よりの眺めとなるべし。

盆栽を造るは即ち小ひさき盆裡に小樹木を植え、これに深山幽谷の趣を保たしむるが爲めなれば小樹木をば深山に於ける大樹木の如き風に培養せざるべからず、こゝに於て小さき樹木を多年の間小さき盆裡に培養せざるべからず、發育すべき樹木を小さき盆の裡にて培養し、其發育を充分ならしめずして形こそ小さなれども能く大樹林の風采を備ふるやうに培養せざる可らず、併し其の發育を妨ぐるが爲め大切なる枝幹を枯らすに至るは盆栽術の最も拙劣なる處なれば、一本の枝たりとも枯死せしめざるやう注意すること肝要なりと知るべし。

されば樹木を培養する盆もまたこの目的よりして成るべく樹木に比して小さき盆を好むは云ふ迄も無く、且つ平盆が最も鉢栽好ければ素人の見て能くもこんな小さき盆にこんな大きな樹が育つことなりと、不思議を抱かしむる程の小盆を喜ぶ必要あり、爲めに乾濕の度宜しきを得ざれば忽ち枯死するの恐あるを以て大にこの點に注意せざるべからず。

盆栽にて培養する樹木は殆んど枚擧するに遑あらず、併し普通は松、杉、枳殼等及び果實のものにては佛手柑、柘榴等あり、花卉にては梅、牡丹、海棠、玉蘭、藤、百日紅等あれども詰まり盆栽には松が最も趣味あるを以つてこれを培養する人甚だ多し、併し松には種

類頗る多けれど久しく盆裡にて培養せば自から擲すべき趣味を生じ葉の長きものも漸次短くなり、枝幹も亦綠苔を生ずるに至る、こゝに於て始めて愛玩すべき盆栽となるなり、こは松のみにあらず他の樹木も亦同樣にて要するに數十年を經ざれば誇るべき盆栽を得に至らざるなり。

扨又果實を實らしむる盆栽は佛手柑、柘榴などが最も盆栽家の愛するものにて、佛手柑はその實の形に趣味あるのみならず、香氣馥郁として愛すべく、これを一室に置かば香氣室内に滿つ、また柘榴は花を愛するものと實を愛するものとあり、花の美なるものは實らず實るものは美しき花が咲ず、されど果實を愛するものは多く接木せざれば小さき樹木に大なる果實を實らしむると難し。

又花を愛するものは梅なり、これは盆栽家の最も培養に苦心するものにて且つ梅には多くの種類あるが故に珍物も亦多し、さて盆栽に於て梅の花を開かしむる方法は種々ありて、先づ日當りの能き場所に置くは無論なれど只これのみにては充分ならず、總べて花を開くものも、果實を結ぶものも、花の開く時、或は實の結ぶ時に於て培養に注意するよりも、寧ろ樹木が花を開き或は實を結ぶ準備を爲す前に於て、培養に注意せざるべからず、即ち普通に云へる寒肥料なるものが總べての盆栽に最も必要なるなり、この寒肥料を與ふるは寒中よりも寧ろ寒の入以前に於てこれを行ふ可し、偖またその肥料は無論人糞が最も宜しけれど、これは不潔にて取扱ひ困難なれば油糟を用ふべし、即ち寒の入に先つて油糟を與へ置き日常樹木の發育に注意し、春に至つて花の散りし後は不要なる枝を伐り、盆より移して地に置く可し、また夏季炎暑甚だしき時、日中に出して充分日光を受けしめたる上、充分水を灌がば春に至りて花を開くこと多し。(別項の盆栽圖は舊冬より上野公園五號館に開會せし盆栽共進會の奇品を摸寫せしもの也。



家具買物の秘訣

人一たび一家を經營して後ちは、日々の買物に於て大いに心得あり、何ぞや一の物品を買はんに、此の物は好し、假令價額は高くとも、寧ろ必らず最上等のものを要すと始めより心を定めし物は、勿論上等の物を買ふべし、又始めより此の物は敢えて上等なる物を要せず、下等品にて宜しと決せしものは、勿論下等品を買ひて差支へなかるべし、然れども世の中の買物此の如く始めより迷ひなく決し居るものゝみはなし、時に或は之を買ふに臨みて善惡兩品、將た又た精粗數品ありて、是れにやせん彼れにやせん、甲は品は善なれども而かも其の價額高きは少しく考へものなり、或は乙は價額は安く懷中都合は宜しけれど、而かも其品の粗惡なる始終の爲め筋果して如何あるべきやと、是れを思ひ彼れを想ふて決し兼ぬることあり、此の場合には宜しく左の秘訣に照らして之を決すべし。

抑も買物に臨み良きにやせん安きにやせんと迷ふて決せざる時は、其の品を買ひて果して何時頃まで使用するものなるや否やを考ふべし、若し食物の類ひ、將た又其の他の器物にても、一週間二週間一ヶ月も使用せば、到底其の上の使用はなし難しと、明らかに知らるゝものは、好し假令少々其の品質は惡しくとも寧ろ其の値段の安きものを求むべし、然るに之れに反して若しも其の物が道具等に屬し一ヶ月や二ヶ月にて到底使用し盡すべきにあらず、一年二年は必らず使用せられ若し叮重に取扱へば、或は三五年若くば十年も使用せらるゝことゝ思ふ物は、假令少々價額は高しと雖ども寧ろ其の良品を撰ぶべし。これ數日にして盡るものは好し少々品質は惡しくとも其の僅かなる數日を經過すれば、使用した結果も同じことゝなり、然れども一年以上も使用せらるゝものは當初錢を出す時は少しく多く要すと雖ども、而かも長き歲月の眼を以て見れば少し位ゐ高きは何でもなし、其の品質の佳良にして始終の使ひ宜きは豈に亦心地の快なることにあらずや。

眼の養生

眼は五官器中に於ても最も貴重なる機關にして取り分け注意を加へ攝養せざるべからず、倘し其節制宜しきを得ず、一朝眼を疾病に罹らしむるか或は誤りて之れを毀傷するが如きことあらばために身躰不具の醜態を免かる能はざるのみならず、百事意に隨ふて之れを操る能はず、左れば一層注意を加へて之が節制を勉ざるべからざるなり、眼の健全なるものと不健全なるものとを問はず其眼には塵、烟、苛性の熱氣、强度の光線、猛烈なる熱氣、烈風、冱寒、衝突、壓推、打撲等之れを避けざるべからず、又睡覺後卒然寒冷に過ぐる水を以て眼を清淨するが如き或は眼中異質物の浸入する等の如きは是れ皆な其の眼の健康を害すること、鮮少らざるものなり、通常其々の中に眼の健康を害するものは彼の日光及び燈光を以て最も甚だしとす、蓋し日光と燈光と、其光力甚だ燦灼且つ强大なるものは是れ亦た其力眼の網膜を刺戟すること甚だ大にして遂に之れを麻痺せしむるの患ひあればなり、就中暗中より出て、卒かに日光に對するが如き、或は此の如き光をして下方より眼に射入せしむるが如き、或は此の如き光をして光耀體より眼に反射せしむる等の如き是れ皆な共に眼の視力を減却するものなり、故に眼の攝養法には光燿躰例へば鏡面或は水面又は凡て光耀を帶びたる物躰より反射する所の日光月光、燈光等に對して之れを刺戟すること久しきに瀰るが如き或は之れに對すること數回に及ぶが如き或は燦々たる日光に對して書を讀み字を書き鍼を取り圖を寫すか如きことは皆な避けざるべからず、殊に兒童を然りとなす、又黄昏或は拂曉に於ても日光の倘ほ未だ微弱なるときに於て上記の如き業を執るが如き或は穗の暗き燈光に對して精密なる仕事を爲すが如き等何れも皆な視力を勞すること甚だ過度なるがゆへに甚しく眼の健康を毀傷するものなり。

彼の燈光の煌々たるもの又は日光の反照恒ならざるもの例へば樹影に於て其枝葉の動搖するがため日光の率

然として隠れ又卒然として現はるゝが如きものに對するも是れまた大に眼力を微弱ならしむるものなり、併し日光と燈光とを比較するに甲は是れ眼の健康を害すること乙の如く甚しからず、そは日光は之れを燈光に比較して其色少し青白なりと雖ども燈光は之れを日光に比較して其色稍や赤且つ黄なるがゆへなり、是れを以て我國の紙帳燈は之れを玻璃燈に比して眼の健康を保護するに大に有益なるものなり、故に玻璃燈は之れを白く照さしめ且つ稍や青色を帯ばしむるの工夫を爲さゞるべからず、其法燈前に一個の球形なる玻璃球例へば彼の金魚球の如きものを掛け之れに盛るに青色の水即ち藍色なる顔料を水に溶解したるものを以てすべし、或は白色の乳樣玻璃燈筒の裏面を塗るに薄き藍色を以てするが如き或は其外面を覆ふに薄き灰藍色の紙傘を用ふるが如き等最も簡易なる法とす。

凡て日光と灯光とに係はらず之れに對して業務を執るものは其光線射放の方向を擇むこと最も肝要なるものとす、日常日光に對して職務を採るものは左方より光線を引くべし、こは右手にて其事を操るとすれば視線常に右方に向ひ日光の注射を避くるに便なればなり、又燈前に職業を操るものは燈光を頭上より高き所に置きて而して其光線を上方より下方に向はしめ只だ操る所の業にのみ當らしめるか、或は之れを頭顱より低き所に置き覆に燈午を以てして其光線を只操る所の業にのみ注射せしめて眼に觸るとなからしむ可なり、總して精密なる職業を執らむには其物と眼とを相接近せざるを得ざるがゆへに、其業を操りて久しく停止せざるか或は數回相次で之れを操るが如きは是れ忽ち近眼及び眼衰等の病を醸すものなり、小兒或は學童を敎育するに方りて之れに示す所の物體を其眼に甚しく近接するも是れ亦た害あるものなり、凡そ眼を勞すべき業務を操るものは常に眼鏡を用ふるを宜しとす、然れども各人多少其眼の性狀を異にせるを以て倘し其眼に適せざる所の眼鏡を用ふる如きことあらば却つて其視力を害するものなり、世上猥りに不適當の眼鏡を用ゐて是が爲め却つて天然間然する所なき良眼を殘害し遂

に近眼或は遠視眼等の眼病に罹れるもの尠なしとせず、殊に近時學生間に於て其甚しきを見る、故に何人に限らず又其視力の弱きと否とを問はず苟も眼鏡を用ひむと欲せば先づ之れを眼科醫に質して而して後に適當なるものを擇ぶべし。

鑛酸或は熱湯の如きものを誤りて眼中に入るゝときは成るべきだけ速に醫を聘して之れが手當を施すべし、而して其手術療法を待つの間は冷水に浸透せる所の濕布を以て眼部を覆ふべし、其濕布にして溫氣を生ぜば別に他の濕布を備へ置き取換々々眼部を冷却せしむることを努むべし、又氷塊を布片に包て以て之れを眼部に觸接するも亦た宜しとす、又石灰、爐灰、或は烟草等其他凡て此の如き苛性の物質を誤まりて眼中に入るゝときは先づ油或は軟なる乳酪を擇び之れを眼瞼と眼球との間に點して以て其浸入せし所の物質を塗浴し且つ同時に浸透せる所の濕布を以て眼部を被覆し斯くの如くにして醫者の來るを待つべきなり。

左に眼の形狀に由て諸病の徵候を示さんとす、例へば天性の習慣にあらずして偏視するは是れ腦病、腸虫等を發せんとする現徵なりとす、一物に對して強く直視するは是れ狂心せむとする徵候なり、又眼光卒然衰弱するは是れ疲勞、嘔氣、或は不快の心地を催ふさんとする前兆なりとす、瞳孔の擴張するは是れ腦燃衝或は腦水腫病等に於ける壓重、腸虫の刺戟或は黑內障眼の前兆なり、之れに反して瞳孔收縮して且つ光線に感覺耐へ難きものは是れ刺戟衝機の旺盛なるがためなり、倘し然らずして瞳孔の收縮するも倘ほ且つ光線の感覺を好くするものは是れ衰弱の高度を現はすものなり、熱病患者に於て此の如きは病勢危篤なりと知るべし、瞑眩は是れ上衝、卒倒或は脫力、其他腸中汚物の逆上等を現はすものなり、複視と半視とは是れ毎に痙攣の徵候にして尋常腸の刺戟を兆するものなりと雖ども亦た往々只だ子宮病或は依斯垤見病に於て複視或は半視を發することあり、眼突出して赤色を帶び且つ其爛れたるものは是れ非常の腦充血を兆し又た眼窪むものは是即ち衰弱を示せるものなり。

十二指腸虫の話

△病狀　此病氣は現時日本になか〱多い病氣であるこの病の大體は十二指腸虫と名くる長さ三分許の虫が、腸内に寄生し、腸管壁に喰ひ込み、血を吸ひ、次第に貧血を起させ、それが進むとツイ命を取られる、何人でも此病にかゝると貧血して其爲め頭痛、眩暈、心機亢進、呼吸促迫等を起して、半人分の働きしか出來ない、世間ではこの病には至つて冷淡であるが、其原因はツマリ東京を始め、各都會に少なく、田舍に多いのと、何時發生するとも無く經過が極緩漫で、病勢が一寸外形に顯はれない爲めとである、從つて其研究者も少い又年中絶へず流行して居て、縱令總ての患者を悉く死に至らしむることなくとも、働くことが出來ない爲め、經濟上非常な損害なるにも拘はらず、急性傳染病の樣に耳目に觸れぬから、日本には根本的撲滅法を講じた者はなく、當局者も亦左のみ關心して居らないのである。

△蔓延の狀況　この病を始めて見付たのが伊太利で鑛山や隧道の工夫、煉瓦製造人杯の間に流行した、云ふ迄もなく彼等の大概は住所不定で、行く先き〲へと病を持込み、それが段々廣がりて、遂に佛獨墺等へも傳播したのである併し更に勞働社會に流行した丈けて他には餘り廣がらなかつた、其後追々と亞弗利加、亞細亞、亞米利加にも發見された、日本では獨ベルツ博士が二十年前に發見した樣に覺へて居る、今日となりては日本國中何れの地方でも本病の無い所はない、東京附近では千葉、茨城、栃木、群馬、などに多い、東京で生れて東京で育つたものには本病患者無しと云つて宜しい、それ故東京での患者は地方より病を持て來た移住者と見て差支ないのである又本病の徴候が無いにせよ、腸内に其蟲の居る以上は營養上多少の損害を被つて少なからぬ營養價を消費するから、取り〱直さず無益に金錢を消費する道理になる、今日では流行地では醫者は貧血患者とさへ見たら、直ぐ十二指腸蟲病で無きやと疑を入れても差支ない位であるが、何に致せ本病を確知するには是非顯微鏡の力を借りなければならぬ、所が顯微鏡が出來ない、從つて根本的療治をする夫れらの醫者はどうした所で確診が出來ない、從つて根本的療治をする譯にも行かず、ヤレ胃病だの肝臟病だの、心臟病だの、黄疸だのと、勝手な誤診をして怪しい療治をするから、幾年經ても直らず其中甚しく衰弱して斃れると云ふ次第である、斯樣な醫者に扱はれる本病患者は、誠に迷惑な話、早速直るのも直らず散々金を使つての上に命迄も取られる、本病治療法が斯く不進歩であるから本病は益蔓延するとも決して衰滅する筈はないのである。

△病性　此の病氣は前申した通り三分許りの虫が、淨山腸管内に棲息したる爲めに起るのである、即ち小腸の大部に寄生して、口端の鈎で深く腸管に喰込んで血を吸ふ、もと〱小虫の事であるから、吸ふ血の分量は少ないが、何百匹と云ふ多數の事であれば、永い間には寄生主の血が次第に減少して、ツイ貧血症が起つて來る、虫の數が少い場合には吸ひ取らるゝ血が少なく、其の日〱に補給が付いて行く筈であるが、夫れでも貧血するとは一寸不思議に思ふが、是れは虫體から一種の毒が出て、其作用で人の血液を惡變するのであるとの説がある、隨實でこれを自家中毒といふのである虫の作用で此貧血を起すと皮膚は血色を失つて蒼白となり、心臟の皷動が高まり、從つて呼吸促迫して顔部や下肢などに水腫が生ずる、此の息切れは初めは坂や梯子を上る時とか、或は駈け廻る時ばかりに限るが、追々には座敷の起居動作にも息切れがしたりするやうになる、夫れが一層進むと今度は床上呻吟、遂に絶息すると云ふ事になる、病性は先づコー云ふ順序であるが、其の經過が頗る不定で、極りがない、病氣の初期に驅虫法を行つて、鐵劑を飲用すると、譯もなく直るが床に就く樣になつてからは驅虫法も水の泡で致方がないから何んでも初まりの用心が肝要である。

△繁殖の狀態　此の虫は腸管壁に吸ひ付いて容易に離れないから、大便と一所に排泄する事は殆んどないと云つても宜しい、雌雄虫が生ん

だ卵が、大便に混じて排泄するから、顯微鏡で大便を験すると直木病の診斷が付く、極少しの便即ち芥子粒の便にも數十個の卵が混じてゐる事がある、此卵は腸管内で孵化する事は決してなく、體外に出てから適度の温度（攝氏廿七度より三十二度）に逢ふて始めて一種の子虫が孵化し、機會を得て偶然人の腸内に入り、茲に始めて成熟し、雌性のものは母虫となりて孕卵するのである、斯様な順序で虫は發育を遂げて繁殖を助けるのであるから、人に寄生する機會さへなければ、虫は自然に死滅する道理になる、扨て其の腸内に入る機會と云ふと是は本邦が習慣として大便を肥料に供する所から起る、即ち大便に混んじて排泄された卵は其の大便が肥料になる前には、肥壺の中で、肥料となつた後には、畑で適度の温度と温氣とで子虫に孵化する、此の子虫でも卵でもなか／＼生活力強く、酷暑厳寒を凌ぎて越年する、そこへ持て來て農夫は田畑の仕事をして土の付いた手をろく／＼洗ひもせずに飲食したり、土を能く洗ひ落さない畑の作物（大根類）を生食したり、又は畑の土が混じて居る小川で口をそゝぐとか、夫れを飲んだりするとか云ふ事は普通の事であるから、何時の間にか子虫は腸内に這入て萬事好都合と何の遠慮もなく發育繁殖する、農夫以外の本患者はどうして發病したかと云ふとそれは野菜の生食か煮焼の足らぬのを食たりした爲に起つたのである。

△撲滅の法　一通りの説明が終つたから其の撲滅法を話さう、西洋と日本では事情が違ふから向ふの撲滅法を直ぐ其儘行ふ譯には行かない、日本では大便を肥料にするから夫を廢物にする事は到底出來ないそこで、肥料にしても差支のない方法で撲滅法を講ぜねばならぬ夫れに就ては石灰が一番有効である、取扱が面倒でない、唯石灰は或る植物に害があるし、又腐敗した糞便に混ずるに安母尼亞を遊離して便の窒素性分を減じ、従つて肥料の價値が下がる、缺點あるから、此缺點を除かうと其の道の專門家にも質して色々研究した揚句、植物の害ともならず、又肥料の効力をも減少しない其法を考へ付いた、其方法は至つて簡單で格別手數も費用も入らぬから誰れにも實行出來る、即ち左の通りである。

(甲)糞便を糞壺より他の空虚な桶に汲み取つて之に糞便の量より少からぬ七十五倍の石灰水を灑ぎかけ、十分に攪混ぜて其儘にして置いて七日間經たなら後ちに肥料に用ゐるのである其間に糞中の卵や子虫は皆死滅して仕舞ふ、七十五倍石灰水は水一斗に三合の石灰を入れ攪き混ぜさへすれば出來る。

(乙)石灰は生石灰の新しいものでないと効がない石灰の容器は石油罐の明き物か左もなくば口の廣からぬ箱などが宜しい、さうして容れてある石灰の表面を平にならし表面兩部に跨かり合ふ様な板で石灰面上に密切に蓋して空氣に觸れぬ様にして置かればならぬ。

但し右の撲滅法を個人的に遣つた許りでは根本的撲滅が出來ないから、矢張り官の御世話を仰がねばならぬが、是れとて別に六ヶしい事はない、先づ本病流行地へ衛技手を派遣して、戸毎に糞便を檢査させ、（檢査は二三分間で濟む）卵のあるのは夫れ／＼驅虫法を行ひ、糞便は前の様に處置させる位で宜しい、又個人的豫防法としては食事の際に手や指を十分に洗ひ、川の水は飲まず野菜の生食はしない事にする、斯く公私相待ちて厳重に右を實行したならば遂には日本全國に本病の跡を絶つ事が出來やう。（右は本病研究を以て有名なる瀬川醫學博士の談話を筆記したるものなり）

出廬　幸田露伴著

文壇の巨匠露伴の韻文は春陽堂より新たに裝釘されて出ぬ、抑も學は和漢に亘り、識古今に徹せる此詩人が多年の蘊蓄を發きたるものなれば元より滔々たる俗眼を喜ばすの作にあらずと雖も其道の人には必らず珍として賞讃せらるゝものなるべし、氣は萬有を吞吐して、眼一世を空しふするの概ありといふべし。

海外事情

北極の新婚旅行

法學士　山本遷山

こはレオナルド、リー夫人のアークチック、ホネームーンを簡單に意譯したるもの、原文はホワイト、ウォールドと題する書物の中に在り、該書は北極に關する諸家の經歷譚を集めたるものにして、趣味ある記事少からず、上野帝國圖書館一五三函九○號を採て之を見給はゞ、興いと深かる可し。

未だ氷雪の奇怪なる王國を知らざる人々には、グリーン、ランドへの新婚旅行と云ふも、何等の興味をも感動をも與ふる事無きのみならず、却て之を以て無謀の擧となすべし、現に盲人蛇に怖ぢずとの諺を以て、妾等が企を罵るの聲は、屢耳にせし處なり、去れ共是等の非難は、妾及妾が許嫁の人の決心を動かすに足らず、妾等は北極大王パーリー氏の懇切なる誘引あるや、直に其準備に着手し、一八九七年七月六日、公に結婚の式をあげ、相携て北極氷雪の天地に、樂しき新婚旅行をなすことに決したり。

ボストン市に於て、親戚友人等と相會し、諸種の要務を辨ずる爲に數日を費し、終に七月十九日を以て、捕鯨船ホープ號に便乘し、ボストンの港を出帆したり、同行の人々は、科學者、敎授、大學生等の一群にして、パーリー氏を始め、孰も技藝家にして又快活なる旅行家なれば、譬へ風波洶湧の際に於ても、順風恬波の海を往くが如し、船中にはよく甲板上に嬉戯して一行を慰むるアルバート、オペルチ氏あり、容貌端麗にして少壯氣鋭なるアーサー、モーア氏あり、バイオリンの妙手にして、紘上清新なる音樂を奏じ、遠く〳〵其反響を北洋の浪に起さしむるランシング、バルドウィン氏あり、其他有名なるフィツギンス氏あり、ソホン博士あり、去れば北洋に航するには、過半霧の爲に鎖さるゝ間を行くものなるを以て、船中多くは無聊に苦むを常とすと云ふにも拘らず、此の如きの好伴侶あり

ては更に寂寞を感ずる事なし、況や船上クリッチャット等遊戯具の備はれるに於てをや。

文明と相離れて次第に北に航するわれ等の航路も、一定の時日内は特に記述するに足る者あらざりしが、或朝に至り、ふと甲板上に於て、大聲に叫ぶ者あるを聞き、直に階を攀て至り見れば、衆人皆舷に倚て大氷山の浮流せるを見つゝあるなりき、是より以往、眼界頓に改まり、妾等は未曾て知らざりし景を眺めつゝ、波を截るの船上に立つの愉快を感ずるに至れり、而して妾等の船は今バッフィンス、ランドを指して行きつゝあり、蓋こゝに捕鯨場を經營せるゼンセン氏、及び漁獵業に從事せんとする大學生諸氏を此地に上陸せしめんが爲なり、嗚バッフィンス、ランドの地よ、寂寞の廢境、荒凉の極地。

バッフィンス、ランドに到着するや、ゼンセン氏は、おのれを歡迎せんと、出て來れる土人のなきを見て、多少失望の色なりしが、數發の爆彈を發射し、船舶の近接を報知するや、遥に水平線上に一帆の舟泛び出てゝ、漸く近づき來るを見、氏は直に滿足の風釆に返へれり、其船舶はやがて次第に近寄り來りしが、と見れば一人の男、三人の女、五人の小兒及犬其他獸皮等を積みたる小舟なり、妾はこゝに始めてエスキモーを見たり、實に奇異なる人民なるよ。われ等はゼンセン氏が五ケ年間の糧食其他の必要品、及他の狩獵家の貨物を陸揚げするが爲に、其日及其翌日をこゝに經過する事となり、其間に妾は盛夏八月の交に於て、却て氷山を滑るの小說的經驗をなし得たり、氷山とは氷を以て鎖され凸凹なき斜面を有する小丘にして、我夫リーが先づ數度の試驗をなし、其危險なきを確むるを待ち、妾も亦之を試むるの好奇心を發し、幸他人の見ざるを好機とし、裾をからげて座し、ひた走りに氷上を滑りたり、其愉快言語に盡す可らず、數度之を繰り返へして倘飽くを知らざりき、既にして船上に歸り至れば、一紳士の微笑みながら、氷山を滑りたりやと問ふに會し、妾は思はず顏を赤らめたりしが、やがてわれ等が尊敬する博士諸先生も亦是を試み給ひしと云ふを聞き

て、漸く心を安じたりき。エスキモー等は英吉利風を加味したる奇異の衣服を着し、一人は毛皮の上着を、一人は赤色の、一人は青色のスカーツを着し居たり、其中の一人は生後二ヶ月許りを過ぎたらんと思はる。小兒の母と覺しく、其の脊の頭巾中に之を負へり、小兒は小さなる頭巾と毛皮の衣とにて包まれ、四肢は殆ど露出せる有樣にして、若母の頭巾を出づれば、或は寒氣に泣くこともやと思はるゝ許なり其母の小兒を愛しいつくしむこと、英吉利などの母と異ることなし。

頓がて此地を拔錨しゴッドハーフェンに向ふ、こゝはわが夫及妾がポープ號の更に北航して歸來するの間、樂しき家庭を作らんとするの地なり、而かも妾は嘗てわが夫の說きたるが如く、氷山を衝破して航する底の愉快なる壯景に接する能はざるに失望したり、蓋し今年は特に海水氷結の度うすくして此の如きなりと云ふ、八月七日、われ等の船はゴッドハーフェンの繪の如き港に入れり、われ等の船は直に交易のため、諸種の貨物を積載し來れる土人の小舟に依て回繞せられたり、此地のエスキモーは、和蘭人との混血兒なる爲め、同人種の特徵たる扁平なる鼻、黑色の皮膚、黑色の頭髮、短倭なる骨格等の諸點を失ひ、而も其婦女等の中には容貌美麗なる者も少からず。

わが夫とパーリー氏とは、われ等の住處をしつらへんとて先上陸したり、われ等は該地監督者アンデルソン氏の家に於て、其數室を借るの豫定なりしも、氏の家族は今丁抹に至りて在らず、ために其目的を遂せざりしも、頓がて其周旋に依て、嘗て丁抹の官吏某氏の細君に屬したりし小舍を借るを得たり、妾は本船に殘りて、われ等の荷物が端艇に轉載せらるゝ間、徒に焦慮し乍ら待ち居たりしが、暫くにして其準備全く成り終に上陸したり。

前のバッヒンスランドを過ぎて、今ゴッドハーフェンに來れば、全く其觀を異にして、白き小花を着けたる草を以て蔽はれたる、樂園に達したるが如き感あり、水邊には婦人の群集出て迎へて、其赤、青、黃等とりど

りの長靴、毛皮の股引、キャリコの短衣、諸種の南京珠にて飾られたる襟等の配合目もさめる許りなり。

頓がて上陸してエスキモー等の助力を藉り、家財等を小舍に移して、こゝにわれ等の新居は成りき、妾は家に入て平生被ぶり慣れたる帽子を置きしに、エスキモーの婦人等は忽ち其周圍に集まり來りて、ベスネセー(美麗を意味す)と叫ぶこと數度なりき、蓋しその薔薇の花が水を注かれずして自然にこゝに咲けることを思へるなり。

暫時にして、われ等の樂しき旅行を護りたるホープ號は、遙なる岬角を回りて其影を沒せり、われ等は乃ち約一ケ月間の住家とせられたる小舍に於て、始て家務を執ることゝなれり、小舍と云ふは、屋根こそ同じく苫を以て葺かれたれ、其內部は三室を有し、通常土人の小舍と同じからず、大なる室は南と西とに面せる眺望に富む窓を有し、壁は青く、天井は黄に彩られ心地よき一室たり、他の室は稍少なれ共而かも不快ならず、一は臺所とし一は貯藏室に充てられたり、而して小器具の類は、知事カール、ハリス氏の厚意に依て貸與せられたるものにして、ハリス氏はアンデルソン及び副知事フライシェル夫妻と共に、少からぬ便益を與へられたる人なり、彼等は丁抹人なれ共少しく英語を解す。



妾は小舍に入りて、何心なく執務せる間に、俄に室內黑濛々たる煤烟に充たされ、こゝを逃避せざる可らざるに至れり、そはわが夫が臺處に於て火を焚かんとしての失錯なりき、既にして二人のエスキモーは傭はれ、

烟突の掃除は成り、妾は乃ち家に入りて始て炊事をなせり、新鮮にして水を出たる計りの魚など少からず、是等は皆われ等が携へ來りしビスケットの幾片と交換して土人より得る者なり。

われ等は物を得んが爲に市場に行くの必要なし、交易の爲に諸種の貨物を携へたる土人が相連りて列をなしてわれ等の前に市塲を展開し來るをもて、居ながらに買ひ求め得るなり、彼等は常に外側の戸を開き、妾が内に入れと呼ぶ迄は靜に鼻を鳴らし乍ら立てるなり、或日妾は靜に戸を開きたる音を聞きしを以て、幾度か入れと呼びしも終に何人も入り來らず、妾は立て其何人なるやを見しに、兩手に大なる魚を持ちたる小兒なりき、彼は動かず又言葉を發せず、只眼を以て妾に何事をか請ふに似たり、妾は乃ちわが夫を呼びしに、わが夫は直に出て來りて彼を戸外に伴ひ、之をレンスに入れ、僅幾片のビスケットを與へて其魚を得たり、又頭髮黑くして專北方エスキモーとも見ゆる一人は、妾等が綽名してフートボール、プレーヤーと呼びしが、常に無價値の物を持ち來てわれ等を煩はすと一再ならず、ある日彼は土にて汚がれし赤色の海豚の革にて作りたる袋を持ち來れり、わが夫は之を見て、何の爲に持ち來りしやと問ひしに、彼れ交換の爲と答ふ、わが夫は又重ねて、交換、交換、そは土より堀り出したる者に非ずや、汝は其の如き物を貯ふるかと問へば、エーエー、余は其の如き物を貯ふと意味もなく繰り返へしき。

彼等は彼等が理解せざること有る時は非常に不快とするの習あり、我夫は、否、吾はそを要せず、そは貨物に非ずと云ひしが、貨物に非ずとは彼等の理解せざる所、彼は不快なる色を表はせしも、而かも亦已むなくして辭し去りき。

一歩小舍を出づれば目に觸るゝ者は、總て新しく且つ珍しきものゝみ、此處其所に芝土(稀には其芝に花咲けり)の小片を以て蔽はれたる岩石、周圍に微笑しつゝ集り來る土人、小草を戴ける小屋、一木だになき廣漠なる光景、無數の氷山、是等は總て妾が歡喜の種た

らざるはなし、こゝに妾は一ケ月を費し此地及親切なる人民と相親むに至りたり。

此生活に於て、第一に妾が腦裡に表はれ來る者はニコラスなり、彼は始めわれ等の奴僕たらんとして雇用を請ひ來り、其後引き續きて忠實にわれ等の爲に勤勞に服したりしが、當初妾は其容貌の醜惡なるを忌み、屢く其解雇をわが夫に提議したる事すら有りき、而かも暫時にして其善良なる性質を發露し來り前日の惡感は終に痕跡をも留めざりに至りき、而して彼は少しく英語を解し之を操るを悦びたりき。

妾の少婢は可愛らしき十才許りの小娘にして、美しき皮膚と髮とを有し、一眼は常に天を仰ぐの僻あり、彼は命ぜられたる事は總て之をなし、又彼に與へられたる物に非ざれば決して之を取る事なし、名をエリザベスと云ひぬ、多くのエスキモーは英吉利風の名を冠れるなり。

妾は屢々土人より珈琲會に招待せられしことあり、始の間は何となく不馴なりしも、頓がて丁抹より來る黑珈琲を飲み習ひぬ、而かも其方法に就ては、更に他に良法もあるべきをと微笑まれつ、夕には舞蹈あり、各人多少心得ありて殊にデーニエル及他の兩三人は所謂バック、エンド、ウィングなどに似たる者をも踊り得るなり、三歳以上の小兒も亦舞蹈に加はるを常とし、曩に魚を持ち來りし小兒の如きも、其丈と幅と殆相同じき程なるにも拘らず、他の者と歩調を揃へて舞蹈せんと務むるなど、仲々に面白し。

われ等の最も屢々訪問したるはデーニエルの家なりき、彼は嘗て捕鯨船に在りしを以てよく英語を解す、丈低き黑色の小男にして滑稽に富み、全島中第一の美人を妻となせり、彼等の家は二つの部屋に分たれ、各低くして出入の際にはわれ等の頭を打つべき小さき入口を有す、又室の一隅には床より二尺許り高くして幅五尺許りなるプラットホームあり、其上に寢床に供せらるべき數ケの鳥毛の袋あり、こは日中は壁の側に立てられプラットホームは床として用ひらる、他の一隅にはベンチあり、其下に水桶を置く、壁は色彩を施した

る繪畫を以て飾られ、又三段の棚を架せらる、室の中央には暖爐あり、而して是の如き一室に大抵三家族、男女小見合計八九人のもの生活せり。

最も愉快なりしは、鐵の標本を得んが爲にプリューフィールドに旅行したる一事とす、われ等は六人のエスキモーを伴ひ、捕鯨船に投じて出帆せしが、好潮を待つが爲に一夜を野營に明したり、此夜エスキモー等は其の着衣の薄きを以て寒冷を訴へしが、われ等は石油暖爐を備へたりしが爲にさ迄寒苦を覺へざりき、この石油暖爐は非常にエスキモー等の賞贊を博したりき、想ふに此石油暖爐一個を以てすれば、全島を買收することを得べし、やがて標本を得て、われ等は歸途に就きしに、此時妾は始て寒氣の激烈なるを感ぜしにより、我夫は毛皮製の上着を以て妾を蔽ひたりき、而して次第にゴッドハーフェンの岸に達するや、土人等は頻に妾等に向て奇聲を發して叫び始めたり、蓋彼等は妾が着けたる毛皮の上着及頭巾により、そのケープヨーク、エスキモーなるを想像したりしが爲なり、元來エスキモーは其性快活にして能く笑語す、妾が一行の岸邊に近づきし時、妾は立ち上りて手を揮りつ、彼等はその想像に反して妾なることを知り、假に一同大笑したりき。



又最も愉快なりしは氷山に登ることとす、われ等は食料を準備しカミクスを着し、早朝出發したり、カミクスとは妾が此時始て着用したる者にして、防寒の目的によく適合したるものなり、山は二千六百呎の高さあり、其斜面には柔き苔類ありて屢脚を取らるゝを以て歩行容易ならず、正午頃漸く其半腹に達し、尚進て四分の三に達したる頃、妾は疲勞を感ずること甚しく、

殆進退に窮したりしも、終に少憩の後勇を皷して絶頂に達したり、時に大砲の連發の如き巨大なる音響あり、驚て眸を放てば、河上に於て巨大なる氷山中央より裂け、其下より氷の平原湧出し、其上にのりたる大氷塊は、巨靈の唸るが如き聲を發しつゝ徐々海中に沈沒し去らんとするなり。

バーリー氏が第一北征の際、遺したりし石碑を見て、やがて歸途に就きしが、下山の際は登山の時に比し勿論容易なりと雖も、甚だ險峻にして只座して滑り下るの外なき處もあり、わが夫は先に降り行きて適當の地點に立ち、妾が滑り行きて終に止まる能はざるの際、之を捕へんが爲に用意せり、途上ハックベリーに似たる甘味なる苺の叢生せるを見しも道草とりては日沒迄に歸られざるを憂ひて、靜に之を味ふの餘裕を得ず、最初わが夫は小銃を準備し、ニコラスに命ずるに、銃聲三發の聞ゆるを待ち、灣を横ぎつて小舟を漕ぎ來る可きを以てせしが、われ等の下て小銃を發射すべき地點に達したりし時は、ニコラスは旣に小舟を操てこなたを指して來りつゝありき、蓋彼等は皆われ等の安否を憂ひつゝありたればなり。

われ等は又アンデルソン氏の小舟を操て灣上に泛ぶを毎日の樂となしたりしが、一日例に依て海上に出て、遙に灣外に出でて氷山の寫眞を撮りつゝありしに、巨鯨俄に我舟の近傍に泛び出て、石を取て投ずれば達すべき距離に近接し來れり、妾は乃ち之を避けんと欲せしも、わが夫及ニコラスは其危險なきを云ひ、且つ妾は小屋の如く巨大なりと思爲するにも拘らず、彼等は其あまりに大なる者に非ざるを說きて之を避けず、却て其水を吐くの狀及其尾を一掉して幾何の距離を泳ぎ得るやを觀察するの趣味あるを說けり。

ある日妾が晝食を終りたる時、黒き低きエスキモーの婦人、小舍の前面に來り、四十哩を距てたるデスコ、フィオルドより來り非常に疲勞せるを說きぬ、妾は彼を家内に案內し、さて温き珈琲、冷肉ビスケットの類を與へたりしが、彼はよく英語を解し自由に妾と會話することを得たり、彼は實に有名なるオーガスチナ

なりしなり、彼は嘗て廿五年前、ポールの遠征の際、ポラーリス號の難破により、不幸なる伴侶と共に冬期の間、氷山の上に生活したるの經驗あり、其際彼は氷山上に於て一人の小兒を產みたりしが、其兒はチャーリーボーラリスと呼ばれて今も尚チスコ島に生存せりと云ふ、妾はオーガスチナとの會見に於て非常なる愉快を感じ、且つ彼がある船長によりて氷山上より救ひ取られ、合衆國へ連れ行かれたる時の物語を聞て益々快味を覺へたり、蓋し其船長とは、バーレット氏にして、われ等今回の遠征船の長たる人の叔父に當るを聞て、愈其の奇遇に感じたりしなり。

われ等は此地に於て又二回の雪嵐を經驗したり、而も其雪片は岩石に觸るゝと共に消失し去るなり。又夜は次第に暗黑を增し來り、寢に就かんが爲に、窓戶を閉ぢて以て暗黑ならしむるを要せざるに至れり、本國に於ける人民は多くは、グリーンランドの天候は一年間同樣なりと想像すべく、又妾が岩上に踞して編物をなせるの圖を見て、何故に妾が斯かることを成し能ひしやを疑ふべし、然り妾自身も亦冬期果してこゝに寒苦と戰ひ能ひしや否やを知らざるなり。



ゴッドハーフェンに於て、小寺院の存在せし事は、妾の一方ならず喫驚したる所とす、こゝに日曜日每に參集し、而かも男女は左右兩側に別座し、小學校長たる說教師が、ルーテル教の教義を述べ、儀式を行ふを見ば、誰か其夢想だもせざりし所なりしを悟らざらんや。

妾は又一日、偶然に起りたる事件に於て、如何に彼等エスキモーが有價物を投棄する事に就て感ずるかを驗したりしは面白かりき、凡廿人許りなる婦女と小兒とが、岩石の上に於て珈琲を飲み且つ空談しつゝありし際、妾は其招待を受けたるを以て、レモナードの一瓶を携てこゝに臨み、之を彼等に分ち與へたりしに、彼等は非常に悦て之を飲みぬ、やがて其瓶の空となるや、妾は之を投棄したりしに、其瓶は數十片となりて地上に散亂せり、エスキモー等は之を見て、未だ曾て見ざりし程の不快なる感覺を其容貌に表はしたりき。

とかくする間に、妾等はこゝに一ヶ月餘を費し、前に北に向ひしホープ號か再び到着して妾等を迎へ去るべき時となれり、乃ちわれ等は土人に向ひ、第一にホープ號の近接を發見し通知し來りたる者には、ビスケット廿片を與ふべしと約したりしに、九月五日の早朝、デーニエルは息をきつて驅け來り、オーミアクスア(船の意)と叫びぬ、然り、是れ實際なりき、暫らくにしてわれ等は船中の友人が相呼べるを聞き、ホープ號船上の人となりて、本國に歸ることゝなれり、ゴッドハーフェンの地よ、妾は恰も故里に離るゝが如き心地を覺へたりき。

此の如くにして、われ等の樂しき新婚旅行は終りぬ、而して妾は、總ての他の北極旅行者と同じく、常に北極の磁力に吸引せらるゝを覺えて、終に永く氷雪の奇異なる、しかも面白き王國を忘却する能はざるなり。

(完)

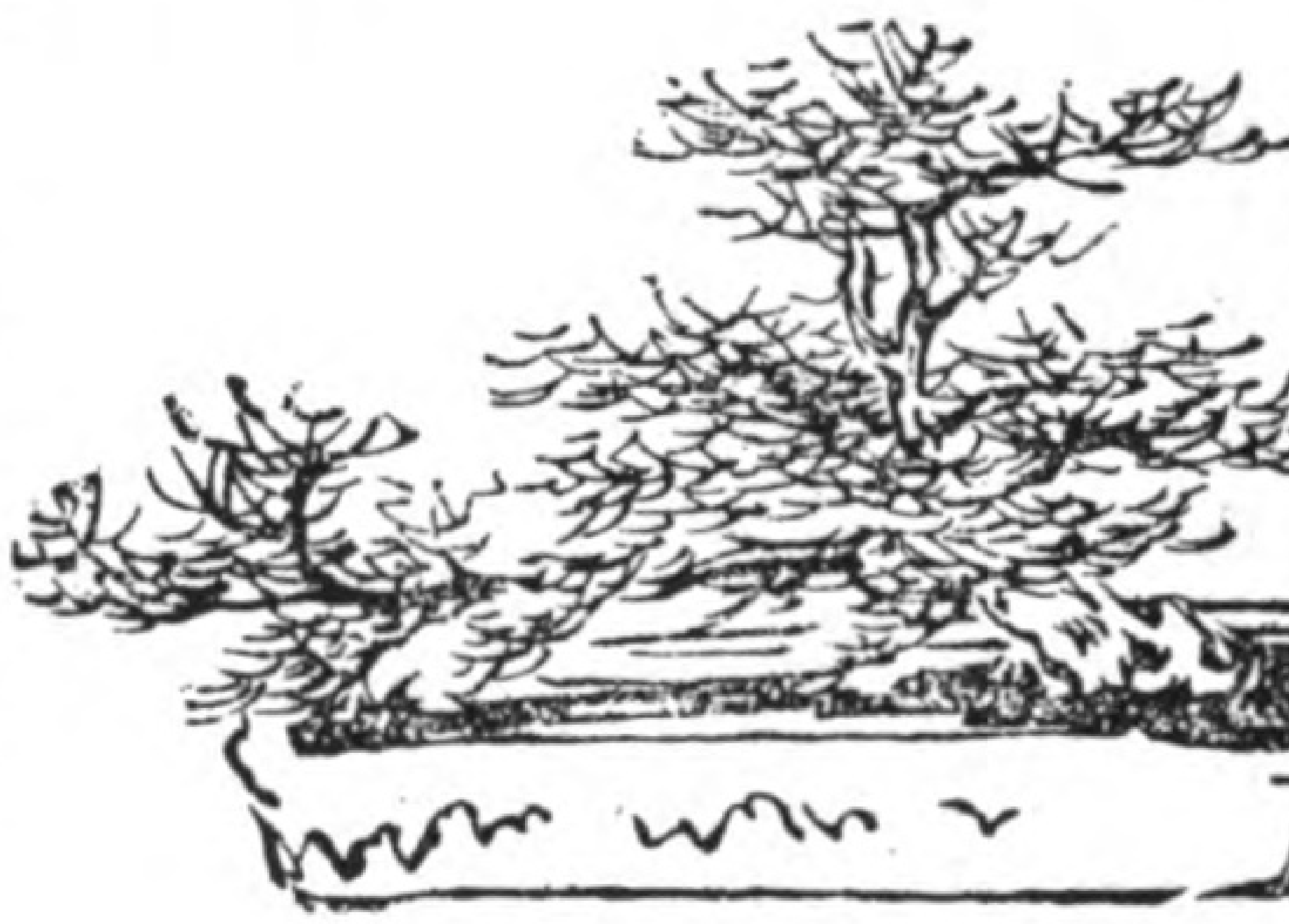
米國の女演說家

小田花子

女史の父は、米國フイラデルフイヤ市の商人にして、敬虔なるクヱカ宗の信徒たり。母は貴族の出にして、容姿端正、品格高潔なる婦人なりき、女史幼少の時、父は不幸にも產を破り、苦心焦慮の末、遂に黄泉の客となれり。家運傾けるが上に、一家の支柱さへ失へることゝて、赤貧洗ふが如き苦境に沈淪したり。アンナ

は性來浮躁なる質にて、事を好み、氣儘に、而も至つて空想に耽る小女なりしかば、其の性の爲め、生涯を不幸にせしとも少々ならず。

然りながら、又た熾る如き大望心と、強固なる意志力を有せしかば、之が爲め種々なる困難を排して、幸にも成功の榮譽を得たり。あはれ世の富める見童の心なきとよ。學校の朋輩は、アンナが身に粗末なる衣服を着けしを見て、特更らに貧衣を纏ふ眞似して、彼女を弄び、猥りに快とせり。之れ反りてアンナを刺激し、一層奮發せしめたりとは、女史が後年感謝して人に語りし所なりといふ。アンナは非常なる讀書好きにて、苟も其の手に入るもの、一として之を讀まざるはなかりき。數ヶ月の間、一晝夜は五時間より多くは寢らざりしことさへありきと。アンナは雄辯法につき特別なる嗜好を有したり。或時はウエンデル、フイリツプス博士の講話を聽かんが爲め、便所の掃除をなして廿五仙の金を獲しことさへありたり。女史は又た熱烈なる性質にて或時田舍の學校に教鞭を採らんと希望せしことありしに、事務員は女史を見て嘲ける如くに、


槻

「以前一人の男教師此の學校を教へたるが、其の人々さへ一ヶ月二十八弗より多くは拂はなかつた先づ女教師とならば、十六弗が關の山‥‥」

女史嚇と激怒して、

「貴君は怪しからぬことを言ひ給ふものかな。それでも妾を一匹の人間と思ひ給ふのか。妾は今日は一對の木綿手袋さへ買ふとが出來ぬ程に窮しては居ますが、貴君の手より一物にても頂戴きて婦人の面目を汚さんよりは、寧ろ此の樣な襤褸を下げて居ましよう」

女史は當時懷中一錢の貯蓄もなく、其の日の食さへ得

難かりしかば、遂に一商店に雇はれて賃子となりしが、僞言を言ふ能はざりしより、ついに此所にも居り難くなれり。

千八百六十年、女史十八歳の時、或る集會に於て、「婦人の善と惡」と題し、其の最初の演說を試みたり。女史は其の後合衆國造幣局の一員となれり。然しながらボールス、ブラフの戰役之を評して「此の戰役の不利に終りしもの、馬鹿と無能力者との故にあらず。唯だ總大將の叛逆を企てたるが爲めなり」と公言せる爲め終に解職せられたり。

此の時より女史は、演說界に其の志を立て、之を以て一生の職となしぬ。而して造幣局より解雇せられしが如きは一時女史をして、非常の苦境に陷らしめしも、之が反つて幸福を生むの遠因なりしとは、後に至りて思ひ合されたり。而して女史の境遇は、爾來屢々窮乏を告げしも、余輩は讀者とゝもに、人はすべて言語に絕せる悲境を經て、此に初めて赫々たる功名の獲らるゝものなることを女史に依りて學ばんと欲するなり。

千八百六十三年の早春、女史は演說をなさんとて、コンコルドに赴けり。之れ彼女が其春に於ける最終唯一の仕事にして、當時女史は懷中無一物にて期する所の收入は唯此の演說に依りて得べき十弗の金あるのみ。其他女史が希望せる職務はすべて不成功に終りたり。女史は疲れぬ。殆んど失心せんばかりなり。

其の後女史が「病院の生活」と題せる講話は、共和黨の頭領が評して、「もし余輩にしてニウハムプシャイアの全州に此の女史をして、演說せしめば、此度の選擧に全勝を得んと易々たるのみ」と言ひし所なり。五月一日となるや、女史は選擧運動の巡回を始めたり。而して其の結果、勝利は共和黨に歸したり。知事の當選せしは、全く女史の雄辯が、聽衆を醉へるが如く感動せしめたる結果と認められたり。

風潮は一變せり。女の境遇は今や滿潮に棹すが如し。コンネクチカット州は女史の出馬を懇請せり。此處には共和黨の勝利到底覺束なかりしも、女史奮戰の結果、勝利は共和黨に歸したり。女史は一夜の演說に一百弗

を以て酬いられたり。而して、撰擧前夜の演説の如きは、四百弗を獲たり。

女史の到る所、心酔者は潮の如くに押し寄せ来りて、其の演説を聴かんとせり。次て女史は、ペンシルバニヤ州に招聘され礦山地方に派遣されたり。之れ或人が「斯る地に演説を試み得る者到底なかるべし」と言ひし所にして、女史到るや、石を以て打たれ、腐敗せる卵を投ぜられたると度々なりしに係らず、其の働きに對しては一弗の金も酬ひられざりき。

女史が生涯中、尤も大なる名譽とすべき一事は、議院の大廣間に演説をなすの招待を受けたるとなり。而して此度の演説には、ワシントン府に於て、前代未聞の聴衆にて、大統領を首めとして上院議員、下院議員外交家、重なる法官、ワシントン府の名ある公人、私人すべて之に網羅されしと註されぬ。此の演説に依りて、女史の酬ひられし所、一千弗に上りたれば、女史は之をナショナル、フリイマンの救濟會に寄附したり。



多くの有名なる演説は、戰爭の後に於てもなされたるが、中にも「婦人の働きと賃銀」の如きは、最も成功せるものにて、女史も亦新に力を注ぎたるものにて、女史が多年の經驗より得たる燃るが如き雄辯を振ひて、演述した所なりといふ。

（完）

世界の秘密國

H O 生

これは英國の宣教師にして布教の爲め深く世界の秘密國たる西藏へ入り、幾多の辛酸を嘗めて後日本へも立寄りたるラインハート女史の經歴談の一節なり

◎私共は今から九年前西藏に向つて出發ので御座いまして、始め上海に行つて楊子江を溯つて西藏に達したので御座います、此國へ入りますに諸方に路はありますけれども西の方からは中々困難で御座います、何故かと云ふに、此方面には方々に關所があつて喇嘛の坊さんや、兵隊が守つて居つて、外國人を決して入れません、夫れ故到底西からも東からも這入ることが出來ません、只北の方と東の方とは支那領になつて居るから、支那の官吏は始終這入つて居る、又支那には西藏から朝貢を三年目に一度宛出して居りますが、其貢物はラッサ府に居る大僧正が持つて行くので其道は多く街道になつて居ります、故に其方から支那人となつて行けば這入れるので御座いまして、楊子口を溯ることと二千哩で西藏に達するのであります、私共は最初カンパンに行つてそこに住居して居つた處が、回々敎徒の所爭が始まりまして、其所の寺院が皆城砦となりました、戰が其所のお寺の大僧正が大變に親切な人であつて、私共を其家に隱匿つて呉れました、其所で一年許りは其處に居つて戰爭で負傷した、兵隊共を療治して遣たり、又其地方に流行して居るヂフテリヤや天然痘に罹つて居るものを療治して遣りました、夫れから後にクンダムと云ふ所に行つて、其所にも數ケ月居りましが此間に四方八方から三十日も四十日も掛らなければ來られないやうな所から病人を連れて治療を托されました。

◎私共が最初西藏に參りましたときは、クンダムといふ所に暫く居りましたが、其所には立派な寺院が澤山ありました、一躰西藏の國民は二個の階級に分れて居る即ち喇嘛と（僧侶）普通の人民でこの喇嘛は常に寺院に住居して居りますが、其寺院たるや實に宏壯輪奐

の美を極めたものであつて皆山の中腹や或は絶頂に煉化と石とを以て構造されて居りまして其の景趣の雅なる事は丁度支那の風景畫其儘でございます、其れ故其寺院に登りて行くのは申すまでもなく中々困難でございますが道は皆石を切りて段々が出來て居ります、斯のやうに石や煉化て健固に造つた所の寺であるから一朝國内に爭亂などの起つた塲合には忽ちにしてこの寺院は變じて城壁となるのである、日本でもむかしは京都の叡山などでは寺院を城郭として戰爭をした事もあります。又この喇嘛の僧侶は何をして日を暮して居るかと申すに、彼等は外國人が思ふごとく決して悠々閑として遊惰の生涯を送つて居るのではなく、勤勉に其日を過し、中には非常に富んで財産の豊富なるものもあります、彼等の職業は主に醫師と教師て御座いまして、其他文官に屬する所の官吏は皆喇嘛の僧侶が就つてゐるのであります、その寺には弟子があつて喇嘛は夫れを教育致します、之は後日僧侶となるものですが兎に角西藏で讀み書きの出來るものは喇嘛僧に限つて居ります、從つて世間からも非常に尊敬されて居ります、喇嘛の首長は大喇嘛と申しますが、是は人民から王とも云はれて居ります、喇嘛以外の人民は多く牧畜を業として居るものであつて、彼等人民は耕作の術は知らずして單に羊や牛を飼ふ事を以て一生の事業として居るのである、それのみならず其羊や牛は彼等の財産となつて居るのである。



◎西藏の風俗を知らうと思へば婦人や小供に交際しなければ本統の狀態を察することが出來ません、さて婦人や小兒に交際するには何う云ふ方法を取るのが善い

かと申すと、彼等の住居たる天幕を訪問するより外はないのである。

一體此の西藏と云ふ國は世界の秘密國と言はれる位の處で他の國から此の土地へ來る事は容易の事業でないであるから交通機關といふものは絶體的にないといつてよろしい、で旅行するには歩行するか馬に乗るかの二つの方法より外にないが私共は歩く方は止して、馬に乗りました、狭隘い道路を田舎の方に向つて參りますと、向ふの方に鼠色に汚れた天幕が見えます、一體此國に於ては白い色の天幕はない、それは何うい譯かと云ふに喇嘛の僧侶が國内を旅行する時には白色の天幕を携帯することに定まつて居りますから、普通の人民は白い色のは決して用ひませぬ、先づ天幕の前て馬を下ると私共の身邊には、多くの老幼男女が群聚つて歡迎して呉れました。

◎さて彼等の衣服を見ると老若男女皆一様の調製で年齢や、階級や、男女に依つて變化區別をして居りません、でこの衣服は皆な羊の皮で、毛の附着した方を肌に着け、其裏の方を外面に出して着て居りますが、その調製法は極くゆるやかである、西藏人は支那人や蒙古人のやうに不潔を嫌はぬ人種と見えて、衣服の洗濯など云ふことはしない。夫れ故随分不潔なもので上には網の様なものを以て衣服を縛つて居りますが、唯婦人丈は黄色か又は萌黄色のひか／＼光つたものを帶にして締めて居ります。

◎またその寛やかな衣服の前の方には種々雜多の器物を挿し込んで居る、それは木で拵へた椀、火藥、嗅烟草、錢、權衡の様なもので、又横の方から見ると小刀を下げて居る、何故こんな權衡なんかを銘々持て居るかと云ふと、此國では銀貨が一番貴重の貨幣で夫れを受取つたり、又拂渡するには皆この權衡にかけて、取引するので御座います、所が中には不正直なものがあつて、其權衡が皆違うのである、即ち人に拂ふ時には重い權衡を使ひ、取る時には輕い方を使ふと云ふやうな有様である。次に天幕内の有様はどうかといふに幕内に床はなくて下は直ぐ地面に成つて居る、正面の

一段高い所には偶像が祀ッてあつて其側の方には皮が敷いてある、又家具としては木を刳て造ッた粗末な盆がある斗である夫から天幕の中央を見ると、羊や犢が居る、殊に冬期になると、此國では澤山な家畜を天幕の中へ入れて置きます、其れは暖味を取る爲めてある一體西藏は日本ていふと富士山の五合目と高さを同じくする位の高地てあッて、激烈に寒い國であるから動物を幕外に出して置いては、凍死するから、内へ入れて保護するのである、そこて外來の客があると、直ぐに出て來て兩方の手を出ます、其意味は直ぐ分るから私共は携帯して來た椀を出すと、それに支那から輸入された茶を注いて呉れる、西藏の人は食事をした跡の椀は決して洗はずに。舌を以て舐るのである、夫れ故、私共は人の舐めた器物でお茶を呑むことは嫌いてあるから何時も椀を携帯してまいりました。



○椀の序に食物の事を申しませう、西藏人の三食の重なるものは茶てあるが、その茶には牛酪が這入つて居る、茲て少しく牛酪のことをお話するが是れも普通の牛乳てはなく、ヤクといふ毛の長い牛の乳を搾つてそれを牛酪に製法したものである、夫故中には牛の毛や、羊の毛が澤山混入つて居ることもある、元來此國には材木と云ふものは一本も無く滿目蕭條として殆んど曠野の如くてあるから、随つて炭が無い、又た薪がない、然らば此國では燃料として何を用ふるかと云ふと、誠に口にするも憚る様な事であるが、動物の排泄した糞を乾燥して夫れを燃料にするのである私は往々旅行中に牛馬の糞を西藏人が運んで乾して居るのを見ましたが、彼等は手で其糞を掴んで乾し其手を洗うかと

思ふと矢張り洗ひません、只一寸着物で拂ふ丈でありまして、其手で直ぐ牛酪を拵へるのである而して其牛酪を茶の中に入れるのであるから其不潔汚穢は言語に絕へたものであるお茶は支那の磚茶と云ふので行李に入れて輸入して來るのである、之を挽くのは手であるが或時私は牛が二千頭も續て支那からお茶の這入つた行李を曳いて來るのを見ました、此國ではお茶の入れ方が普通の入れ方と違つて先づ湯を沸騰して其中にお茶を入れて其湯が奇麗な茶褐色を呈するやうになるまで、煮出した後で茶碗の中に注ぐのであるが注ぐと直ぐに牛酪を入れるのでその茶の上にはキラ〳〵と脂肪が浮きますが土人は夫れを皆悅んで飲んで居る。

◎又此の國に眼の惡い者が多い、どう云ふ譯かと云ふに一寸眼が焮衝しても、直に不潔な塵などの附着した布片を出して濫に眼を摩擦するからである、それでも水で洗へばよいけれども彼等は其位なことすらも知らないから、段々眼を惡くする。又彼等は沐浴をしないから非常に疾病に罹り易いのである支那の方に面して居る地方は支那との交通があるために、湯に入ることを知つて居りますが、內地の方に來ると一切而う云ふ事はしません、夏季になると全身に牛酪を塗て日光の中に出して置く、すると牛酪が日光に溶けて其上に塵埃が掛りますから、實に何とも云はれん樣なありさまです、私は西藏人に石鹼を拵へることゝ燐寸で火を拵へて湯に入ることゝを敎へたら餘程此國の病氣が減じ樣と思ひます。

◎私共も其後そこを去つて食物から衣服夜具及び醫療器械等を携へて田舍の方へ向つて出發しました、而うして到る處病人があれば療治して遣つて居りましたが、元來此國には非常に盜賊が多くて私共が夜分天幕の中に就眠して居るとそつと來て馬の手綱を切つて連れて行つて仕舞うて翌朝目を覺まして見ると乘るべき馬がない、爲めに所持の荷物を持ち運ぶことが出來ない已むを得ず其持つて來た品物を其所へ殘して出立する、而うすると村人は其後へ來て皆悅んで其品物を懷中して仕舞ふ、實に非道い人民である。

◎爾後三年を經過して私は夫と、去年生れたばかりの女兒とを抱へて人足を雇ひ、日用品とを用意してまた出發いたしました、茲て一ッお考へを願ひたいのは而う云ふ所に行と手紙を故郷に出す事も出來ません、また故郷からも手紙一本も受取ることも出來ません、併し夫れは元より決心の上てあるが始めは非常に不愉快に感じまして、宛然世界から切り離されたやうな氣持がいたしました、段々進んで行つた所が二個の山脈の間の地方に出ましたが、私共が行くのを聞いて彼方からも此方からも小供や病人を連れて來て療治して與れと云ひました、私共は手の屆く丈けしてやりまして夫れから復た内地の方に進んで參りました。

◎丁度九月頃でしたが不幸にも共私の小兒は死にました、さて此地方には材木と云ふものは皆目なく柩を造ることも出來ませぬて、據ろ無く其兒の屍は毛皮に包んで土葬に附しました、西藏國に於て土葬にされたのは私共の小供が始めてです、何故と云ふのに此地方ては埋葬と云ふ事はしない死者があると、衣服を脱がせて山に持つて行つて捨てゝ置く、而うすると隼のやうな鳥が來て其肉を食つてしまふ、風習とは言ひ乍ら何とも早言ひ様のない沙汰てあります、又地方によると其身體を細かく切つて喇嘛が掌の上に乘せて隼に食べさせる處もあるとか之れはつまり喇嘛の宗教の點から來て居るのてせう。私共は幼兒を葬つた上に石を横たへまして隼も之を食べないやうに又土人もこれを見つけて發掘ぬやうになしておいて心靜やかに其所を出發いたしました。



私共は小兒の死後そこを出發して或る都會に出此所

て二人の首長に出會ひましたが其中の一人はラッサ首府で教育を受けた僧侶でありました、其人が私共に西藏の地理を敎へて呉れました所が之等の人々は豫ねて賊と通じて居つたのか彼等が私共を伴れて行つた所は强盜の住家で御座いました、賊は私共を見ると高い崖から突然射擊を始め遮りに發砲する案内者は皆逃げて仕舞ひました私共は荷物を馬に乘せたなり、其所へ殘して置て一生懸命に逃げ出しましたが數日旅行を續けてとある村落に落つくと又賊に出會ひその爲め、とう〱良人は賊の兇刄に罹つて斃れました私は馬と一所に逃け出して殆んど二ヶ月計り逃げ續けて漸く支那人の案内者を賴んで支那まで逃げて參つたのであります。

クルップの模範村落　△△△

武器の製造を以て世界に名高き獨逸のクルップ會社は其富數億圓に上り其の製造所は方一哩に亘り、工場を始めとして各種の建築物は縱橫して玆にクルップ町と稱する一大市街を形造るまでに繁榮し膨脹して其の盛大宏壯の觀は眞に世界漫遊者の眼を驚ろかすものあり、而して其の會社の組織の如き頗る整頓せるものにてクルップ會社は即ち爰に一のクルップ王國を形造り、會社の重役を始めとして役員職工すべて此の會社に關係ある者は皆いづれも此の王國共同生活團の組織に從ひ、爰に新社會を造りて最も都合よき方法の下に生活しつゝあることとなるが、就中職工の組合たる共和團の組織こそ極めて面白ろきものにぞある。勿論クルップ工場の盛觀に就ては從來歐洲漫遊者の歸朝談によつて其の規模の壯大なるを紹介されし事なるが職工共和團の事に就ては是まであまり世人の談柄に上らざりしなり。

先年歐行の途次クルップ工場を參觀じたる大阪朝日新聞素川生の觀光記中の一節に詳しくこの職工の共和團を實見したる記事あり、是れを讀むに誠に文明國の一

美観にして世界著明の大會社の規模の大なるを窺ふに足るものあるを以てこゝに其一端を紹介せん。抑もこの「コロニー」と稱するは殖民地の謂にして「クルップ」の職工を以て村落を作り、學校より病院より、屠牛所、麪包燒、粉挽、製氷、刷毛、紙袋、仕立屋、靴屋、洗濯屋、旅館、麥酒屋、珈琲店、圖書館倶樂部等社會需用の諸機關を職工の村落を以て備へ、宛然一國を爲すを以てコロニーとは名づけしなり。先づ我等は其の近村より巡り始む。第一は兵營造りにて、最も舊創に屬す。職工等家族と與に其の一室々々に棲む。試みに轉宅等なきやと問へば、曰く有り、此の中倘名ばかりの貸屋料あり、貸屋料に多少の高下あれば、相互の相談にて時に轉宅することありと。此の兵營制の一部落を過ぎて次の村落に入れば、建築も新しく、庭園もあり、職工の住家としては立派過ぎるなり。次の村落は最も模範的に出來居り、一家族一軒の家に棲み、一家四五室あり。繞らすに庭園を以てし、百花競ひ開く、一戸々々多少の風致を異にし、宛然別莊ともいふ風なり。其の市塵を距ること遠く、空氣亦清良にして最も健康に適す。「クルップ」の職工たるもの何等の幸福にて、各別莊には棲み得るぞ。村落の數都合七箇所あり。われ等は其の三箇所を巡り、尋て養老村に至る。養老村とは二十五年以上勤續の職工にして年七十に達し、最早其の業に堪へぬものを此村に移し、恩給を與へて餘命を樂しましむるものなり。試に或る一家に立寄る。七十以上の老人、夫婦住居にて、終日無事に苦しむものゝ如く、長煙管を口にし、最ともノンきに又心安くわれ等を迎へ、二階へ迄伴れ上り、往にし日、皇后陛下の我家に臨御しまして、此の窓より眺め給ひ、最とも景色を賞で給ひぬなど、婆さんの物語なり。室内は二階も下も掃除行屆き種々の裝飾などして相娛めり、終には厨屋にまで、われ等を導き、ジャガ芋等の貯へあるを見めせり。家の周圍は花と菜園とを作り。月に一回、克留布夫人親しく巡廻して、室内を善く掃除し又庭園を奇麗に仕立てるものには、夫々手土產あるを例とし、彼等は克留布家を君主の如く尊崇し、

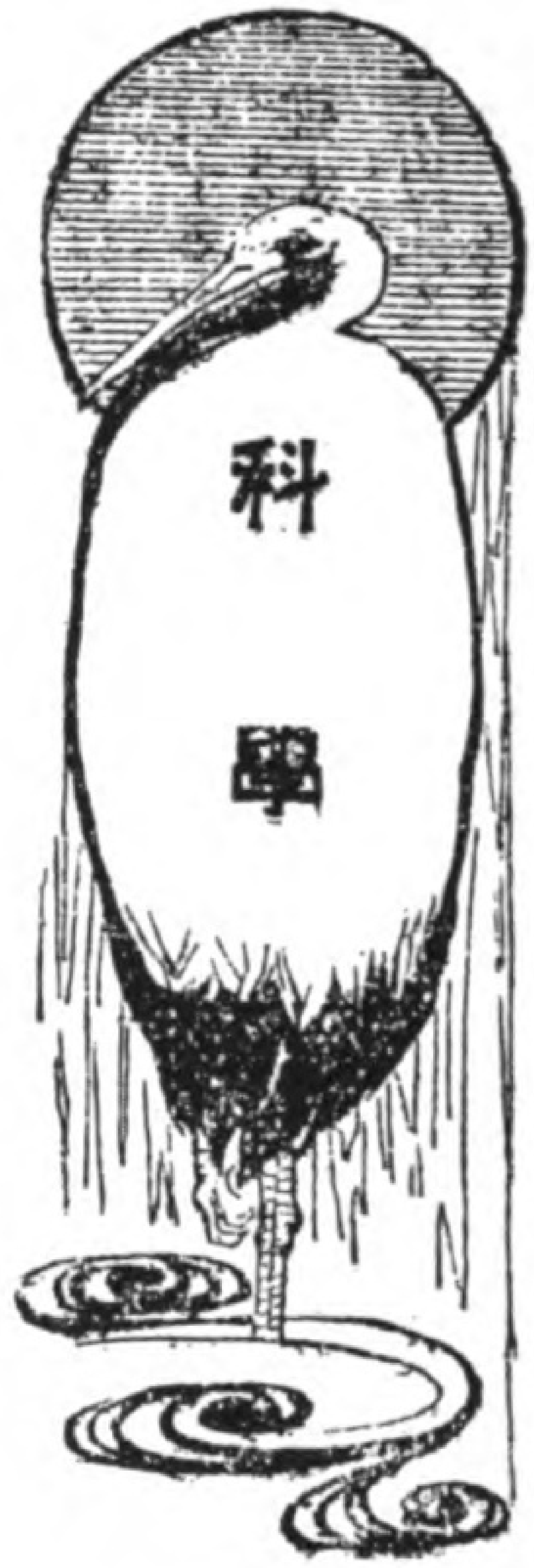
家毎に其眞影を奉ぜざるなき有様なれば、此の克留布夫人の巡視を此上なく有難がり、閑暇に苦しむ老人等、競うて花を植ゑ、庭の手入を爲しければ、實際に奇麗なること謂はん方なし。七十の老人のみと云へど、日本の七十老人よりは頗る壯健なるものゝみなり。又獨身の老人は、獨身の老人のみ集り居る家あり。又功勞ある職工の寡婦は、其れ等のみ集り居る家あり斯くて以上の七村落と養老村とを合せ、四千八百五十三戸ありとは、豈に驚くべきにあらずや。更に保養院なるものあり。中々立派な建物にして、庭園より森に連り、逍遙散策に宜し。這は「クルップ」の職工にして病氣したるもの、醫者の診斷に依り、最早健康に復し、就業するも差支なしと言渡されたるもの、更に此の保養院に送られ、二週間乃至三週間病後の保養を爲さしむる所なり。皇帝及び皇太子も曾て此家に臨み給ひて、竈の上なる鍋の蓋を取り、病人の食物を試み給ひしことあり。今は其の鍋蓋を紀念として扁額とは爲しあるなり。

斯る長閑なる村落、特に養老村などに入れば、衣食住何一つ不自由なく、世の浪風は何處を吹くらんといふ有様にて、從ひて心も優に氣も裕かなり。宛然羲皇以上の人と爲り、愉悅の氣滿面に溢れ。われ等馬車にて打通るを見ても、一々敬禮し、若し言を交ゆれば、其の心安きこと舊知の如し。由て惟ふ、人各其所に安んじ、何の憂ふる所なければ皆善人と爲る。世に盜賊ある皆社會の罪なり、人心不安の罪なりと。

コロニー制は斯の如し、而して更に購買組合等の設けあるは勿論にして、日用品を廉價に賣下げ、其の利益は一年二回、其買人に分配するなり。其の店の數のみにても、五十五軒あり。一年に獸類を屠りたる數のみにても一萬七千二百六十一頭の多きに達せりと。又職員には職員の公宅あり、且遊娯倶樂部あり、職工にも又倶樂部あり、其の子弟婦女には夫々手工教場あり、一切の設備整はざるなく。世の惡風醜俗を避けて、斬新世界中良風美俗を養ふの習ひあり。

氷界奇談

RM生



シベリヤの冬

西はウラル山麓より起りて、東は太平洋の沿岸に至る廣大無邊のシベリアも、氣候の寒烈なるため、殖民に適せざる地が僅かに其過半を占めておる、されば露國は亞細亞三分の一の廣土を占領しておるとはいふもの丶、其實は未だ何等の利益を收むることも出來ない、故に學者は殖民事業上此地を觀察して、三大界に區別して、氷結界、森林界、農業界と爲しておる、即ち氷結界と森林界とは、樹木の有無に依て區別せられ、森林界と農業界とは、穀物の稔熟と不稔熟とに區別せられておるので有る、今此三界に就て、氣候、風景上に眼を放てば、中々奇談が多い、風土の異なる溫帶地に住つてゐる我輩の眼を驚かすもの決して鮮少でない。

氷結界は、北緯六十三度を限りとして其以北一帶の空漠たる地を稱するもので、其地底は萬古氷結し、植物といつては、唯だ夏の七八十日間に、氷の表面が少し解けて、滿地皆な沼澤に化した處に、一種奇態な苔の展びるのを見るまでのことで、髮の毛ほどの樹木さへ發生しない。しかし此夏期七八十日の間は、溫帶地に於ても亦容易に見ることの出來ない好風景を現出し、水禽の大なるものは、雁、鴨、鷺、鵠を始めとし、

鷗、鷺の類に至るまで、群がり來りて沼澤の間に翱翔し、苔を啄むもの、啼くもの、飛ぶもの、或は關關、或は悠悠、其數幾千萬とも知れず、雪片の風に飜へるが如し、ソレに名も知れない獸類までが、南のかた森林界を辭して、同じく此地に聚合し、此等の水禽を餌にし、食に飽いては眠り、眠りては醒め、意の欲するまゝに遊んでゐる、我國のやうに獵師の射擊するでも無く、網を張るでも無いから、鳥も、獸も皆な能く馴れて、人に驚かず、例の野苔、池草を啄んで、五六步の前に和鳴するといふ有樣、身は動物園に遊んだも同じこと。

さて此ゝる快樂の時期も惜いことには、至て短日で、秋の八月に至れば、此等の鳥獸は、一齊に此樂土から退かねばならない、退かねばならないといふのは、天候の俄然として變色を現ずるため、凝結せる窮陰は、黯澹として地に垂れ、飛雪紛紛、滿野皆な白ふして一點の黑色を認むることは出來ない、萬派の河水も亦氷結するので、水陸の分界を識別することは出來ない、ソレに北氷洋の沿岸は、時に或は朔風が吹き荒み、波濤洶湧として、一里四方もあらうかとおもはるゝ氷塊を打ち寄せ、其上を洗ふ狂瀾怒濤までが、見る間に氷結して了ふので、瀕海一帶の地は、水晶のやうな、犬の牙のやうな、玻璃のやうな氷山が、峨峨として聳えてゐる、此れ亦奇觀ではあるが、氣候が何處までも寒いので、雪見酒などゝ、內地のやうに呑氣な遊びの出來たものではない。

斯くのごとく氷結界は氣候寒冽であるから、唯其夏期七八十日の間のみは禽獸の樂土たるべしと雖も、而かも人類及び植物の繁殖には、斷じて適合しないので有る、今ヤクートスク州に於ける一個年の平均溫度を舉ぐれば、零下十七度にして、夏季酷熱の候にしても、其溫度猶ほ十三度が關の山、冬季三ヶ月間の平均と來ては零下四十七度に下降し、最寒の夕には零下六十八度の低きに降下することも亦敢て珍らしとせない、さらば其地には、種々なる西比利亞土人及び少數の露國官吏、流罪人等が七八萬餘住んでゐるばかりて、土人

は常に馴鹿、犬を飼ひ、橇し牽かしめ、運搬の用に供し、或は其肉を食ひ、別に獸類を捕獲すること、別に何等の職業もなく生生死死してゐるので有る、奇なり、珍なりとはいへ、誠につまらぬ土地である。しかし玆に一ッ珍らしいのは、此地方は、氷雪の中より、往往にして前世界に於ける動物の遺骨の發見せられて、考古學者の研究の資料に供せらるゝ一事である、我邦の考古學者も、東京附近の貝塚など發掘し、石鏃の折れや、土鍋の割れや、

健康體は成るべく蠻的に鍛錬へたいが、體質の虚弱い人、病中、老人、小兒などには飲食物は必ず文明的の注意をせねばならぬこと無論である、今試みに此等の人の爲に所謂不消化物を擧げて見やう、植物質では胡瓜、蒟蒻、昆布、ひじき、あらめ、わかめ、海苔の類、牛蒡特に油煮、蓮根特に酢煮、甜瓜、煮豆、油揚、茸、蕈類、澤庵、未熟の果實など、動物質では貝類但し牡蠣を除く、章魚、烏賊特に乾烏賊を主として、古い鹽鯖、鹽鮭類、蒲鉾など、別けても蒲鉾といふもの、海に遠い所で造つたのには、腐敗り始めた麁物を利用した物が種々あり、これ等の中には味に分らぬ毒素の入つて當られる例があるから、餘程注意せねばならぬ、魚肉は刺身が一番消化れよい、次は燒いたもの、獸肉は筋や脂肪勝ちの部分の外は、一般の思つて居るより消化れよいが、犢の肉は分けてもよい、豚肉は比較的消化れ惡い、夫から主な食物の胃に滯在する時間は食事から食事迄の時間に關係があるから言はう米飯の一時間を最短として、パン一時間から二時間、生卵一時間半、乳二時間、馬鈴薯、煮豆二時間半、豚、牛肉四時間、夫からゆで卵は五時間で生卵とは大層な相違である。

一ッ二ッ拾つて、鬼の首でも取つたやうに得意に爲つておらうより、少し奮發し、氷山見物に出懸けたらよからう。

▲森林界

次に所謂森林界は、北緯六十三度より以南に横はれる地積で、樹木の密生せる處を稱したもので、其樹木の長大なることは、驚くばかりに亭亭として天腹を摩し、欝茂して日光を遮蔽し、太古の老樹、其根も、其幹も、漸く然腐朽しながら、猶ほ他木に支へられて倒るゝことが出來ないで、其樹

間に中立し、更らに新樹を生ずるなど、竒姿横生、此れ亦一大偉觀で、廣さは數百里、狹さも數十里、而かも彼のシベリア鐵道は往往にして此深林の中を横貫してあるので有る。

加ふるに此地方には湖や澤が多く、平生の空氣がすてに濕潤が上に、風力は樹間に及ばないから、夏季に至れば濕氣が陰蒸して、蚊や、虻のやうな毒蟲は、頻りに發生して、野獸を苦しむる、家畜を害する、熊のやうな猛獸でさへも、遠く遁逃して之れを避くるといふ有樣、されば土人は常に網を以て顔を覆ひ、家畜は、煙を爆らして之れを禦ぐので有るけれども、猶ほ或は衣服や、網の上から、其利嘴で以て皮膚を刺され、爲めに死に至ることも亦決して少くはない。

此毒霧陰陰たる大森林、露人は如何にして其中に鐵道の線路を布設したかといふに、先づ火を放つて燒拂ひ、燒殘りの枯木を折り倒し、地並を好くして、其處に枕木を並べて、然る後ち二條の鐵軌をおいたので有る、それ故、今に汽車に駕してシベリヤ大陸を横絕すれば、車窓の兩側に、眼の及ぶ限り、帆檣の林立したやうに枯れた大木の殘つておるのを認むる、而かもメレが二日行いても三日行いても盡きない所があるといふに至りては、大陸の光景ばかりは、誠とに島國人の夢想だもする所でない。

さらば此森林界の氣候は如何にもいふに、此れ亦酷寒の地で、冬季の溫度が零度以下二十九度乃至三十三度、夏季の溫度が十四度乃至十五度であるから、平均溫度は、矢張氷結界と同じく零度以下だ、尤も夏季でも、極暑の日は、時に或は十七八度を示すことのないとも限らないけれど、其冬季といふのが半年以上も繼續し、太陽の地平線上に出づることも至て低いから、地底は永久氷結し、寒威の凜冽なること、夏日の比較的溫煖なるに比して非常なる差異がある、然かし此森林界に於ける冬期の空氣の靜穩なることは、烈風の多いシベリアの一大奇現象で、烏鵲の飛行する時には、星の流れたあとのやうに、舟の通ツたあとのやうに、燐火の飛んだあとのやうに、其大空に一道の白氣を引

曳し、野鹿は到る處に群を成し、肩肩相摩して煖氣を取り、時に樹木や、巖石の寒氣に觸れて凍裂する聲、轟然として數里の遠きに響き、銃砲の響を聴くに同じである、斯くのごとく淒絶なる光景を現出するので有るが、慣れた土民は、之れが爲めに恐色なく、却て其空氣の靜穩なるを喜び、或は狩獵し、或は旅行し、愉決に此長日の冬期を消遣しつゝある、かくいへば、森林界の空氣は、何時も此通りに靜穩であるかのやうに聞ゆるが、必ずしも左樣でなく、時に或は猛風が吹起るので有る、而かも其猛風は必ず北から吹起るので有るから、凛烈たる寒威は俄かに數倍し、流石に慣れた土人も、之れには敵することの出來ないものと見え、孰れも蝦蟇のやうに爲りて室内に蟄居し、纔かに焚火の餘温で其凍死を免るゝといふ始末。

かくのごとく森林界は、樹木の發生には非常に適當し、現に松杉の繁茂せるものゝ多いけれど、其氣候は猶ほ未だ農業を施すには適してをらない、尤も日當りの宜しい處には、穀類の生長する處もある。

人躰と食物

すみれ

人間の身躰は十四の元素より成りて、其元素は肺臓皮膚、其他の所より常に蒸發し去り、其蒸發したるものは、食物によりて又躰中に入るものなれば、人の躰に必要なる元素を含たる食物を常に擇んで食するときは人は常に壯健にて居ることを得るの利あり今若し十三貫五百目の體量の人ありとせんに其人が强壯に働かんには日々百八十目より二百七十匁迄の固形食物と四百五十匁より七十二匁の流動食物を飲食し、又、十石より十二石五斗の容積ある空氣を吸入するを要すべし即ち人の躰内には夏も冬も、亦晝も夜も、不絶火の燃へて體温を保つものなるが故に、其烟は不絶肺及皮膚等より體外に溢出するなり然るに吾人が平常之を見能はざるは其の燃燒の度が竈に火を焚く如くに急激ならずして、徐々たるが故なりされど寒天に馬の汗などを見れば烟の如く蒸發氣の上り、又人間の口より息の白くな

りて出るを見る、蒸發氣は斯く常に體外に溢出しつゝあるなり、故に體溫を保つ爲には又能く相應の燃料を供せざる可らず。

　然らば其燃料には何を要するや、こは脂肪、糖質などの中に最も多く含蓄せらるゝ炭素と他の元素即ち酸素に逢ひて燃ゆるなり、この二個の元素は、倶に動植物を食し、呼吸をなすに依て人の體中に入來るなり。且又人體に必要なる元素の中にも筋肉を養ふ窒素あり、腦と神經とを養ふ燐素あり骨を養ふ石灰質あり、或は血液を養ふ爲め鐵氣、體溫を保つ爲に要する炭素酸素等の如きは最も人の爲に大切なるものなれば、それを程よく供給する食物を撰みて用ゆるを、學理上保健食料といふなり。然るに造化は精妙の配劑を以て吾人に供す即ち食物に付て研究するに驚くべき事實ありそは人類の食する食物の中に吾々人類に必要なる渾ての元素を吾々人類に必要なる丈けの分量に最も適當に含蓄せしめたる事なり。

　たとへば一個の麥粒を撿するに內部と包皮と、發芽部とあり內部は澱粉質とて人體の脂肪を造る爲に必要なる炭素を有し、周圍の薄黑き所は筋に必要なる窒素を含み、發芽部は腦神經等を養ふ燐素を有し、而して其分量は恰も人體に要する比例にして植物の含有したるは奇と云ふべし尙麥の外皮には人類に最も必要なる石灰質鐵質等あれども外皮は不消化なるを以て常用に適せず、故に是等は他の食物にて補はざる可らず。

　右の分析により吾人は麥の滋養に富たるを知べし、之と倶に篩にて篩はざる粉は、其篩ひて澱粉質即ち炭素のみとなりたるものより、遙に健康に益あるとを知るべし、人類の食物は體の必要なるに應じて食慾を來すものなり、假令ば筋肉を勞働する者は窒素の多き食物を好み腦を勞するよ甚しき人は之を養ふ爲に又多量の燐素を取らざるべからず。

　獨逸の化學者セルマン氏は監獄、兵營、病院等にて試驗の結果として左の如く言へり、即ちジャガ芋を重なる食物として用ゆるときは澱粉質のみ超過して窒素に欠乏するが故に筋力の衰退を來し、肉食をなさんと

するの食慾を起さしむ、麥とジャガ芋を比較すれば麥は筋肉を養ふ爲め百分の十四の窒素を有し腦及神經の爲には百分の二の燐素を含む、然るにジャガ芋は僅に百分の一の窒素を有し、二千分一の燐素を含むとを發見せり。

人類に必要なる三大要素と稱せらるゝものは脂肪、即ち體溫を保つ爲に砂糖、油、バタ等、筋力營養の爲に獸肉、魚肉、チース、豌豆、蠶豆、等腦神經の爲め貝類、肉類、豌豆、蠶豆、鳥類等にして、野菜物、果物は酸素とて血液を淸潔にし、水分を供給するものなり而して我等は食物に付て左の事を記臆せざる可らず即ち

(第一)蔬菜と肉類は等しく人類に必要なれば一方のみに偏せざる事、

(第二)寒冷の氣候には炭素食物を要する事即ち脂肪のもの砂糖の多きものを多く食すると、但暑中は可成之を避くる事、

(第三)脂肪糖質等の食物を用ゆるときは注意して運動をなさゞれは胃弱を來す事、

(第四)學生又は銀行に勤むる人、家内に蟄居する婦人仕立屋等の如き專ら坐居する人は油砂糖の如き炭素を含みたる食物を多く食せずして、魚鳥肉、若しくは果實の如き含窒素物を撰み食する事、

(第五)熱きもの、不消化のものを避くる事、

(第六)間食をなさず食事と食事との間は少くも四五時間を隔つる事、

(第七)食事を急がずして能く咀嚼する事、

造化は既に人類の求に應じて寒熱倶に適當の食物を與へ寒國には脂の多き獸類を供し熱國には淡泊なる穀物を供す又寒國の麥は暖國の麥に比して、炭素の部分多きが如く、夫れ〲人類の求に應じて不自由なからしむ、されば之を撰ばずして健康を害するは人類の過なれば我等は宜しく己の身躰の事に付て深く研究し健康を保つの法を守るべきなり。

日本に於ける婦人問題

此文は當淸國に於て發刊の獨乙新聞に掲載せる本邦婦人に關する記事の譯文に有之候日本女子教育に關し如何に外人の目に映じつゝあるかを知るに足るべくと譯作候に就ては御參考までに供へ候敬具

在天津

淸國駐屯軍司令官陸軍少將　仙　波　太　郎

女學世界記者足下

今を距ること三年以前、東京に開設せられたる女子大學校は、第一回の卒業試驗を施し、百二十名の生徒は本年(卅七年)四月九日を以て卒業證書を授與せられて退學せり、此日の模樣を話さんに、此校舍は四面櫻の林により繞らされあれば、時しも霞か雲かと見まがう許りに咲き亂れたる紅白の花の裡に、今日を晴と着飾りたる妙齡の乙女子が、妾共を見よと云はん許りに現れ出ぬ、そが中にも年うら若き第一年と、第二年の乙女等は、其友の乙女や、卒業生や、はては此日の賓客の爲めにとて自己の手になれる御馳走にかい〴〵しくも忙しく立ち廻はりぬ、そも大學校と云へば左も深遠の學理のみを研く所と思はるれど、此學校は幸にしからず、固より大學としては更に希望も抱負もありしならんも、兎に角一通り吾國の高等女學校の課程により之に手藝や料理法抔も敎ゆる仕組となり居るは此校の特色なりき、本來日本にては女子の義務敎育年限は四年と定めあるも、今には一般に六年に延長せらるべし、又女子の高等師範學校も設けられて女子が敎師に任用せらるゝ事となり居るのみならず、又格段に財產家の女子の爲めにも、特別の學校は設けられ、此處にて高等の敎育を受け品性の陶冶をなし又實地の事務の練習も稽古する次第となり居れば、漸次婦人の地位も高まり、はては他年男子

同等の權利の義務を負ふに至り得べきなり、從來婦人と云へば儀式に列するも木偶の如く、其行儀作法こそ如何にもしかつめらしく教育を受けしが如きも大衆の前にて飲み食ひする事は控目にするの習慣あり、所謂る子としては兩親に順ひ、妻としては夫と姑に順ひ老ゐては子に順ふべしとは婦人の服膺すべき、東洋流の訓言にして、從來の婦人は全く鉢のよき牢屋に押籠めらるゝと同様にて誠に情なき次第にてありき、今日に至りては女子の境界は漸々に自由となり、大道を行歩して遠き學校へ通學し、日日人生のあらゆる生活の有様をも目撃し思を精神界に馳せて其廣大なる價値に想到し、自然人間として男子に劣るなきの理を感ずるに至れり、社交的實驗律の原則によりて、かの職工の如きものにても、會社工場等衆人の中に於て働くが爲に不知不識社會の習慣、規則に制せられ、又吉凶禍福の事ある毎に互に相慶弔し、同情の念油然として生じ、人人互に相助け、隨て一致協力の輙むべきを覺り、從て自然に其操守も高尚となる次第なり、此と同じく社交律に從ひ、此種の大學校の爲めに、日本女子の地位も漸次上進すべきや疑を容れず、日本の婦人は今や政治上のとにも注意を拂ひ、現に此日女子大學の校長と卒業生の演説中にも、日露戦争の事に説き及びて、此戦争後に來るべき將來の時局に對し、日本婦人は如何にすべきやとの問題を以て語を結べり、唱歌は日本古來よりの習慣にて、殊に年の或時季には教師は問題を揭げて練習せしむるを常とせしが、此卒業式に於ても幾曲の歌は卒業生により歌はれ、又此式は唱歌を以て終りを告げたり。

此種の學校の設立は極東にては殆んど破天荒なり、余は信ず此種の學校は女子教育の中心となり、獨り日本婦人のみならず全極東の婦人の爲めに大なる誘導者たるに至らんと已に「シヤム」にては本年四月四日「バンコツク」に於て國王の保護の下に新に女學校を設け、王女學校と名け、王子の一等秘書官は其校長に任ぜられたりとの報ありき、此王子は世人の知る如く、前年英國より歸朝の途次、日本に立寄り、一二週間滞在し、其間に

於て女學校設立の必要を感じたる人なりき此學校の教育擔任者は日本婦人にて、其中には伊集院鐵子（安井哲子？）と呼べる教育學者を聘して本年二月十四日「バンコック」に着せり、女史は先づ其課程を準備教育と本教育とに分ち、九名宛の女子を入門せしめたり、是れ皆高貴の子女にして、其組織は全く日本の華族女學校に倣へるなり、鐵子女史は日本にては東洋婦人會の幹事にて、曾て女子師範學校に教鞭を取りしとあり、外に中島川村の二女史あり、此れ又た元と女子師範學校の教師にてありし、以上各女史の爲め送別會は本年（昨年）一月十八日東京にて擧げられ一行の成功を祝せり、蒙古にても已に千九百三年の夏、喀喇沁王は一人の日本婦人を女教師として招聘せり、その後此婦人は單簡なる書面を東京華族女學校の一教師に送れり、その中に云へる樣「妾は此地に到着後直に教育案を立て、王と王妃とに呈し、それによりて王室と高貴の子弟二十四人を教育するとなれり、此學校は十二月二十八日盛大なる儀式の下に開かれたりしが、生徒は皆初めて教育を受くるものゝみなり、而かも彼等は熱心に勉強を爲しつゝあり、妾は初め蒙古語に通ぜざるが爲めに、教育上少なからざる不便を感ずると思ひ、心配せしに、幸に王妃の母と王妃とは漢文には通せざるも、能く北京語を談じ、又一人の女婢ありて之れ亦北京語に通ずるを以て、妾の未熟なる支那語を蒙古語に譯して生徒に傳へ、かくして又平易なる日本語の言ひ廻し杯も敎へつゝあり、王御夫婦も毎日學課に臨まれ、王妃の母も亦敎へを受けんと申し居れり、爾來此地附近の人民はすべて日本の事は何事によらず賞讃するに至れり、生徒中一人の王妹あり當年十七歲の少女なれども、天性怜悧の御方にて、已に或蒙古王族と結婚の約ありと云ふ、近き將來に於ては他の蒙古王族も喀喇沁王族の如くに日本贔負になるは疑なき事と信ず云々」

東京華族女學校の生徒等は學課の後一時間宛、繃帶製造、其他出征陸海軍の爲めに勤勞中なり、他の學校にても此好例に倣ひ居るを見受けぬ。

現今日本にては總數七十九の高等女學校ありて其內官立は一、共立は七十一、私立は七ヶ處にして官立學校は一般に少き割合なり。

愛國婦人會は　皇族方より特別の眷顧を蒙り、有栖川宮殿下より五百圓、閑院宮、東伏見宮各殿下より三百圓、山階宮、梨本宮、賀陽宮各殿下

より百五十圓、同會に寄附せられたるが、此協會は特に癈兵を擁護するを主意とせるなり、日本　皇后陛下も、此婦人問題に就ては至極御同感を有し賜ひ　陛下には本年（昨年）三月十一日に於て華族女學校運動會に成らせらる、其の日の朝十時少し前に許多の宮女に侍かれ、同校に御到着あらせられ、常宮、周宮、富美宮、泰宮の内親王殿下を初めとして、東伏見宮、山階宮、梨本宮、伏見宮の各妃殿下は皆出迎あらせられ、皇后陛下の還啓あらせられしは其日の午後四時なりき當日の賓客中には徳川公爵夫人（前將軍家）島津公爵夫人（前大諸侯　鍋島侯爵及夫人木戸侯爵（新華族）英國公使「マクドナルト」及其夫人其他二三の英國貴婦人紳士等を見受けたりき。

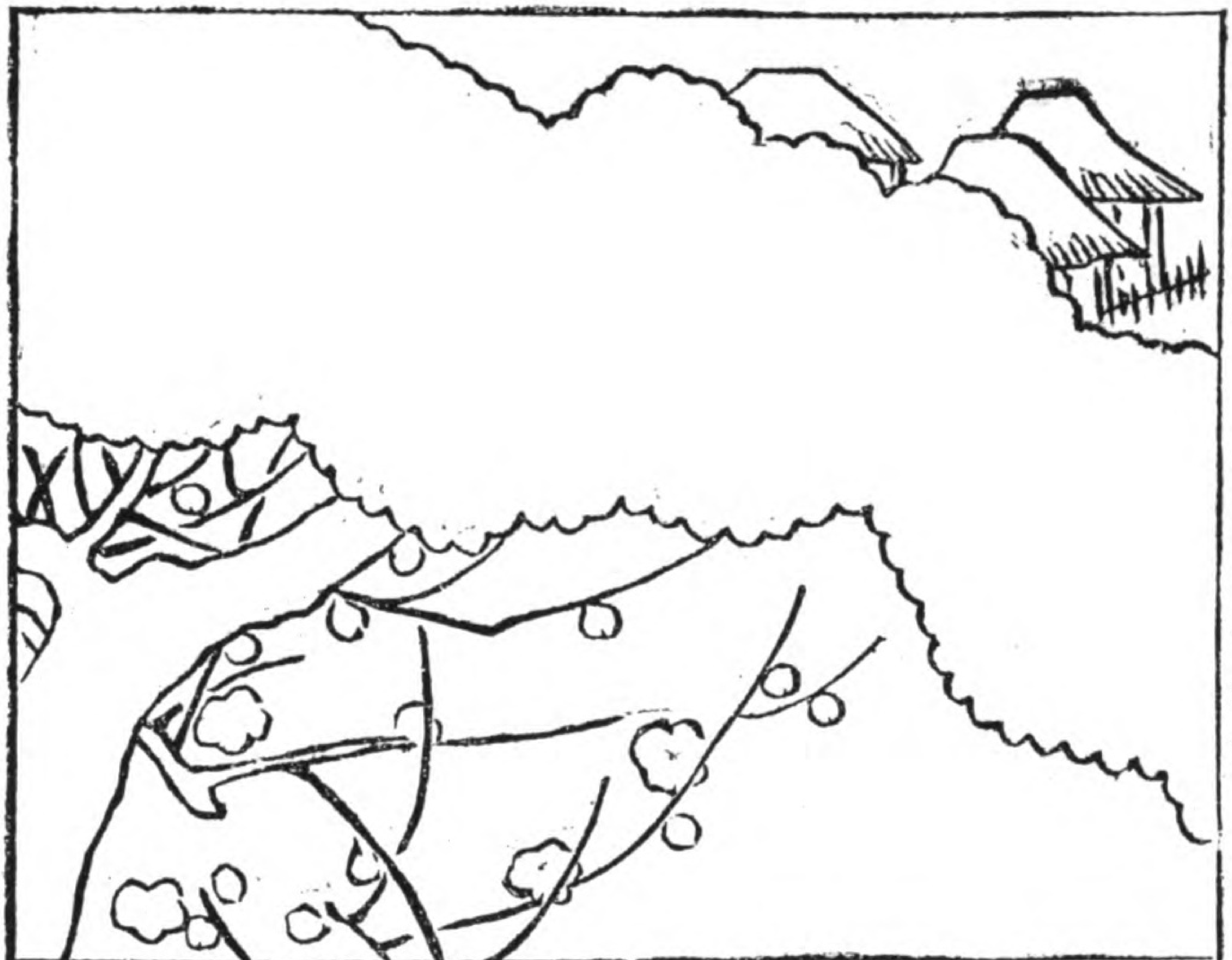
特志看護婦會は五月七日に開かれ會するものは伏見宮、山階宮、梨本宮の各妃殿下を初め奉り、其他百三十名の會員なりき、會長は鍋島侯爵夫人（大財産家舊大諸侯）にして、此日一人の軍醫は野戰病院の通氣法や其他に就て講談する所あり、此會よりは廣島の陸軍病院へ千五百箇の毛製頭紐其他を寄贈せり、神戸住の婦人にて清水ふうと呼へる者は、神戸市長に面會して一萬圓を軍事費中に献納せんと申出てたりしが、其擧動の怪しきか爲に拒絶せられたるも再度の熱心なる情願により取調の結果十萬圓の財産家なること分明となりたれば即時受理せられぬ。

又亞米利加赤十字社より負傷者救護の爲め若干の貴婦人は海を越えて渡米せし際、日本の貴婦人は横濱埠頭にて二日間而かも降雨の滂沱中に佇立して其來着を待ち受けたり、一行の延着の爲め日本婦人は日本の禮儀を破らざりし。

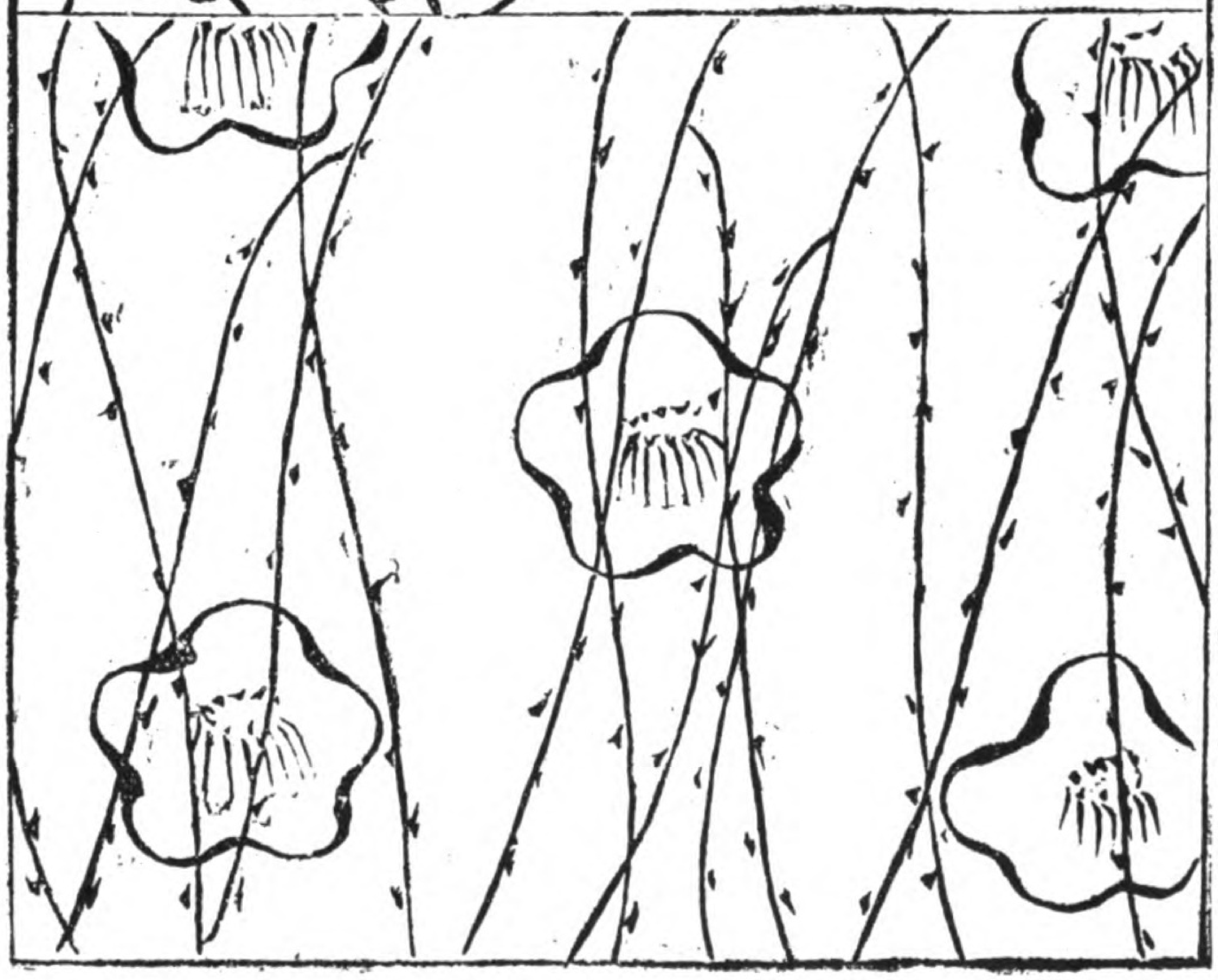
總武鐵道會社は十七歳より廿三歳迄の婦人を主要なる都市の事務員に任用し、又出版事業の進歩は婦人問題の上にも注意を加へ來り、昨年の末「貴婦人」と云ふ挿畫月刊雜誌は外國人の世話の下に刊行せられぬ、此紙上には日本文字にて歐米貴婦人の風俗を掲け、日本の服裝を改良せんとに努めつゝあり、實に服裝の事は單一の問題にあらず、實際上及經濟上必要の事件なり）日本衣裳の兩袖は蝴蝶の翼の如くにて物入嚢として用立つべきも、從て又煩はしきと甚しく、殊に動作を妨くる事云はん方なし、日本昔時の衣裳を見れは、一見して日本婦人は何事もなすなき家内の裝飾品に過きざりしを知るに足る、今日は然らず工業と競爭の時代なり、服裝の事も自然に變化せざるを得す、此際に於て斯る雜誌を刊行し、之を奬勵せるは實に賞讃すべき事なり。

英國令孃の和裝

英國リバープール大學教授ハーベーロブソン氏は今回其愛孃の十四歳なるが同國に於ける日本野戰病院寄附の慈善會に特志出演するより特に其服裝を日本風に爲さんと知人なる青山原宿の池野成一郎氏に和服の注文を依頼し來れるにぞ同氏は直ちに三井吳服店に注文し價格四百圓餘の品を誂へたるが今同店にて調製中の服裝意匠を聞くに上着は縮緬裾模樣（模樣荒波に鵆色は古代紫暈染下着胴貫二枚、長襦袢（紅縮緬の友禪染、疋田入鉦模樣）繻珍丸帶（白茶地蛇籠に吉野立田の合遙模樣）しごき（時色紋縮緬七寶に菊の地紋）帶止金具、草履は緋ビロードの鼻緒の三枚重ねにて其他絹足袋下締に至るまで一切取揃へ今月中に送荷するとの事なるが定めて當日の慈善會はこの令孃に依りて一異彩を添ゆるならん。



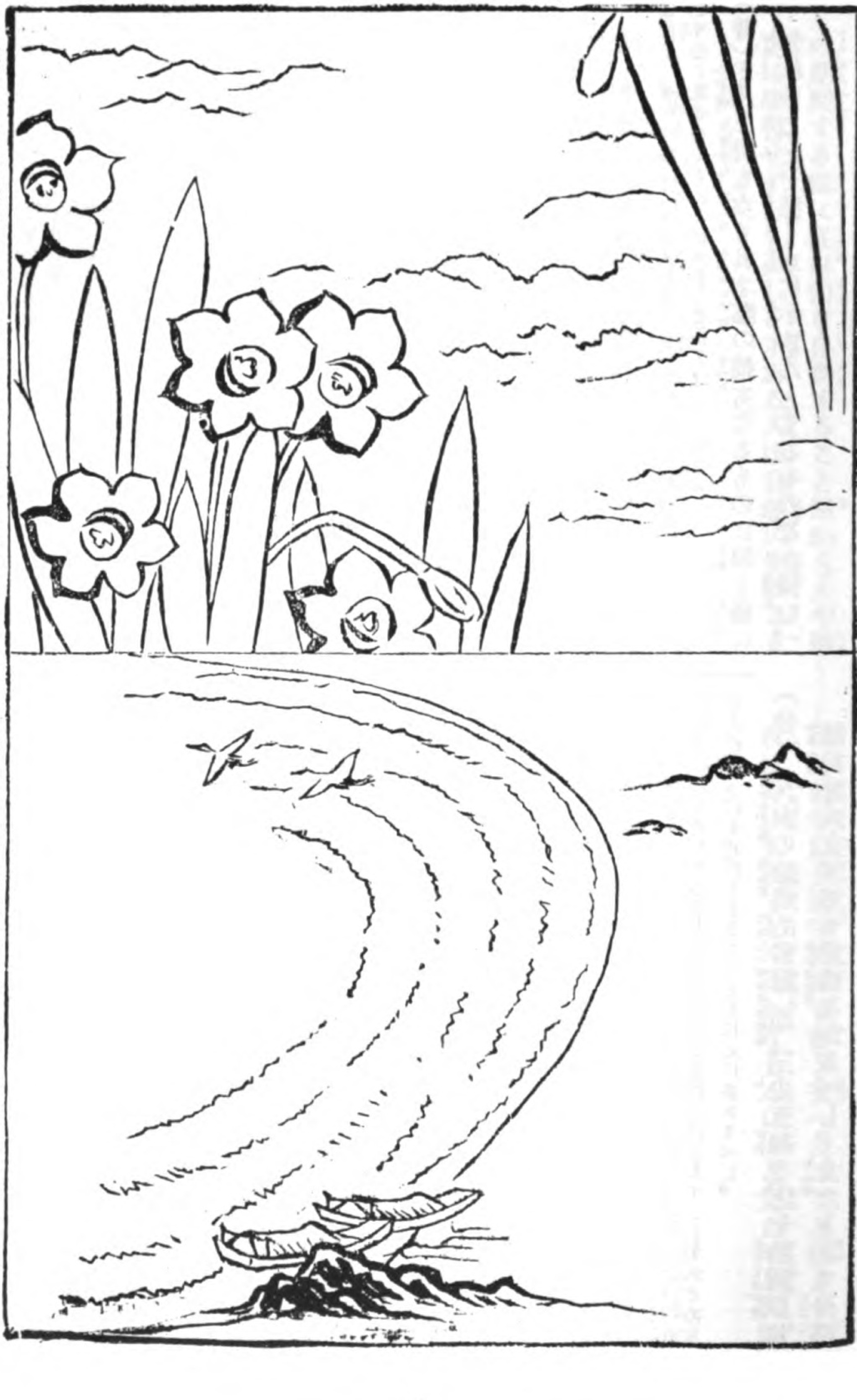
白梅のほつ／＼ひらく一重哉



青柳のあぶら流るゝ雫かな

いづくにか月の光はとゝむらんやとりし水もこほり居にけり

風さゆるとしまが磯の群千鳥たちゐは波のこゝろなりけり





雜録



紫式部と女學生

山田霞筑

これは源氏物語の帚木雨夜の品定の結論の處で頗る面白い處で、今日の女學生などにも隨分戒めとなるやうであるから書いて見たのである。原文を讀む人の爲にもと原文と私の試に書いて見た普通文とを、對照せしめてさて後評論に移ります。

（原文）すべてをとこも女もわろものはわつかにしれるかたのことをのこりなく見せつくさんと思へるこそいとほしけれ。

（普）凡て男も女も其才藝の拙劣なるものに限り僅に知れることを悉く人に示さんとするものなり憐むべし。

（評）男も女もとあれども重に女のことを云ふたのは次の文にて明である。孔子の知らざるを知らずと爲よとの金言は如何にも萬世不朽の名言で男にも女にも戒となるが殊に女にとりては必要である。女程自慢に流れ易いものはない、紫式部もこの弊を看破したと見える、書生としては朋友の前で赤面し、婦となりては其夫に對し其姑に對して面目を失せぬとも限らない、ゆめ／＼愼むべきことである。

三史五經の道にしかたを明にさとりあかさんこそあいきやうなからめ、などかは女といはんからに世にあることの公、わたくしにつけてむだにしらずいたらずしもあらんわざとならひまねばれどもすこしもかどあらん人のみゝにもめにもとまることしれんに多かるべし。

（普）又女の論議的書籍即三史五經などを物識顔に講說せんとするも愛嬌なかるべし。女たりとて公私

の見聞する處に從ひ何ぞ自得すること無からんや事更に學習せずとも少しく才ある人は自然に覺ゆること多かるべし。

（評）道々しきとは政治法律などの鹿爪らしきを云ふので、吾國は言擧げせぬ國と云つて餘り理窟などは好まぬ習慣であつた是は平安朝時代までも此風が引續いてあつたものと見える、殊に女の身分として漢文などは最不相應の學問て、才學を衒ふ丈けの學問に過ぎなかつたことは分る故に女としては却て愛嬌なからうと戒めたのてある。女と生れたからとて公のことと私のことにつけて自然に見聞するところによつて自得するとが多いものてある故に少しく才のある人は別段に學習せずとも大抵のことは自然に覺えるとの多いものてある。

さるまゝにはまんなはしりかきてさるまじき中の女ぶみになかばすぎて書きすゝめたるあなうたてこのかたのたをやかならましかばと見ゆかし。

（普）女にして若し己が才に誇りて同輩に送る文などにも過半以上漢字漢語を書き交へたるなど他より見れば今少し女らしく柔かならんにはと笑止千万に堪へざるべし。

（評）衒才的學問即漢字漢語を多く使用して讀めもせぬ友達に送るなどは實に沙汰の限りてある。今日の女學生の中にも頻に中古文を眞似て文を作らんとし又極はいから的に英佛の語などを囀りたがる分らず屋もあるから昔も今も女の自慢心とか虚榮心などは同しことゝ見える慨嘆の至りてある。

こゝちにはさしも思はさらめどなのつからこはくしきこえによみなされなどしつゝことさらびたりこれは上らうの中にもおほかることぞかし

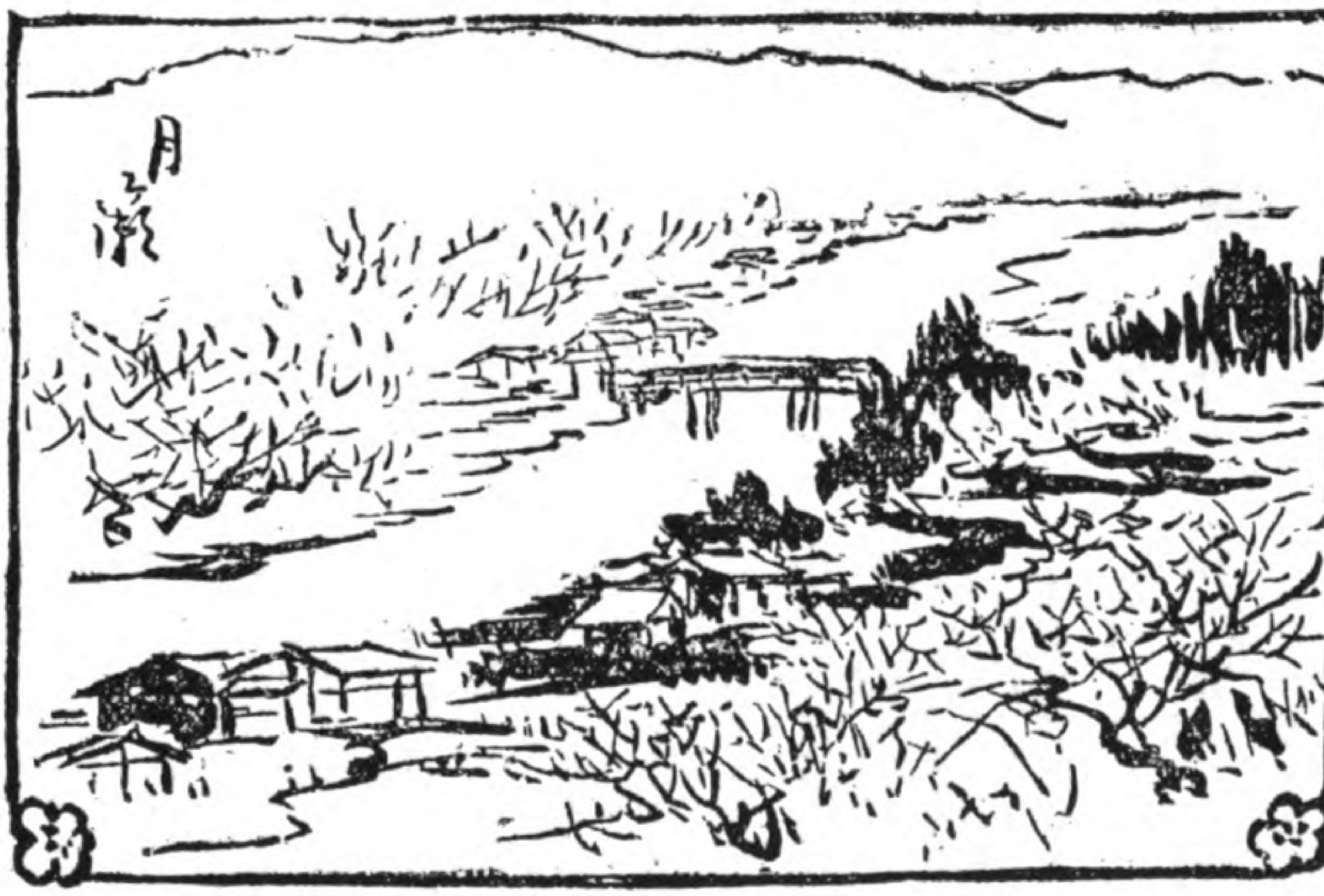
（普）其人の心には人に厭はせ憎まるべしとは思はざらむも自ら漢音の角立ちて聞ゆるなど其人の心までも見透さるべし。斯くの如きは上流社會にも多かるべし。

（評）自分で自分の事は分らぬもので其本人は之を書いたが爲に人に憎まれやうとも思はない否却て其學才を賞められるかとも思つて居るかも知れない然し

世間は凡て冷かなる頭を以て見るから却て自分の腹の中をも打破つて見せる樣なもので耻かく事が多いものである女は愼むべきものである。

うた詠むと思へる人のやがて歌にまつはれなかしき古事をもはしめよりとりこみつゝすさまじきなりく詠みかけたるこそものしけれかへしせれどなさけなしえせさらん人ははしたなかるべし。

（普）己は歌詠むと思へる人やがて其歌に熱中せる餘り趣味多き故事をも先その歌の種として然かも時ならず人に詠み送るなどは何とか評せんこれを受けたる人返歌せねば心なきに似、歌の何たるを辨せざる人は如何ともすること能はざるべし。



（評）これは學問と云ふことを一種の技藝の如く見てそれに熱中すると如何なる人でも其好める方に傾き過ぐるもので人間の通弊と云ふべきものである、其の傾きの度の過ぎる程人間の常識を失ふものである、故に學問は眞の目的が人間に完全なる常識を與へると云ふことなら教育者も被教育者も注意せねばならぬことである。生嚙りの學問は凡て此通弊に落ち入り易いものである。

さるべきせちゑなど五月の節會にいそきまゐるあしたなるのあやめも思ひしつめられぬにえならぬねをひきかけ九日の宴にまつかたき詩のこゝろを思ひめぐらしいとまなきをりに菊のつゆをかこちよせなどやうのつきなきいとなみにあはせさならてもおのつからげに後

に思へばなかしくもあはれにもあゝべかりけることのそのをりにつきなくめにもとまらぬなどをおしはからずよみいてたるなか〳〵心おくれて見ゆ。

(普) さるべき節會即五月の節に急ぎ參內せんとして風流のことなどは思ひ到らぬ時菖蒲の根にことよせて歌を送り重陽の宴に漢詩の意義を探り菊の露によせたる歌などを不意に送りて人の忙しきをも意とせざる如き凡て人をして徒に無益のことに心を勞せしむるは時機を辨ぜざるものゝ甚しきものなり。斯くの如きは心其日其折りに限りたるにあらず却て後に思へば面白く人を感動せしむること多かるべきに其時機を得ざるが爲に人の注意を引かざるをも知らず妄りに歌詠むなどは却て其人の心の劣れるを知るべし。

(評) 人には思ひやりと云ふことが必要である、場所折り、などを考へずに事をすると失敗に至らぬまでも見榮えのするものではない、殊に己が才學をてらはんとして先方の用事あるのをもかまはず歌など送ると云ふことはよろしくない。

よろつのことになとかはまでもと覺ゆる折々時々思ひ分かぬばかりの心にてはよしばみなさけ立たざらんなむめやすかるべきすべて心に知れらむことをも知らず顔にもてなし言はまほしきことをもひとつふたつのふしはすくすべくなむありける。

(普) 万事皆然り爲すべき時と爲すべからざる時とあり其爲すべからざる時をも辨へざる心ならば憖に歌などよみて心ありげに風流めかんなどは爲ざるに若かざるなり、凡て心に知れる事をも知らぬ體に裝ひ、言ひたきことをも一二句言ひ殘したるこそ奧床しくもまた貴けき。

(評) 西洋の諺にも女は敏捷に聞いて少しく言へと云ふことがある、我國の淑女とか上品な女とか云はれるものも昔しより此風である然るに近來女學校の勃興と共に一種の風潮に驅られて男子をも凌ぐばかりの雄辯を振ひ、生噛りの語學などを振廻はして用もなき眼鏡などをかけて其辯日常處世のことなどには常識を欠いても得々然たる者を見受けるやうであ

る。僅に知つて居る事柄を悉く言ふと澤山知つて居りながら少し言ひ殘す位にすると何れか奥床しいてしようか。

米國人の家庭教育に妙を得たる一例

米在カリホルニヤ　酒井政次

親は一農夫に過ぎなかッたが、子供の家庭教育には、一方ならぬ注意に注意を加へる人であつた。其子供が五六歳になると、早や、母親の爲めに薪を薪箱迄毎日二度づゝ運ばして、一度運ぶ毎に、父から五仙を與へるといふ約束であつた、が、父は其度毎に之を與へずして、自分勝手にとはいふものゝ、而も極正直に薪を運んだ度毎に或る帳面に附けさして居て、毎週の終りに其帳面を見て、應分の賃金を仕拂ふ事として居た。最も日に二度と定てあれば、運び入れた度數を認める必要はないのであるが、斯樣にせなければならぬと云ふ理由は、日に二度づゝの外特別に母親から注文せられる事もあるからだそうな。此子供は病氣とか、外出するとか、其他の事情で自分が薪を運べぬ時には、兄が三人あるので其內の誰かに助けを願いよつた、故に毎週父から賃金の總計を受取つたら先づ兄の三人に應分の御禮をいたし、其殘りの內少しの小使錢を引去りて、其殘餘は、銀行同樣に父の手許へ預けて居た。

此子供の兄三人も等しく此心掛よき兩親の、秀でた腕前に依て育てあげられたのであるから、皆感心に成育して行きよる、末から第二番の子供は、今年は取ての十歳であるが、父と共同で豚の兒を育てあげるのを仕事として居る。其內實は親と子とであるが、年少の子供が熱心に此業に從事して居る樣は、一見他人同志の共同事業とより思へなんだ。而して未だ若年なれ共斯道に熱心なる結果豚兒を養育する事と來たら、實に年長者を驚かすに足つて居たさうです。故に年々歳々の純益金も多額であつたが、それは無論親と二ッ分けてあるから、其取分の多分は銀行に預けるといふ樣にし

て居かから、少なからぬ貯金があるといふ事です。又其次の兄は、養鷄を業として居ましたが、之れも出精の結果非常に好結果であつた。此れは東部に於ける話ですが、養鷄と來たら、氣候から云ふても其他何れの方面から云つても、當伽洲は養鷄に適する事米國第一と申す事で、此れは唯適するのみではなく、實際收益が多いとの事です。米國養鷄に就ての詳しい事はいづれ其内調べて申しませう。

扨此子の兄即ち長男は十八歳であるが、此子も他の三人の樣に育てあげられたのですが、斯かる事を以て生涯の仕事とはせず、斯かる肥沃なる新天地に生れ農業に從ひ斯道を以て名聲を世界に擧げざるは、天の賜を無にするものなりとて、目下斯道研究の爲め農科大學にて勉學中なりと。而して其學資一切も自身の貯金を以てし、猶ほ殘金に父より借り受けたる金を以て僅かの地所を求めたり、且つ父より借り受けたる金に對しては應分の利子を仕拂ひ居るなりと。

斯かる心掛けよき兩親は實に得易からざる人といふべし。され共此二人の間に女兒なかりしかば此等二人が如何に女兒を養育するやに就ては、良き方法を知り居るや否やを知らず。

羅馬の遺跡

小羊生

羅馬帝國といへば二千年のむかし今の歐羅巴全土を風靡した一大帝國で、今の歐洲各國はいづれも一度は羅馬の版圖であつて、その赫々たる武强國の名は歷史上の花として見るべきものであるが、爾來蒙古人種の爲め、或は日耳曼の野蠻人種の爲に段々に侵蝕されて、遂に千五百年以前の昔衰亡して、今は唯其空名を伊太利の一隅に止め、爾來今日の歐羅巴各國といふものが出來たのである、其の歷史上有名なる羅馬といふものは果して如何なる規模を有して居たのであるかを今日遺つてゐる遺跡に就て調べて見ると中々趣味のある事柄である、これに就て坪井博士の語られた羅馬の遺跡

談は頗る面白いから聊か西洋歴史を學ぶ人々の參考にまで。

◎抑も羅馬の起りは三千年ほど以前であつて詩人の物語などに傳はつて居るの外、殆んど考證すべき記錄はありませんが其處で先づ地理に依つて考究して見ませう伊太利半島の中央西南の海岸に一つの原野がある、其最も長い處は十三里、最も廣い所は十五里ばかりでありますが、其中には川もあり、沼もあり、先づ無用の地を除けば五里四方と見て差支はない、此原野の中央にチーベル今はテーベルと云ふ川が流れて居る、川幅は平均四十四間ばかりである、此川の注口が羅馬時代に有名なオスチャ港であつたが、今は荒れ果た村となつて殘つて居るばかりである、此邊は有名なマラリヤ熱の發生地で、其水を呑むと直ぐマラリヤに罹るので旅行者は態々飲料水を携へて行く始末である。

◎此オスチャ港から殆んど七里、鐵道路で九里ばかり川上に上つた所に、昔時の羅馬の遺跡があるのである、チーベル川は此邊から溪谷となり、出水のため其近傍の高臺の崩れて、斷崖絶壁となり、離島のやうなものが幾つも出來て居る、其のマーストランクスと云ふのが羅馬の根據地である、此の地が三方が斷崖になつて、一方のみ山手の方に連つて居る、其高さはチーベルの川床から百尺位である、此高臺の上は一寸菱形の樣になつて居つて、其總坪數は僅かに六万千五百坪であるが、其中に住居地と認めらるべきものは僅に五千五百八十六坪である、此地は神聖の地として保存せられ、羅馬人の祖先と稱するカーサーロミールスの住んで居つた茅葺の家(五間に三間)が保存されて居る。

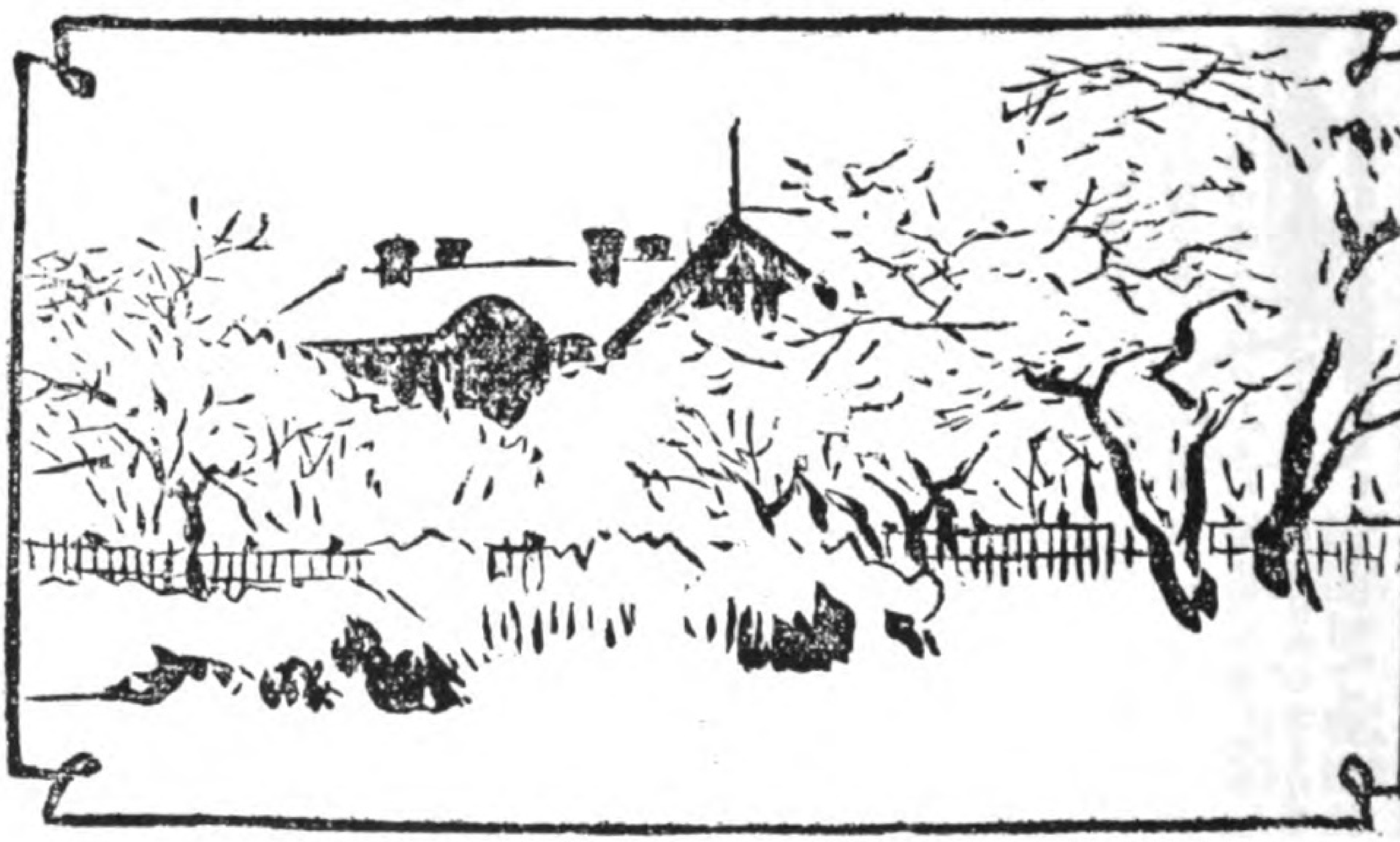
羅馬人は斯る地に住んで如何なることをして居つたかと云ふに、彼等は農業の民でもなく、又た商業の民でもなく、全く牧畜を業として居つたことが明かである。即ち此邊の地質は火山層より成立ちて、とても耕作などすることは出來ない、其處で羅馬の住人は此高臺に住んで、牧畜を營んで居つたのである。

◎彼等は此六万坪餘の地面の四方に城壁を設けて敵に攻められたる時の備へをなし、又其野畜を放つために

大なる空地を設けたのである。

◎此城壁は今より二千年前に掘り返されたが、其石の積みやうなどより考へるに決して後人の造つたものでない。

◎又た有名なチーペルの板橋は今も尚ほエトロスカ地方より羅馬に通ずる往還の所に殘つて居るが、是れは其昔チーペル川に架つて居つた只一の橋で、羅馬帝國の盛んな頃も其紀念のため昔時のまゝになして、改造を加へなかつたのである、此橋は全く木材のみにて金物と云へば釘一つも用ひてない、實に古代の橋である、是れから見ると羅馬はエトロスカ地方から北部に通ずる往還の宿場の樣なものであつたてとが分るのである。



◎又た羅馬の盛んになつたのは、エトロスカ地方と貿易をした爲めであると云ふものがある、夫れは大なる間違である、此時代にはエトロスカ地方は余程發達して美術も盛てあり、彫刻物、鑄物など實に立派なものを產して居る、所で羅馬人はどうであるかと云ふに、草さへ十分に發育せぬ所に住んで牧畜をして居た位だから、エトロスカの產物と貿易すべき產物がないのである。

◎偖て前に云つた五里四方の平野の中には所々に當時羅馬と競爭して居つたアルデヤ、アレヲムネーなど云ふ都市の遺跡が殘つて居る、總て其時分の都市は高臺にあつて、其四方に城壁を廻らし、其中に住居地を作つて居つたもので、此都市が即ち國

であつたのである、即ち羅馬は羅馬と云ふ都市（部落）の名であつて其は川添ひと云ふ意味から取たのである。

◎此小い羅馬がどうして大なるものとなつたかと云ふと、他の部落のものが段々山から出て來り、羅馬の近傍に移住して羅馬人となり、遂に自己の防禦上他の都市を滅ぼして遂に之を支配するとになつたのである。

◎チーベル川の沿崖にある村は多く高臺の上に建てられ、住民は或る時期を限り老人小供等を其村に止め、其他は原野に下りて其處に假住居をなし、其田野を耕し其時期を過すと又た高臺に歸ると云ふ有樣であつたそれはマナリヤの怖ひのと一つは追剝の心配があるからである。

◎此地方の追剝は隊をなして出沒し旅人などを惱ますので、人々が旅行する時には護身のピストルを携へて行くのである實に泥坊と乞食は此の地の名物と云つてもよろしい。

◎土人は斯樣な譯で原野に住むことが出來ないので、高臺を撰んで村を作つたのである、偖て高臺になつて見ると、其上に又高臺があつて、夫れから下の高臺を見下す樣になり、下の高臺に居るものは一日も防禦を怠ることが出來ない、其處で羅馬人は其の高臺の敵を亡ぼさなければ安固に自立することが出來ないと云ふ考へから、生存上近隣を亡ぼして遂に大きくなつたのである。即ち羅馬は商業に依てゞなく戰爭に依つて圖を興したのである。

米國老婦人

聖ルイス博覽會へ差遣されたる箕作博士は曩に米國の一老婦人と同乘して與に歸朝の途に就きしが扨て此の老婦人は博士が嘗てエール大學に學生たりし頃、己れを實子の如く愛し呉れたるミス、ゴールドスートとて本年七十一歲の老婦人なるが、博士が博覽會見物の途次久々にてニユーヘブンに件の婦人を訪ひたるに、婦人は非常に悅び、俄に親族會議を開き、自分は子もなき身なれば我が最も愛する日本の箕作博士の事業を受け、戰捷國の光景を見て日本の土となりたしとの決心よりして、扨こそ博士と共に日本に來りしよしなる由、されば博士は懇切に婦人の世話をなし永く日本のパラダイスに老婦が餘生を養はしめんはずなりとぞ。



ステッセル將軍夫人稻佐の客寓

旅順の降將ステッセルの宿りしは露國に緣ある長崎稻佐のお榮方別莊なる事は既に世人の熟知する處ろなるが、その別莊といふは稻佐の背面、一段高き山腹に當りて三面堅固なる石垣を築き、一見城廓の如き構を以て二階建と平家と其棟を接したる數奇を凝らせる建物にして、これに通ずるの細徑は、十數の石磴を上りては又上り、漸くに阪路を上りてその庭前に出づれば、家飽迄手入の屆きたる庭園は廣からねども趣味あり、家は東南に面して遠く長崎全市街の瓦甍鱗次せるを望み光景尤も佳絶なり、その平家建の一棟これ即ち和洋折衷にして實にステッセルの起居せる處、洋風の玻璃窓に接して廣椽ありステッセルの好んで散歩する處なりと聞く、當時大阪の某記者が訪問して其風采を見たりといふにかれステッセル將軍は顏色赤く鬚また赤色を帶び、素より堂々の風采なしと雖も一個の威嚴は確かに眉宇の間に存せりといふ、又その夫人は滿身肥え太りて偉大なれども新聞などにて賞贊するが如く別段壯烈なる意氣を具ふる婦人とは見受けざりしといふ。

ス將軍夫人は稻佐の阿えいその娘千代の案内にて散歩を試み、舟邊雜貨店にて種々買物をしたるか、中に琥珀織にて日本婦人服二着を作りたり、一は藤色にて袖襟に縫物の飾り付き、一は水色玳瑁模樣、孰れも袷なり、又帶も作りたるが、同じく琥珀にて締めて長く垂るゝ樣に作らしめ、又着物の後にひだをつけたり、一見日本と支那の折衷に似たるものなり、此價一着に付約六十圓なりしと、夫人は身躰長大なれども音聲優しく、溫雅の風采あり、又別に木綿縮織の白大巾のもの多く買ひ入れたりと又當地の人々には解放者を扱ふには頗る愼重の注意を

用ゐ、歡迎宜しきを得んがため苦心の程見へ、稻佐を上陸地となしたるも他に取締上適當の地なかりし故詮方なくこゝを撰びしなりと娼妓などは別に一處にかためて外出を制限しあれば我國の躰面を損することなかりき。

扨又一行の婦人は久しく籠城の辛酸を嘗め盡して顏色憔悴の者もありしも、概して擧動快活容色美なる者多く、思ひ〳〵の服を着け、帽子又一定せす、中に乳飮み子を抱きたるあり、臨月とも覺しき腹をなしたるもあり、日々憂苦に責められ居たるに、上陸して慰安を得たるためにや、多くは嬉々微笑して且つ母子姉妹幼見を擁し、喃々として語る樣呑氣に見受けたり其内に稻佐護神寺門内にて出迎ひたる夫を見て相擁し接吻をなしたるもありしといふ。

又長崎にてステッセル將軍へ種々の贈物せし者ありしも將軍の受たるは大臣よりの三鞭酒と葡萄酒、知事よりの蜜柑箱入、市長よりの三鞭酒と林檎、婦人會よりの玩具のみにて其他のものに對しては悉く之を謝絶したり、其辭柄は極めて巧みにして又た要を得たるものなりき、即ち其言に曰く「贈物を寄せられたるは感銘に堪へざる所なるも、吾今の境遇にあるは諸君の贈物を受くるの權利を有せざるを悲しむ、他日此の光榮ある贈物を受け得る地位を得て諸君と逢ふの日あらば謹んで厚意を併せ受け納めんと」言ひしとなん。

海戰の逸話　上村中將　（高等女學校にて）

去月十五日の事なりき芝の東京高等女學校に於て旅順陷落祝賀會を開き折から歸京中なる上村海軍中將を招請して戰爭談を聞けり其談話の一二を記せば

時は二月の初旬仁川旅順の海戰の數日前であつた、或夜の夜半近き頃、豫て佐世保に集合せる我艦隊に突如として長文の電報が達した、披いて見れて一刻千秋の思ひて待居れる　大命である「艦隊は直に敵艦隊を擊破して餘力なからしめよ」との　勅命であつて、豫て心に期して居つたとは言へ、十年以來の敵たる露國に

對して愈よ多年磨き來れる腕が揮はれるかと思ふと、流石に事新らしく心が騒ぐのか、全艦隊の將士の面には言ふべからざる光りが見えた、喜び立つたとか踴躍したとか言ふと一般に祝盃でも擧げて騒ぐものと思ふだらうが、感激の極度に達すると決して其樣な事の出來るものでない、眞の喜びは只涙である、全艦の將士一人として涙を浮べぬ者はなかつた。

又八月十四日の蔚山沖の海戰で、私の艦隊がリユーリックを擊沈した顛末は既に人の知る通りであるが、當時我第二艦隊は未だ沈まざるリユーリックを瓜生中將の艦隊に任せて、ロシヤ、グロムボイの二艦を追ふた、併し考へて見ればリユーリックは一万噸以上の裝甲巡洋艦で、大砲などで沈められる艦でない、夫に比べると數こそ勝れ瓜生艦隊は何れも二等巡洋艦であるから歷戰甚だ危險である、定めて苦戰して居るであらう、敵を追ふよりは先づ味方の急を救はねばならぬと思直して取て返した、然るに此時は敵艦全く沈み果てゝ、乘組員は艦材の浮流する上に小鳥の群がるやうに取附いて漂ふて居るので、ソレ救へと言ふて、直ちに端艇を下させ收容に掛たが、私は此時敵に勇士の多のに感服した、勇敢な我兵卒でも片腕片足を失くするやうでは擔架で舁かれて歩くのだが、當時浮流物に取附いて泳ぎ居れる重傷者の中に僅に皮で繋がつた片腕のぶら〳〵するのを泳ぐに邪魔だと、自らチヤつて棄てた者がある。

又既に片足のもげて居るにも拘らず平氣で端艇に上る者があつた後で此事を軍醫に話すと夫は神經が鈍い爲に痛みを感ぜぬのだらう抔と笑ふたのであつたが戲談は兎に角勇士の多いのは事實である、其から六百三人と云ふ者を收容して佐世保に送り、特に鄭重な治療を受けさせたのだが、此度歸國の途次此艦の負傷者百八十人中死亡した者は只五人だと聞いて大いに滿足に思ふて居る。

又之は特に此女學校の生徒諸君に望のだが、戰局の前途は未だ〳〵遠いから油斷して居られる場合でない、南に來る波羅的艦隊と、北は浦鹽に殘る艦隊を擊破せ

ねば心を安んずる事は出來ぬ。私も東郷大將もお召に依つて歸つたのだが、此度又々恭き勅命を蒙つて或方面に赴くのだ、然れば私が戰地に赴いて任務に服するも諸君が學校に在つて將來良妻賢母となるべき力を養ふのも、國家に報ずる點に於ては何の異る處はないのだ。私の前途は如何なるか判明らぬが、幸ひにして無事凱旋する事を得た曉には此戰爭中何方が何れ丈けの勉强をしたか勉强較べをして見度いと思ふ、國民たる者は何卒其意で一意報國の念に反かぬ働きをするやう切望に堪へないのである云々。

旅順俘虜 少女イワノーの話

頃日似島へ送られた七歳の俘虜少女はエウゲニヤ、イワノフと言つてブラゴインチエスクの生れ、母と弟と彼女との三人暮してあつたが母は先年亡くなり弟も續いて現世を去つたので其からはホンの一人法師、前より育てられた日本婦人の手に託つて辛と成長する矢先に日露開戰となつて其日本婦人も祖國に引揚げた、この小さな憐れな者は溫かな慈愛の光にも觸れず寒さも寒き北地の吹雪に埋もれんとしたのを唯一人の叔父なる軍人が旅順の戰場に伴ひ行き幾百度となく悴ろしき戰爭を經て果は今度日本の俘虜となつたものである、似島にて通譯は少女に向ひ「さぞ戰爭が怖かつたらうナ」と尋ねると少女は嫣然と笑つて「イ、エ、初めは怖かつたが後には慣れて平氣になつたの」と答へ、更に愛らしき眼を見張つて「一度妾の前に大きな彈丸が落ちて怪我をしました」と言添へぬ、少女は日本婦人に育てられた故か少しも日本人を怖がる樣子はなく、先日松山に送らるゝ事となつて似島から宇品へ廻されると通譯に向ひて「此處は何といふ所？」と問ふ、通譯は「廣島」と答へると少女は鈴の樣な眼に一杯涙を含んで「廣島？妾の保母は廣島の者、名はまさ、是非逢はして頂戴」と、洋袴に抱きつきて放さず、通譯は奈何にも哀れに思つたれど唯廣島のまさでは尋ねやうなきに詞を和らげて詳しく言ひ聞かすと少女は涙をホ

ロ〱と流して手に携へ居る密柑と林檎の籠を指し、『妾、保母に遣らうと思つて』と、言ひ掛けて泣き出したるを通譯は種々に宥め賺して辛と聞分けさせたり憐れなる話にこそ。（某新聞）

沙河滯陣　兵士の正月

奈良縣出征の某兵士がその故郷へ送りたる消息に神風や滿洲天地吹き清め、一寸正月の光景を申せば、支那の長持の上に「兩陛下萬歲」と分隊所屬戰死者姓名とを謹書して其前に觀音樣及び氏神樣の御守袋を肌より離して祭り、鏡餅、密柑、柿、御酒を供へ、燈明には蠟燭を立て、家屋內には自分の部下十九名と一處に居りますから是が所謂軍隊の一家內、偖て餅搗は去年の三十日に致した種々の御馳走の準備は昨日にすまし、今朝からは只飲んで喰ふて祝うて居るばかり風呂も昨日瓶に湯を沸して入りました、髮や鬚は勿論三日も前に清潔に散髮しました元旦の御馳走は三度常食物以外に、魚肉、野菜、酒に餅十餘種の佳味、食ふことをのみ樂しみとする我々は右の品々で種々の御馳走を作り「あん附け餅」も出征以來初めて味ひました、私の樣な下戶連は五合の餅では足らず喰ひ餘しの白米で「あられの餅」を搗きました。

萬歲の聲は各所に起り淨瑠璃、浮かれぶし、劍舞其他の餘興あり、此演者は皆內地での本職達だから中々面白い、只今も其餘興先きから迎ひに來て吳れるので此手紙を書き終れば順次覗きに行くつもり、內地では定めて淋しき正月をして居るかと思召さんが、實際は中々陽氣なもの、明日をも知らぬ身なんぞ、そんな考へを懷いて居る者は一人もない一休和尚が「なる樣にしか成らん」と言はれた通りですから、來年の正月を哈爾賓で迎へるか或は故郷で皆樣と共にする樣になるか、其れは自然に任してどつちにか成る迄は一月でも面白くをかしく暮せば、命が延びるのですから、私は其主義てす、今朝の御祝にも男ばかりで酌婦なしてすから伯父さんからと大阪からと送つて吳れた鰤はが

きと(美人)寫眞殊に大阪から送つて呉れた名高い美人寫眞を前に揃へて見ながらの御祝です、今皆が歌つて居る歌は「支那が座敷で日本が客で露兵が藝者で引くばかり」何と面白いではありませぬか、呑氣な滞陣也。

旅順 俘虜の風采

旅順口は一月二日に開城の條約整ひ同じく五日より捕虜引渡しの實行となつた扨てその處は西港の西端にある、鳩湖村であつたが陸續たる俘虜はぞろ〳〵と連續つて歩くその光景は、何たる異様の觀であらうか、水色線、空色、灰色の美々しき服裝に、金色燦爛たる劔を吊り、身丈高き駿馬に跨つて、意氣揚々と煙草を燻らして居る將校、實に立派である、實に快活である、誰が目にも好箇の軍人、絶好の將軍と見ゆるのである、然しながら將校の美々しき服裝と反比例に、むさくるしきはその兵の姿勢である、不揃ひな、塵埃だらけの服を着けて、抱へきれぬ程の大風呂敷包みを背負つた體裁は、その見にくいこと、強ちに敗殘の弱兵として見るひが目ばかりではない。殊に列伍のふしだらなる、いかに軍紀の紊れたるかを知るに足るのだ。それのみならず兵の多くがドロンケンに醉つ拂つて、千鳥足なる體裁に至つては見るも憐れ氣の毒な感がある、併し流石に將校等は悄然として居たが亦極めて洒落に、眞實平和を祈るやうなことを辯じて居た者もあつた。それから我が衛兵に送られ、巳が將校に指揮されて。夥多日本人や支那人が山のやうにあつて見物して居る中を、得々として歩いて居るのには一驚を喫せずには居られぬ。特に道に巻煙草でも喫つて居る日本人があれば、スグ列を離れてそれを呉れろとやつて來る井戸があれば井戸に蝟集り、足が疲るれば會釋なしに地上に轉がつて休息する、その亂雜なる、その不規律なる、到底想像の外であつた、とは實地を見し人の談であるがよく露兵の實際を寫したものである。



俘虜の將軍

旅順降將元要塞司令官スミルノフ中將以下七名は名古屋に收容せられたる由にて其官職と姓名は

旅順要塞司令官	陸軍中將スミルノフ	(五十)
西伯利亞第三軍團砲兵隊長	陸軍中將ニキーチン	(五十八)
東部西伯利亞步兵第四師團長	陸軍中將フオーク	(六十三)
東部西伯利亞步兵第七師團長	陸軍少將メフマンドルフ	(五十九)
旅順砲兵司令官	陸軍少尉ベールイ	(五十)
旅順砲兵第四旅團長	陸軍少將イルマン	(五十四)
ベーヤン艦長	海軍少將ビーレン	(四十八)

にして之に附隨せる副官は

大尉アラビコフ、中尉アーメル、中尉ベールイ、中尉カナンスキー、中尉グリボスキー、

の五名なり右の内ベールイ少將とベールイ中尉とは親子の由にて一は司令官にて一は其副官なり而してスミルノフ、ベールイ、ビーレンの三將官は西本願寺別院にニキーチン、フオーク、メフマンドル、イルマンの四將官は東本願寺別院に收容せられたる由、彼等の收容室は何れも兩別院に於ける奧御殿にして、一將官毎に二室を給與され化粧臺、電燈、暖爐、寢臺等の設備至らざるなく而も其家屋は名にし負ふ時代建築に係り床の間、襖等は金泥に名家の筆に成る彩色畫を以てせるのみならず、其庭園には築山あり池水あり、老幹古木の鬱蒼せる樣は宛がら仙境の思ひあれば、彼等俘虜の感果して如何ならん尚ほ彼等は我收容所より給與の食事のみにては不足を告ぐるとて、私金を以て別に洋食を取寄せつゝある由にて、一人一日の賄料は五圓なりと、又彼等は市外の散步を許され居れば、今後漸次散策を試むるならん、副官二人は既に將官の用度品購買の爲め委員附添ひて市内を散步し洋式簞笥及び書籍其他少からざる日用品を買求めたりとぞ。先月下旬名古屋よりの消息に見へたり。

豫備病院の臺所

一時に二千三千の膳立を拵へて些の滯りなからしむる陸軍豫備病院内の庖廚に就て報知新聞の記する處によれば

陸軍には格別に膳立てなるものなし木製の麵箱に更に

副食物を小皿に盛るまでとにて同分院は第一區、二區、三區、四區と別たれ其第一區のみにて患者二千四百名あり、即ち一餉に二千四百人前の膳部を拵へねばならぬなり、

◎二千四百人に對する米は一回に四斗入り十三俵づゝを炊き居れり但し病人故中には粥を食るもありパンを食るもあり又米には無論麥を交ぜるともあり、

◎右の人數に要する副食物中一回の刺身に要する鮪は毎朝荷車三輛にて此處に運ばれつゝあるが、三輛に毎時も七尺大の鮪を十二三疋づゝ積み來れり是れが頸を刎ね最初の輪切りには鋸を用ふと、

◎午前六時、正午十二時、午後六時の三食に一回二千四百人前の麵箱を詰める役は一人にて擔當せり二十人前づゝ洗つては水を振りかけて飯を詰めるものゝ前へ持ち運ぶ片ッ端より詰めて行く人の腕の凄さ、一時間に一人にて千二百本を詰め居るといふ、

◎萬事以上の遣り方にて朝は例の味噌汁に香の物をつけ、晝は玉子燒に蓮根、煮しめ若くは刺身の類と定まり七八日乃至十日目位に料理の種類を異へる事となり居れり、

◎以上にて旣に充分の御馳走なるに一日と十五日には更により多くの御馳走あり栗のきんとん、かまぼこ、牡蠣のフライ、カツレツなどあり香の物は守口を每度用ゆと大祭日も是れと同じ、

◎以上の料理方としては煮方四人、釜方三人、菜方七人（この外に分配方四人あり）、飯方四人（この外に分配方六人あり）にて總べて二十八名あり比較的少人數故順番に一ヶ月の間に一日だけ暇を得て自宅に歸るを許さるゝのみにて他は一切庖厨に詰め切り二六時中起ちづめ働きづめ流石は陸軍の炊事場といふべし、

◎一室に四十名乃至五十名位なる患者あり（將校室は別）これが食物の運搬は何れも其室附添ひの看病人これをなしつゝあるが何んにせよ二千四百人を數ふる頭數ゆゑ順を逐ひて運ぶが定まりなれど何れも看病人も自が附きそひたる患者に竭さんとするは情の同じ事とて四面八方より例のメンコ臺を運び來る時はなか〳〵の大混雜なりと。

彙報

新年山

御製

ふじのねににほふ朝日もかすむまで年たつ空ののどかなる哉

皇后宮御歌

鶴の羽のかされていはふ年たちて山さへゑめる心地こそすれ

東宮御歌

あらたまの年のはじめにあふげ人君がみいづのいや高のやま

東宮妃御歌

ふじのねをいよ〳〵高く仰くかなあらたまりたる年のひかりに

海軍大將大勳位功四級　威仁親王

もろこしの山てふ山に日のみはた立てゝやいはふ年のはじめを

勳一等　慰子

あらたまのことしはことに日の本の山はたかくも仰がれにけり

侍從長從一位勳一等侯爵　藤原朝臣實則

大御代にこがね花さくみちのくの山もゆたかに年立ちにけり

宮內大臣從二位勳一等子爵　藤原朝臣光顯

山の名の黃金白銀おほ君の御手に入りけりとしのはじめに

樞密院顧問官正二位勳一等伯爵　源朝臣高行

あふぎみる天のかぐ山のどかにも初日にほひて年立ちにけり

選者點者

正三位勳七等男爵　藤原朝臣正風

もゝしきの大內山はとよむらん年のほぎごとかちどきのこゑ

讀師　從二位勳二等子爵　菅原朝臣修長

やま〳〵はなほ雪深しあらたまの年はいづくをこえてきつらん

講頌　正三位伯爵　源朝臣重朝

大御代とゝもにうごかぬ不二のねをまづこそ仰げ年のはじめに

發聲　正三位勳五等子爵　源朝臣有眞

いさましくしめしとりての山々にみいくさ人は年迎ふらむ

奉行　正三位勳五等子爵　藤原朝臣光昭

君がよを入ちよとうたふ國民に山もこたへて年立ちけり

講頌　從三位子爵　藤原朝臣以季

のどかなる年やたつらむ山々につもれる雪も花とみえけり

講師　正四位子爵　藤原朝臣爲守

とつくにの空もへだてず照すらむ大內山のとしのはつ日は

講頌　正四位男爵　源朝臣文仲

こゝろにもかゝる雲なく山はれて御代ゆたかなる年立ちにけり

講頌　正四位男爵　物部連有䕃

あだ浪はなぎしみなとの山たかく御旗なびきて年たちにけり

奉行　從七位勳七等　源朝臣有經

霧がれし野ずゑの山もなにとなくのどかにみえて年たちにけり

選歌

沖繩縣知事正四位勳二等男爵　源朝臣繁

かちどきの聲にうごかぬ山はあらず世は靜かなる年のはじめに

權典侍正四位　藤原文子

いくさ人いさををつみし山の上に年のはつ日やさしわたるらむ

福岡縣士族從八位勳八等　吉田實

世はなべてにぎはふ民のかまど山けぶりのどかに年たちにけり

あらたまの年立つ柚が峯はじめ一日にぎはふ山のおくかな
　　　　愛和縣平民　鈴木源太郎

つはものにめし出されしわがせこはいづこの山に年迎ふらん
　　　　山梨縣平民陸軍歩兵二等卒大須賀昌二妻　まつ江

ためしなき年ぞ迎へてあふぐかなおほうち山のたかきみいづな
　　　　大日本歌道奬勵會員富山縣平民　田村直喜

詠進歌數

歌御會始に詠進は年々數増し居れが本年詠進の懷紙竪詠草の總數左の如し

皇族御詠進	枚
懷紙	七
計	七
臣民詠進懷紙	
御前披講	二一
高等官	四
華族及有位者	三五
女官	一七
御歌所	一八
神宮職員	一八
華族女學校	二二
向陽會	二二
計	一五七
臣民詠進竪詠草	
高等官	三四七
華族及有位者	四五
華族女學校	六一
女子高等師範學校	一三
京都高等女學校	八五
向陽會	九
大日本歌道奬勵會	一五二八
大日本女學會	三九八
國學院	二七
東京府	七六〇
京都府	五〇七
大阪府	五三一
神奈川縣	一四七
兵庫縣	二九九
長崎縣	二三三
新潟縣	二九四
埼玉縣	二〇四
群馬縣	一六五
千葉縣	二四九
茨城縣	二八七
栃木縣	九五
奈良縣	一三六
三重縣	四九一
愛知縣	一一三二
靜岡縣	二四九
山梨縣	二三五
滋賀縣	三〇一
岐阜縣	三九七
長野縣	六七八
宮城縣	二四〇
福島縣	三〇一
岩手縣	一五八
青森縣	一九四
山形縣	三八一
秋田縣	三五五
福井縣	一〇二
石川縣	一四〇
富山縣	一四四
鳥取縣	六一
島根縣	二二七
岡山縣	二五八
廣島縣	二四七〇
山口縣	三七〇
和歌山縣	一三四
德島縣	一一七
香川縣	一一九
愛媛縣	一六一
高知縣	六八
福岡縣	二二八
大分縣	一六〇
佐賀縣	一三七
熊本縣	五〇六
宮崎縣	六七
鹿兒島縣	二七六
沖繩縣	三一
北海道	一八〇
臺灣	三四
戰地	一六四
米國在住者	四
獨逸同	一
清國同	六
韓國同	四
計	一五、五〇九
外に長歌	五
違式	四八〇
期日後到着	七四
計	五五九
總計	一六、二三二

殿下獻上の滿洲土產

北白川宮殿下が沙河及旅順方面にて生捕りし犬、梟及隼を陛下に献上せんとて御持歸りありし事は既に

記しぬ、その動物は昨日の午前十一時三十分下關より貨車にて神戶に着し同午後零時五十分發の列車にて東京へ送られたり、神戶驛にて同列車が停まれる時檻の外よりチラと見し所によれば、犬は普通の種にあらずその形驢馬よりも大きく傍の兵士に體量何程あるべきやと試みに問しに二十貫目はあるべしと答へしとぞ、げに二十貫目の犬は珍らしく雄雄しからん左れば食物も毎日牛酪を加味して燒きたる麵包五斤と牛肉四斤を要すと云ふこれにても逞しきは大方想像せらるべし又この犬洋服着たる人には能く狃るれど和服姿の者には何となく恐るゝ風あるこそ可笑しけれ、これ全く見馴れざるためならん兩耳に茶の斑毛をさし兩足の下部にも同樣のさし毛ありその他全軀は純白の長き毛の房々と垂れたるがさながら滿洲の雪を一握みてゝに移したる心地して潔きこと限りなし、かの隼や梟と共に誠に目出度き御獻上物なり

東鄕大將と祝文

東鄕大將が昨春二月我帝國聯合艦隊司令長官として旅順口なる敵國艦隊を襲擊せられし以來連戰連捷の名譽を荷ひ世界の偉人東鄕大將として歸朝せられたる以來今日に至るまで各地より種々の祝文を寄來るもの夥多なる趣なるが强敵に向ては勇往邁進一步も退かざる鬼大將も開戰以來今日まで退引ならずして非常に苦しめられ居る一事ありそは他ならず即ち見ず知らずの歐米各國の貴夫人若くは女學校生徒又は小學兒童杯より數多の祝文を寄來り就中寄送者に多くは一字なりとも苦しからざるに由り大將自筆にて返書を希望する旨申來るもの多くして今や其數數萬に及べる由にて日本人ならば兎も角なれども一面識だになき歐米より誠意を以て態々寄せ來るものを直逆に其儘打捨て置く譯にも行かずとて一々返事せざるを得ざるには大に煩を覺え居らるゝ由。

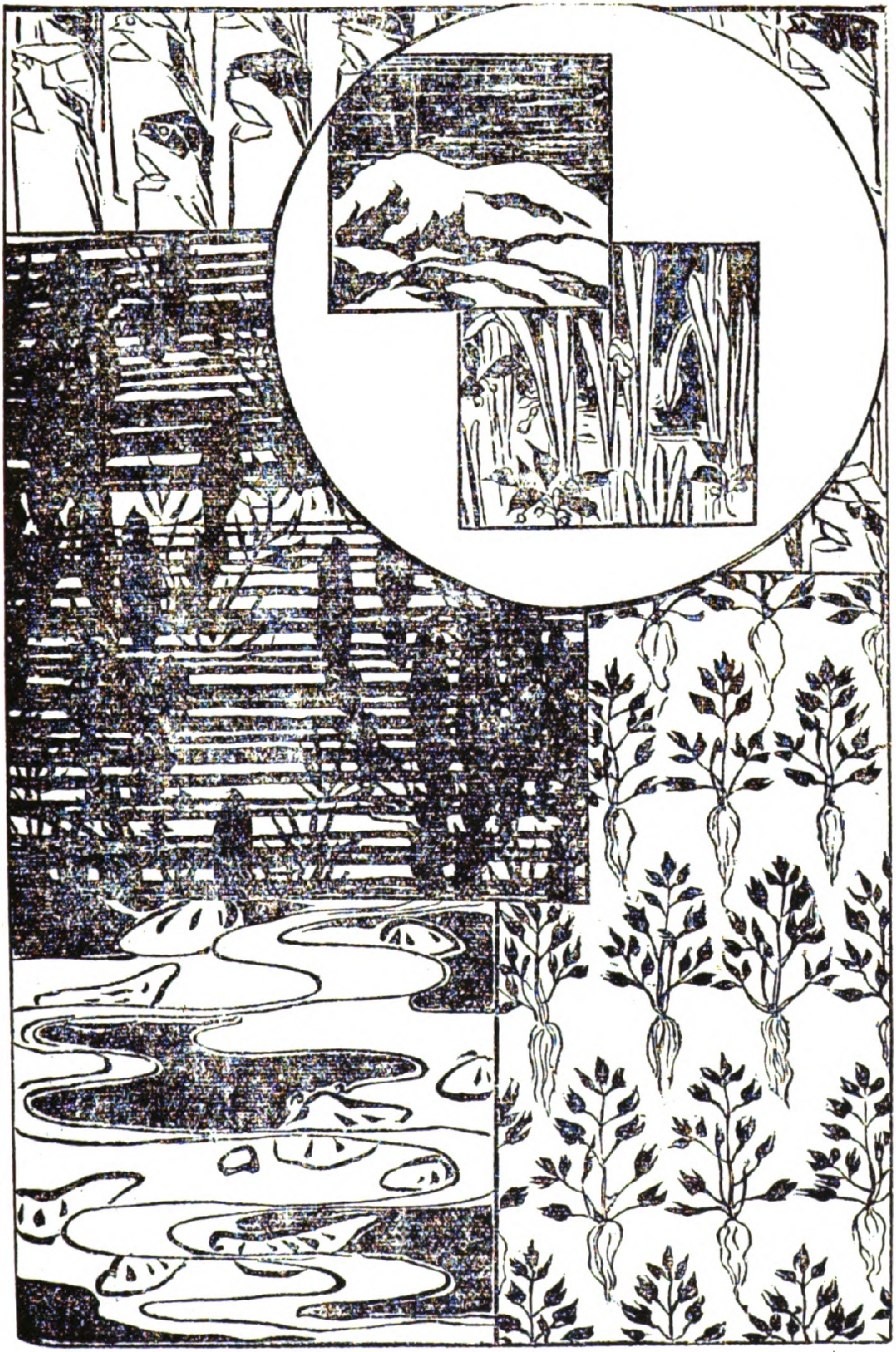
新刊紹介

第二軍從軍記

田山花袋著

美文家にして從軍せる花袋の從軍記は硝烟彈雨を主として描ける數多從軍記の中にありて一異彩を放てるものなり、渦洞玉の如しと言はゞ當らずと雖も風物の咏歎を描いて趣味深し。

（繪かへ 土筆 はまぐり 殘雪 水仙 田芹）





塚越停春撰

【天】冬　營　常陸土浦町　菊地みね子

忘れては夢かとぞ思ふ雪の夜を
　喇叭ふきいてぬ軍馬いなゝきぬ

評曰、靜かなる夜に入れば、身の境遇を忘れて、或は夢かと思ふの瞬間あること、是人情の常也。而も一たび喇叭吹き出て、軍馬嘶くを聞けば、忽ち鐵手として一個の赳々たる武夫に復る。所謂男士は聲の音に眠を覺すもの、則ち日本人の日本人たる所也此歌男あり、涙あり、一讀人をして餘情の縷々盡きさるを覺えしむ。就中『忘れては夢かとぞ思ふ』の一節の如き、眞に實情を穿ちたるもの。

【地】立春海　大坂四區新町三丁目　山中まず子

沖とほく霞たなびけり伊豆の海や
　七島（なゝしま）かけて春はたつらん。

評曰、氣象の雄大にして辭句豪邁に、而も詩人温藉の意を失はざる、眞に洪海渺々たる伊豆七島の大景を淡靄の間に見渡すの概あり。「立春海」を詠じたるもの、此の什を以て第一となす。

【人】冬　營　伊豆田方郡上狩野村市山　古見彩子

拔刀の志士送るへく榾焚きて
　雪煮る夜半を雁低く鳴く

評曰。榾を焚き雪を煮る、旣に苦境也。而も之を爲すに夜半を以てし、殊に一時半時の後忽ちに生死の手を分つへき拔刀决死の士を送るか爲めに之を爲すをや。天下の悲壯これより悲壯なるはあらさるべく、只冬營の中にして初めて此の事あるを見るべきのみ。加ふるに此の悲壯滿眼の刹那に於て、卒然近く鳴雁の渡るを聞くあり。鄕思一片動かさらむと欲するも竟に得ず。此歌善く此の壯士斷腸の光景を歌ふ。

秀逸

○○冬　營　佐賀市椎小路　青木唯子

百万の人馬寂として聲はなく

營壘十里雪静かなり

意氣堂々、眞に沙河岸頭に於ける我が雄師を歌ひたるもの、營壘動かず満洲の野を壓するの意氣辭句の外に躍如たり。

、〇〇立春海　下總國古河停車場前　三田よしゑ

海士が子の黒髪なよび和湖の
いさゝ上風春立つらしも

古調を以て新意を歌ひ、克く曲線の致を窮む。敬服敬服。

、〇〇梅村聞笛　名古屋市南鍛冶屋町八十五番戸　玉村多歌子

月はおぼろかをりにそれとしら梅の
にほへる野路に笛をきくかな

何等趣致多き光景ぞ、何等趣致多き句辭ぞ。
「梅村聞笛」の作、此篇を白眉となす。

、〇〇立春海　甲府富士川町九番地　大島百合子

浦々の霞を舟のつなでにて
春は海路を渡りくるらし

霞を舟の綱手と見立てたるは、奇想と謂ふべし。而して語意圓成、詩味饒し。

〇〇冬　營　越後三島郡日吉村　坪井わか子

氷踏んで敵壘斫らむ時來ぬと
冴えたる月に劍とぐ猛者

劍光北斗を衝くの概あり。沙河營中の光景今方に此くの如きものあるべし。

〇〇冬　營　駿河　林すゞ子

すさまじき雪折の音の時々に
銃とりなほすつはものもあり

是亦沙河對陣中の光景也。營戎の勞知るべきのみ。

〇〇冬　營　岡山市倖屋町二一小西方　植田立子

逆襲の聲かと計り吹きあれて
沙河の野營の雪になり行く

悲壯悽慘の狀、目に睹るが如し。才筆と謂ふべき夫。

〇〇立春海　熊本市西鍛冶町四〇羽田方　豊子

天かける鷲はかすみに影きえて
大灘百里春立にけり

辭意雄勁、一讀人を快哉と呼ばしむ。

、〇梅村聞笛　栃木縣下都賀郡小山町初島谷　新井翠子

朧月夜梅さきつゞく川添の
十戸の村に笛の音する

如畫。

、〇梅村聞笛　上野國新田郡太田町　阿部田鶴子

月ふけぬ今はとゝざす柴の戸や
笛の遠音に白梅かほる

情趣多し。可誦可歌。

、〇梅村聞笛　宮城縣遠田郡小牛田小學校内　齋藤とよの

あて人のすさびか雛か更くる夜を

梅か香しめり笛ほそり行く

下句殊に妙。

〇〇立春海　山梨縣西八代郡豐和村　内田安惠

日の本の光ゆたけき春にあひて
旅順の海もかすみそめけり

何等の愛たき光景ぞ、祝すへく賀すへし。

〇〇立春海　東京牛込中町十番地　田上小金

夕霞西へ流れて眞帆片帆
夢さながらの春の海かな

『夢さながら』とは、形容し得て妙限りなし。此歌極て面白き歌なれども、惜むらくは題『立春海』の立の字の意に切ならざる所あり、題を改めて『春の海』となさは則ち妙ならむ、

、〇梅村聞笛　伊豆田方郡上狩野村月ヶ瀬　内田文子

朧夜を梅の小村の寺に寐て
夢の心地に笛の音きく

、〇梅村聞笛　京都三條大橋東三丁目二九　西澤まつ子

笛の音の何處ともなく聞え來て
梅の一村月朧ろなり

、〇梅村聞笛　和歌山市南甚五兵衛町　木本歌子

芝笛のしらべかすかに聲ゆなり
梅さく村の春の夕暮

以上三首、異曲同巧にして、得易からざる作也。

、〇立春海　茨城縣水戸市常盤八幡町　楢山美枝子

仇艦はあとな波なりて西の海の
波路靜に春や立らん

、〇立春海　石見國邇摩郡靜間村　宮内登見子

浪の音もおほろ〳〵に聞ゆるは
たつの都も春や立つらん

、〇立海春　大阪府堺市材木町西二　松谷八重子

ちぬの海汀によする八重汐の
おとものどかに春立ちにけり

、〇立春海　兵庫　柳田春枝

春立しけふの海原かすみこめて
淡路島山おぼろげに見ゆ

、〇立海春　東京四谷南寺町四十番地　木村秀子

朝日かげ光かすみてさしいづる
冲津島山春やきぬらし

、〇立春海　愛媛　梶田愛子

うら〳〵とさし出る日に和田の原
淡路かすみて春立ちにけり

以上六首、是亦曲異同巧と謂ふへきもの歟、

、〇梅村聞笛　伊賀府中村　服部かつ子

身にしむは梅か香のみか誰が家ぞ

今夜別れの笛のしらべは

妙。

、○冬　營　下野國下都賀郡中村大字下河原田　神山ふみ子

ふくるまにほだ火も消えて大丈夫が
　故郷しのぶ夢さむるらむ

冬營の中、眞に此くの如くなるへし。

、○冬　營　磐城國伊具郡角田町一九六　高山要子

千萬のますら武夫がゆめ結ぶ
　枕べ白う雪降りしきる

、○冬　營　上總市原郡姉崎村姉崎　森田以志子

篝火もかすかになりて冬の夜の
　陣營寒く霙ふるなり

以上二首は、ほゞ同じき意味を歌ひたるもの。共に面白し。

、○梅村聞笛　姫路日の本女學校　荒牧すみゑ

牛牽てかへる翁の小村邊に
　梅さく見ゑて笛の音ひゞく

、○梅村聞笛　名古屋市小町十三番地沼津方　森井せき子

牛ひきて歸る與作が笛の音に
　梅散る里の夕月淡し

此の二首、亦相似たる所ある歌也。

、○立春海　備後芦品郡岩谷村　石岡磯子

乙女二人のせ行く波間霞こめて
　海原千里春は立つらし

誦すべし。

、○梅村聞笛　備後沼隈郡本郷村　金原俊子

三日月の梅をもれ行く春の夜に
　笛の音きこゆ高殿にして

宛として畫中の景也。

佳　調

（立春海、冬營、梅村聞笛）

●　長崎　水村女史

わた舟は烟もきえて眞帆片帆かすみそめたり四もの海原

●　長野　吉田犬子

敵艦の烟は絶えて支那の海かすみたなびく春は來にけり

●　松山　山崎匡子

二見かた浪かきわけて出る日に天津御國の春をしるかな

●　敷島家　細川とし子

梅村のかなたに冴ゆる笛の音は牛ひくわらべ今かへるらし

●　なほ子

咲きつゝく梅林一里春の夜にあるしゆかしき笛の音ぞする

●　大阪　武田まさ子

なみもしつか日もうらゝかに春立ちてがいせんのふれいさましき哉

●　牛込　さくら子

梅か香にあくかれ出し夕月夜うつゝともなく笛の音を聞く ● 愛媛　山崎好子

梅かほる一里の林とめくれば笛の音すなりみやび男やたれ ● 伊豆　古見彩子

北さして斥候にゆきし友は來ずみぞれ音して篝火に消ゆる ● 京都　三の宮つゆ子

君まさて月と梅とのふる里にありしながらの笛の音かな ● 三重　すみれ

吹く笛はかすみの奥に音のみして主なつかしき梅の下道 ● 小倉　すみれ

心して冬の夜寒を戰の友よびかはすもろこしが原 ● 神戸　小林竹子

こほる篝火にあふりつゝ故郷へ身のつゝがなきを書き送るかな ● 長崎　古賀秀子

渤海の波しつかなり春の朝げいくさ艦にをころ君が代喨朗 ● 仙臺　大宮もとぢ

みいくさを故郷思ひみだれてはれられぬ宵を雪ふりつもる ● 兵庫　眞梓

風流男のすさひなるらむ遠方の梅さくあたり笛の音のする ● 和歌山　田中正子

鶯の聲かとぞ思ふおもひきや梅さく里に笛をふく人 ● 三州　荒川よし子

幕の内に焚火圍みてあたりつゝまどろむ夢や故郷の空 ● 長門　木村いく

淡路島霞みにけりな立春に昨日まて見し眞帆も片帆も

笛の音はやゝにうすれて垣根添ひゆく水長く梅くれそめぬ ● 三重　前田美子

仇のふれ沈めつくして和田の原なみ面白くなれる春かな ● 伊勢　岸田春子

ちぎり置きしひとや來ませ臘よの梅の下道ふゑの音ぞする ● 伊勢　よし子

眞帆片帆見えつかくれつ霞むなり沖の浜路に春や立らん ● 備中　武邊靜枝

梅宮に春の女神が吹きますや笛の高音のあなうるはしき ● 大阪　榎原英野

牧童の笛の音高く日はおちて梅香きよき春の夕暮 ● 和歌山　木本歌子

うなはらに先つ天降ります春姫の笑まひあふれてよする小波 ● 新潟　石川まつえ

笛竹の音のゆかしくきこゆなり梅の林に月もかゝりて ● 山形　竹内かれ子

營内の健兒が結ふ夢守りて哨兵立てり吹雪る夜半 ● 下野　森田華子

今日も亦小銃もとらて土穴にれてたき火のもとにゆめ語りきく ● 下野　植村かつ子

陣頭に叢低うたれて馬の脊のほの白きまて賤たはしる ● 埼玉　松本しげ

勝ちほこる御軍艦にうす霞棚引く見れは春は來にけり ● 栃木　大嶋かく子

● 大分　大橋君子

梅見んと谷を越ゆれは鶯の聲にましりて笛の音のする　●　越後　松永しげ子

寢室に飾る枕の初夢の夢かうつゝかゝりて落しぬ　●　磐城　松本露子

うらうらと霞小村に梅咲きて笛吹く男子見えつかくれつ　●　尾張　木村直

香を慕ひ梅の小村にたちよれは牛ひくわらべ笛吹きてすぐ　●　廣嶋　錦織しん子

おちこちの霧笛のけむりほそく消えて月になり行く沙河の大のら　●　備後　坪山淑代

梅見せし籬のあたり夜なよなに香りをこめて笛吹くは誰そ　●　兵庫　小西やを

長閑なる磯にかすけき音たてゝ打ちては返す春の海かな　●　伊賀　佐々木まさ子

鶯のほゝ笑む聲とおもほえて笛の音ゆかし月か瀬の里　●　信州　田中みつ子

文かけは筆も凍りぬ日れもすを友よ語らんなつかしの國　●　京都　清子

主は誰ぞ梅が木の間に人絶えてかをりに和してしらぶ笛の音　●　小樽　福美どり子

咲き匂ふ梅の木かけにたゝずめば讃鳥あらず笛音聞こゆ　●　前橋　宮内りき子

誰はさそ梅か香こめて吹送る笛の音冴えし春の夜の月　●　伊勢　澄子

おほろ夜の梅か枝かくれにかつ見えて風流士一人笛ふきてゆく

東風吹かはと惜しみて出征し梅村に君が好みしソプラーヌを聞く　●　堺　松谷せい子

春くれはあしまの薄氷きえそめてかすみに浮ぶあまの釣舟　●　近江　青山せい子

鶴にのりて神くたります樂ならむ梅咲く里に笛の音ぞする　●　神戸　竹島とし

明渡る海も靜に薄霞立てるは春のしるしなるらむ　●　大阪　吉野ひさ

穴ほりてねくらさためむ今日もまた吹雪につらき冬こもり哉　●　大阪　おしかも

一とせの阿修羅の海も春立ちてのどかにかすむ大總小總　●　奈良　工藤ふみ

冬こもり焼火に更くる夜靜々々男士そゝろに故郷なつかしむ　●　美作　大谷秋子

梅か香に人なつかしき夕月出やあやしときゝぬしろかれの笛　●　深川　山岸榮子

霞より明けて漁村に春の海さてもしつかになみゆるきゆく　●　筑後　美久瀧春

いくさ勝ちて綱引のこえはとよむまて波しつかにも春そたちぬる　●　下谷　岩崎花子

父や如何母や如何にと思ひ寢の「テント」洩れくる冬の夜の月　●　甲斐　清泉

梅か香にこゝろしめりてふく笛の音もうちかをる月かせの里　●　熊本　安田文子

本所　天沼ますえ

真白きテントの野營寂として吹雪に暮るゝ滿州の原

● 肥後 島崎紫子

帆の影に春のみ艸のたとるらむかすみたなひく今日の海原

● 四谷 工藤すゑ

今朝見れば沖の小島は霞けり舟歌長閑鴎飛々

● 備中 谷澤野菊

朝日子か浪かきわけてマストなる(帆柱の)若松てらす春たつらしも

● 羽後 小林つゑ女

徒然さに若き拍子と踏へば埋火白く夜は更けにけり

● 越後 水鹿田鶴

友をとへば笛の音きこゆおぼろ月夜夢かと思ふ月のせの里

● 本郷 門馬千花子

島山は淡くかすみて夢のごと白帆流るゝ春の海原

● 本郷 新井ちよ子

寶島は遠からずなりて笛の音のかすかにもるゝ白梅の村

● 赤坂 藤井操

相行くに笛の音もする薄月夜梅咲く道の夢にも似たり

● 山梨 岡久代子

雪五尺まだ降り止まず篝火に取りいてゝ見るふる里の文

● 京橋 染野かすみ

積り居しあだは降りて春は立ちぬ旅順港外浪めたらしき

● 岩代 安孫子けさ

前線の梅の梢に月落ちてさえわたり来るよこ笛のこゑ

● 富山 五島民子

舟にして晩下る川沿の梅林の奥笛の音細し

● 廣島 大島鏡子

つく島も氷る露營にたけならが雑嚢袋の品さだめする

● 本郷 清野公子

友と別れ梅さく里をわれ来れば夕べ妙なる笛の音聞ゆ

● 廣島 撫子

うつらうつら丸れの耳に風の音か夢かうつゝか母の御聲か

● 廣島 濱口愛

はつ東風にこそのあらなみやはらぎてしらほゆたかに春やたつらむ

● 香川 前田きみ子

そよとふくその春風に送られて梅をぬひくる笛の音床し

● 美濃 山田愛子

分捕の繩にまぐさにことたりて冬ごもるらむ遼陽の城

● 山梨 小林まつ子

旅順をば陥し入れたり雪は降りぬしばしいこはん天幕の内に

● 陸前 中澤藤子

朧夜を笛の調べに聞きとれて梅咲く野路を一人迷ふ

● 南多摩 山口歌子

春なれやまだ風さゆる海原をなみ路はるかに霞初けり

● 東京 若目田濱子

長閑にも春し来ぬれば打よする波の音さへいと靜なり

● 茨城 海老澤すゑ子

攻め取りし敵の砦を據ひて雪の夜殿に夢は結れぬる

● 大阪 小泉ふさ子

鳥たちて紅梅こぼるゝ名なし村夕日斜めに笛の音きこゆ

● 新潟 藤田ふく子

● 冬の夜は冨嶽の夢の結びかれて爐火におもふ故郷の友　新潟　春野すみれ

● 戦さ勝ち國治まりて君が代は春立つ今日の海ものどけき　栃木　永井きく子

● はてしなき大海原に春立ちてめぐみの波に風靜なり　岐阜　柳田まさ子

● 長閑にもさし來る汐の音はして霞こめたる春の海原　仙臺　波部光子

● 打よする波ものどかに春立ちてかすみこめたり松島の沖　茨城　小野もと子

● ふきあるゝきのふの海もかすみ立ち沖つ島山春たちにけり　宇都宮　金澤保子

● 春かすみたな引きにけり海つらにこぎ行く船の跡ぞかくるゝ　駿河　山本俊子

● 雲を得て天かけり行く蛟龍もしばしば時を穴に待つなる　日本橋　吉川秀子

● さく梅に薔薇の帷幕香ぐはしきおぼろ夜誰ぞや笛ひゞかする　日本橋　生方あや

● わがうたに合する笛の主やたれ月朧なる梅の下道　和歌山　皆川直子

● 風さわぐ荒浪あけし唐の海も霞渡りて春は立ちけり　美濃　磯部女史

● 琵琶の海さゝ波とほくかすむなり春立けふのしるしなるらん　名古屋　小森房子

● 笛竹の聲ときこえて山里に梅ちるさまのおもしろきかな

● 今日も未だ打つて出つべき命出でず氷辷りに一日暮さん　麹町　柾靜枝

● ま柴負ふ稚子の草笛かすみ行きて梅の花ちる月の瀬の里　伊賀　すま子

● 遠ちこちにすなどる小舟あまた見えて春たつ今朝の海のどかなり　越後　荻野てる子

● 天幕に血の香つめたうしみ入りて物思ふ夜半を雁ひくうなく　盛岡　日比い代子

● 雲の上に矛を枕の夢さめてあふぐみ空に月冴え渡る　大和　藤岡百合子

● 月はくらし枯柳の下に見はりし居れば雪野に遠く狐のなく　奥　熊谷ふさ子

● 佐保姫之舟出ましぬと聞きしよりやはらぐ海にそよ東風の吹く　三重　亀井ゐと子

● 二見浦岩うつなみもしつかにて沖の小島もかすむ今朝かな　播磨　横田春枝

● 鷗のすむ於岐の海だに君が代の春たつけさは波靜なり　伊勢　太田榮子

● いと清き笛の調べの主やたれ春もおぼろの月の瀬の里　姫路　毛呂まさじ

● 雪深く月塔に白き夜半立てる歩哨の影あはれなり　越前　藤梅子

● 霞をさそひがに吹く笛か音にゑまひこぼるゝ梅がかたかし　三重　中谷かよ子

鶯のなくれとたえて日はくれて笛の音すなり梅かをる里
● 石見　宮内登美子

葬まれし酒を手向けてなき友の魂にぬかづく土窟の内
● 筑後　田龍つら子

梅の花白くあけゆく曉の小村靜かに笛の音もるゝ
● 伊豫　勝田秀子

おぼろ夜を梅さく里にきて見ればかすみこぼれて笛の音きこゆ
● 伊豫　清崎こと

たがすさぶ笛の音ならん春風の梅が香さそふまどのほとりに
● 備中　大野ます子

春風に折にもるゝふえ竹のしらべもたかし梅が一村
● 牛込　峯崎いと子

馬の上に笛吹きすさぶこゑすなりうめさくさとの春の夕くれ
● 日本橋　佐久間靜子

君やいかに故郷にありても寒ければ野營やいかに冬の月
● 神田　高宮安子

川添の一むらつゝき梅咲きて花をなかるゝ笛竹の音
● 熊本　安田文子

竹芝の沖へのふれのけふりより波の千里もかすみそめつゝ
● 筑前　幸枝

本營の篝火ほそく霜さえてかりねの兵士何夢むらむ
● 香川　高橋ちか子

ひろき野にたてる孤哨の影淋し見渡すかぎり飛雪紛々
● 名古屋　奥村てる子

三日月の影ほのかなる夕闇夢梅の小村に笛の音ぞする
● 下總　岩瀨野不知

音も細う里子が吹くは竹笛かしろ梅一里月のさやけき
● 横濱　望月せい子

吹雪して敵も味方もしばらくは心ろならずも冬ごもりかな
● 下總　ます子

たが爲のすさびなるらんおぼろ夜に笛の音さへて梅かほるなり
● 兵庫　柳田鶴子

おぼろ夜を梅散るそのにあこがれてしらへたえなる笛の音ぞ聞く
● 越後　小川有

見る目十里枯木まばらの雪の陣月をかすめて雁寒うゆく
● 駿河　菊池武子

誰がために誰かすさびの笛ならむ色香ゆかしき梅の村里
● 牛込　龜澤なみ子

銃とろに射むかふ敵もあらずしてなか〱寒き冬ごもりかな
● 美作　安藤笑月

追分の節の調はうすれ行きて吹雪にくるゝ月が瀨の里
● 名古屋　塚本かね子

榾の火に妻のやさしき水盃を五たび六たびくりかへし見る
● 越後　いしゐ

笛の音もしばしとだえて春風に梅の花ちる月か瀨の里
● 信濃　金子なみ子

何となふあくかれ出てゝ七村の梅のはやしに笛をきく哉
● 牛込　此木ちよ

梅なくばとふ人もなき山里に調べゆかしき笛をきくかな
● 京都　大谷淑子

佛ふれのかげもかたちも消へ失せて晃開けく見ゆれ沖の島影

● 紀伊　葉紫尾

笛の主はいつか霞に消えゆきて月朧なり梅の一里

● 大阪　塩谷ちかえ

香にまよひたとりし梅の一村にいとゆかしき竹とひの節

● 甲府　石原登代子

誰か笛の音にかよふらむ冬木立きよき香りはいとたかくして

● 静岡　清水はつ子

入夏霞む砂路の末に見ゆるかな霞かとばかり伊豆の島山

● 和歌山　坂口恵希子

笛の音を辿りて梅をわけ行けば月にかすめる柴折門あり

● 下野　石井久眞

百万の敵にひるまぬものゝふも埋火一の命なりけり

● 羽後　菊池廉子

三軍のテント氷りて沙河のほとりたゞ哨兵の剣のみぞ冴ゆ

● 豊後　大島菊子

血に染みし剣を洗ふ益荒雄が息吹ま白き北支那の原

● 東京　森戸はつ子

あまはらけ起出て見ればさながらにすみ絵にたる海の面かな

● 岡山　郷木仲代

梅か香に笛の音添へて吹きおくる風なつかしき小田の中道

● 仙台　渡部光子

冬營するテントの側に日は落ちて沙河の十里は吹雪に暮るゝ

● 星　代子

たき火してつゝ音を聞くさむき夜をすごくも照す月のかげ哉

● 大阪　田中常子

あなゆかしいかなる君の笛ならむ梅か香かなるこの里にして

● 三河　村越みゆき

風薫る今月か瀬に笛の音を聞くや心月の夜にして

● 岩代　菅野和子

ふるさとの山に柴樵る心地してえみしの國に冬ごもるらむ

● 徳島　久保串子

露營する天幕低く月落ちて焚く篝火に霜さやかなり

● 日本橋　星村たま子

笛の音にあくかれくれは一村の梅か庵の月影白し

● 秩父　かつら子

くれはてゝ笛の音清く聞ゆなり梅か香高き五戸の一村

● 長崎　白百合

雅男の笛も聞えてうめが香の匂ひゆかしき山かげの村

立春海

駿河　林すぎよ

朝なぎにつりする船の二つ三つ霞の沖に見へかくれつゝ

● 大阪　田中しゆん子

雪の夜やいろりかこみて武夫は絵はかきの君のしなさためする

● 熊本　安田文子

吹く笛のあるじをとはんおほろ夜のつきにもしろき梅かをる里

● 山梨　鶴田涙江

島がくれ初荷の船の行く見えて春立つ今日の海ぞにぎはし

● 横濱　巽　仲

櫻貝よせては花のちり〳〵にかもめとびこふ春のしつけさ

● 名古屋　清水みさを

桃か野や梅か香さそふ春風にたゝよふ春の聲ぞたえなる

● 大和　大中花江

花白う梅の香高き山里に谷を隔てゝ笛の音かすか

● 神戸　愛子

鶯の初音ゆかしときて見れは梅さく里に笛の音しるし

● 大阪　小山ふく子

月さえて梅か香かをる春の夜のしはの戸もれてふえの音聞ゆ

● 河内　竹内敏子

紛原手に山道傳ひそゝろ行けは笛のねすなり梅かほる里

● 伊勢　証井ふじ

月の夜に一村梅のかをりして身にしみきこゆ笛竹の聲

● 山梨　小林まつ子

朝日かけ静代なからにかすみつゝ和田の海原春立ちぬらし

● 丸亀　片山ます子

浪たゝぬ御世ぞうれしと歌ふなる海女がこえにそ春はたちぬる

● 筑後　中原衣子

こぎいだすあまが小舟の影消えてしつかにくるゝ立春の海

● 千葉　榎本あき

沖遠くうしをゆたかにさしみちてうなはらひろく春立ちにけり

● 磐城　佐久間ひろ子

さしのぼる朝日に匂ふ梅村の奥にきこゆる笛ぞゆかしき

● 信濃　高仲菊子

聞く人の魂もうかれむ梅園に鶯ならぬ笛の風流音

懸賞文藝課題

▲和　歌（題随意）

▲狂　歌

▲俳　句（春季雑題）

▲新體詩

▲謎　々　題「沙河の對陣」とかけて

▲端書文（はがき一枚四行限）

▲川　柳　題「繪はがき」

◎賞　品　各種天、地、人に限り左の賞品を呈す

天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

◎投稿締切　二月十五日限

◎新體詩を除の外投稿はすべて端書に限る

たび日記

須原秋子

一月十一日、寢るも惜し、起るもつらき、月影の、うすく木梢に、殘る頃、なつかしき床を離れ、出て見れば、庭一面に、霜をむすびて、いまだ通ひし、人の跡もなし。折りから、雲井はるかに、鳴き返る、雁の聲、たが玉章を、運ぶにやと、あふげば、雁はあたりをこめて、其は何處か！いましも木の間かくれに、さし登る、旭の光も、いと〳〵清よふ、我心もけふは、人よりまさりて、嬉しうてなん。用事もなきまゝに、窓により、あかぬ、景色に、眼をうつせば、寒き風は、我襟のあたりを、はらひていともつめたし、折りから、郵便の勇ましき聲、見れば花の晨、月の夕べ、東の間も、忘れられぬ、友垣よりなり、古郷遠く、はなれては、友よりの玉章こそ、千金にも、かへがとふ、嬉しうてなん、封押し切る隙も、なんとなくいそがれて、讀みゆけば、おく霜に、なやめる、白菊のそれにもまして、美くしき文字、玉ともまがふ、文章に、やさしき言葉を、あらはし給ふ御心のほど、いと〳〵嬉しうて、思はず、頰笑めば、今まで寒かりし、我身は、いと暖うなりぬ、げに友の情は。寒さをも、温むるめり。去る者は、日々にうとしとは、如何なる人の、言葉にや、我の上京せしは、空吹く風も、にくからぬ、秋の頃野べには、錦を飾りしがいまは早、おく霜に爭ひかれて白菊も、いつしかうつろひ、山姫のそめにし、紅葉も、かれはてゝ、眺め淋びしき、今日まで、月は五ッ度かはれども、友の其はいまもなほ、こひしうてなん。

思ひ出せば、すぎにし春の頃、四つの秋をつられつゝ、櫻の名所へ尋ねむと、三日餘りの歌枕、重れつる時友の交りとこしへに、變らじと、誓ひし事も、いまははや、すぎにし昔の夢とさめ、懷かしき、友を只一人殘して、つれなくも、上京せんとは、友はさぞかし、うらむらん、かゝる事を、思ひつゞくれば、心は千々に亂れ、玉なす涙は、頰をつたひぬ。我も返書出さばやと、あやしき蛙を紙にはこばせば、おかしきまでに、文字はふへる思ふ心もなか〳〵に、のべがたくてなん。

ひるすぐる頃、うら淋びしき、冬枯の細路をたどりつゝ、吹く風に、袂をはらひて、只獨り、明化學校のほとりに行きぬ、歸るさに見れば、乙女子は日蔭の軍歌を、うたひながら、羽子つくも、流石は軍國の、乙女の心も思ひやられて、こよのふうれし。

上野にてつく、鐘の音の高く低く短く長くあはれに夕べを、つぐる音と供に、日はいつしか、西山に入りし頃、うすぎぬもて、つゝみたらんようなる、五日あまりの月は、笑ましげに、地上をてらしぬ。折りから、さら〳〵と、枯木をおとふ、風に驚きてか今まで、見へざりし星の、一時にきら〳〵と、愛らしき眼を、見開きぬ。

我は只一人、二階の小窓をさしのぞきて、しばし、脊に眼を運ぶ折りから、つれなくも、風は吹き來て、我もの顏に、脊を獨り、みだりに、諸きさりぬ。今日は早やけれど、頭もいとゞ重ければとて臥戸に入りぬ、門外にては、犬の遠吠、物すこし、いまより如何なる、夢路をたどるらん。(評文情幽婉)

梅花にそへて

小山松枝

まあ御覧あそばせこの梅の花を見るかげもなき宿に咲き出てましたのですけれどもその潔白なる色と高尚なる香りとは、玉なきそへる國ににほへはものとことなるところはあるまいと思ひます貴女は如何です私は何よりもこの花を愛します梅花は嚴冬霜雪を凌ぎてめてはやさる人も困難におはざれは名をあらはすの時來らずといふことをある人から聞されて一層なつかしうなりました丁度今満洲の野に氷點以下何度といふ極寒を犯して戰へる兵士等のかの艱難をしのきて芳しき名を世にとめかくて大日本の國力も輝くと思へば梅花の節操を推してもよいてはありはせんか何はともあれこの不撓不屈にならひて一すぢにつとめはやと思ひまして貴女にも一枝さし上ます御意見の御いとまにながめて下さい、ほゝ、(評、理致あり)

理想の家庭

吉田てふ子

理想の家庭には三聲を要すこは妾が敬愛する某大人の仰にして妾が他日家庭を作らん時かならず此三聲をかゝすまじと思へり「三聲とは何ぞ織紡の聲、嘻兒の聲、讀書の聲此なり」

織紡の聲とは單に衣を織り糸を紡ぐとのみにはあらず商家は商、農家は農とそれ〱我家庭の營業にしたがひて束の間もなまけ怠る事なく家業にいそしみ勵むべしと謂なり

嘻兒の聲とは一家和合の謂にして畏くも教育勅語に爾臣民父母に孝兄弟に友に夫婦相和し。」と宣へり

讀書の聲も亦むつかしき和漢洋の文の之を讀むと云ふにはあらず新聞紙を披きては普く世界の形勢を知り雜誌をひもときては能く實用の知識を博むるなど元より此聲の重なるものといふなり

あはれ富よ位よそは由なき人間の榮花には必用ならんも清く美しき家庭の資料にはあらじげに此聲こそ苟くも理想の家庭を望まんものゝ夢の間も忘るまじき金言にあらずや(評、立言奇抜)

雪の朝

ゆかり女

一夜のうちに銀世界とやらん、何の見ところもなきわが庭も今朝はめつらしく、冬木立の一時に花咲きたらんやうにて、日ころに心にもとめざりし

松の枝より岩の對など何となうなかしく、四方の景色をながむれば心さへすか〳〵しく、ことに豊としのしるしときゝてうれしともうれしうなむ。されどこの雪よ、もし降れるがうへにもふれゝばいかに、げに暖けき國なればこそかくはめてはやさるゝなれ。かのまつげさへ霜さへ凍るといふ滿洲の野に戰へるますらをらは、日々ふゞきゞにさらせし、雪中をさまよふとか、其のくるしさいかばかりなるらん、それを思へば雪をたのしみなほ晦しとて火桶に親むなどのことといかで出來得べけんや、ましてこの寒氣に遠征の夫をおもひて堪へかぬる妻もあるらん、身の不自由なるにわが子の上かたりつゝ帆をうつたふる老人もあるらん、など思ひつゝあればかとべに童ののゝしる聲す、見ればそこらの雪をかきあつめて固りとし、やがてそを打ちこわして萬歳を唱ふ、其さまの勇しさ、今や世界にかゞやきしやまとものゝふの譽と思へば末たのもしや。打しも朝日のきら〳〵とさしのぼりて、あたらしき希望をもたらすかのごとおぼゆるは、子等は已にいつ地ゆきけん影もなし。雀はゑをあさるにか、雪の花とにほへる梅となふみしだきつゝちよ〳〵とこづたひぬ。

あゝわれもつとめなん、神のみめぐみにものたらぬことなき身をもて、雪螢をあつめてふふることもあるものを。

雪なだれ

杜鵑女史

一瓢一笠おもしくや飄零の身、あしたには風雪夕には露宿一帙の詩一卷の歌を伴にして、かはる月日を自然の暦にはかり、經めぐる山村水郷に花紅葉のうつりゆく姿を見つくして、きのふは南今日は北さすらひありし千里の旅路、心なき身は西行の風流も學びえねど、折々の風につれておぼゆるあはれの數々あやしき日記に殘したるあともさはなるに、願ふは分たむとをとおもひはおなじからむわがはらからに、

春の夕暮浦賀の港を立出てゝさすかたは劍ヶ崎、津久井が濱に陽は落ちて、弦月夜のあるじとかはりぬ、漁村金田に着きて分入る雛閒の間、月は森の花明りと照り合ひて前路迷はむかたもなけれど、劍ヶ崎の燈樓唯一點蒼白く輝きて外にはたよるべき孤灯もなければ、更けゆくまゝ宿かる家を案じ煩ふ程に折よく來懸りたる短褐の老翁にとへば、數へてかの小高き松の村立夜烟籠めたるそのうの幽かなる灯をこそたづれえさせむへといふがまゝにわれにはまだみえぬともしみを夜烟のうちに探ればうれしこの寒村ににつかはしからぬ高樓一棟、ほとほと叩けば心よく請じ入れぬ、げに探りやおてなる旅亭よとこれはいへば見るから濱育ちの小婢紅き頬に笑を湛へてこの宿の燈火は闇の夜は小中里から見えまする、こよひは月明りでお星様さへちらりほらりほんとにあなたをぢらしたお月様は憎うござります

三崎にかゝりて桃の御所を弔らひぬ、みやかなる茅葺の寒舎にそひて五六年生の若木の桃枝疎にさみしく綻びて老木は求むれどもなし、守男にかくても桃の御所の舊址にやとひかくればわらふて答へぬ兩府の榮華は七百年昔この桃は幾十代の孫だか分りませぬ

海は三日つゞけて暴けぬ、船つきあしき鹿島の灘、長汀十里鋸齒ほどの曲りもなく、船板三寸を奈落の境、漁のかど出には聲勇ましく「三十五反の

帆を張上げていくや仙酔石の巻」欸乃ながく沖にひゞきて遠く漕ぎいてしおのが夫の、昨日の凪にも今日の追手にも歸らず、氣も荒磯の濱に生ひたちし漁婦も流石に思ひ棄れてや、潮の花散る鰹角の上、「船は千來る萬來る中に、妾の待つ船まだ來ない」風鳴きよる夏の夕暮、一節あはれに餘韵を送りて、海村羈愁の我が胸を裂きぬ、

房の南角洲の埼の明神に詣てゝ、鬼が浦の波のしぶきに旅衣ぬらしつ、夏の日影の富士の雲冠に隠れゆく頃根本の濱を過ぎて、疲れたる脚を磯の片陰に休むるほどに、通りかゝれる三味の門付女一人、おなじ労れならちかき巖のほとりに寄せぬ、折節いづこともしらずひゞく口笛二ッ三ッいぶかしと思ふひまもなく、脚下の波の中より蜑婦の頭一つうかび來りぬ、泳ぎつきたる姿を見れば石花菜の小籠小脇にへて腰には纒ふ布一卷、胸も脛もあらはなるむくつけきさまなるに、門付の女嘲るやうにながめやれば、蜑婦もなめげにかなたを見て呟きぬ、天然の女と人工の女と白波いつくしき濱邊にならべみて、わはひめかに胸の底に領きぬ、

日盛に函根の古道を辿ちぬ、山の片そばに百合花の花瓣ぶるがごとくにほひぬ、言さへぐ國の夫婦遊覧粧姿かろやかに來かゝりて花を見入るにおぼえし程に、男はやをら軀をおこして藤蔓するく\と傳ひて一本手折りつ、ゑみまけて女の頭にかざしかくれば、女嬉しげに花に接吻してやがて男の胸におもてをあてぬ、

秋の夜半、湘南の濱に神秘の空を仰ぎて獨ものを思ひぬ、流れ星二ッ十字の影を描きてかききえぬ、基督教徒にあらぬ身にも、いかなる神のさとしにやとあやしまれて一夜思ひわづらひぬ、

去歳も紅葉ことしも紅葉に裏見の瀧をとへば、裏見の小徑は秋の初のあらしに流とかけりゝむかしうらみの瀧となりぬ、道しるべの山賤はいひぬ、ことしは瀧の姿のかはつた故か紅葉の色ら力なげに見えまする

樹々の梢も色づきそめぬ、都は袷羽織の頃なり、拇變の流を短艇に上りて養老の溪の秋の姿を見れば、大溪のそばに懸れる白糸のやうなる瀧き一條に身を戰はせて、雪の肌に烏羽玉の髮、おどろに亂したる纖弱き乙女、あまりにいぢらしとといへば、一心こめては冷たくもありませぬ、この瀧に願をかければ母親の病は必然癒りますれば

霧に函根の古關を過ぎぬ、斷碣枯艸みな眠を載しぬ、山村寂たり湖面眠れるが如し、われは涙をおぼえて聲を噛むに權現の御道より乳實の少女きかゝりぬ、婿しくて一聲の愛を乞へは、あなたもお氣の毒なども われはこの寒空に山道二里の仙石より登りし者御主人の病に欠くべきもあらぬ一瓶の乳、どうかお許し下されといひすてゝ飛ぶがごと吹霧の中に消え行く姿、薔薇の双袖翅の如く、われは叫びぬ霧の天女と、

女學世界定期增刊

閨秀文壇

四月十五日發行

懸賞文募集

小說　短篇（十行二十字詰二十枚限）
和歌（落花、閨、風）一人一首端書に限る
新體詩　題隨意　三十句限
俳句　春季雜題　投稿は端書に限る
狂歌　題隨意　投稿は端書に限る
川柳　題隨意　投稿は端書に限る
美文　文體隨意
消息文　文體隨意
短文　文體隨意　端書に限る
謎々　「裸體畫」とかけて　解答は端書に限る

〆切三月二十日

賞品

小說
一等　金參拾圓
二等　金貳拾圓
三等　金拾圓

和歌・俳句・狂歌・川柳・謎々・短文
天　參圓
地　貳圓
人　壹圓
（圖書切符）
以下秀逸各種に付十人づゝ有賞

美文・韻文・消息文
天　五圓
地　貳圓
人　壹圓
（圖書切符）
以下秀逸各文に付十人づゝ有賞

投稿は封書端書共文種を記し「閨秀文壇」と朱書にすると

小說

子寶

大江小波

上

柳部伯爵家應接間の場。無論西洋風で、飾付も大分ハイカラ式に出來て居る。此所に伯爵夫婦は、今日華族會館に行はれる、戰捷祝宴を兼ねての、假裝會に出かけるので、伯(三十歲位)は三太夫に、夫人靜子(二十五六歲)はまだ腰元に化けて、時刻の來るのを待つて居る。尤も今夜は、自分達が娛樂に出るので、雇人共にも暇をやり、それ〳〵遊びに出す事に成つたので、眞個の三太夫古井正物の腰元お辨も、それ〳〵身支度をして、此所へ暇を貰ひに出て居る躰。

古井　御前! ではお暇戴きまして宜しう御座いますか。

伯　よい〳〵。併し馬車の用意はよからうナ?

古井　申付けて御座ります。然し只今はまだ七時半、御會は九時からでは御座いませんか。

伯　では早く行くがよい。

古井　へイ、難有う存じます。

ト、云ひながらまだ愚圖々々〳〵して、時々お辨に目配をして居る。伯は思出した樣に、

伯　どうぢや古井! よく似合ふたか?

古井　へイ、よく御似合て御座いますとも、これではとても御前とは思はれません。

伯　左樣か……定めし今夜は同族共も、皆驚く事ぢやらう。アハ……。イヤ、もうよい行け〳〵！

古井　へイ、只今參りますで御座います。

ト、云つてもまだ逡巡ふ。夫人心付いて、

夫人　辨や！　お前も用が濟んだら、もう行つてよいよ。

お辨　難有う御座います、では行つてまゐります。

ト、一禮する。古井も初めて辭儀をして、やがて共に出て行つてしまふ。

伯　イヤ、かう皆に暇をやつたら、家は空虚に成つた樣ぢや。

夫人　ほんとに、何だか淋しい樣で御座いますねエ、

伯　はやく時刻が來ればよいに、……まだ一時間餘りある。

ト、壁の時計を見上げる。夫人は頭を垂れて太息。

伯　何うした、其方は何だか顏色が惡いぞ。

夫人　ハイ、惡くも御座いませう。

伯　何故か？　何所ぞ惡いか？

夫人　イエ、なんとも……

伯　しかし、今日は珍らしく其方の支度が早う濟んだから、時間が大層餘つた樣ぢや。

夫人　それでは却つてお氣の毒で御座いましたねエ。いつそ矢張り例の樣に、ゆつくり支度を致せば宜しう御座いました。

伯　イヤ、それにも及ばんが、……どうも待つと云ふものは、氣が落付かんで不可ものぢや。

ト、部屋の中をソワ〳〵歩き初める。夫人恨めしさうに見ながら、

夫人　貴方のお氣は、もう疾うに會へ行つて居らつしやるんで御座いませう。……それが三年も前まではかうして二人限りで居りますのが、何より樂みで御座いましたのに……

伯　さう云ヤア乃公もさうぢや。……ほんとに此頃は面白う無く成つたなア。

夫人　貴方もさうお思ひてすか。

伯　思はんてか！　それと云ふのも、皆其方の心が變つたからぢや。

夫人　いゝえ貴方こそお氣が變つて居らつしやる故てす。

伯　それぢやア兩方とも變つたのぢや。然し以前の事を思へば、兩方とも愉快ぢやつたなア、乃公が讀書をして居れば、其方は側て編物をする、讀書に飽きて書物を置けば、其方は直ぐに茶を入れてくれる。それからいろ〳〵な話に成つて、よく兩人とも笑ふたものぢやが……あゝ、今はそれも夢に成つた。

夫人　ほんとに往時が戀しう御座います。

伯　イヤ、それも互ひに年が寄つたからぢやらうが、何も年が經つたからと云うて、情まで冷に成る理由は無い筈ぢや。それに、かうして差し向ひて居つても、双方互ひに睨み合て、互ひに別々の事を考へとるたア、チョッ、約らん話ぢや。

夫人　さう仰有いますけども、貴方は此頃ちつとも御邸に居らつしやらず。また、偶々お在宅の事があつても、むづかしいお顔ばかりして居らつしやいますから、何ともお話の仕様が無いぢや御座いませんか。

伯　さア、それが入らん遠慮と云ふものぢや。乃公が何も云はんからと云うて、其方まで默つて居るにやア及ばん。さう云ふ時こそ、何ぞ面白い談話をしてくれるがよいぢやないか。

夫人　ても、私は始終宅に居りますが、貴方はよく他所へ入らつしやいますから、いろ〳〵面白いお話が御座いませうのに、ちつとも聞かして下さいません……私なんぞは、お相手にして下さいませんのてす。

伯　イヤ、さう取られちやアまことに困る。

ト、尙落付かぬ躰にあちこち歩く。

夫人　まア貴方、ちつとは落付いてお話し遊ばせな―何だか氣に成るぢや御座いませんか。

伯　オ、、それは惡かつた。ぢやア動くまい。

ト、今度は窓の側へ來て、コト〳〵と硝子を叩き何か拍子を取て居る。夫人は八の字を寄せて、

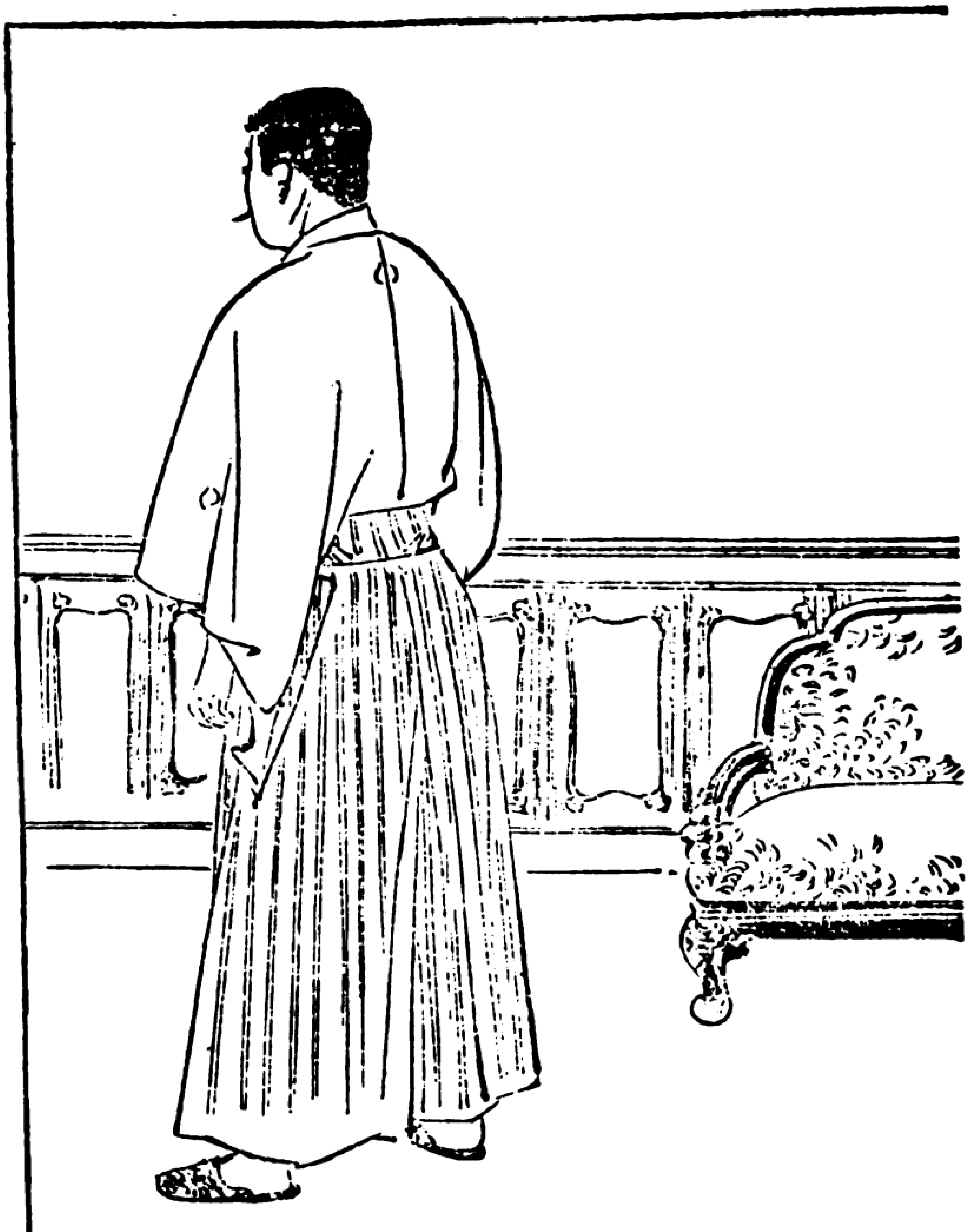
夫人　お足が休んだと思ひましたら、今度はお手が初まりましたに、私何ですか、頭痛がして參りましたから、後生ですからお靜に遊ばして下さいな―



伯　ホイ、また叱られたか。いつそもう出かけやうよ。さうしたら靜に成つて、其方も落付く事が出來やう。イヤ、頭の痛む時なんぞは、大勢の中は却つて惡からうか。

夫人　左樣で御座ますか。ハイ、それでは私はお留守番致しますから。貴方はお獨りで入らしつて、たんと面白い目を爲さいまし！　お馬車ももう出來ましたらう。……

どうせお邸に居らしつては、面白い事は御座いますまい。……あゝ、今晩の會には、さぞお美しい方が、大勢來て居らつしやいませう。



伯　さうとも……新橋柳橋の尤物は、皆引上げてある筈ぢや。

夫人　エッ、藝者？　まアそんな者が參るんで御座いますか。厭な事！

伯　何が厭な事ぢや。藝者は宴會に來るべき者、それに何の不思議がある。——美しくて、調子が好くて、いつも晴々した婦人の居るのは、實に愉快なものぢやからなア。

夫人　モシ貴方！　妻の前ではちとお愼み下ださい！

ト、きッと云ふ。伯はわざと笑ひながら。

伯　イヤ、美しい物を悦ぶのは、蓋し人情の常ぢやからなア。

夫人　併し結婚を濟ました男は……

伯　ナニ、結婚後の男子は、藝者を呼んぢや成らんと云ふのか。これは珍しい事を聞くものぢや。それぢやア妻の在る者は、他の婦人と同席は出來んと云ふのぢやナ、これは嚴しい、何時そんな法律が出たか知らん。

夫人　法律ぢやア御座いませんが……妻のある身でまた他の女を……

伯　イヤ、それぢやア妻のある者は、非常な不幸な者と云はずやア成らん。

夫人　いゝえ、妻こそ不幸で御座います。

伯　何故か？

夫人　だつて……貴方は……貴方はもう私の事をさつぱり思ひやつて下ださいませんのですもの：

伯　……（ト、少し涙組む）

コレ、其方は何を云ふのぢや、そんな解らん事を申すものぢや無い、今云ふたのは嘘ぢや。第一華族會館へ、藝者なんぞの來られると思ふか。

（トこれは眞顏に成る）

夫人　さう仰有いましても……私が此方へ參りました時分とは、全くお心が變つたに相違御座いません。

伯　さう云ふお前の方こそ、大分變つて來た樣ぢやが……（ト夫人の顏を覗き込みながら、そつと溜息を吐き）あゝ、實に困つたものぢや。

夫人　さぞ御困りで御座いませう。定めし御困りで御座いませうとも。私も此樣な事に成ませうとは、ちつとも存じませんで御座いました。……ほんとに貴方は、ちつとも可愛がつて下ださらないので御座います。

伯　どうして〳〵！　乃公は一生懸命に成つて、其方の機嫌を取らうとして居る。それに其方が、少

しも取らせて呉れんから困る。

夫人　それは貴方の、取り方がお惡いので御座います。

伯　イヤ、或はさうかも知れん。が、それと云ふのも、畢竟此頃兩人の嗜好が、自然に遠ざかつて來たからぢやらう。然し、已に人の妻と成るからは、その夫に隨ふのが常で、嗜好も互ひに近づくのが普通ぢや。然るに其方は其方て、勝手に自分の要求を主張し、乃公は乃公て……イヤなに……實に此頃の樣では、かく同棲はして居つても、少しも夫婦の實は擧らんと云ふものぢや。

夫人　いゝえ、それは私からこそ、申したい事で御座います。それに、貴方の樣に仰有いましては、何だか私許りが惡い樣で御座います……

伯　イヤ、其方許りが惡いのではあるまい。乃公も必ず貴を引かんとは云はん、が、少しは其方も其點を省みて貰ひ度い。折角夫婦と成つて居りながら、互ひに不愉快な日を送る位、天下に愚な事は無いからなア。

夫人　皆私が行き屆かないからで御座います、

伯　ぢやからちと氣を付けて呉れと云ふのぢや。

夫人　氣を付けてと仰有いますが、元々行き屆かないものて御座いますから、此上氣の付け樣も御座いません。……また、氣を付けました所で、とても貴方の御氣には入りませんから、……いつそ私は、暫時の間御暇を戴いて、母の所へ參つて居りました方が、却つて貴方の御氣に叶ふかも知れません。

ト、夫人は段々神經質に成る躰、伯も當惑したが、やがてまた氣を更へて、わざと無造作に、

伯　オヽ、それもよいぢやらう。實家へ行つてお母樣によくお話をして、何方が惡いか裁判して戴くもよからう。

夫人　では私は、實家へ參つても宜しう御座いますか？

伯　よいとも。

夫人　ほんとに參つても宜しいのですか？

伯　ハアよいよ。

ト飽くまで冷かに云ふのを、夫人は恨めしさうに見ながら、

夫人　イエ／＼私は參りません、貴方は私の參るのを、却つて喜んで居らつしやるんですもの……また私が參りましたら、貴方はよい氣にお成り遊ばして……

伯　コレ何を云ふのぢや。そんな事があるものか。其方が行き度いと申すから、それで行つてもよいと云ふたのぢや。

夫人　サ、そ、それが、貴方が水臭いと申すので御座います。……ほ、ほんとに貴方は……それで貴方のお心も、すつかり解りまして御座います。

ト、夫人は又しても噓唏する。

伯　コレ、それでば實に困るぢや無いか。其方が自分で頼むから、乃公が許した斗りぢやないか。それを直ぐさう邪推されちやア、乃公は實に當惑する。

夫人　それも皆、貴方がさう云はせる樣に遊ばしたのです。

伯　イヤ、これは驚く。あゝ云へばかう云ふと、其方はまるでだゞッ子ぢや。

夫人　ハイ、だゞッ子で御座いますとも……こんなだゞッ子をお持ち遊ばして、さぞ御迷惑で御座いませう。……ですからこんなだゞッ子は、はやく親の所へお返へし遊ばせ！

伯　誰が返へすと云つた？　行き度いと云ふから參れと申した許りぢやないか。……コレ、何うしたものぢや？　……ほんとに其方は何うかして居るぞ。

ト、夫人の肩に手を掛けて、宥め賺かさうとするほど夫人は猶泣きしやくる。

伯　コレ／＼、厭ならそれで解つたから、もう俐の所へ參るにやア及ばん。……考へて見りやアつまらん事ぢや。……ソレ見い！　折角立派に化粧した顔が、皆剝げてしまうたぢやないか。……

伯 …サヽ、はやく機嫌を直して、顔もよう直すがよい。

夫人 いくら直しましても、三平二滿はどうせ三平二滿で御座います。

伯 さう云ふ顔が三平二滿と云ふのなら、乃公は三平二滿が大好きぢや。

ト、態とらしく顔を見つめる。

夫人 アラ厭で御座いますねエ。

ト、身をよけながら、實は嬉しきこなし。

伯 ソヽそれ、その通り乃公を厭がるぢやないか。ぢやから矢張り、其方の心が變つたのぢや。

夫人 アレ……決して左樣ぢやア無いので御座いますよ。

伯 いゝや嫌はれたく〱。……嫌はれた者は側へも行けん……こりやちと遠慮して居らう。

ト、隅の方へ行く、夫人それを追ふ樣子。

夫人 アラ貴方、左樣では無いと申したぢや御座いませんか。

伯 イヤ、乃公はいつそお父樣の所へ行こう。

夫人 何を仰有るんで御座いますねエ……

ト、夫人は氣を揉んで、伯の機嫌を取らうとする。途端に鈴の音リーン！

伯 ヤツ、誰か來た樣ぢやぞ！

夫人 えツ？

ト、兩人耳を引立てゝ、靜まりかへる。鈴の音更に劇しく、リーン、リヽーン！

夫人 お人て御座いませうか。

伯 誰か早う取次げばよいに……

夫人 ても……誰も居りませんぢや御座いませんか

伯 そいつは困つたナ。

表では又しても、リーンリーン！

伯 仕方が無い……乃公が明けなきや成らんか？

夫人 ホヽヽヽ！

伯 何を笑ふのぢや。

夫人 でも貴方がその御風俗でお取次遊ばしたら、さぞお似合ひ遊ばしませう。

伯　ウン、さうぢやなア……眞の家來と思ふぢやらうナ。

夫人　乾度驚きますて御座いませうよ。

ト、云ふ時又鈴の音劇しく鳴る。

夫人　はやく明けてお遣り遊ばせよ。

伯　仕方が無い……

ト、行きかけるのを、夫人はまた追すがつて。

夫人　アノ……若しや先方が間違ひましたら、貴方も其氣て、間違へた儘にしてお置き遊ばせよ。……面白う御座いますから……

伯　よし〳〵！

ト、又もや鳴り立つ鈴の音の方へと、伯は扉を開いて出て行く。夫人は後影を見送りながら。袖を口にして、クス〳〵〳〵！

●流行の帽子　觀櫻會流行の爲めシルクハットの賣行きよし代價は舶來にて九圓以上十五圓、中折は薄茶及び鼠のソフト流行にて二三圓以上六七圓位まで、鳥打は八ツはぎホック止め物は無地又は縞物なるも大概は膨れり地質は綾羅紗裏は琥珀にて七十五錢以上二圓近くまで

講談

乃木將軍と夫人

眞龍齊貞水

世界無比難攻不落と敵の誇りました旅順の堅塞も、遂に力盡で彼より開城降伏致しました、是全く我幾萬の將校士卒の方が長らくの間、寒暑を冒し艱苦を凌ぎ勇戰激鬪のお功績とは申ながら、一つには司令官たる乃木將軍閣下の畫策御司令が宜しかッたゆゑ、斯のごとき大勝利を得られたことゝ存じます、偖其將軍が既に出征の大命を拜し、彌よ帝都を御發途の際、夫人靜子どのに對はれまして、將「彌よ明日は出發に及ぶ、隨分其身を堅固にいたしてをられるやう。」夫「ハイ、貴君樣にも御無事に彼地に御上陸遊ばされ、引續いて御健康をお祈り申し上ます。」將「就ては今回の戰ひは容易ならんによッて、再び當屋敷に立歸ることはヨモ有まならん

い、我のなき後は確と和女にも覺悟あるてあらふ。」と仰せられたぎり何のお言葉もない、此時夫人は常々の仰せも確かに承知いたしてをりますれば、夫「御出陣遊ばされましたる後のことは、聊かもお心に留させられぬやう願ひます、悴ども丶若年ではございまするが、戰地に參り一廉のお役を勤めること丶信じをりますれば、是亦此心配遊ばされぬやう願ひます。」爰て將軍は御出陣の御用意を遊ばされました、抑も此乃木のお家は諸君御承知の勤王家、吉田松陰君とは從弟同士にお當りになるお家柄で、吉田松陰君は神に崇められるほどの勤王家で在す、其從弟に當らせらる丶將軍なれば、我も今回は故松陰君に劣らぬやう、誓つて皇恩に報い奉まつらんといふ御決心、又夫人の靜子どのは薩州鹿兒島の有名なる某御方の御息女にて、兼て乃木家の御懇望によッてお輿入になりまして、既に武人の御子息をお擧遊ばして、常にお怒り遊ばすお顏を見たことはないといふくらゐ、如何なる場合にも大聲をお發あそばしたことはない、實とに沈着にして能召仕ひの女中、其他馬丁にいたるまでお懐けになりまして、御家庭は質素勤儉を旨として、實とに武將の夫人と仰ぎて恥かしからざる賢女に在す、御總領の勝典君が彌よ出陣の際に、勝「母上樣、此度御命令を蒙り彌よ戰地へ發足をいたします、常に軍人の心得は、棄破戰かひに望み身命を拋ちまして、皇國に盡すが軍人の覺悟でございます、二十有餘年の間御丹精を蒙むりまして、今回出陣をいたする好機會を得るも、偏へに母上樣の御保庇でございます、併し彼地に參りますれば、最早御尊顏を再び拜しまするとも如何と考へますれば、隨分御尊軀を御大切に、母上樣の御健全をお祈り申し上ます。」夫「父將軍も潔ぎよく御出陣遊ばされましたによッて、其方も乃木將軍の一子であれば、必らず家名に傷つけんやう頼みます、戰地に參りなば、其方が勇ましき戰死を遂たといふ報は喜びもすれ、若病氣のために一命を失なふやうなことは、何卒無いやうにして貰ひたいと思ひますから、其身の健全を祈り皇恩に報い奉つるやう確と申し付ました。」勝「ヘエー恐

れ入ました。」ソコデ首途の祝盃をおあげ遊ばした、夫人の御胸中實にお察し申し上ます、斯て勝典君は某師團について遼東半島に御上陸、間もなく南山大激戰のとき殘念なるかな敵彈に觸られ、野戰病院に收容されました、ところが此時の我損害は夥多しい數でございましたから、野戰病院の繁忙は目の廻るやうな現況、戰地におきまして負傷をする、是を收容して何れも醫官が施術をされます、輕傷者は後に廻し、重傷を被ふッたる人を先にといふので漸々やります、實に此南山の役は大激戰であるから、敵も大いに死傷者を出しました、殊に我軍隊にては死決隊を募り、或は地雷火の瀬踏をする、鐵條網を切拂ふ、或は掩堡の中に飛込んで敵兵に肉薄をする、又は組討ち掴み合、打り合刺違ひ、組だるまゝ彈丸のために立往生をするもある、實に全世界の戰爭歷史のうちに、讀しことも聞得しことも試のない戰爭といふのは此南山の役である、流石の露軍におきましても大いに恐れをなして、遂に堅固な永久此處で日本軍を苦しめやうと致した南山を、僅か一日にして要害を捨て退却に及ぶといふ程の激戰でございます、然ういふ際だから乃木中尉どのが負傷をなすッたが、餘ほど時經て擔架が來まして收容いたした、其時に勝典どのゝ從卒は非常に八方を駈廻り、若殿樣の御身の上は如何であらふ、今日の激戰何うかお間違のないやうにと頻りに心配をしてをッた、然れども勝典君は從卒に對つて、勝「其方は危ない、是から進むところは殊に危險であるから、貴方だけは最う來るに及ばん。」從「何うか御供を致したうございます。」勝「イヤ供するに及ばん。」斯ういふお言葉があッて何うしてもお供をすることが出來ませんによッて、是非なく聯隊の本部に引退ッて來て、何うか〳〵と心配をしてをる中に、何うも勝典樣の御容子が分らないといふ、併し戰かひが此通り御勝利であるから、何處でもお見當り申さなければ成ないがと思ッてゐるところへ、衞生隊が擔架て血のボタ〳〵垂る將校を運んで來る、若やと氣になるから從卒は、從「衞生隊、其將校は誰人です。」衞「乃木中尉どのでございます。」從「エーイ、乃

曹木中尉どのでございますか、私も御傍らに附て……。」と擔架に近づいて御容子を見ると、二ケ所の重傷を被ふッてゐらッしやる、其まゝ野戰病院に參りました、スルト三等軍醫が、醫「誰人だ。」從「乃木中尉どのてございます。」醫「乃木君か、然うか、繃帶をかけて來たのか。」從「ハイ、繃帶は致しましたが何分にも重傷てございます。」と微聲で言ふ、醫「然うか。」夫から野戰病院の內に收容して、醫官が施術をなすッて首を傾けてゐらッしやる、甲「貴君。」醫「アー。」甲「乃木將軍の若殿は何うてあらふか。」醫「何も工合が惡いねエ。」甲「能注意をしておあげ申さふ。」醫「勿論さ。」醫官どのが皆申し合して斯う申すやうなものゝ、何分にも將軍どのゝ御子息てあるからと言て、別段の手當をするといふわけに往ないのは、陸軍大尉は大尉、少佐は少佐と階級のあるものだから、殊に此非常な混雜、何しろ多くの負傷兵を野戰病院で手當をするのですから、夫りやア實に軍醫のお骨折なんといふものは一通りではございません、スルト御次男の乃木保典君、是も某

地點に御上陸になりまして、今回兄上の御出征に臨み母人から御教訓もあッた、我亦兄上に劣らん功名をして君國のために報い奉つらんと、能部下を愛し言葉少なく實意を旨として眞にお柔和しいので、皆部下の人々も、皆々「乃木少尉どのはお年は往んが、流石は閣下の御次男。」と影口にも皆喜こんでをります、素破戰かひに望むときには、鐵壁銅山を物ともせず、部下の先に立て能指揮をして、兵を損せず敵を破り其身を捨ての御働き、然るに戰ひ終ッて中隊まで御引揚になッたとき、南山にて乃木中尉どのが負傷されたと誰言ふとなく聞える、そこで保典君が、保「オイ曹長。」曹「ハイ。」保「貴君が只今乃木中尉が負傷をしたといふ事を話してをッたやうだねエ。」曹「ハイ然やうでございます。」保「アー中尉は南山の役て負傷をしましたか。」曹「ハイ、少尉どのへ申し上ますのも眞とにお氣の毒てございますが、實は最前傳騎が此中隊に參りました時に、中隊長どのに中尉どのゝ御負傷あつたことを申して居まして、丁度私は其時に、中隊長どのゝ傍ら

に筆記いたすものがありまして筆を執てをりましたから、能其事を承知いたしてをります、御重傷だそうでございます。」保「アー然うか、夫では中尉は何處にをられますか。」曹「ハイ、此から三里ほど南方の野戰病院にお在でございます。」保「アー然うか、ヤ大きに失敬をしました。」曹「何う仕つりまして、併し眞に御心配なことでございます。」保「ヤ別に心配することはない、戰爭をするのだから負傷することは素より覺悟、イヤ負傷どころではない、生命を失なふことも承知致してをるから、敢て驚くべきでもない。」とお答なすッたが、御兄弟の御真情お顔に溢れて、お氣遣の御容子は彼の曹長此を見て取り、眞にお氣の毒なことであると思はず不俯伏てゐる、保「曹長、御繁忙のところを大きに失敬しました。」曹「何うつかまつりまして。」サア保典君がお考へになッたが、重傷であるといふから最う何うかなッたかも知ない、切ての事に息あるうちに往て兄上の御尊顔を拜したいと思ひ召た、併し無斷て出て參るわけには往ません、日が沒ましてから中隊長のところへヤッて來られ、保「エー中隊長どの、甚だ恐れ入ますが一寸御伺ひをして」中「ハイ何ですか」保「實は一寸是から南山の激戰の負傷者が收容されてをる、野戰病院へ參りたいと存じますが、今晚小官が寸暇を得ることは能いませうか。」中隊長は保典君のお顔を見て、中「ア宜しうございます、往ッて入ッしやい、併し御難儀でもございませうが、軍中のことであるから、御用が濟ましたら一刻も早く御歸隊を願ひます。」保「ハイ、心得てをります。」中隊長は用件を問ず、扨は勝典君の容子を尋ねにお往でだなと、心中にアーお氣の毒だ、乃木閣下の御次男とも言るゝお方が、是から三里程の夜道を、野戰病院に兄上の御容子をお尋ねのためにお往でになる、其御心中お察し申すといふところから、お往でなさいと直に許されました、そこで隊に使役を致してをりまする支那人、夫を道案內として只一人にて、保典君は暗い滿洲の難路を右野戰病院までお往でになる、何れを見ましても高粱の畑、斷ら來れば僅に二三軒の支那の農家、消えんとばかり幽

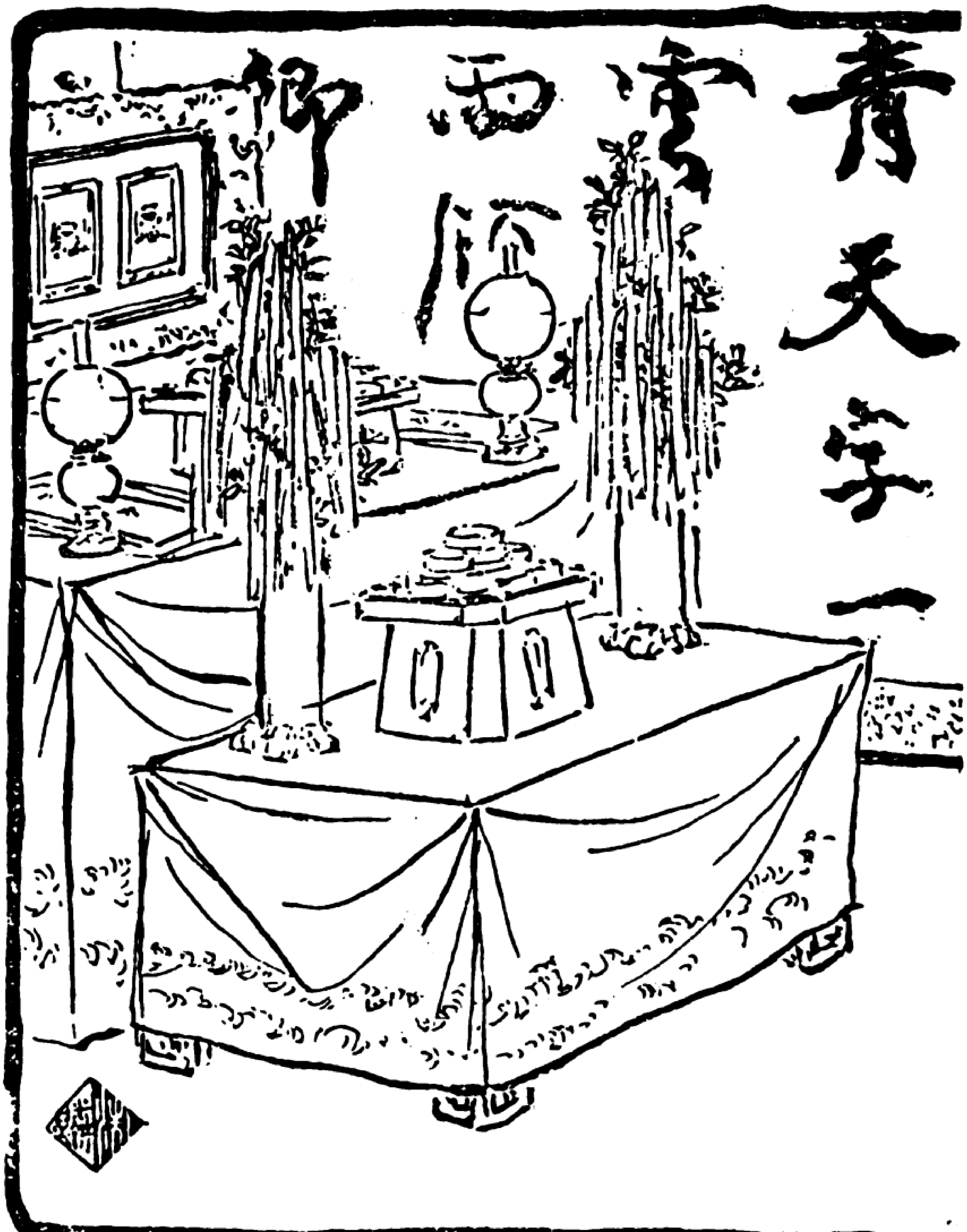
の燈火が見える、其村落を越て又山の裾を廻り、河に沿ひ坂を登り、山又山の間を過て野戰病院にお往でになりましたる時は夜の十一時頃ほひだ、歩哨の兵がをりまするから、禮をして、保「アー此りや。」歩「ハ」與に兵は將校ですから禮をして、歩「誰君でございますか。」保「ア僕は乃木少尉である。」歩「ハイ。」保「野戰病院は是から入ッて宜のだな。」歩「ハイ、此突當りのところの彼が病院の發着所でございます。」保「然やうか。」夫から正面のところが病院の發着所、此へお往でになりました、スルト醫官どのか兩名ほど、看護長看護手、何れも混雜をしてをる。醫「コラ繃帶を早く屆けてやらんチヤア可んヂヤアないか、アー是は露兵か、アーマア露の負傷者、彼は後にして宜しい、輕傷だから、我負傷者から早くしてやらんければ可ん」乙「アー擔架を早く持て往てやらんければ可ん」甲「此りや彼には粥食でなけりやア可んよ、彼は肉汁をやらんキヤア可んから」醫「ヤ早く手を廻さんければ可んヂヤアないか、八百有餘名といふものにやるのだから、皆も早く手を廻してくれんければ可んよ、早いが宜と言て訛まつて施術をしては可んよ」其混雜のところへ、保「アー一寸。」乙「エー誰君でございますか」保「ハイ、僕は乃木少尉でございます。」保「ア、乃木少尉どのでございますか」保「ハイ、此野戰病院に乃木中尉が負傷を被ふッて收容されてをるといふ事を聞傳へて參りましたが、居ますか。」乙「ハイ、一寸お控え下さいまして……醫官どの、只今乃木少尉どのがお入來になりまして、乃木中尉どのが居れるかといふお尋ねてございます。」醫「ア少尉君がお入來か、此方へお入申して。」乙「何卒お入り下さい。」醫「アー此は當野戰病院の一等軍醫でございます。」保「ヤ、僕は乃木少尉でございます、兄中尉が當院にをるといふ事を聞傳へまして……。」醫「ヤ、最う最前施術いたしました、が餘ほど御重傷であッて、迚も治療は能ふまいかと思ふのでございます、併し生命は醫師が如何やうに斷言を致しましても、天祐を以て不測に助かる場合もありまする、然れど我々が見るところでは、大分傷所が惡うございます

から。」保「ア、然うでございますか、私も此まで參りましたのは、何うか息あるうちに一寸會たいと存じますが、會して頂けますか」看「アー宜しうございますアー一寸御案内申たら宜らふ。」乙「アー此方ですからお往てなさい」保「ヤ、御繁忙のところをお手數をかけまして。」乙「は、何う致まして、此方でございます。」少尉どのは看護長に看護手軍醫が附て、西洋蠟燭を點まして、夫を持てや



ッて來ると、野戰病院の天幕の中からズウーッと負傷兵が何れも皆居る、如何に決心をしてをりましても、甲「ウン、ウン、殘念だ、忌々しい奴だ、今に見ろ、快なれば彌れ露スケ、最う少し—……ウーン、負傷を被ふらんければ、彼等を殺してしまふのに、殘念デヤ。」と頻りに呻く内にも、勇氣をもッて、各自只敵のことばかりを言てゐられる、丁度保典君を御案内をして參りますと、看護手

と一等看護長とが、勝典君の寢臺の此方に立つて、頻りに脉を察て心配をしてをられる、處へ附て來た看護手が、看「此處でございます。」保「然うですか。」見ると、第三軍司令官乃木大將閣下の御賢息勝典君も、戰場の事なれば實に間に合ば宜といふほどの寢臺の上に横臥されて、最早前後の御容子も更に分らん有樣、看「中尉どの〳〵、只今御令弟少尉どのがお入來てございます、中尉どの〳〵。」とお顔近くに燭を照した、保典君は傍へ寄て、保「兄上、〳〵、お兄い樣、〳〵、お氣を確にお持遊ばせ、保典でございます、兄さん、兄さん。」と耳のところへ口を寄て大きい聲をお發になる、勝「ウーン、ウーン、ウーン。」と只其聲ばかり、軍醫が、醫「中尉どの、少尉がお見舞でございますぞ、御令弟がお見舞になッたんでございますぞ。」保「兄さん、〳〵。」てへと此時初



めて勝典君、兩顏をグリ〳〵と動かして、保典君のお顏をヂイッと見詰てお在になる、保「兄さん保典でございます、分りましたか、保典でございます、氣を確かにお持なさいまし、保典でございます。」と三度ほどお聲がかゝると、莞爾〳〵とお笑ひになッた、保「お分りでございますか、水を呈ませうか。」此から水呑に水を注て、斯う口の傍へ持て參ると、快よく其水をグクリ〳〵貳口、保「兄上〳〵、」と仰しやる内に、グウーッと眠るが如くに息は絶たり、保「オ兄上、兄上」醫官が、醫「迚も可んのです、實は少尉どの、貴君が是にお入來になるといふことを、流石は御兄弟でございますから虫が知してをるのでございませう、最う五時間も前から迚も可んといふことは僕は察して居ました、ところを貴君がお入來になりまして、此お水を召上ッたのが、貴君のお入來をお待受を見えました、宜いところへお入來下さいました。」保「ヤ諸君に種々御厄介になりました、併し兄勝典ばかりではございません、南山の役には何れも大いに戰死を遂て居れるのでございますから、兄は實に譽れてございます、僕も何もか此兄のやうに名譽の戰死を遂たい心得でございます、ヤ折角參りましたんでございますから、切て身體を拭て遣はしたうございます。」醫「何うか然う願ひます。」一滴の涙も流さず保典君が、兄勝典君の最期を遂られての後ち佛家で申す湯灌、奇麗に負傷の箇所の血潮や何かを拭い取り、軍服を取脫け軍刀を傍らへ正なぞして奇麗にお扱ひなさる、室内の看護手看護長醫官何れも此御容子を見て感心をした、そこで悉皆始末をなすッて、保「眞に諸君の御手數をかけましたが、何此後は何分宜しく願ひます。」醫「ハイ、最うお跡は確かに此方でお引受致しますでございますから、御心配なく。」保「有難うございます、ではお暇致します。」そこで御自分は直に最前の支那人を案内に中隊に御歸りになッて、中隊長に歸隊をした屆をなさる、其後ち細かにお認めなすッて、是を母上樣の許へお贈りになりました、乃木將軍の夫人は此御次男が戰地よりの書面をお讀遊ばして、勝典君の名譽の戰死といふのは、其

筋の御通報によッて御承知でございましたが、最期の際に保典君が末期の水をお與へになッたとあるを、暫しは見つめて在する、此時の夫人の御胸中は實にお察し申し上ます、尚是よりは一層斷腸の思ひあらしむるは、中尉君の遺念即ち鮮血に染たる負傷當時の軍服、是が司令官の許へ屆き、副官が受取て將軍に御覧に供さんと致しました、然るに最も不思議と申しませうか、丁度此際將軍の從者が、御面前にて御携帯の行李を開き、襯衣をお替申すため取出さふと致して圖らず目に注たは勝典君の夏服、是は將軍が帝都を御出發の節新調して、勝典君に遣はされやうと御携帯になッて有ましたのだ、何の氣なしに從者が、從「是は勝典樣のお夏服でございます。」と取出した機會に、副官から右勝典君の血に染だ冬服を、副「是は御賢息のお遺念でございます。」と差出した、此とき乃木閣下は其二品をヂッと御覧になッて、將「此夏服此冬服。」と仰しやッたきりであッた、稍あつて、將「忰は名譽の戰死を遂たか天晴れな奴ヂヤ。」と、此時お傍にをッた諸君は將軍の御胸中をお察し申し上て、何れも下俯伏き暫らくは顏を上られなかッたとは御尤もなことゝて、夫から後に南山の役に戰死をされた將校の墳墓へ將軍を御案内申し上た、其際將軍は御携帯になつた水瓶の水を、將校方の墓標へ順次にタラ〳〵タラ〳〵と垂して、一々拜を遂てお巡りになッた、一番最後に乃木中尉君の墓標を御覧になッた、ヂイッと其墓標を白眼てお在遊ばしたが、空の方を斯う御覧になりまして、同じく水瓶の水を其墓標へ、タラ〳〵タラ〳〵とお注なすッた、其御容を見て從者は勿論のこと、隨行して參ッた面々一人として泣ざる者は無つた、泣ぬは泣に彌増る、流石は三軍の司令官、御愛子を失なふといへど、一滴の涙を見せず其水を注て在する、此御心中を一同が、實に堪らなく手巾を取て涙を拭いました、スルト第一師團長伏見宮殿下は、深く乃木將軍の心中を御賢察遊ばされ、此先萬一保典を失なふやうな事が有ては、と、目賀田監理部長に御命令があッて、保典君を監理部附に轉職仰せ付られました、然るに保典君は其辭令書を持

て、直に父將軍の許へお入來になりました、將「オ、何か。」保「ハイ、眞に我儘な申し分てございますが、私は今日監理部へ轉職を命ぜられましたを不本意に心得ます。」將「夫は結構ヂャないか、有難く就職するが宜いと。」御子息のお心を試す思し召て態と斯う仰せられた、スルト保典君は父上のお顏をヂッと見上て、保「何うして結構てございます。」將「夫はお前、師團の監理部と言たら敵彈の患へがない、安心してをられる、結構ヂャないか。」保「是はお父上のお言葉とも覺えません、怪しからん事を仰せてございます、私は監理部に轉職いたしまするは眞に有難いことてございます、併し靑年少尉が危險のない監理部にあるは、眞に望ましからんことゝて、願はくば先頭に進んて敵彈雨飛の中に働らきたく存じます、仍てお父上のお力をもッて復職致しまするお計ひは能いますまいか。」此時傍らより副官どのが、副「エー閣下へ申し上ます、今回若殿の御轉職は先に兄君の御戰死より、師團長の宮の深き思し召に出させられし事と承まはりました、仍て御對話を遮り此儀をお聽に達します。」此時乃木將軍はハラ〳〵とお落淚遊ばして、將「ア勿躰なや金枝玉葉の尊とき御身を持せたまひ、此荒き滿州の野の不潔極まる土人の家屋の內に、御起臥遊ばされる御事さへも恐れ入奉つるに、豚兒勝典が戰死にまて御心を注がせたまひ、我胸中を慰め遣はすとの御深慮より、扨は保典を監理部に轉職の有難き御沙汰。」と宮樣の御仁慈のほどを深く御心に留め、將「此りや保典、君恩の厚きを忘れることなかれ、其方が今回の轉職は深き殿下の思召より出させられし事と、今副官より聞く通りてある。」保「ハイ。」將「其方の身の上をお氣遣ひ下し置かれるほど、尙更恐れ多いことヂャ、併し監理部に轉職のことは好まんのヂャな。」保「ハイ、殿下の思し召は深く有難く心得ます、然すれば尙更私は先頭に進みまして、一廉の軍人らしき働き致して。兄勝典に優るほどの戰死を遂て君恩に報い奉つりたい決心てございます、自由になりまする事なれば監理部に轉職の儀は御免を蒙ふりたく存じます。」將「然るてあるか。」と保典君の容

子を御覧になると、如何にも其決心が面に現はれてをります、斯てこそ我伜なりと必にお喜びあッて、將「然らば此方から致して、殿下には實に恐れ多い事ヂヤが、其方を隊に置て下さるやう、成か成ぬか一個の資格で申して遣るから。」夫から將軍より、豚兒保典こと今回監理部に轉職を命ぜられたるが、是について彼は戰闘に臨んで、小隊長の役は勤らんとの儀に候らふか、若勤まるといふ事なれば、現職に其まゝお差置を願ましく候、と師團司令部へ宛てお申送りになりました、そこで此事を師團長の宮へ申し上ると、殿下は、宮「乃木父子が斯まで君國の爲に盡すか。」と仰せられまして現職に留まることに相成ました、其後ち保典君は其隊の副官に轉職されました、然るに爾靈山、即ち二百三高地の大激戰のとき、敵も全力を注いで戰ひました、素より我軍隊は勇猛だが、此時の敵の戰かッた有様も凄まじく、實に敵ながらも褒べきほどの戰闘を堪へて、此といふも當所は、旅順の死命を制すべき最重要の地點でありますからだ、此時乃木保典君は再び小隊長となッて先頭に進み、敵の掩堡へ乘り入り軍刀を振て部下を勵まし、近寄るところの露兵何れも銃劍をもッて突てかゝる、其銃鎗を引拂ッて忽ち敵を斫こと三名、如何にも其勇猛に當りがたしと、殘れる露兵が一團となッて、多勢を力に少尉に迫らんとする、甲「ソレ少尉どのお危ない。」乙「小隊長どのお危ない。」と部下は何れも少尉の左右に進んで奮戰に及ぶ一刹那、何れて狙撃いたしましたか、ピユーと飛來ッた彈丸少尉の眞眉間にあたる、保「殘念。」と其まゝ少尉がお倒れになる、兵「ヤ少尉どの御戰死、爾れ露スケ此讐を。」と何れも一層勇戰に及ばれる、遂に此二〇三高地を我軍にて確實に御占領になり、後に國音の通じまするところから、乃木將軍此二〇三を改めて爾靈山と御命名になッた、將「伜の戰死は素より覺悟の上、名譽の事であるから騷ぐに及ばん」と此時將軍は保典君のことを聊か患る御氣色もなく、御馬を左右に乘廻して八方の戰況を御注意遊ばした、既に占領の後ち御馬を頂きに乘上げ、積上たる土嚢の間から双眼鏡をもッて旅順の市

街をお見下しになッて、隨從してをる將校方を願りみて、將「ヤ、諸君のお盡力で此二〇三高地も我有トなッた、最う程なく旅順も全部我有になるてあらふ、アー愉快ヂヤ。」と仰せられた、然るに保典君戰死のことが早くも東京の御本邸に知れました、其の時に乃木夫人は、杖柱とも思し召すお兩人の愛子を、前後引續いて失ひたまひし御憤を色にも見せず、早速勝典君と保典君の寫眞をお飾りになりまして、是に供物を供へ燈火を點じ、夫「勝典保典能く君の御爲に戰死を遂られました、定めし將軍も御滿足で在せられやう。」と仰しやつて拜をなすッた、其御心中をお察し申し上て、仕へて居ますする女中方が、女「餘り夫人がお氣丈でゐらせられるから、却ッてお痛はしう存じまする。」と晝夜涙に袖を濡してをるくらゐ、ところへ某氏が此程お尋ねになッて夫人へお目通りを致し、某「實に三十八年の新しき年を迎へまして、元旦早々將軍の御威光によつて、旅順開城敵軍の降伏と相成ましたのは、五千万同胞の喜ばしき事にございます。」夫「イヤ最う昨日から致しまして、皆樣がお尋ね下さいまして、種々く祝賀をお述下さいますが、實は將軍が出征の際、質素謹儉を旨とせよと言置れましてございますから、一月の支度も仕つらず、何日旅順口が陷落致すことゝ存じましたら、其筋から御通知がありまして、初て春を迎へるやうな心ちが致します、某「併し若殿お兩人をお失ひ遊ばしましたる事は實にお察し申上ます。」夫「ハイ、倅どもも兩人戰死を致しましたのは、却て世間の人に對しても、將軍が定めし滿足でございませう、妾とても其ごとく、國家の爲に出たる兵も多く旅順で生命を失つてをります、其親族の人々へ對しても、當家の倅兩名が戰死を致してをれは、夫れて聊か將軍妾も安堵致して居ます、是が貳人の倅が無事に歸朝を致してども見ますれば、何と世人樣へ申して宜か分りません、勝典も保典も戰死を遂ましたのは、忠孝を守つてくれたんでございます……はい、曩に將軍の許へ、倅共の葬儀を問合せましたら、己が死でから父子三人の葬式を出せといふ返書が參りました、夫ゆゑ未葬式

の事も着手りません、戰地に參ッて以來は一度たりとも消息を受た事はございません、夫ゆゑ家事は總て妾一人で扱かひをります……はい、旅順口は陷落致しましても、將軍は一度歸朝は致しますまい。」某「併し眞にお目出たいと申すも如何でございますが、武門に取ましては御名譽なことでございます、隨分御機嫌お宜しう。」と某氏は辭してお玄關の敷臺へ來て、思はず夫人の御胸中を察して、溢れる淚を手巾で拭て御門を出られまして、旣に御子息武人を失なふといへど、將軍と申し夫人と申し斯まで君國の爲に盡させられるといふは、實に恐れ入たる事でございます。」（完）

記事豫告

第五卷第四號　三月五日發行

每月五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）‥金二十錢
四册（三ヶ月分）‥‥‥前金七十五錢
八册（半ヶ年分）‥‥‥前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）‥‥‥前金二圓八十錢
内（定刊四回増刊）‥‥‥十二册
一、四、七、十月價格同一
郵税　一册　二錢

廣告料

二十四字詰	一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等			割引三十三圓
一等	四十五錢	十四圓〇八錢	割引二十七圓
二等	三十六錢	十一圓五十二錢	割引二十二圓
三等	二十九錢	九圓二十八錢	割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割増にて五厘以下の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治卅八年二月五日發行　第五卷第參號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　東京市小石川區久堅町四〇八番地　合資會社博進社工場
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局
三百三番
千十八番
二千六百二十番
三千二百二十九番

謹告
本誌愛讀諸君

本館が昨卅七年一ヶ年間に於ける新規刊行せし圖書雜誌は、以下列記せる五百餘種千八百餘萬册にして、此外重版增刷したる圖書は千二百餘種に上り、其種類に於ても其數量に於ても敢て尠少なりとせず、顧みれば昨卅七年度は日露戰爭の影響を受け實業界は一般に不振の狀態を以て歲を終れり、就中出版界の如きは極めて萎靡沈衰の狀況に陷り文界轉た落寞の觀を呈す。此時に當り、幸に本館は奮つて前記幾多の圖書を刊行して出版界に生氣を添へたるは、一に大方の諸彥眷顧の賜と爲す。玆に昨年間發行圖書目錄を刊行するに當り、先づ謝意を表す。

明治三十七年度 新刊圖書

博文館
圖書注文規定

◎本館の販賣品は圖書總目錄に記載せる出版數千種の圖書雜誌及び手販賣の數種にして他所發行品の取次販賣は一切致し不申候

◎御注文は、節は必ず前金御送付被下度添金なき御註文は一切送本不仕候▲市内の御註文は代金引替とし其配達方も取計ひ可申候

◎御送金は郵便爲替なれば受取局を東京本局と受取人を東京日本橋區三丁目博文館と爲し爲替券面指定欄内へ御明記被下度郵券代用御送金は必ず一割增に相限り申候

◎御註文の書簡は書名、冊數、住所姓名等文字明瞭に御認めの事▲事故の御照會は御送金の年月日書名、冊數、及新舊の御住所詳細御認の事▲御問合は返信用郵券又往復端書の事▲宛名は博文館小賣係▲未納不足稅等の書信は其儘御返送可仕候

◎御註文品、品切等の際は出來期日を豫報可仕尙最近增刷の見込なき圖書は他の類書に變更御承諾方御願可申上候▲總て返金は御斷り申候

◎金員の受領證は金壹圓以上の御注文には發送可仕候得共一圓以下は送本丈に、辨用可致候

◎一時に金五圓以上御註文の方へは博文館々友證を呈し開發後三ヶ年間御註文品につき書籍は正價の一割引、又雜誌は、全書既に前金割引あるもの及び豫約減價のものは特に五分の割引を以て特待可仕候

◎贈答御進用又は御賞與品等に最適當なる圖書切符發賣仕候御入用の方は金高の多少に不拘御望みの金高に調製仕り優美なる箱入となし差上可申候

◎本館出版の圖書は數千種有之凡百の學術書より小童幼見の讀物に至るまで網羅し居り候該總目錄は往復端書にて御申込あれば進呈可仕候

博文館小賣係

博文館

（後付の一）

▲雜誌

●日露戰爭實記 每月三回 三ノ日發行 自第壹編至第四十五編 四十五冊
每月一回定期增刊八日發行
臨時增刊 三十七年二月日露開戰に付發刊す
◎軍神廣瀨中佐 四月發行
◎旅順口閉塞隊 六月發行

●戰爭實記定期增刊 寫眞畫報（自第一卷至第十二卷）四月ヨリ每月一回發行
臨時增刊
◎遼陽大決戰 九月發行
◎遼陽占領紀念寫眞帖 十月發行

●太陽 每月一回一日發行 每年四回定期增刊發行 第十卷 自第壹號至第十六號 十六冊
定期增刊
◎明治史第一編 議會史 一月發行
◎新法令 四月發行
◎滿韓大觀 六月發行
◎日露海戰史 十一月發行

●文藝倶樂部 每月一回一日發行 每年四回定期增刊發行 第十卷 自第壹號至第十六號 十六冊
定期增刊
◎ひと昔 一月發行
◎花ふゞき 四月發行
◎勝いくさ 七月發行
◎軍談大鑑 十月發行

●實業世界 太平洋 每月二回一日十五日發行
第二卷 自第壹號至第十二號 十二冊
第三卷 自第壹號至第十二號 十二冊

●少年世界 每月一回五日發行 每年四回定期增刊發行 第十卷 自第壹號至第十六號 十六冊
定期增刊
◎滿十歲 一月發行
◎露西亞征伐 四月發行
◎大勝利 七月發行
◎金鵄勳章 十月發行

●中學世界 每月一回十日發行 每年四回定期增刊發行 第七卷 自第壹號至第十六號 十六冊
定期增刊
◎自轉車世界一週 三月發行
◎世界十五大戰爭 六月發行
◎東西武勇傳 九月發行
◎處世百法 十一月發行

●女學世界 每月一回五日發行 每年四回定期增刊發行 第四卷 自第壹號至第十六號 十六冊
定期增刊
◎女學校生活 三月發行
◎婦人壯烈譚 六月發行
◎社會百生活 九月發行
◎家庭十二ヶ月 十一月發行

●通商彙纂 外務省通商局編纂 每月六回 三、八ノ日發行 卅七年 自第壹號至第七十三號 七十三冊

●自治機關 公民之友 每月一回十五日發行 第二卷 自第壹號至第貳號 二冊
日露戰爭實記發刊の爲二月より休刊す

●數學講義錄 每月一回 算術、代數、幾何の三科各一冊宛發行 各科共 自第九號至第十二號 十二冊

（後付の二）

三十七年四月にて各科共全部十二册宛結了し更に五月より次の如く改題發刊せり

毎月一回 中學課程 **數學講義錄** 各科共 自第壹號至第七號 廿一册

算術及三角、代數、幾何ノ三科各一册宛發行

毎月一回 十五日發行 **圖書世界** 第五卷 自第壹號至第十二號 十一册

以上第三種郵便ニシテ遞信省認可ヲ受ケ發行セル雜誌八十三誌二百六十八種ニシテ明治卅七年度中通計千六百餘萬册ヲ發行シタリ

▲圖書

帝國百科全書 自第百二編至第百廿編 十九册

▲並製ノ外總クロース特製本アリ 正價一冊五十五錢郵稅一冊拾錢宛

現代露西亞 法學士須崎芳三郎君著 全一册洋並綴 大判四二六頁 正價四十錢 郵稅拾錢

露國侵略史（銅版地圖挿入） 法學士須崎芳三郎君著 全一册洋並綴 大判二七八頁 正價四拾錢 郵稅八錢

最近外交史 法學士原田豐次郎君著 全一册洋並綴 大判三四四頁 正價四拾錢 郵稅八錢

政治地理學 法學士山本信博君著 全一册洋並綴 大判三二八頁 正價四拾錢 郵稅八錢

議院法提要 法學士工藤重義君著 全一册洋並綴 大判三七〇頁 正價四拾錢 郵稅八錢

支那法制史 文學士淺井虎夫君著 全一册洋並綴 大判四〇八頁 正價四拾錢 郵稅拾錢

金融論 法學士佐々木[illegible]二郎君著 全一册洋並綴 大判三二六頁 正價四拾錢 郵稅八錢

工業政策 法學士鎌田隆次郎君著 全一册洋並綴 大判三〇〇頁 正價四拾錢 郵稅八錢

新撰應用重學 理學士刈屋他人次郎君著 全一册洋並綴 大判三五二頁 正價四拾錢 郵稅八錢

世界殖民史 法學士山內正瞭君著 全一册洋並綴 大判三〇四頁 正價四拾錢 郵稅八錢

植物病理學 農學博士大森順造君、農學士山田玄太郎君合著 全一册洋並綴 大判四三六頁 正價四拾錢 郵稅八錢

地文學 理學士吉田弟彥君著 全一册洋並綴 大判三二八頁 正價四拾錢 郵稅八錢

比較神話學 文學士高木敏雄君著 全一册洋並綴 大判三六六頁 正價四拾錢 郵稅八錢

日本佛教史 文學士石原即聞君著 全一册洋並綴 大判三〇八頁 正價四拾錢 郵稅八錢

日本儒學史 文學士久保天隨君著 全一册洋並綴 大判二九二頁 正價四拾錢 郵稅八錢

食物論 農學士井上正賀君著 全一册洋並綴 大判三一二頁 正價四拾錢 郵稅八錢

水產學 農學士[illegible]本濟造君・農學士井上正賀君合著 全一册洋並綴 大判三二六頁 正價四拾錢 郵稅八錢

園藝各論 農學士高橋久四郎君著 全一册洋並綴 大判三二四頁 正價四拾錢 郵稅八錢

博文館卅七年度新刊圖書目録

●農學博士横井時敬君著 **稻作改良論** 全一冊洋裝 大判三二六頁 正價四拾錢 郵税八錢

工業叢書 自二十冊至卅一冊 十二册

●工學士久野末五郎君著 **實地土木工學** 全壹册洋布上綴 中判四四〇頁 正價八拾五錢 郵税拾錢

●工學士重見道之君著 **工業數學** 全壹冊洋布上綴 中判四三六頁 正價九拾錢 郵税拾錢

●工學士町原駉君著 **紡績一斑** 全壹册洋布上綴 中判四〇二頁 正價八拾錢 郵税拾錢

●工學士矢野道也著 **繪の具製造法** 全壹册洋布上綴 中判四七〇頁 正價八拾五錢 郵税拾錢

●工學士野津正之助君著 **調帶及調繩** 全壹册洋布上綴 中判三六二頁 正價七拾錢 郵税拾錢

●工學士町原駉君著 **機織及意匠一斑** 全壹册洋布上綴 中判三六〇頁 正價八拾錢 郵税拾錢

●工學士石井鎚太郎君著 **橋梁學** 全壹册洋布上綴 中判三七〇頁 正價九拾錢 郵税八錢

●工學士淺田忠順君著 **工業藥品製造法** 全壹册洋布上綴 中判二八〇頁 正價七拾錢 郵税六錢

●工學士若目田利助君著 **電話機及電話交換** 全壹册洋布上綴 中判二六〇頁 正價七拾錢 郵税六錢

●工學士野津正之助君著 **計算尺原理及使用法** 全壹册洋布上綴 中判一九〇頁 正價六拾錢 郵税六錢

●工學士市川俊雄君著 **燃料及測熱法** 全壹册洋布上綴 中判二一四頁 正價六拾錢 郵税六錢

●工學士淺川影君、專門技師大見錄一君合著 **ベイント製造及檢査法** 全壹册洋布上綴 中判三九二頁 正價壹圓 郵税拾錢

●東京高等師範學校教授 理學士 山崎直方君 東京高等師範學校教授 理學士 佐藤傳藏君 共編

大日本地誌（全部十卷）第三卷十二月發行

第二卷 **奥羽** 大判背皮金文字入 地圖及寫眞版百八十圖入九百六十頁 正價貳圓五拾錢 小包送料拾五錢

第三卷 **中部** 大判背皮金文字入 地圖及寫眞版百數十個入一千餘頁 正價貳圓五拾錢 小包送料貳拾錢

●故尾崎紅葉君著 巖谷小波君石橋思案君泉斜汀君校訂

紅葉全集（全部六卷）自一卷至六卷 六冊完成

▲正價一冊壹圓八拾錢全部拾圓 小包料拾五錢宛

▲大判總クロース金字金摸様附函入美本

▲紙數一冊約九百卅頁 總紙數五千六百頁

第一卷 ●色懺悔 ●巴波川 ●戀の蛻 ●關東五郎 ●猿枕 ●一人むく助 ●風雅娘 ●南無阿彌陀佛 ●此ぬし ●新色懺悔 ●わかれ蚊帳 ●二人女房 ●新桃花扇 ●拈華微笑 ●夏瘦 ●文ながし ●七十二文命の安賣

第二卷 ●伽羅枕 ●紙きぬた ●おぼろ舟 ●夏小袖 ●むき玉子 ●戀の病

第三卷 ●三人妻 ●心の闇 ●俠黑兒 ●袖時雨 ●男ごゝろ ●むらさき

第四卷 ●隣の女 ●冷熱 ●鷹料理 ●不言不語 ●青葡萄 ●浮木丸 ●三箇條 ●八重襷

第五卷 ●多情多恨 ●寒牡丹 ●安知歇貌林 ●千箱の玉章

（後付の四）

故文學博士高山林次郎君遺稿　姉崎文學博士・齋藤文學士共輯

樗牛全集（全部五卷）第一卷二月發行

第一卷 美學及美術史　正價壹圓五拾錢　小包送料拾五錢

▲大判總クロース金模樣金字入美本紙數五百五十餘頁

第六卷 ●金色夜叉（前編、中編、後編、續金色夜叉、新續金色夜叉、續々金色夜叉）●煙霞療養 ●紅葉山人傳 ●全著作年表

文學士（漢文學科專攻）久保天隨君著

東洋通史（全部十二卷）自五卷至十二卷 八冊發行

全部十二卷大判和裝紙數一冊約三百頁

正價一冊五拾錢　全部五圓　郵稅一冊八錢

子爵細川潤次郎君序文　赤堀又次郎君校訂

心學叢書（全部六冊）自一編至五編 五冊發行

▲大判和裝美本　正價一冊四拾錢　郵稅一冊八錢宛

第一編

- 寶先生卜安樂傳授（三卷）……盧白齋述
- 寶先生卜𣏐俵（三卷）……仝
- 齊家論（二卷）……石田勘平述
- 民の繁榮（五卷）……盧白齋述
- 故實俗諺錢湯新話（五卷）……伊藤單朴述

第二編

- 松翁道話（五篇十五卷）……布施松翁著　入宮白齋輯
- 雨やどり（二卷）……盧白齋述
- 孝行になる傳授（一卷）……脇坂義道述
- 福相になる傳授（一卷）……同
- 目の前（二卷）……盧白齋述
- 勸善小語（一卷）……山東指月述

第三編

- 御代の恩澤（五卷）……脇坂義堂著
- 銀のなる木の傳授（一卷）……同
- 和合長久の傳授（一卷）……同
- 都鄙問答（四卷）……石田梅巖著
- 夜話莊治（四卷）……出駒子著述
- 開運出世傳授（二卷）……脇坂義堂著

第四編

- 立身仕末鑑（二卷）……木南堂著
- 案山子艸（二卷）……寺井方信著
- 鳩翁道話（三編九卷）……柴田鳩翁述

第五編

- 鸚鵡問答（一卷）……丹羽氏粘著
- 有るべかゝり（上下）……手島堵庵著
- 五用心愼草（三卷）……脇阪義堂著
- 長命になるの傳授（二卷）……脇阪義堂著
- 道のこだま（三卷）……柳泓著
- 道得問答（三卷）……槃慈音尼著
- 聖賢雜語國字解（一卷）……上河正揚著

醫學新書

洋裝大判洋布背皮上綴　金文字入　堅牢頗美本

醫科大學皮膚病梅毒科教室助手醫學士旭憲吉君著

泌尿生殖器病學

全一冊背皮上綴　大判 九〇〇頁　正價四圓　小包送料貳拾錢

伊藤侯題辭　松方伯題辭　桂伯題辭　大隈伯序文　伊東祐穀君編（大判竪八寸五分 横六寸）

明治三十七年 世界年鑑

全一冊洋裝總クロース千三百頁函入美本

正價四圓貳拾五錢　小包送料三拾錢

▲卷頭極彩色石版精圖（旗章及統計圖等）二十三枚

獨逸伯林大學教授 パウルセン氏原著

文學博士蟹江義丸君　文學士藤井健次郎君　文學士深作安文君共譯

倫理學大系

全一冊大判洋布上綴九〇〇頁

正價壹圓八十錢　小包送料十五錢

（奥付の裏）

博文館卅七年度新刊圖書目録

政治學大綱
東京帝國大學法科大學教授法學博士小野塚喜平次君著
正價一冊五拾錢　郵税一冊八錢
全二冊大判總クロース金文字入上製三五四頁

新式算術講義
東京帝國大學理科大學教授　理學博士高木貞治君著
正價壹圓　郵税拾四錢
全一冊洋裝總クロース金文字入大判四七〇頁

新撰數學講義
理學士藤田外次郎君著
正價一冊卅八錢　郵税一冊六錢
上下二冊洋裝背クロース中判五七八頁

理論實驗 競技運動
前山口縣知事　法學士武田千代三郎君著
正價壹圓貳拾錢　小包送料拾五錢
全一冊洋裝總クロース金文字入大判六七八頁

園藝新說
横井、稻垣、佐藤三博士序文　農學士原田友作君著
正價七拾五錢　郵税拾貳錢
全一冊洋裝總クロース金文字入大判三八〇頁

增訂現行 日本法令大全
博文館編輯局編
正價四圓五拾錢　小包料四拾錢
全壹冊背皮上製洋裝大判四〇〇〇頁

軍艦詳說
工學博士宮原次郎君校閲　工學士增田知藏君著
正價壹圓貳拾錢　小包送料拾五錢
全壹冊洋裝上製總クロース金文字入大判五二〇頁

露國の實相
坪井文學博士校閲　文學士堀竹雄君　文學士竹内尚次君編纂
全壹冊洋裝上製正價七拾錢　大判紙數三〇〇頁郵税拾錢

明治三十八年 當用日記
大形一種中形二種小形一種

大形	菊判上製總クロース金字入	五百四十頁	正價金五拾錢	郵税拾四錢
中形	四六判背皮特製金文字入頬美	五百四十頁	正價金七二錢	郵税拾拾錢
中形	四六判上製クロース金字入	五百四十頁	正價金參拾五錢	郵税拾錢
小形	菊判半截上製總クロース金文字入	五百廿頁	正價金參拾錢	郵税八錢

明治三十八年 懷中日記
用紙特優　製本堅實　印刷鮮明　趣向斬新

新形	細長形總クロース美本	二百八十頁	正價金二拾錢	郵税八錢
上製	總クロース金文字入美本	三百二十頁	正價金拾八錢	郵税貳錢
並製	模皮金文字入上製	三百二十頁	正價金拾貳錢	郵税貳錢

世界之秘密國 西藏旅行記
西藏探險者　河口慧海君著
正價一冊壹圓　郵税一冊拾貳錢宛
全貳冊洋裝總クロース大判八九〇頁

言文一致 戰時國際法
法學博士　寺尾亨君校閲　法學士　永井亨君著
正價六拾錢　郵税拾錢
全壹冊洋並製大判三九〇頁

進化學より觀察したる 日露の運命
東京學士會院長文學博士　男爵加藤弘之君著
正價拾貳錢　郵税四錢
全壹冊洋並製大判九〇頁

日清往來尺牘
東京外國語學校教授　金國璞君閲
東京外國語學校教師兼高等商業學校講師吳泰壽君編
全壹冊和本製大判一七九頁　正價三拾五錢　郵税六錢

- **袖珍實用 滿韓土語案內** 軍參謀本部步兵大尉平山治久君著　全壹冊洋布上製 小判一二四頁　正價貳拾五錢 郵稅二錢
- **博士試驗論文集** 田鍋太郎君編　全一冊洋並製 大判二八六頁　正價三拾五錢 郵稅六錢
- **農民讀本 新農家** 前山口縣知事 法學士 武田千代三郎君著　全一冊洋並製 中判二五〇頁　正價四拾錢 郵稅八錢
- **酒量大觀** 貴族院議員櫻井駿君著　全一冊洋布上製 中判一一六頁　正價參拾錢 郵稅四錢
- **續仰臥三年** 一名養病讀本 醫學士近藤常次郎君著　全一冊洋並製 大判二四〇頁　正價參拾五錢 郵稅六錢
- **青年訓** 文學士大町桂月君著　全壹冊紙皮上製 小判三一八頁　正價二拾八錢 郵稅四錢
- **軍國訓** 文學士大町桂月君著　全壹冊洋並製 小判三三六頁　正價二拾八錢 郵稅四錢
- **演說活法** 附演說法名家談 中島氣崢君著　全壹冊洋布上製 小判二二六頁　正價參拾錢 郵稅四錢
- **東亞新字** 前田默鳳道人著　全壹冊洋並製 大判一三二頁　正價參拾錢 郵稅六錢
- **生死自在** 鑑海師著　全一冊洋並製 中判一二四頁　正價貳拾錢 郵稅二錢
- **赤心一片** 銀行頭取園田孝吉君著　全一冊洋並製 大判三八六頁　正價四拾錢 郵稅八錢
- **瓜生判官事蹟** 瓜生寅君撰 瓜生震君 瓜生復君校　全壹冊洋並製 大判八十六頁　正價二拾錢 郵稅四錢
- **金利精覽** 生命保險相互會社取締役矢野恒太君著　全一冊紙革上製 紙數二百七十頁　正價五拾錢 郵稅六錢

- **續農學階梯** 上下 農學博士稻垣乙丙君 西鄉父次郎君合著　二冊洋布背皮上製 大判七六〇頁　正價各七拾五錢 郵稅各拾貳錢
- **普通簿記教科書** 神戶高等商業學校教授東奭五郎君校閱 長崎縣師範學校教諭山下之吉君著　全一冊洋並製 大判一八四頁　正價參拾錢 郵稅六錢
- **最新家計簿記** 曾我部純一君著　全一冊洋並製 大判一三四頁　正價貳拾五錢 郵稅六錢
- **中等教育 算術教程** 佐久間文太郎君著　全一冊洋並製 大判二二二頁　正價四拾錢 郵稅六錢
- **實用造花術指南** 造花術校長山田與松君著 木版圖數十個插入 ▲附錄 實習摸形圖畫　全一冊和並製 大判一〇六頁　正價貳拾五錢 郵稅四錢
- **實用刺繡術** 刺繡術專門機村大次郎君著　全一冊洋並製 大判一二四頁　正價貳拾五錢 郵稅四錢
- **各宗本山名所圖會 高野山名所圖會** 石倉重葉君著 寫眞銅版三十餘葉插入　全一冊洋並製 大判三四〇頁　正價六拾錢 郵稅拾錢
- **世界風俗志** 西田勘次郎君著 各國風俗寫眞銅版八葉插入　全一冊洋並製 中判四三〇頁　正價五拾錢 郵稅八錢
- **世界富豪の表裏** 長田秋濤君著　全一冊洋並製 大判二六二頁　正價參拾五錢 郵稅六錢
- **竹本攝津大椽** 水谷不倒君著 寫眞銅版插入　全一冊和裝上製 大判二三〇頁　正價四拾錢 郵稅八錢
- **布哇渡航案內** 木村芳五郎君 井上胤文君共著　全一冊洋並製 大判二三六頁　正價參拾八錢 郵稅六錢
- **心身鍛錬 少年競技運動** 前山口縣知事 法學士 武田千代三郎君著　全一冊洋並製 大判一五五頁　正價拾八錢 郵稅四錢

（綴付の七）

博文館卅七年度新刊圖書目錄

- 池田米太郎君著 **日曜の昆蟲採集** 全一冊洋並製 大判 一三六頁 正價拾五錢 郵稅四錢
- 池田米太郎君著 **日曜の植物採集** 全一冊洋並製 大判 一二三頁 正價拾五錢 郵稅貳錢
- 石川理學博士校閲 木村小舟君 武田櫻桃君合著 **少年動物畫談** 全一冊洋並製 大判 二〇〇頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢
- 吉田理學士校閲 腹卷助太郎編纂 學生必携 **鑛物採集鑑定** 全一冊洋並製 小判 一四二頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢
- 第六高等學校教授松尾哲太郎君著 新撰中等 **用器畫教科書解說** 全一冊洋布上製 大判 一七三頁 正價五拾錢 郵稅八錢
- 同 新撰中等 **用器畫教科書圖式** 全一冊厚表紙製 太陽版 石版摺 正價五拾錢 郵稅六錢
- 坂本隆哉君著 **病者の食餌** 全一冊洋並製 小判 一五〇頁 正價貳拾錢 郵稅四錢
- 阪本隆哉君著 **衛生食物調理法** 全一冊和並製 大判 一五四頁 正價參拾錢 郵稅六錢
- 露國トルストイ伯著 田山花袋君譯 **哥薩克兵** 全一冊洋並製 大判 二二八頁 正價拾八錢 郵稅六錢
- 江見水蔭君著 軍事小說 **武裝の卷** 全一冊洋並製 大判 二四六頁 正價貳拾五錢 郵稅八錢
- 文學士中内蝶二君著 **日露戰爭未來之夢** 全一冊洋並製 大判 一九二頁 正價貳拾五錢 郵稅六錢
- 井口義爲君編 露國征伐 **劍舞獨習圖解** 全一冊洋並製 中判 二四六頁 正價貳拾五錢 郵稅四錢

- 大和田建樹君作歌 上眞行君作曲 **日露開戰軍歌** 全一冊洋並製 小判 美本 正價參錢五厘 郵稅三冊迄三錢
- 文學士久保天隨君作歌 上眞行君作曲 **征露新軍歌** 全一冊洋並製 小判 美本 正價四錢 郵稅三冊迄三錢
- 文學士大町桂月君作歌 上眞行君作曲 **露國征伐軍歌** 全一冊洋並製 小判 美本 正價四錢 郵稅三冊迄三錢
- 佐々木信綱君作歌 上眞行君作曲 **露西亞征討の歌** 全一冊洋並製 小判 美本 正價參錢五厘 郵稅三冊迄三錢
- 文學博士井上哲次郎君作歌 山田源一郎君作曲 **征露の歌** 舶來上等洋紙 大判 折本 正價貳錢五厘 郵稅八枚迄三錢
- 巖谷小波君作歌 山田源一郎君作曲 征露軍歌 **旅順の開戰** 舶來上等洋紙 大判 折本 正價貳錢五厘 郵稅八枚迄三錢
- 巖谷小波君作歌 東儀鐵笛君作曲 征露軍歌 **決死隊** 舶來上等洋紙 大判 折本 正價貳錢五厘 郵稅八枚迄三錢
- 佐々木、大和田、中村、東宮四君作歌 上、小山二君作曲（文部省檢定出願中） 日露戰爭 **國民唱歌** 第一編 全一冊洋並製 大判 美本 正價八錢 郵稅三冊迄三錢
- 鍋島侯爵、同侯爵夫人、武島 佐々木、大和田の諸君作歌 上、小山二君作曲（文部省檢定中） **同** 第二編 全一冊洋並製 大判 美本 正價八錢 郵稅三冊迄三錢
- 女子大學教授文學士 鹽井雨江君作歌 女子大學音樂教授 白井規矩郎君作曲 **女子軍歌** 全一冊洋並製 大判 美本 正價拾錢 郵稅貳錢
- 野口寧齋君著 戰詩 **征露宣戰歌** 全一冊洋並製 小判 美本 正價五錢 郵稅三冊迄三錢
- 國府犀東君著（戰詩） 伐露樂府 **大陸劍歌** 全一冊洋並製 小判 美本 正價五錢 郵稅三冊迄三錢

（後付の八）

佐藤六石君著 戰詩 **征露大捷歌** 全一册洋並綴 小判美本 正價五錢 郵税三册迄二錢

少年工藝文庫

石井研堂君著 毎編寫眞銅版及木版圖數多挿入 自第十八編至第廿四編 七册

染色の卷 全一册洋並綴 大判一二〇頁 正價拾五錢 郵税四錢

煙草の卷 全一册洋並綴 大判一二八頁 正價拾五錢 郵税四錢

砂糖の卷 全一册洋並綴 大判一二四頁 正價拾五錢 郵税四錢

釀造の卷 全一册洋並綴 大判大二八頁 正價拾五錢 郵税四錢

石油の卷 全一册洋並綴 大判一三六頁 正價拾五錢 郵税四錢

機械の卷 全一册洋並綴 大判一〇二頁 正價拾五錢 郵税四錢

建築の卷 全一册洋並綴 大判一一〇頁 正價拾五錢 郵税四錢

通俗農藝文庫

横井農學博士校閲 農學士井上正賀君著 第十一編 第十二編 二册

養鷄篇 全一册洋並綴 大判一六〇頁 正價貳拾錢 郵税四錢

農業經濟 全一册洋並綴 大判一六〇頁 正價貳拾錢 郵税四錢

蠶業叢書

第十二編 一册

池田榮太郎君著 蠶體生理論 全一册洋並綴 大判二二二頁 正價參拾錢 郵税八錢

少年商業文庫

天城安政君著 第五編 第六編 二册

商人修身訓 全一册洋並綴 大判一二二頁 正價拾五錢 郵税四錢

商業の栞 全一册洋並綴 大判一三二頁 正價拾五錢 郵税四錢

受驗問答叢書

自第廿一編至第廿八編 八册

相澤新八君編 明治三十六年文官高等試驗答案集 全一册紙皮上綴 小判二五六頁 正價貳拾錢 郵税四錢

法學士佐竹義文君校閲 森美文君編 新撰英語會話作文問答 全一册紙皮上綴 小判二五四頁 正價貳拾錢 郵税四錢

文科大學藤井憲君著 新撰獨逸文典問答 全一册洋並綴 小判二五〇頁 正價貳拾錢 郵税四錢

志岐湖月君編 新撰農業要項問答 全一册紙皮上綴 小判二七六頁 正價貳拾錢 郵税四錢

濱田四郎君 遠藤辨二君共編 新撰商業要項問答 全一册紙皮上綴 小判二五八頁 正價貳拾錢 郵税四錢

東京高等工業學校教員養成所加野友次郎君編 新撰工業要項問答 全二册紙皮上綴 小判四七二頁 正價一册貳拾錢 郵税一册四錢

西村眞次君編 新撰作文問答 全一册紙皮上綴 小判二四六頁 正價貳拾錢 郵税四錢

世界お伽噺

巖谷小波君編 （毎編木版密畫挿入） 自第五十四編至第六十五編 十二册

鶯王子（シヽリナ） 全一册洋並綴 大判六六頁 正價八錢 郵税貳錢

●朝星夕星（ルーマニア） 全一冊 大判 洋六六頁 並製 正價八錢 郵稅貳錢

●法螺くらべ（佛國） 全一冊 大判 洋六六頁 並製 正價八錢 郵稅貳錢

●指環の魔力（露國） 全一冊 大判 洋七六頁 並製 正價八錢 郵稅貳錢

●二子草紙（ルーマニア） 全一冊 大判 洋六二頁 並製 正價八錢 郵稅貳錢

●鬼だまし（瑞典） 全一冊 大判 洋五四頁 並製 正價八錢 郵稅貳錢

●二人半助（愛蘭土） 全一冊 大判 洋七四頁 並製 正價八錢 郵稅貳錢

●病魔降伏（露西亞） 全一冊 大判 洋六二頁 並製 正價八錢 郵稅貳錢

●金馬將軍（希臘） 全一冊 大判 洋七〇頁 並製 正價八錢 郵稅貳錢

●熊むすめ（シベリヤ） 全一冊 大判 洋六六頁 並製 正價八錢 郵稅貳錢

●龍宮の使者（朝鮮） 全一冊 大判 洋六八頁 並製 正價八錢 郵稅貳錢

●森の女（印度） 全一冊 大判 洋六八頁 並製 正價八錢 郵稅貳錢

巖谷小波君著 武内桂舟君畫

明治お伽噺 自第八編至第十二編 五册

●お伽十二支 上卷 洋裝 大判 一一七頁 並製 正價四拾錢 郵稅貳錢

●同 下卷 洋裝 大判 一〇五頁 並製 正價四拾錢 郵稅貳錢

●お伽洋行船 上卷 洋裝 大判 一二六頁 並製 正價四拾錢 郵稅貳錢

●同 下卷 洋裝 大判 一三七頁 並製 正價四拾錢 郵稅貳錢

●お伽立志噺 全一冊 大判 洋一一〇頁 並製 正價四拾錢 郵稅貳錢

武田櫻桃君編 每頁木版密書入

教訓繪ばなし 自第十八編至第廿四編 七册

●理科の卷 全一冊 大判 洋三四頁 並製 正價五錢 郵稅貳錢

●發明の卷 全一冊 大判 洋三四頁 並製 正價五錢 郵稅貳錢

●尙武の卷 全一冊 大判 洋三四頁 並製 正價五錢 郵稅貳錢

木村小舟君編 每頁木版密書入

●娛樂の卷 全一冊 大判 洋三四頁 並製 正價五錢 郵稅貳錢

●博物の卷 全一冊 大判 洋三四頁 並製 正價五錢 郵稅貳錢

●衞生の卷 全一冊 大判 洋三四頁 並製 正價五錢 郵稅貳錢

●談話の卷 全一冊 大判 洋三四頁 並製 正價五錢 郵稅貳錢

山本九馬亭君著 竹本攝津大掾 竹本彌太夫贊助

淨瑠璃通解 自第四編至第六編 三册

▲正價一册參拾五錢六册壹圓九拾錢郵稅一册六錢宛

第四編

●近江源氏先陣館（四斗兵衛内の段）●仝（盛綱陣屋の段）●仝（船長の段）●義經腰越狀（日質屋の段）●仝（泉三郎館の段）●鎌倉三代記（三浦別れの段）●川本賢女鑑（片岡忠義の段）●、陣守設が政清本城の段、●姬子松子の日の遊，妹兒狀の段、●仝（佐賀島物語の段）

第五編

●木下蔭狹間合戰（竹中砦の段）●仝（壬生村の段）●釜ヶ淵双級巴（釜煎りの段）●日吉丸稚櫻（五郎助住家の段）●繪本太功記（本能寺の段）●仝（夕顔棚の段）●仝（尼ヶ崎の段）

第六編

●增補生寫朝顔話（明石船別の段）●仝（摩耶が嶽の段）●仝（松小屋の段）●仝（笑藥の段）●仝（宿屋の段）●艶娘昔八丈（城木屋の段）●仝（鈴ヶ森の段）●花雲佐倉曙（宗五郎住家の段）●仝（半年屋の段）●仝（甲補宗五郎仕替）●岸柳巌流鏡（朝比奈上使い段）

（後付の十）

博文館卅七年度新刊圖書目錄

大和田建樹君著
能の栞（全部六卷完成）
六の卷 一冊 正價一冊四拾錢 郵税一冊六錢
六の卷（●龍田 ●朝長 ●砧 ●阿漕 ●善界 ●國栖 ●弱法師 ●大原御幸 ●蟬丸 ●鵜飼 ●大佛供養 ●斑女 ●藤戸 ●大江山）

醫學博士井上通泰君監修
家庭衞生叢書
毎編專門博士の講話 第壹編 第貳編 二冊
▲全部六冊洋裝大判 正價壹冊貳拾錢 全部壹圓拾錢 郵税六錢宛

第壹編
●傳染病の話（醫學博士北里柴三郎先生）●胃の攝生法（醫學博士長與稱吉先生）●血族結婚と聾唖との關係（醫學博士土肥慶藏先生）●眼科談第一（醫學博士井上通泰先生）●患者を生じたる時の注意……十六項

第貳編
●腸窒扶斯に就て（宮本大學助教授）●婦人の衞生一斑（醫學博士木下正中先生）●婦人及小兒の眼の衞生（醫學博士桐淵鏡次先生）●眼科談（第二）（醫學博士井上通泰先生）（一）とり目及疳目の話（二）孤兒の風眼（三）小兒の眼病●衞生雜話……五項

巖谷小波君著
少年日露戰史
自第一編至第七編 七冊

第一編●開戰の卷	全一冊洋並製 大判一〇六頁	正價拾貳錢	郵税四錢
第二編●決死隊の卷	全一冊洋並製 大判一〇四頁	正價拾貳錢	郵税四錢
第三編●九連城の卷	全一冊洋並製 大判一〇二頁	正價拾貳錢	郵税四錢
第四編●南山の卷	全一冊洋並製 大判一〇一頁	正價拾貳錢	郵税四錢
第五編●得利寺の卷	全一冊洋並製 大判九九頁	正價拾貳錢	郵税四錢
第六編●摩天嶺の卷	全一冊洋並製 大判一一〇頁	正價拾貳錢	郵税四錢
第七編●大石橋の卷	全一冊洋並製 大判一〇〇頁	正價拾貳錢	郵税四錢

▲文武堂新刊

農學博士南鷹次郎君校閲 農學士今村猛雄君著 ●最新蔬菜栽培書	全一冊洋布上製 大判四一二頁	正價貳圓	小包送料拾五錢
佐々木信綱君、湯淺雅子女史共著 ●新撰女子用文	全一冊洋並製 大判二二六頁	正價參拾錢	郵税六錢
飼鳥大家川口孫五郎君著 ●諸鳥飼養全書 極彩色石版刷鳥類解譜十二葉挿入	全一冊紙皮上製 大判二一九頁	正價九拾錢	郵税拾錢
押川春浪君著 ●海國冒險奇談 新造軍艦	全一冊紙皮上製 中判三五一頁	正價參拾錢	郵税六錢
宇野光三郎君新註 ●イヴアンゼリン	全一冊洋並製 中判一三二頁	正價參拾錢	郵税四錢
英學新報社編纂 ●ダイヤログス	全一冊紙皮並製 中判一八九頁	正價參拾五錢	郵税六錢
高島捨太君編 ●訂正增補 和文英譯集	全一冊洋並製 中判二三〇頁	正價參拾五錢	郵税四錢
英學新報社編纂 ●英文 最近演説集	全一冊洋並製 中判二〇七頁	正價參拾九錢	郵税六錢
英學新報社編纂 ●英文討論集	全一冊洋並製 小判一五八頁	正價貳拾五錢	郵税四錢
巖谷小波君原著 グリーン女史英譯 ●英和對譯日本昔噺 大江山	全一冊洋並製 大判六六頁	正價拾參錢	郵税貳錢
同 コルビー女史英譯 ●英和對譯日本昔噺 瘤取り	全一冊洋並製 大判四六頁	正價拾參錢	郵税貳錢
佐藤農學博士閲 增田良吉君著 ●實用肥料學	全一冊洋並製 大判二八二頁	正價九拾九錢	郵税八錢

押川春浪君著 **武侠艦隊** 全一册洋裝 小判二八〇頁 正價參拾錢 郵税四錢

英學新報社編 明治三十八年 **英文懷中日記** 全一册紙皮上製 長方形三一二頁 正價貳拾五錢 郵税六錢

同 リツデル女史英譯 英和對譯日本昔噺 **俵藤太** 全一册洋裝 大判五〇頁 正價貳拾參錢 郵税貳錢

同 グリーン女史英譯 英和對譯日本昔噺 **文福茶釜** 全一册洋裝 大判五四頁 正價貳拾參錢 郵税貳錢

同 リツデル女史英譯 英和對譯日本昔噺 **物臭太郎** 全一册洋裝 大判五四頁 正價貳拾參錢 郵税貳錢

▲繪はがき 日本葉書會新刊

日本葉書會發行 木曜會圖案 日露戰爭繪はがき **海戰の部** 第一輯 石版極彩色刷密圖六枚入一組 正價拾五錢 郵税三組迄二錢
▲特製 正價貳拾五錢 郵税四組迄貳錢

同 渡邊審也君畫 日露戰爭繪はがき **仝** 第二輯 石版極彩色刷密圖六枚入一組 正價拾五錢 郵税三組迄二錢

同 木曜會圖案 日露戰爭繪はがき **陸戰の部** 第一輯 石版極彩色刷密畫六枚入一組 正價拾五錢 郵税三組迄二錢
▲特製 正價貳拾五錢 郵税四組迄貳錢

日露戰爭繪はがき **仝** 第二輯 石版極彩色刷密畫七枚入一組 正價拾五錢 郵税三組迄二錢

日露戰爭繪はがき **旅順の海戰** 寫眞銅版彩色刷十二枚入一組 正價拾貳錢 郵税三組迄二錢

日露戰爭繪はがき **在韓の我陸軍** 寫眞銅版彩色刷十二枚入一組 正價拾貳錢 郵税三組迄二錢

旅順陷落繪端書 石版極彩色刷六枚入一組 正價金拾五錢 郵税四組迄二錢

東京名所繪端書 上下 コロタイプ版着色刷六枚一組 正價各拾參錢 郵税三組迄二錢

今様美人繪端書 上下 コロタイプ版着色刷六枚一組 正價各拾參錢 郵税三組迄二錢

玉章、廣業、年方、月耕、花蹊、半古、桂月の七大家揮毫 **巳の歳繪葉書**（日本畫） 石版彩色刷七枚入一組 正價拾五錢 郵税三組迄二錢

和田英作、三宅克巳、久保田米齋、五姓田芳柳、大下藤二郎、中澤弘光の六君畫 **巳の歳繪葉書**（洋畫） 石版彩色刷七枚入一組 正價拾五錢 郵税三組迄二錢

水野年方君筆 **日本美人端書** 石版極彩色刷六枚入一組 正價貳拾五錢 郵税三組迄二錢
▲桐箱入特製 正價參拾錢 郵税貳錢

中澤弘光君筆 繪はがき **花暦**（十二ヶ月の時花美箱入） 石版極彩色刷十二枚入一組 正價參拾五錢 郵税貳錢
▲桐箱入特製 正價四拾錢 郵税貳錢

戰地寫眞繪端書 寫眞銅版色刷十二枚入一組 正價八錢 郵税三組迄二錢

跡見花蹊女史、野口小蘋女史畫 **花ニ鳥繪端書** コロタイプ版六枚入一組 正價拾五錢 郵税三組迄二錢

制海紀念 **封緘はがき** 光澤紙刷寫眞版十四面入書翰箋 正價四錢 郵税四組迄二錢

葉書帖 全一册大判四枚挿 洋布金字入頗美 正價八拾錢 郵税拾錢

日露 **戰報拔萃帖** 全一册厚表紙 大判一六〇頁 正價參拾錢 郵税六錢

（後付の十二）

太陽定期增刊

明治史 第二編
財政史

二月二十日發行
正價金參拾錢
郵稅金三錢

（綴付の一四）

●明治年間財政家の肖像　寫眞銅版二十餘人

財政史は明治史の第貳編として現はれたり。是れ戰時の國民が看過すべからざる必讀の書なり。今や戰時に於ける國民の負擔は殆んど十億万圓に達せり。是れ未曾有の大事實にして其影響は必らず戰後に及ばむ。而して直に是れ國民各個の利害に關する大問題なり。豫め之を解釋し置かざれば獨り戰勝の効果を空くするのみならず國民各個は却て之れが爲めに疲弊するに至らん。財政史は是に於てか出でたり。本書は明治初年より現内閣の戰時財政計畫に至るまでの財政を歷史的に記述したるものなり。其内容は豫算、貨幣、公債、租稅及び各種の財政案に關する事項悉く備り、時に日淸戰爭以後より現時に於ける財政計畫の始末は最も精詳を極めたり。凡そ現時の戰時財政を領解せんとせば、先づ財政の沿革變遷を知らざるべからず。其淵源を尋ねずして其下流の滔々たるを治めむとするは難し。試に本書を座右に備へよ、戰時の財政は刄を迎へて解くが如き感あらむ。戰爭に勝つの國民は亦財政に於ても成功せざるべからず此點に於て本書は國民の虎の卷なり

▲附錄――明治三十七年史は昨年に起れる政治、外交、財政、軍事、教育、文學、社會等の各問題を敍述して光彩陸離たり

●二月二十日發行　正價卅錢　郵稅三錢

發行元　東京日本橋區本町　博文館

大隈伯時局談

伯爵大隈重信君口述

武井宗十郎君筆記

口繪寫眞銅版　大隈伯爵肖像、仝伯爵家庭園　二面

大政黨の首領大隈伯刻下の時局に對して豈一大識見なくして可ならんや、夫れ伯爵一たび演説すれば倫敦市場忽ち公債の騰落を見るにあらずや、其一言一行の社會に大勢力あること以て見るべきなり、今や伯爵時局に對して滿腔の熱血を吐き帝國戰後の大經營と對露對清對韓の政策に於て縱論横説餘す所なく以て天下の輿論を斷ず言々剴切句々烈賓、讀者をして思はず拍案快躍せしむ看よ刻下國民の必讀すべきもの本書にあらずして抑も何ぞ

▲正價三拾錢　郵税四錢

(號付の一五)

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

水哉坪谷善四郎君著



目次

近畿　中國　四國
九州　琉球及台灣

沿道各國都市詳細二十而寫眞銅版約百個
全國西半部緻密着色大判地圖挿入

曩に本書の上卷を以て、日本の東半部なる東海、東山、北陸、北海の四道を案内し、今や其下卷成らんとす、收むる所は近畿、中國、四國、九州、琉球、臺灣に及び、皆著者が親しく各地を歴遊して視察する所に據る。大都名邑勝區舊蹟神社佛閣溫泉、浴場等の案内は言ふも更なり、山海の形勝、水陸の交通、產業の情況、風俗の美惡、旅館、料理店、舟車の費額、土產物の調進に至るまで盡く之を詳記し、傍ら歴史を說き、人物を說き、古今の詩歌を鑑み、加之著者特得の各地風景寫眞版百圖と各都市の銅版密刻圖二十餘種を添へ、別に一枚折日本西半部着色詳密圖を附す、凡そ地方に旅行する者は必ず一本を欠くべからざるは勿論、一室内に在て之を讀むも座がらにして名所を知り山光水色自然の美景を賞するを得べきなり

（正價　　郵稅　　）

●日本漫遊案内　上卷（東部）

洋上製中版美本各縣所在地銅版廿二頁、風景寫眞八十二個全國東半部地圖彩色刷大判挿入

正價金壹圓……………郵稅拾錢

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（後付の一六）

女學世界

明治卅參年拾貳月廿五日
第參種郵便物認可

第五巻第參號

明治卅八年二月五日發行
每月一回五日發行



（定價金貳拾錢）